

2019年度 京都市

文化芸術による  
共生社会実現に向けた  
基盤づくり事業

報告書

2019

HAPS

2019年度 京都市 — 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 — 報告書

HAPS

2019年度 京都市

文化芸術による  
共生社会実現に向けた  
基盤づくり事業

報告書

004 はじめに  
文|中川眞

**Chapter: 1** 010 **Research | 文化芸術を通じた社会包摂に関する事例調査**

012 社会福祉法人 カトリック京都司教区カリタス会 希望の家 カトリック保育園  
文|山本亮太郎

016 NPO法人 京都DARC  
文|倉谷誠

019 きょうとWAKUWAKU座  
文|山本亮太郎

022 医療法人稲門会 いわくら病院  
文|山本亮太郎

025 東九条マダン実行委員会  
文|山本亮太郎

029 NPO法人 ビッグインシュア基金  
文|山本亮太郎

032 特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる  
文|四元秀和

036 ドラッグクイーン・ストーリーアワー東京 読み聞かせの会  
文|倉谷誠

041 一般社団法人 kuriya  
文|倉谷誠

044 MASH大阪  
文|山本亮太郎

048 ヒアリング調査を行った団体の実態調査結果

052 第14回 アジア・アーツマネジメント会議(カンボジア)  
文|中川眞

059 Dance Well—movement research for Parkinson (イタリア)  
文|下倉久美

**Chapter: 2** 064 **Seminar | 連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」**

066 [第1回講座]眼差しのバイオニアをつくる基礎と未来  
講師|奥山理子  
構成文|山本亮太郎

074 [第2回講座]芸術実践と人権——マイノリティ、公平性、合意について  
概論|山田創平 トーク|小泉明郎、遠藤水城、あかたちかこ、山田創平  
構成文|内山幸子 編集協力|吉田守伸

082 [第3回講座]ローカリティと芸術実践——アーツ前橋「表現の生態系」展の事例より  
講師|住友文彦 討論者|山田創平、今井朋、石倉敏明、住友文彦  
構成文|中川眞

090 [第4回講座]まともがゆれる——常識をやめる「スウィング」の実験  
講師|木ノ戸昌幸、Q、XL  
構成文|倉谷誠

100 [第5回講座]日常使いの現代美術  
講師|滝沢達史  
構成文|山本亮太郎

108 [第6回講座]フォーラム「芸術と労働」  
講師|吉澤弥生、三輪晃義 トーク|渡邊朋也、山本麻友美、伊藤まゆみ 進行|ほんまなほ  
構成文|内山幸子 編集協力|吉田守伸

116 [第7回講座]共有空間の獲得  
講師|小山田徹  
構成文|倉谷誠

**Chapter: 3** 126 **Practice | モデル事業**

128 プロジェクト01 京都・崇仁地区にて、プロジェクトを立ち上げる前に  
文|石井絢子

132 プロジェクト02 東九条こどもご近所映画祭  
文|福森美紗子

138 プロジェクト03 2018年度モデル事業 継続調査報告  
—— 関わる人々それぞれにとっての「ノガミツ プロジェクト」  
文|小泉朝未

162 プロジェクト04 2017年度モデル事業 継続調査報告  
—— 「京都DARC」との協働を経て、舞台芸術の基盤の問い直しへ  
文|高嶋慈

**Chapter: 4** 176 **Coordination | 相談事業**

178 真のヒューマンサービスを目指して—— 相談事業「Social Work / Art Conference」の出発  
文|奥山理子

186 アートと社会的包摂の背景  
文|中川眞

193 実施概要 | 2019年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業

# はじめに

文 中川 眞  
(2019年度 京都市  
文化芸術による共生社会実現に向けた  
基盤づくり事業 ディレクター)

本冊子は京都市の2019(令和元)年度「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」の報告書である。京都市は平成29年度に「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」を実施し、市内の地域社会やコミュニティ、あるいはもっと小さな単位を対象として、文化芸術を通じた社会的課題の克服、緩和、解決というテーマに取り組んできた。事業名が示すように「モデル事業」であり、実施と検証を通して方法論や考え方を明示し、最終的には多くの市民がこのような活動に取り組んでいけるような環境を整えることを目指している。本事業は文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課が主管し、一般社団法人HAPSが京都市の予算をもとに主催している。

本事業は次の5つの取組みからなっている。

## 1: 市内・市外の事例調査

市内外における先行事例の調査を実施する。

## 2: 普及・啓発事業

社会課題にアプローチするアートプログラムの事例や効果を伝えるための講座を実施する。

## 3: 相談対応事業の開設準備

社会における包摂的なアートの導入ニーズが高まると予想されることから、相談事業開始に向けた準備を進める。

## 4: コーディネーター育成の仕組みづくり

文化芸術と社会課題をつなぐ人材を育成するための仕組みを構築する。

## 5: モデル事業

文化芸術の力を活用し、社会的課題の緩和や解決につなげる取組みを実際に行い、その効果などを検証する。

以上、結果として、これらの取組みは順調に推移したと言える。本冊子はこれらの報告を旨とするが、平成29年度・30年度のモデル事業についての継続調査の報告と海外の事例報告を加えている。

## 本事業の背景

先述の通り、本事業は京都市の施策の一環として平成29年度に実施した「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」が出发点である。本年度で3年目であるが、事業達成にはあと少しの時間が必要である。事業名は昨年度から「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」へと変わったが、基本的な方針が変わるところはない。文化芸術は、とすれば美術館、劇場、音楽堂、能楽堂のような場所で大家の作品を鑑賞するといったイメージがあるが、そうではなく、生活や、さらに踏み込んで言えば社会的困難といった生きることに損傷を与えられるような切実な場面において重要な役割を果たし得るという観点から、モデルづくりを試みながら市民の方々と様々な新しいソウハウや考え方を共有していこうという主旨で始まったのであった。

しかし、そのような取組みが京都でなかったわけではない。亀岡市になるが、1964年にみずのき寮(現:障害者支援施設みずのき)で美術家の西垣籌一氏が障害を持つ利用者への絵画教室を始め、彼らの創造的な才能を大きく開花させて作品を世に問い、私たちに強い感銘を与えた。その20,000点を越す大量のストックが基盤となってみずのき美術館が2012年に誕生するが、西垣氏の取組みは全国的に見ても障害者芸術の日本における嚆矢のひとつとなっている。そのほか京都市北区のNPO法人スウィングなどへのリサーチを重ねてゆくにつれ、京都とその周辺には福祉や医療、教育施設におけるユニークな芸術活動が盛んであることがわかってきた。この3年間で私たちは京都市内だけでも40か所近くの活動現場を訪れ、その多彩さや豊かさに触れてきた。それぞれの施設の規模、ケアの対象、アート観は多種多様であり、どれひとつとして同じような取組みがないのが特徴である。しかし、それらはあまり知られることなく密やかに存在しているように見える。

活動のキャンパシティはあっても、メインはもちろん福祉事業であり、アート活動が専門性に裏付けされた分野ではないゆえの困難さや問題に直面しているようでもある。当事者への聞き取りによれば、最大の問題は経済面であるが、それ以外にも多くの課題がある。アートプロジェクトに詳しい職員が施設にいないために外部から呼ばねばならず、別建ての予算を措置しなければならない。自前で専門的な人



\*1  
「Socially Inclusive Arts」という言葉は用語として定着しているわけではない。  
ここでは「社会的包摂の現場・状況で用いられるアート」という意味であり、「社会的包摂を達成、実現するアート」という意味ではない。

\*2  
パブロ・エルゲラ(アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会訳)  
『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』フィルムアート社、2015年  
[原著 Helguera, Pablo *Education for Socially Engaged Art: A Materials and Techniques Handbook*, Jorge Pinto Books, 2011]

材を育てる余裕がない。疑問が生じた場合の相談相手がいない。また、ほかの施設などでの活動を知らないから参考にすることもできない等々。

以上が聞き取りで浮かび上がってきた当事者の声であるが、その実情や要請に対して、本事業(京都市+HAPS)ではアート活動を支えるインフラの整備に取り組む必要性を感じた。まず実施したのは、人材(コーディネーター)の育成と、様々な相談に応えるとともにネットワークの構築に携わる窓口の設置の2点である。

人材育成については、時給で雇用しながら実践の経験を積んでいってもらうという趣旨から公募を行った。2回の公募で10名近い応募があり面接に至ったケースもあったが、残念ながら雇用にはつながらず、令和2年3月の3回目の公募でようやく相応しい人材を発掘することができた。公募とは別に1年目から社会包摂型アーツマネジメントの入門講座を実施し、啓蒙を図ると同時に将来の人材との出会いを期待していたが、実際のマネジメント活動にチャレンジする人を生み出すまでには至らず、来年度からの講座の内容、方法についての刷新が必要である。

相談事業についてはアーツカウンシル東京の主催する芸術文化創造・発信事業「TURN」のコーディネートに携わってきた奥山理子氏をディレクターに招き、氏が中心となってコンセプトづくりなどの準備を行った。当初は令和元年度内に事務所を開設予定であったが、新型コロナウイルス感染症が広がったため、来年度の然るべき時期に開設することとした。事務所は東九条東山王町に置かれる予定である。この事業についての詳しい説明は本報告書の奥山氏の論稿を参照していただければと思う。

## 社会包摂型アート(Socially Inclusive Arts)と

## ソーシャリー・エンゲイジド・アート(Socially Engaged Art)との関係

私たちの調査の対象は福祉や医療、教育施設などと前に述べたが、公立の施設から民間のNPO・任意団体など多岐にわたっており、活動組織のありようも千差万別である。そこで向き合っている課題は

障害、病気、ジェンダー、女性、被災、失業、高齢、過疎、酒類・薬物依存、犯罪加害・被害、民族・出自差別、シングルマザー、ひきこもり等々と極めて幅広い。私たちに見えていない社会的課題もまだまだたくさんあるはずである。このような場、状況の中で文化芸術が果たせる役割を模索・モデル化し、あらゆる意味において社会的排除の軽減を目指すのが本事業の骨子である。だがこのような場での活動をどういった概念でとらえたら良いだろうか。当初から社会的排除を視野に入れていることから、社会包摂型アート(Socially Inclusive Arts 以下、SIA<sup>[\*1]</sup>)と呼んできたが、依然としてその定義は曖昧である。しかし本事業の活動がふれないためにもその位置づけは重要である。以下は、そのための考察ノートとして、ソーシャリー・エンゲイジド・アート(Socially Engaged Art 以下、SEA)に関する議論との交差から見てゆきたい。

SEAとSIAは領域的に近いことは確かである。しかし完全に重なりはせず、また一方が他方を包含しているわけでもない。また日本には「地域アート」という独特な実践があり、これとSEAとの関係も微妙である。

SEAの定義は、市場ベースのアート界の制度から離れながら、市民などのコミットメントを最大限に活用し(社会的相互作用)、一時的に課題をアートの領域に引っ張り込んでくるソーシャル・プラクティスのことである<sup>[\*2:p.34]</sup>。それが成立する文脈は特定の地域の課題や状況であるが、必ずしも「問題解決」を目指しているわけではない。そういう観点から、エルゲラはソーシャルワークとアートを区別する。

「ソーシャルワークは、人間性の向上を目指し、社会的正義、人間の尊厳や価値の擁護、人間関係の強化といった理想を支える信念やシステムの伝統に根ざした、価値観に基づく職業である。その反対に、アーティストは、おそらく同様の価値を認めているだろうが、人々の反応を引き起こすために、主題に皮肉を込め、問題化し、緊張を煽るような作品をつくる」<sup>[\*2:p.86]</sup>とあって、ソーシャルワークとアートの差異を強調する。つまり、アートは社会的状況を批判的に捉え、アーティスト独特の方法で表現、暴露し、社会問題に対する「解釈を複雑化することであり、そこから人々が新しい疑問を発見できるようにする」<sup>[\*2:p.144]</sup>のである。

SIAはこれとは方向性を異にする。すなわち特定の問題に積極的に介入しながらも、皮肉を込めたり、別の解釈を提案したりすることを目標とはしない。当事者が追い込まれたり、自ら抱え込んだり、あ

るいは本人の落ち度ではないのに巻き込まれてしまったという諸課題と対峙し、当事者をエンパワーすることを通して何らかの緩和や解決を志向している。また見えない課題を想起し、それを事前に顕在化させて予防的に取組むことも行う。ここにSIAとSEAの分岐点はあると言えるだろう。

一方で、両者は社会的価値と美的価値つまりアートの他律性と自律性の相克という定番的な課題に対してともに直面する。地域アートを例にとれば、社会的価値は地域おこし(活性化)や経済的効果ということになる。その際に、アートは手段化してしまうのではないかという危惧がアート関係者から語られる。ただこの両価値は必ずしも現場で対立するものではなく、条件さえ整えば双方とも獲得できると言えるが、スポンサーが行政の場合、やや社会的価値の方に引きずられることが多い。価値の議論は重要である。社会包摂型アートに関しては、しばしば表現の質について疑問が呈されることがある。美的価値は二の次になっているのではないかと問われるのである。

この点に関連してSEAでの議論に少し耳を傾けてみよう。SEAには新自由主義的な資本主義経済への批判、現行の支配的システムへの批判が内在していると言われるが、他方で、アートは社会的抵抗やアクティビズムに直接関与して自らが劣化してしまうのを拒むことによるのみ、つまり直接的な抵抗や政治的世界との接触を避けることによって、その顕著な先見性を保つことができ、革命的真実の啓の役割を果たし得るのではないかという議論がある。背景にはアート以外のすべての文化形式(学問も含めて)が資本主義的合理性の圧力のもとで手段化し、汚染されてしまっているという認識があるからである[\*3: p.115]。そういう文脈の中で、SEAでは美的な自律性を保てるのではないかという議論が出てくる。SEAは我々が慣習的な思考形態から逃れ、新しい価値を生む主体であると気づかせてくれるからである。

美的価値をめぐるではSEAでは関係性の美学を主張するニコラ・ブリオと、それを批判するクレア・ビショップとの論争が続いてきた。アートの自律性を強調するビショップからすれば、ブリオが主張する関係性の強い作品は穏健で、改良的・協調的であり、アートが持つ批判力や混乱を喚起する力がないというのである。匿名の作品(コミュニティの共同的な作品)は個人の責任の放棄であり、少人数のコミュニティを自己肯定するだけであると。しかしジャスティン・ジェスティによれば、グラント・ケスターは関係性のアートがモダニズム的アートの行き着いた先＝洞察力と潜在力をアーティストに求め、それを理解する

特別な能力を批評家に求め、結果として大衆にはアクセスできないものになっている状況への批判として存在しているという[\*4:p.228]。集団の社会的相互行為、政治的関与が、アーティストが自己表現を失ってまで手に入れようとしている、新しい領域であると主張するのである。従って現在のSEAをめぐる議論はビショップに不利である。彼女が述べるアンタゴニズム(敵対主義)的主張はあまりに単純だと見なされるからである。

この自律性、自己表現を求めるビショップと、社会関与性、他己表現を求めるケスター、ブリオの対比のほか、SEAでは他己表現における内向的(リレーショナル、参加型)と外向的(ソーシャル・コーポレーション)の対比もまたある。リレーショナル参加型は、一言で言うならば、アーティストの枠組みの中にオーディエンスが参加することによってこれまでにない体験を得る、というタイプのものである。ソーシャル・コーポレーション型は、作者が誰であるか曖昧になる(作者名がない)、社会的境界を越える、月単位・年単位に及ぶ長期にわたって参加者を巻き込むといったタイプのものである。前者は参加者を筋書きに沿って挑発しようとする伝統的な作者性(authored)であるのに対し、後者は集団的創造を受容し、作者性を排除する(de-authored)。

以上のような図式の中であえて言うなら、SIAはソーシャル・コーポレーション型の活動と親近性を持つと言えるだろう。このような布置作業がSIAの把握にプラスかマイナスかは議論のあるところであろうが、本事業を社会的に定着させていくためにも、アートとしての位置づけを試みることは重要である。ソーシャル・コーポレーション型においては作者の自己表現あるいは「強い作者性」は背景に退き、集団的な表現が前景に立ち現れる傾向にある。その時「弱さ(vulnerability)」が表現の方法や核として浮上してくるように思う。来年度の報告書では、この「弱さ」の概念を補助線として理論化を進めてゆければと思う。



**Director's Note** 社会包摂型アートの現場へのリサーチは市内外で12か所を数えた。京都市内が5か所、市外が7か所（府下1か所、大阪2か所、東京2か所、海外2か所）であった。様々なルーツを持った子どもたち（希望の家カトリック保育園）、薬物依存症からの回復を目指す人たち（京都DARC）、精神の障害を抱えた人たち（きょうとWAKUWAKU座、いわくら病院）、在日コリアンの人が多く住む地域で共生を目指す人たち（東九条マダン実行委員会）、ホームレスの人たち（ビッグインキュー基金）、高齢者施設にいる人たち（グレイスマいづる）、外国ルーツの若者たち（kuriya）、読み聞かせの会に来る子どもたち（ドラァグクイン・ストーリー・アワー東京 読み聞かせの会）、HIV感染のリスクを抱える人たち（MASH大阪）に寄り添いながら、表現活動をコーディネートしている福祉・医療施設職員、NPO職員などにインタビュー 調査を行った。先行例の少ない中で財源やマンパワーの不足に悩みながらも、実に多彩でチャレンジングな取組みが追求されており、これから同様の取組みを始めようと思っている人にとっては貴重な情報となるであろう。



# 社会福祉法人 カトリック京都教区カリタス会 希望の家 カトリック保育園

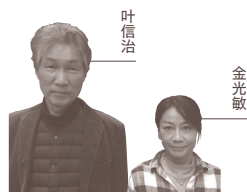
カテゴリ 保育施設

施設紹介 様々なルーツを持った人たちが暮らす地域で、「多文化共生保育」という、お互いを尊重し合う保育方針を掲げ、ともに生きる喜びや人権を大切にすることを育む保育を実践している。また、高齢化や障害を持つ子どものサポートなど、地域課題とも向き合い、違いを認め合い、支え合う地域づくりに取り組んでいる。

基本情報 住所 | 〒601-8006  
京都市南区東九条東岩本町28  
Tel | 075-681-6881  
Fax | 075-691-9581

ヒアリング 実施日 | 2019年7月30日[火]、8月30日[金]  
話し手 | 叶信治(園長)、金光敏(主任)

レジッド 文 | 山本亮太郎



## 活動の経緯

金 | 1967年に保育園として設立して以来、みんな一緒に、みんな平等、というカトリックの平等主義に基づいた保育を行ってきました。もともとこの地域は在日コリアンをはじめ、海外にルーツを持つ住民が多く、1970年代から1980年代にかけてはニューカマーと呼ばれる人たちや、母国の政情不安からオーバーステイでそのまま居着く人が増えていきました。このように、様々なバックグラウンドを持つ人たちが住む地域で、保育園として差別や貧困などの社会課題に向き合い、ともに生きる方針を示していく必要があると感じ、次第に「多文化共生保育」にシフトしていくこととなります。

きっかけは1980年に崔忠植園長が就任し、当時の保育士が、オモニハッキョ(在日コリアンの女性が日本語を学ぶ民間の識字学校)に通い始めたことです。在日一世のオモニたちとともに、字を教えながら、自分たちも学ぶという経験を通じて、保育士自身が地域から学ぶという姿勢が醸成されていきました。どのような課題を抱える地域、家庭であっても、子どもたちに罪はなく、保育を受ける権利があります。このように子どもたちの権利を最優先に考えるという想いが根っこにあり、1986年に「地域に根差した保育」「人権意識に目覚めた保育」を保育園の基本方針として明文化し、2002年から「多文化共生保育」を新たに保育方針に掲げるようになりました。

## 多文化共生保育について

金 | 地域柄、普段から日本語とともに韓国語でのあいさつが一般的で、保育園の給食のメニューにはビビンバやチヂミがあり、園児の誕生日会では色々な民族衣装を着てソゴチュムを踊ったりしていました。特に1993年に東九条マダンが始まってからは毎年くす玉割りやパレードに園児が参加しており、マダンのスタッフになった卒園児も多くいます。外国ルーツのボランティアも受け入れており、2002年からAPT[\*1]のコーディネートで、多様な文化に触れる保育カリキュラムを実施しています。これまで、タイ、フィリピン、中国、ロシ

地域の高齢者の方々と交流会



ア、インドネシア、フィンランド、シリア、フランス、スリランカ、ナイジェリア、アフガニスタン、カザフスタンなど、様々な国の方に来ていただきました。実際に人と出会うことこそが多文化理解につながります。これをきっかけに外国人に興味を持ったり、日本で育った価値観が解きほぐされたりと、園児にとっても、保育士たちにとっても貴重な機会になっています。それに子どもは言葉が通じなくても、身振り手振りで感覚的に何でも吸収します。現地の歌や踊り、遊びを(ロシアのマトリョシカ、インドネシアのアンクルンの演奏、ナイジェリアのボディーパーカッションなど)一緒にしたり、保護者とともに現地の伝統料理(フィンランドのベリーパイやアフガニスタンのボラニーなど)をつくらせたり、地域の夏祭りや外国の工芸品の紹介や絵本の読み聞かせをしたこともあります。また、中東の国の方から紛争や難民についてのお話を聞き、それをもとにした寓話から造形作品をつくらせたり、平和の大事さをみんなで考えるきっかけになりました。2011年頃からは、日本の文化も知ってもらおうと思い、梅干しづくりや羽根つき、餅つきなどを外国ルーツのボランティアの方で行うようになりました。文化の伝承は、保育の役割のひとつであるとも言えますし、日本の文化の良さの再発見にもつながります。また、職員間の温度差をなくし、実感を持って多文化共

生保育に取り組んでもらいたいという想いから、2010年頃から、それまで対象としていた年長年中組に加え、年少組や1、2歳の乳児も対象とし、一緒にできる取り組みを考えるようになりました。このように、外国ルーツのボランティアの方々と一緒に何かをすることを通して、園児たちに「違う国、違う民族の人が隣にすることが当たり前」を経験してもらいたいと思っています。ボランティアの皆さんはそもそも子どもが好きで、何か伝えたい、交流したい、学びたい、という想いが強く、子どもたちにとっても優しく接していただけます。「優しかった」という印象が、外国に対する最初の入り口であってほしいです。国によっては、ジレバブを身に付ける必要があったり、豚肉が食べられないなど、宗教上の様々な事情があります。その人が大切にしている文化、習慣を知り、尊重することが当たり前の日常を目指しています。人から優しくされ、大切にもらうことで、相手を尊重する気持ちが育っていくのです。

## 地域の中の保育園

金 | 地域の世代間交流にも積極的に取り組んでいます。園児たちと地域の高齢者との交流はお互いにとって良い影響があり、戦争体験をされている高齢者と

の交流も、広い意味での多文化交流です。具体的には、園児が生活用品を持って地域のお年寄りのお宅に配って歩いたり、年賀状に絵を描いて送ったりしています。年賀状を送った際には、とても嬉しかったとわざわざ保育園を訪ねてきて、それから毎日のように園に来るようになった方もいました。ほかにも、かつては高齢者福祉施設と合同で誕生日会を開催するなど、地域と顔の見える関係性づくりに努めてきました。柳原銀行を訪問したり、崇仁保育所と交流するなど、隣接する崇仁地区との交流も盛んです。

また、東九条マダンをはじめとした、地域の文化活動に関わっている職員が少なからずいるので、その人たちが核となって職員間に文化活動を浸透させ合っています。現在の職員数は約40人、うち在日コリアンが7人です。園児は112人、うち海外にルーツを持つ子どもが4割ほどです。日本国籍を取得する人が増えているせいか、民族名で通う子どもは減っています。

設立以来、保護者同士の集まりがずっと続いています。過去の懇談会で在日問題について議論したり、交流会を開催したり、新聞を発行したりするなど、子どもの問題に対して、皆さんとても熱心に取り組んでいらっしゃいます。保育園での関わりの中で、いくつになっても人は成長していくんだと実感しました。

## 今後の課題

■叶・金 | 外国ルーツのボランティアのコーディネートはだんだん難しくなっています。自身も生活に余裕がなく、

生計を立てる(それも自分の専門分野の仕事ではないアルバイトなどで)だけで精一杯という場合がほとんどです。

また、保育園に通う児童の中には、身体障害や発達障害を持った子がいます。そうした子どもたちは自分から課題や困難を発信できない場合が多いので、保育心理士や発達支援コーディネーターの資格を取得するなど、障害の内容に応じた適切なケアが保育士に求められています。みんなのできる遊びを考えるなど、集団の中でその子の場所を確保することが必要です。例えば、装具をつけていて、自分で歩くことができない子がいる時には、園児全員でハイハイ競争をしました。彼らの卒園後の進路については、普通の学校でたくさんの人との触れ合いを優先するか、特別支援学校で専門的な教育を受けることを優先するか、親も私たちもとても悩みます。特別支援学校は、普通の学校に比べ地域社会との関わりに乏しいという面はありますが、そうはいつでも将来の筋道をつけるという、教育ノウハウが確立されており、どちらが良いとは言えません。

1980年代には、いわゆる「絶対的貧困」状態の家庭が一定数あり、保育園でお風呂に入れたり洗濯をしたりすることもありました。今はそのような家庭はほとんどありませんが、保護者の様々な状況の中で、本人は頑張っているつもりでも客観的に見るとネグレクト状態に陥っているなど、虐待と認定されるボーダーラインにあるような、子どもはほかの子と変わらないように見えるが実際はぎりぎりの生活をしている「相対的貧困」状態の家庭が増え、家庭の抱える問題が外

から見えづらくなっているように思います。そうした家庭からのSOSに、保育園だけで対応し続けることには限界がありますし、相対的貧困状態の子どもは保護者自身の成育歴や子ども自身の発達など様々な課題を重層的に抱えているので、行政とタッグを組み福祉事務所、保健センターや日本赤十字社、児童相談所、専門の医療機関などの、支え手となる社会資源につなげていけるような

多文化交流の一環として、カザフスタンに関する楽しい話を聞く会

「東九条マダンのオープニングをくす玉割りで飾る子どもたち

カンファレンス機能が、保育園に求められています。当園では以前からそうした連携の必要性を訴えていたので、卒園児を送る時に学校や児童館との関係づくりをするなど、早くから実践しています。医療機関からの連絡で、各行政機関とのカンファレンスを行ったこともありました。ただ、現実的にはまだまだそれらの支援機関同士の関わりは薄く、支援の仕組みは確立していません。待っていても支援は向こうからはやってこないで、ばらばらに存在する社会資源のネットワークづくりを行った上で、専門の窓口に連れて行ってあげることが必要です。

## アートとの関わり

■叶 | 東九条では様々な場所で、多様な文化芸術活動が営まれてきました。ここ数年の京都市の取組みで多くの芸術関係者が東九条にやってくるようになりましたが、それによって地域や子どもたちが変わったという実感はまだありません。ただ、東九条マダンがそうであったように、取組みを続けることで、5年後、10年後、20年後にどんどん地域が変わっていくだろうという予感があります。芸術家とひとくくりにするのではなく、個人個人と出会い、交流する中で化学反応が起こり、良い意味で刺激し合えることが重要です。芸術家の方々の、人と人をつなぎ、利潤追求ではない何かを町に残すという、表現者としての役割には大いに期待が持てるのではないかと思います。

東九条は、長年にわたって多様な人々が移り住んできた地域です。韓国・朝鮮人、被差別部落から来た人たち、障害者、そのほか全国から多くの人たちが生きるために集まってきました。戦前戦後の困難な生活、差別や偏見に晒されながら、厳しい葛藤のプロセスを経る中で、互いの違いを理解し、尊重し、痛みを分かち合い、支え合うことの尊さ、「幅広い多文化共生」が生まれてきました。ここ数年、文化芸術関係者をつながっていかうという地域の動きが進んでいるのは、いろ



んな人たちの努力ももちろんありますが、地域のこうした歴史に関わっているのではないかと思います。

願わくは、一緒に暮らしてみても初めて気づき、共有できることもたくさんあるので、単発的なイベントではなく、日々の生活に溶け込んでいってもらいたいです。その点、子どもは音楽や美術などを通じてともに響き合いやすく、保育園という場は芸術を受け入れやすいと思います。芸大の移転を契機にこうした動きが進み、たくさんの人に地域に来てもらいたいと思っています。優しくされ、大切にもらうことで相手を尊重する気持ちが育っていくのです。

[\*1] APT/ アプト (Asian People Together)

公益財団法人京都YWCAが実施している、外国にルーツがある方を対象とした多言語電話相談事業。在留資格や社会保障などに関する情報提供のほか、通訳同行、行政交渉、裁判支援、家族支援など様々なサポートを行っている。



# タイトル NPO法人 京都DARC

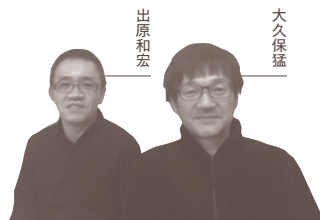
カテゴリ 薬物依存症リハビリ施設

施設紹介 違法薬物に限らず、向精神薬、市販薬、アルコールなどの薬物から解放されるための薬物依存症回復支援施設。薬物を止め続けたい仲間を手助けすることを目的に、「プログラムに従って徹底的に取組めば必ず回復できる」というメッセージを伝える活動を行っている。スタッフは薬物依存症からの回復者が大半で、同じ悩みを持つ仲間との関わりの中で回復するための「居場所」「時間」「回復モデル」を提供、グループセラピーを中心に手助けをしている。また、DARCを巣立った後に継続してプログラムを受けるため、自助グループへの参加を促し、薬物を使わない生き方の方向づけに取組む。

基本情報 住所 | 〒612-0029  
京都市伏見区深草西浦町6-1-2  
サンリッチ西浦1階  
Tel・Fax | 075-645-7105

イベント 実施日 | 2019年12月4日[水]  
話し手 | 出原和宏(施設長)、大久保猛(スタッフ)

レジット 文 | 倉谷誠



## 人間関係を構築するための練習をする場づくり

DARCは、薬を抜いて生活したい人が集まって、コミュニケーションを取りながら、人間関係を構築するための練習をする場だと思っています。料理やソフトボールなど、人が集まって取組むことができれば、内容は何でも良いです。本当に些細なことで口論になったりしますが、人生は上手くいかないことが多く、それでも投げ出さずに向き合うすべを学んでほしいと思っています。

## ミーティング

活動の中心は毎日のミーティングです。そこではテーマを設けて、参加者が今思っていることを順番に発表します。発言に対しては特に意見をせず、みんな無言で聞いています。それは発言に対して評価がされてしまうと、安心して発言できなくなるからです。もちろん、それぞれ聞いている人は思っていることがあり、その証拠に笑いが起こることもあります(笑)。

ミーティングでは、決まったテキストを順番に読むことから始まります。これは、NA(ナルコティクス・アノニマス)という国際的な薬物依存からの回復を目指す組織で行われている手法と同じです。発言することで自分自身と向き合い、ほかの人の意見から学び、そこで得たものを持ち帰る(ときには捨て置く)というプロセスです。やはり、どうしても自分ひとりで依存から回復することは難しく、「ハイパーパワー」という目に見えない大きな力に委ねることも必要としています。これは一見すると宗教のようにとらえられますが、まったくそうではなく、誰もが参加できる枠組みになっています。

## 文化的な活動内容

毎日行っているのは、みんなで昼食をつくることです。今日も、玉ねぎの切り方が太い、細いで口論になっていましたが、それを乗り越えていくことが大事だと思っています。内容は些細なことですが(笑)。でも、生きていけば、必ず人と関わります。そこで、自分のどこが悪かったのか、非を認めることが重要です。薬物に頼ってしまった原因のひとつとして、自分に責任はないと

農作業の様子

思ってしまったことがあります。薬物を止めることができても、その考え方がそのままでは社会の中での生きづらさは解消されません。なので、昼食づくりは、ミーティングと同じくらい大事にしているプログラムです。

ほかには、運動プログラムとしてソフトボールやソフトバレー、農作業、就労体験があります。取組み内容は何でも良いと思いますが、基本的に共同作業が必要なものを選んでいきます。農作業は、山科区や井手町、亀岡市で農家さんの協力のもと行っていますが、手を抜くと出来が悪くなります。一緒に頑張って作業をして、成功体験を得ることが重要です。

2013年に龍谷大学から声をかけていただき、演劇に出演したことがあります。京都駅前の響都ホールで2回出演させていただきました。カルデモンメ劇団の『カルデモンメのゆかいなどろぼうたち』という作品で、町で泥棒をしていた人が、最後は町の人に受け入れられるというストーリーだったと思います。以降も声をかけていただきましたが、スタッフの負担も大きく、残念ながらお断りさせていただきました。

今年8,9月には、倉田翠さんが主宰するakakilikeの舞台『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に



光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』に出演させていただきました。倉田さんとは、東九条にある京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでボランティア活動をしていた時に知り合い、以降、ここに通ってくれるようになりました。薬物依存の方は急に体調を崩したりするので、出演するまでのスケジュールを予定通りにこなせるのか、色々不安はありましたが、倉田さんは一貫して「大丈夫」と言ってくれていました。本当によく通ってくれて、利用者も、スタッフも信頼することができたので、みんなが楽しんで参加することができました。終わってから、利用者も「またやりたい」と言ってくれているし、自分たちも「やって良かった」と思っています。公演を見に来てくれた人の反応も良く、東京DARCのスタッフは感動のあまり涙していました。舞台を通じて、DARCのことを知ってもらうことができたことも良かったと思っています。

## 地域との関わり

この場所に来て、今年で11年目になります。東九条でボランティア活動はしていますが、この地域では、少し周辺を清掃するぐらい。ただ、一度もトラブルはなく、地域の方々には受け入れられているものと思っ

舞台公演の様子



ていました。向島に移転するという計画を発表し、反対運動を受けたときは、普段の様子を見てもらえないのでやむを得ないと思いました。こちらとしても、通いづらい場所なので、近くで違う場所を探したところ、今計画している場所と出会いました。予算的にも折り合ったので、土地を取得し、手続きを進めました。そうしたら、この地域の方々からも反対運動を受け、驚きました。日本の薬物依存症対策というのは、予防キャンペーンに力点が置かれているので、薬物使用者はとにかく怖いという印象があります。集団心理も働いて、そのような反対運動になってしまっているところもあると感じますが、回復を目指す我々にはそれが重くのしかかりました。

今後は、この地域での活動も増やして、少しずつ理解を得ながらグループホームの建設を円滑に進めていければと考えています。

#### 本当の意味で「回復する」とは

回復の意味は、私たちの中でも議論になります。人そ

れぞれ意見は異なりますが、単に薬を止めるだけではなく、ものの考え方や生き方が変わらないと、社会の中で生活することは難しいと思います。「今日を生きる」という言葉が、キーワードとしてよく使われます。でも、自分ひとりのことだけ考えて生きるのではなく、仲間のことを考える、投げ出さずに他者と付き合っていくことが大事だと思います。そして、自分の悪いところを認めて、受け入れて、乗り越えることができれば、本当の意味で回復したと言えるのではないかと考えています。そのために努力する人を、私たちは全力でサポートします。



タイトル

# きょうとWAKU WAKU座

(運営主体:NPO法人PRPきょうと)

カテゴリ 精神保健福祉事業

施設紹介 NPO法人PRPきょうとが運営する、精神障害を抱えた方を対象とした施設。それぞれの希望に応じて、演劇や紙芝居などの表現活動を展開しており、当事者が自由に自己表現することで、楽しさやおもしろさを感じるだけでなく、人前に入る自信を身につけることにもつなげている。

基本情報 住所 | 〒616-8224

京都市右京区常盤窪町18

にしがきビル2階

Tel | 075-873-1774

Fax | 075-862-4061

ヒアリング 実施日 | 2020年1月7日[火]

話し手 | 今井利華(管理者・サービス管理責任者)

クレジット 文 | 山本亮太郎



今井利華

#### NPO法人PRPきょうとについて

2001年頃から車折の民家で活動を開始し、2002年7月に現事務所にてNPO法人PRPきょうとを設立しました。私自身は、2008年頃から勤務しています。当法人の代表理事が現在も勤務している「ジョイント・ほっと」という就労継続支援B型事務所で、演劇従事者のPSW(精神保健福祉士)と出会い、表現活動を行う施設として立ち上げたのがきょうとWAKU WAKU座です。障害を抱える方に就労以外の選択肢を示し、リラクゼーションと演劇を通して社会と関わることを目指して活動しています。

発足当初は、何かを人前で演じることが被害妄想や幻覚症状につながってしまうといった声が上がりましたが、まずは紙芝居から始めました。文字を読むというクッションがあるため、比較的楽に舞台上に立つことができます。既存の紙芝居作品を引き延ばし、大型にしたものを使用しています。過去には、ろうけつ染めができるメンバーからオリジナル作品を提供してもらっていました。ほかにも、メンバーとスタッフが一緒になって、南京玉すだれやバルーンアートなどを習いに行ったこともあり、これらは演劇活動とともに今でも実施しています。私たちにとって、表現活動は大きな柱になっているのです。

現在、常勤の職員が4名、非常勤の職員が3名、理事が6名(うち職員1名、非常勤職員1名)の体制です。過去には芸術系大学の卒業生が勤務していたこともあります。施設の登録者は現在29名で、1日平均12~13名が通所しています。主に精神障害を抱えた方が対象です。2011年に障害者自立支援法が改正された後、2012年に自立訓練(生活訓練)事業を開始し、2年間の利用期間が過ぎた後もメンバーをサポートできるよう、2014年に就労継続支援B型事業を開始しました。それまでも公演料などの収入はありましたが、最低賃金の3,000円を確保するため、ほかの仕事を得る必要がありました。また、メンバーたちの中から仕事したいという声が上がっていたことも理由のひとつです。

長く通うメンバーもいれば、本人のステップアップのために、ほかの専門的な施設・団体につなげることも





主公演作品の制作を始め、2019年3月、『翔平がんばりまshow!』『Yesterday&Tomorrow』という作品を上演しました。幻聴や被害妄想といった症状があっても、そばに寄り添ってくれる人や手を差し伸べてくれる人の存在など、何気ない出会いがきっかけで強くなり、周囲の状況が大きく変わっていくことがある、ということがテーマです。上演後はとても多くの共感の声寄せられました。

第1回公演より、作業所で翔平が仲間にしんとい話を聞いてもらっシーン

あります。私たちは就労だけを最終的な目標にしているわけではないので、表現活動を通じた居場所の提供によって、メンバー自身がどう生きたいかということを探り、かたちにしていくことを大事にしています。

### 表現活動について

演劇活動に携わることは、メンバーの日常にとっても様々な良い効果を生んでいます。発声練習は正しい呼吸方法を身につけることにつながりますし、人前で声を出すことは自信にもなります。また、観客からの反応は、自分自身を認めてもらうきっかけになり、コミュニケーション力がつきポジティブな考え方になるなど、人間らしい生活を取戻していく上で良い影響を与えてくれます。もちろん時間はかかりますが、3~4年すると、表現活動に関わらない仲間も、表現活動をする仲間と施設で交流・協働することで、自信が付き、生活が豊かになっていく姿がはっきり見て取れるようになります。

演劇活動に本格的に取組むようになったのは、事業移行する以前に、保健センターからの依頼で、「うつになった桃太郎」という作品を上演したことがきっかけです。紙芝居からスタートし、そろそろメンバーも演劇をやってみたいと思い始めていた頃で、本番中も台本を持ったまま、途中交代もOKという、緩やかなかたちから挑戦しました。もちろんメンバーには、写真などの記録に残ることも理解した上で参加してもらっています。昨年から実行委員会を設けて本格的に自

次回作では台本の制作から自分たちで行っています。ちょうど台本が完成したところで、当事者がどのように発症し医療にかかっていったかというストーリーです。今日もこの後、読み直しと稽古を行います。10月に上演予定ですが、会場はまだ決まっていません。助成金の申請も検討していますが、なるべくメンバーの収入に還元したいという想いもあり、迷っています。7人の参加者全員が当事者ですが、人手が必要な場合は外部の演劇関係者に参加してもらったり、時には職員が舞台に立つこともあります。表現活動に関しては職員も素人なので、メンバーとの差をなるべくなくし、対等な立場で一緒に学んでいくという姿勢を大切にしています。理事の中に演劇経験者はいませんが、精神科医で劇作家でもある、くるみざわしんさんに協力いただき、病状の表現方法などのアドバイスをいただいています。今回は台本作成の段階から監修していただいています。

### 当事者が演じることの意味・困難さ

過去には看護学校から、病状についての理解を深めたいと、授業の一環として学生向けに公演の依頼があったこともあります。障害そのものをテーマにした作品を普通の人が演じることは難しいですし、なかなか説得力も生まれません。当事者が演じることにこそ意味があるのです。

何かを演じる中では様々な感情が動くため、困難を感じることもあります。例えば、役に引き込まれず

ぎ、妄想や幻覚の症状が悪化することがあります。そのため、スタッフは事前に綿密にミーティングをし、仲間同士がしんどさを受け止められるように関わったり、休憩時にPSWが気持ちを聞き出し、本人がどう取組んでいくかをともに考えたりしてサポートしています。そのほか、かかりつけの先生や、ケースワーカーの方たちともこまめに連絡を取合い、本人の状態についての情報共有を心がけています。時にはいっぱいいっぱいになってしまうこともありますが、こうした困難を少しずつ乗り越えていくことで強くなりますし、作品ができた時の達成感はとても大きいです。

### 当事者との接し方

施設に通うメンバーにはこちらから何かゴールを設定することはありません。個々の目標に対する評価は共有しますが、決定は自分ですということを基本にしており、自分から次にステップアップしたいと、本心から口にするのを待つというスタンスを貫いています。また、上手に施設や医療に頼りながら豊かに生きていく、「依存できる自立」が大事だと思います。そうした生き方を法人として、どこまでサポートすることができるかを、その都度考えるようにしています。

表現活動については、本格的にその道を極めようとするまではなかなかエネルギーが持続しませんが、施設を卒業後も、働きながらなんらかのかたちで演劇に関わりたい、という人はいます。私たちとしては、結果よりもその過程に重きを置いているので、本格的に取組みたいという人がいれば、専門的な窓口につなげていきたいと思っています。

### 今後の展望・行政に求めること

精神障害の分野で演劇活動に取組む施設・団体は、全国的に見ても多くないので、今後は自主公演の制作を継続し、こうした疾患への理解を広めていきたいと考えています。また、一から台本をつくるのは大変なので、既成のものも含め、様々な舞台公演を上演していけたらという展望もあります。

ただ、こうした組織運営を継続し、表現活動だけで安定した収入を得ることは容易ではありません。今後の政策次第では私たちのような活動は淘汰されてしまうことも、十分あり得ます。行政には、表現活動を通して生きがいを感じ、社会に貢献するという方法もあるということを認めてほしいですし、そのためのサポートを期待します。



第2回公演より、幻聴に翻弄された正樹が家族とともに精神科の診察を初めて受けるシーン



# 医療法人稲門会 いわくら病院

カテゴリ 精神科医療施設

施設紹介 1952年に設立した精神科医療施設。長年一貫して取組んできた「開放医療」を通して、一人ひとりの患者の想いに耳を傾け、人として向き合う姿勢・文化を大切に、病気があっても地域で当たり前のように、その人らしく暮らせるためのサポートを行っている。

基本情報 住所 | 〒530-0003  
京都市左京区岩倉上蔵町101  
Tel | 075-711-2171  
Fax | 075-722-7898

イベント 実施日 | 2020年1月28日[火]  
話し手 | 藪島豪智(院長)、  
館澤謙蔵(ソーシャルワーカー/医療福祉相談室主任)、  
児玉聡子(作業療法士/係長)、  
丁春輝(ソーシャルワーカー)

クレジット 文 | 山本亮太郎



## いわくら病院について

—  
丁 | 当院が設立した1952年当時は、まだまだ精神科医療は閉鎖的で、治療と称して患者さんを隔離することばかりが行われる風潮がありました。そんな中、当時勤務していた医師たちが、当事者が回復後に再び地域に戻っていく必要性を感じ、1973年から、「開放医療」に取組み始めました(一部病棟を除き)。病棟から外につながる扉を施錠せず、扉の前に病院スタッフが座っていて、患者さんの想いや出ようとする理由を聞くようにしています。もちろんリスクはありますが、基本的に患者さんを信用して、院内では自由に過ごしてもらっています。主治医からの制限はありますが、決められた範囲内で自由に外を歩き回ることも可能です。こうした人と人の信頼関係が結果的に快方につながるのです。

現在、14名のソーシャルワーカーが在籍しており、入退院をはじめ様々な支援に従事しています。医療法人稲門会という運営法人のもと、外来、入院といった病院機能のほかに、デイケアセンター、就労継続支援B型施設、訪問看護ステーションといった設備も擁しています。現在の病床数は403床ですが、多くの患者さんを受け入れてしまうと入院状態が慢性化し、なかなか地域に戻るできない人もいることから、段々と病床数を減らして行っています。現在の入院患者数は385名で、1日平均2～3名の入退院があります。1、2病棟は慢性期の患者さんが中心で、50年近く入院されている方や、身体にも障害を抱えている方など、様々な方が入院しています。また、2019年12月に京都市内では初めて、「いわくら心の救急医療センター オリーブ」という精神科救急病棟(7病棟)を開設しました。ほかにも、アルコール依存症の専門治療病棟(3病棟)、精神科準急性期病棟(6病棟)、精神科慢性期病棟(5病棟)、認知症の専門治療病棟の「パンの木」(12病棟)、介護医療院「レモンの木」があります。

認知症、統合失調症、うつ病、摂食障害、発達障害など、様々な精神疾患に対応していますが、基本的には精神科の単科病院であるため、幅広い病状に対応するために、近隣の一般総合病院などと連携しています。近年は複数の疾患を抱えている方など、症状が複雑化している印象があります。また10代など

若い入院患者の方も増えてきています。

## 文化芸術の取組みについて

—  
児玉 | デイケアや作業療法室では、治療の一環として、絵画、陶芸、華道、俳句など様々なことに取り組んでいます。また、年に1回、左京こころのふれあいネットワーク主催の「心ときめき芸術祭」に出品しています。また、当院が主催している「秋フェス」で陶芸作品やガラス細工などの作品を販売しています。

絵画については、20年以上前に、当時の看護師らが立ち上げた院内のサークル活動としてスタートし、岩倉在住の画家の先生に月1回指導に来てもらいながら、作業療法のプログラムに組み込まれるようになりました。2年に1回の頻度で、職員の手ついでまちなかの画廊を借り、作品展を開催しています。一般のギャラリーを借りると、費用や搬入の手間がかかりますし、足の悪い患者さんは見に行きづらいですが、それでも、地域の人や通りがりの人にぜひ見てもらいたいと思い継続しています。陶芸についても、20年近く前から立命館大学の先生が教えに来てくれており、今でも陶芸サークルの学生さんがボランティアで訪れています。職員以外に、地域の人や若い人と触れ合うことができる、貴重な交流の場になっています。また、一番規模が大きいのはカラオケなどの音楽の取組みです。何をするか分かりやすく、参加者のハードルも低いため、年代を問わず多くの患者さんが参加しています。以前は華道や俳句の先生にも来てもらっていましたが、教える側も患者さん側も高齢化していることにより、活動自体は縮小しています。ほかにも、就労継続支援B型施設にはガラス細工の職人さんがいたり、革細工や手芸にも取り組んでいます。

就労支援では病院内委託として、各施設や看護師の寮などの清掃を患者さんをお願いしています。一口に治療と言っても、様々なかたちがあり、文化芸術の取組みには、リハビリや投薬治療にはないアプローチの方法があると思っています。

## 開放医療の取組みについて

—

藪島 | 私は14年前ほど前からいわくら病院に勤めています。以前の勤務先は総合病院の精神科で、開放医療を行っていましたが、時代が変わり、精神医療を取巻く状況も変化していく中で、自身がどの方向に向いて医療に取り組むべきか迷った結果、いわくら病院に勤務することを選びました。

先ほど述べた作品展など、病院の外の方が病院にやってきてくれるきっかけとなるような芸術活動も良いのですが、病院自体を地域に開き、病院の外に舞台を用意して、地域の人と患者さんとが一緒になって同じことができるような活動がしたいです。患者さんの見た目や雰囲気戸惑うことがあっても、こうした機会があれば、言葉を介さなくお互いの理解が進むのではないかと思います。病院全体として、開放医療ということで患者さんが建物を自由に出入りし、まちな中に出ていくレクリエーションなども実施してきましたが、もっとたくさん、地域の人が患者さんたちと出会う機会を創出していきたいです。病院の力だけではなく、文化芸術の、お互いの背景を意識しなくてもともに楽しむことができるという特長がいかせるのではと考えています。

イタリアは世界に先駆けて、法律レベルで改革を行い、単科の精神科病院を閉じて、入院中心から地域ケア中心への展開が実現した、精神科医療においての先進国であると言われていています。今年の10月には、「東京ソテリア」というNPO法人が、イタリア・ローマを拠点に、精神障害を持つ当事者が役者を務めるプロの劇団「アルテ・エ・サルエテ」を招聘し、東京、浜松、名古屋、大阪で公演を行う予定です。上演に当たり、日本人の俳優を1公演3人ずつ募集しており、オーディションの結果、大阪公演に私も出演することになりました。本来は当事者が主体なのですが、日本では初めての試みで、現在の日本においては支援者も当事者と同じ舞台上に上がることの意義が大きいということで、支援者も参加できることになりました。残りの2人は私の担当患者さんです。稽古の中で、演劇とはコミュニケーションの芸術であると教わりました。言葉を中心とするだけの治療には限界を感じており、頭でっかちにならずに患者さんとの関係の結び直しができないかと考えていたので、身体そのものに

直接アクセスできる、演劇の持つ可能性には感動しました。演劇がきっかけで、様々な病気を抱えている人たちが、それぞれの感性でぶつかり合い、これまでとは違うコミュニケーションのあり方が拓けていくことで、人と人との関わり方が変化し、病気の回復にもつながるのではと感じています。個人的にも稽古を通して、時には苦手なこととも向き合いながら試行錯誤するという、とても贅沢な経験ができています。

### 生きづらさと文化芸術との狭間で

義島・兎玉 | 医療側の人が感度を持って、こうした文化芸術の活動に個人的に取組むことは、その人にとっては良い経験になっても、周囲の人との共有が上手くいかなかったり、本業である医療の現場でなかなかいかなることができなかったりするケースもあります。今後当院でどのように共有し、浸透させていくかが課題です。特に民間の医療機関でいきなり文化芸術の取組みを導入しようとしても、警戒されてしまうと思うので、あまり取組み自体がフォーカスされすぎず、精神疾患を抱えた方が当たり前地域の中で暮らし、生活の場に一緒にいるという状態が理想です。例として演劇を挙げましたが、このような文化芸術の取組みに参加できる機会を通じて、様々な職種、立場の人たちと一緒に考え、学び、患者さんたちの方から自然と何かやりたいという気持ちが芽生える環境をつくっていきたくです。医療スタッフや当事者の想いが発端となって、芸術家が立ち上がり、活動が広がっていくようなこともあっていいのではないのでしょうか。患者さんにレクリエーション活動を提供して楽しんでもらうことも大事ですが、時には自らが主人公となり、医療スタッフがそれをサポートするというかたちもこれからは大切にしていきたいです。

日々の生活の中で経験したこと、考えたこと、感じたことを言葉に出して伝えるのが苦手な人もたくさんいます。そうした感情を露呈させる場所として、文化芸術が担う役割は大きいのではないかと思います。実際に舞台稽古に取組んでいる中で、自分の内面を外に出して表現することには大きなハードルを感じますが、それを乗り越えて、周りに伝え、結果、交流や反応が生まれることで、自らの成長や生きることの喜びと

いった、人間が人間として生きていく上で欠かすことのできないことと、再び出会い直せるような気がします。

### 文化芸術に求めたいこと

義島・館澤 | 就労継続支援B型施設「いきいき・いわくら」では、患者さんのつくったガラス細工やアクセサリなどを販売していますが、ほかの病院や施設でも似たような取組みは多く見られます。皆さん様々に工夫していますが、購入する側に購買意欲を継続して持たせるようにしないと、つくる側の経済が回っていきません。何をつくりどう売っていくかは施設側に任せられているので、そこには何か文化芸術に関わることができる余地があるのではないのでしょうか。

患者さんは皆さんそれぞれ、独自の生活スタイルを持っています。人との出会いこそがこの仕事のおもしろみであるとも言えるのです。患者さんの手記などは、誰かに見せるために書かれたわけだけでなく、いざ読んでみるととてもおもしろく、感動します。病室の隅に折り鶴などちよっとした小物を置かれている方も多く、そうした些細なことも、患者さんが病院にしながら自身と対話する中で生まれた、表現活動のひとつのカタチであると思っています。ただ、自分自身を癒すためそうせざるを得ない側面もあるかと思しますので、このように患者さんの中から必然的に生まれてきたことを邪魔しないで、より充実させるサポートをしていきたいです。その結果、病院と地域との間で、どちらが主体というわけでもなく、すべての人が主体的に、自然なカタチで取組めるような何かをつくり出せたらいいな、と漠然と考えています。支援者だけで考えてしまうと、どうしても管理に近いサービスを組立ててしまいがちなので、そうではない手法を協働で行うことができるコンテンツがあるといいなと思います。

長期入院から退院した患者さんの中には、急にひとりきりになり、相当つらい生活を送られている方もいらっしゃいます。一方で、ただ人と出会うための場というのは限られており、病院ではないと不安だという人もいます。そんな不安を和らげ、病気も、世代も超えて、当たり前のこととしてすべての人が集まる場をつくるのが文化芸術の力ではないのでしょうか。

タイトル

# 東九条マダン 実行委員会

カテゴリ | 多文化共生事業

団体紹介 | 毎年11月上旬に、地域の祭り「東九条マダン (=広場)」を開催している。みんなが参加し、つくり上げる「いこか つくろか 東九条マダン」をかけ言葉に、コリアン文化だけでなく、東九条地域に存在する多様な文化を楽しく生き生きと表現できる、老若男女、障害のあるなしにかかわらず楽しめる場を目指し活動している。

基本情報 | 住所 | 〒601-8013  
京都市南区東九条南河原町3  
Tel | 075-661-3264  
Fax | 075-661-3294

イベント | 実施日 | 2020年3月24日【火】  
話し手 | 梁説 (ヤンソル/実行委員長)

クレジット | 文 | 山本亮太郎



梁説

### 東九条マダンのあゆみ

もともとは、東九条地域の在日コリアンの青年が、1983年から始まった生野民族文化祭を見て、この地域でも同様の祭りがしたいと思い、これに呼応するかたちで地域に関係する人たちが動き出したことがきっかけだと聞いています。当時はまだ多文化共生という言葉こそありませんでしたが、地域の方が日頃から抱いていた想いが実を結んだ結果だと思えます。1992年に準備会、1993年に実行委員会を立ち上げ、その年の秋に地元の元陶化中学校を会場として第1回を開催しました。当時は運営側ではなく参加者としてでしたが、私自身も第1回から関わり続けており、この秋で28回目を迎えます。東九条マダンは4つの趣旨文<sup>[\*1]</sup>が軸になっていますが、人や世代や時代の状況が変わり、マダン自体の変化が求められれば、趣旨文を考え直せばいいという柔軟性を、実行委員会は持っています。民族の祭りに限定しないところ、事あるごとに立ち返り検討する柔軟性に、マダンのしなやかさと強さがあると思います。

東九条地域には戦前戦後を通して朝鮮半島から渡ってきた人たちが、生活の場を求めて流入した人たちも抱き込んで地域を形成する、いわゆる大都市周縁に備わったダイナミズムがあったと思います。また、1986年に結成された「ハンマダン」<sup>[\*2]</sup>、彼らやそのほか演劇人たちに練習場所を提供していた地域労働センター<sup>[\*3]</sup>、識字教室「オモニハッキョ」、社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会、京都南部教会、NPO法人東九条まちづくりサポートセンターの前身であるHEAT、NPO法人日本自立生活センター(JCIL)など、様々な活動が展開されてきました。東九条マダンは、こうした地域の素地があるからこそ継続してきたんだと思います。

### マダンに魅せられて

東九条マダンの立ち上げ時、私の父、梁民基<sup>[\*4]</sup>が運営に関わっていましたが、当時の私はそのことを知らず、在日韓国人サークルのひとりとしてマダン劇の集まりに行ってみたら、そこに父がいました(笑)。当時は、



ウリ文化研究所という古い家屋をマダン事務所として借用し、開催日が近づくと大人も子どもも一緒になって、準備に追われていました。ただただ自分たちの祭りをつくるために目一杯楽しんで、目一杯動いている人の姿、大人が真面目に遊んでいる姿にすっかり魅せられ、私もそこにいたいなと思うようになりました。自分たちのことを表現でき、かつ楽しめる場を一生懸命つくろうとする人たちと一緒に、私も何かしたいと思うようになったのです。私が本格的にマダンに参加したのは第10回くらいからです。祭りづくりを通して自己を表現し解放するという東九条マダンの試みが、東九条だけでなく、世界すらも変えることができるのではないかという想いを今も持っています。だから私のようにマダンに引き込まれる人がいるのではないのでしょうか。

28年間継続してきたことで、東九条=マダンがある地域ということが随分と浸透してきました。東九条マダンの特色として朝鮮半島で培われてきた文化がまず挙げられますが、決してそれだけではなく、国や民族、属性の多様性に加え、身体的パフォーマンス以外にも展示や遊び・体験コーナーといった表現の多様性を大切にしています。こうしたあり方に希望を感じている人もたくさんいると思います。当たり前のように在日コリアンの暮らしが営まれ、お互いの顔が見える関係性の中に多様な文化背景を持った人たちがいて、様々な信念やこだわりを持った人たちがともに生きていけるということこそが、この地域のおもしろさであり、大きなパワーを秘めていると思います。ここで何かを変えられる、何かを起こすエネルギーが生まれるという予感を、マダンに訪れる人たち、参加する人たちは無意識のうちに共有しているのではないのでしょうか。

### マダン劇[\*5]との関わり方

私が東九条という地域に出会って30年近くになります。かつては南北の分断がもたらした葛藤や、最近では日朝/日韓関係悪化に伴う影響など、政治や情勢が地域に反映されることもあります。むしろ、そんな中でたくましく、時にはしたたかさや飾らないユーモア



で生活を営む地域のあり様を身近に感じてきました。そうした経験をマダン劇の表現にも取り入れてきたように思います。

第1回東九条マダンの後、マダン劇の反省会の場で梁民基が「個別なものを追求していくと普遍的なものになる」と言ったんですが、何かものごとの核心を突く言葉のように感じて今も記憶しています。私は物語を書くとき、自分の力が及ばない理不尽なもの（社会構造、階級、歴史的枠組みなど）によって生き方を強いられた人に想いを馳せます。恨みや怒りよりも、理不尽さに直面しながらも登場人物が辿ってきた生の深さや厳しさ、豊かさを丁寧に描くことで、現実世界の不条理が浮き上がるのではないかと思います。芝居中の笑い——時には役者と観客で交わされる掛け合い漫才のような笑いが大きければ大きいほど、世界に横たわる不条理があぶりだされるように思います。正解なのかはわかりませんが、私なりに辿り着いた現時点での梁民基の言葉の解釈です。朝鮮半島で培われ、在日社会にも部分的に刻まれている生活文化のエッセンスを芝居に取入れるのは、そうした固有なものの中に普遍的な人のあり様を見出せないかと思っているからで、今後は固有なものが多様化していき、そこに普遍性を見出すマダン劇になっていくかもしれません。

### 地域におけるあり方の変化

始まった当初は、露骨に韓国や朝鮮に対して良い感情を持っていない人がいたり、また、今では当たり前になっていますが、在日コリアンと日本人と一緒に祭りをつくるということに、地域内外から、辛辣な意見をいた

「マダン劇」京都市南区の市立凌風小中学校にて、2019年11月3日開催  
（東九条マダン実行委員会提供）

だくこともあったと聞いています。「回数を重ねることの強み」が確かにあり、今や9月から始まる子どもたちの練習風景や、地域にあふれ出す告知ポスターは、街の風物詩になっています。ようやく地域の年中行事のように定着してきたという実感があります。

かつて、ほかの地域にも在日朝鮮人が主体の祭りはありませんでしたが、東九条マダンのように多文化共生を実践するようなものはありませんでした。議論と模索を繰り返しながら一步一步進んできたマダンにとって、子どもたちの参加はとて大きな力として働いています。特に子どもと地域をつなげる役割として、希望の家カトリック保育園の役割が挙げられます。東九条マダンの演目の中で、最も参加人数の多いものが、動きながら打楽器を打ち鳴らし合奏する「ブンムル」という演目なのですが、マダン創成期から保育園は積極的に園児たちと一緒に参加をしています。練習場所は保育園に隣接する公園などを使用させていただくのですが、音がうるさいといった苦情に対して、地域の保育園が何十年かけて築いてきた関係性を持って真摯に対応される姿に、マダンとしても学ぶところが大きいです。今や東九条マダンの人気メニューとなっている「民族衣装試着コーナー」も、多文化共生保育の実践で集まった多彩な民族衣装の試着を来場者に提供するもので、保育園の職員の方が担っています。こうした実践を通して、マダンに子どもたちが参加し、それが保護者に広がり、今では成長した子どもたちが保護者としてマダンにやってくる。こういった地域の保育園や児童館などの協力もあって、マダンを楽しみ、参加することが当たり前のごとく育ってきた世代が成長し、次の世代へと27年間続いているということが私たちの強みです。



「サムルノリ」京都市南区の市立凌風小中学校にて、2019年11月3日開催  
（東九条マダン実行委員会提供）

### サムルのたまごについて

東九条マダンはいくつかのチームで構成されており、うちひとつが「サムルのたまご」です。マダンに参加していた障害を持つ子どもたちが、いつかブンムルやサムルノリといったマダンの演目で、みんなと一緒に打楽器（チャンゴ、ブク、ケンガリ、チン）を演奏できたらどんなに良いだろうという声が上がリ、陳太一（チンティル）前実行委員長が中心となってサムルのたまごが結成されました。家族や協力者たちとともに、障害のある子どもたちが月に一度のペースで練習を重ねています。最初は、全員がひとつの空間で座ることから始め、地道に練習や活動を続けることで、今では単独で公演依頼が来るようになりました。

最初、東九条マダンでサムルのたまごの演奏を見たとき、本当に感動しました。子どもたち一人ひとりの姿はもちろん、やってみよう、挑戦したいという言葉から仕組みをつくって実践し継続していくプロセスにも感動しました。何事も、できないと簡単に諦めるのではなく、やりたいと思うことに対しては常に開かれたマダンでありたいと、一層思うようになりました。様々な人が関わる共生の考えが浸透しているのだと思います。子どもたち（や保護者）がやりたいと思ったことに対して、惜しみなく付き合う大人たちがいて、「サムルのたまご」として活動していく。想いの実現に向けて工夫しながらチャレンジしていくことは、実はすごいことなのです。

### これからの東九条マダンに対する想い

現事務局長が言った言葉なんですけど、「東九条マダンの実存なんだ」という意味を最近よく考えます。今存在するマダン、今構成するメンバーで動くマダンがすべてなんだという意味だと思います。マダンへの想いが強いあまり、知らぬ間に東九条マダンは「こうでないといけない」という考え方に至ることがあります。また、良い意味としても「マダンらしさ」という言葉を使うこともあります。それは時に人を傷つけ、排除することなんだと最近気づきました。27年間、誰もが参加できる実行委員会で民主的にものごとを決めてきた東

九条マダンのスタイルさえ崩れなければ、誰も排除せず、開かれたマダンであるのだと思います。無自覚であった自分の固定観念に気づき打ち破ることが、今、私ができるマダンの継承だと思ふようになりました。

あとは、私が以前、一生懸命に祭りづくりに取り組み、真剣に遊ぶ大人をカッコいいなと思ったので、今は自分が精一杯マダンという場を楽しむ大人でいたいと思います。

### 文化芸術によるまちづくりについて

今後、隣接する崇仁地域への芸大移転をひとつの契機として、東九条に様々な文化芸術が入ってくることで、多彩な人がこの地域にやってくることは嬉しいことであり、お互い刺激を受け合い、将来的に一緒に何かをすることも十分に考えられます。一昨年、議論のすえ、初めて東九条を飛び出し、元崇仁小学校でマダンを開催したんですが、地域の人と顔が見えるかたちで触れ合い、地域の現状や懐の深さを知れたことは本当に良かったと思っています。それは芸大移転で大きく変わろうとする京都駅東部一帯のこれからのひとつの街のあり方ではないかと思っています。

同時に、街が変わるような大きな事業が展開されているので、いろんな立場の思惑があるのは当然だと思います。その中で東九条マダンは、自分たちの祭りを楽しむ、祭りづくりを楽しむことをぶれずにやっていきたいと思っています。きらびやかで華やかな芸術性はないかもしれませんが、生活の中に祭りがあること、祭りを準備するワクワクとした時間があること、広場で解き放たれる表現、役割、一人ひとりの存在があるということ、そしてマダンを通していろんな人と出会うこと、いろんなものが受け継がれるということ、それは東九条で私たちが育んだ文化で、とても豊かな財産だと思います。



「サムのたま」京都市南区の市立凌風小学校にて、2019年11月3日開催（東九条マダン実行委員会提供）

#### 【\*1】東九条マダン趣旨文

- 1 韓国・朝鮮人、日本人をはじめあらゆる民族の人々が、共に主体的にまつりに参加し、そのことを通じて、それぞれの自己解放と真の交流の場を作っていきたいと思ひます。
- 2 朝鮮半島にルーツをもち日本で暮らすすべての人々が、ひとつの踊りの輪に参加できるような、世代交流の場とし、そのことを通じて、子どもたちの生きた民族教育の場を作り出したいと思ひます。
- 3 朝鮮民族の願ひである南北統一に寄与するため、生活の場である地域から、和解と統一につながるマダンを作っていきたいと思ひます。
- 4 東九条で生活するさまざまな人々が、共に生き、人と人が真に触れ合せる、そのようなマダンにしたいと思ひます。

#### 【\*2】ハンマダン

1986年、マダン劇『豚ブリ』の公演を機に、民族の文化を継承し、在日と日本人がともに主体的に自らの文化創造していく現場を築いていこうと結成される。

#### 【\*3】地域労働センター

現在は、東九条市民文庫・マダンセンターとして運営する。

#### 【\*4】梁民基

1981年、久保覚とともに『仮面劇とマダン劇』(晶文社)を出版。以来、日本でのマダン劇運動を大阪・東京・京都で展開。「ハンマダン」結成と「東九条マダン」開催にも中心的に関わる。

#### 【\*5】マダン劇

芝居のための舞台や装置が何もない広場(空間)で、仮面劇やタルチュム、プンムルノリ(農楽)の要素を再現し、再創造した芝居を指す。

## タイトル NPO法人 ビッグイシュー 基金

カテゴリ ホームレス支援事業

団体紹介 雑誌『ビッグイシュー』をホームレスの人たちに路上で販売してもらい、その売り上げの50%以上を彼らの収入にするという事業に取り組む社会的企業「有限会社ビッグイシュー日本」を母体とし、2007年に設立。ホームレスの人たちの自立には就業応援も含めた総合的なサポートが必要であると考え、雑誌販売以外の様々なプログラムを展開し、貧困問題の解決と、「誰にでも居場所と出番のある包摂社会」の形成を目指している。

基本情報 住所 〒530-0003  
大阪市北区堂島2-3-2  
堂北ビル4階(大阪事務所)  
Tel | 06-6345-1517  
Fax | 06-6457-1358

ヒアリング 実施日 | 2019年12月23日[月]  
話し手 | 高野太一(事務局長/プログラム  
コーディネーター)

レジント 文 | 山本亮太郎



高野太一

### 雑誌『ビッグイシュー』について

ビッグイシューの試みは1991年にイギリス・ロンドンから始まり、その日本版の発行元として2003年に有限会社ビッグイシュー日本(以下、会社)が誕生しました。本社・編集部は大阪にあり、全国各地にライターがいて、同社の共同代表のひとりが編集長を務めています。会社が雑誌の作成とホームレスの人たちへの卸売業務を、NPO法人ビッグイシュー基金(以下、基金)が販売者を含めたホームレスの人たちの生活面のサポートをしています。会社は本の売上や広告収入で、基金は市民や企業からの寄付・会費で運営しています。

会社のポリシーは、独立した市民メディアのひとつとして、大手のマスコミでは取上げないようなことや、社会的な記事だけではなく文化、芸術的なことを取上げる、読み手がワクワクするような雑誌づくりです。購買層は40代以上の女性が多く、5人いる編集部のうち4人も女性です。また国際ストリートペーパーネットワークに登録しており、登録団体間で記事を無料でやりとりしています。そのため日本のニュースや販売者へのインタビューなど、日本版の記事が世界中へ発信されることもあります。毎号の記事や企画は編集会議などの場で、検討されています。

ビッグイシュー販売員になるには、時間がかかる審査や、身分証、携帯などは必要ありません。その日から誰でもすぐに始められ、収入を得られるというシンプルさとスピード感が特長です。1冊450円の雑誌を、最初は10冊プレゼントしています(以降は1冊220円で仕入れ)。まず事務所でお話をうかがって、行動規範にサインしてもらい、スタッフや現役の販売員と一緒に立つ「研修」をした以降は、ご自身で販売をしてもらっています。

### プログラム・コーディネーターの仕事とは

私は飛び込みの相談者のお話をうかがうことが多いです。相談者のご状況に応じて雑誌販売をもらうのが良いのか、生活保護をはじめとした公的支援を利用する方が良いのか、あるいはほかの民間支援団体などを紹介するのかなど、サステナブルな生活再建の方法をご本人と一緒に考えます。雑誌販売を



すれば、平均して月に6〜7万円という当座の食事や寝床をまかなえる収入が確保できるため、一時的に販売を希望する方も少なくありません。

販売者の方々は雑誌をしっかりと読み込んで売る人、そうでない人、実に様々です。いつも同じ時間に立つなど、お客さんが買いやすくなるような工夫を考えたり、中にはポスターを自作するなど、広報に力を入れる人もいます。

ビッグイシュー基金では『路上脱出・生活SOSガイド』という冊子をつくって配布したり、定期的な炊き出し回り・夜回りをしており、それらがきっかけになって訪ねて来られる人もいます。夜回りでは3〜6人ほどのチームになって、梅田、難波、新今宮など大阪市内を巡回し、声かけや安否確認を行っています。国の調査では大阪市内に約1,000人のホームレスがいると言われていますが<sup>[\*1]</sup>、一度の巡回で声をかけられるのはそのうちの30人程度です。炊き出しの場では50〜60人程度の人に出会えます。

## ホームレスの定義

「ホームレス」とは、路上に寝ている人だけでなく、「住まいを失うリスクを抱えた人」も含まれていると考えています。例えば家賃滞納などで近い将来家を出ないといけいない人や、ネットカフェやドヤ（簡易宿泊所）など不安定な居住状態に置かれている人などです。国の生活保護制度は生活再建に有用なものです。働けるうちは働きたいと利用しながらない人や、依存症などによる金銭管理の問題で制度利用を維持できない人もいます。ビッグイシュー販売は、自分で仕入数も販売時間も選ぶことができるという点が特徴的で、公的支援を受けたくないからビッグイシューに来られる方も少なくないです。相談件数自体は減少傾向にあります。相談者が若年化し、住む場所はないがスマホは持っていて、検索してビッグイシューを訪ねて来る人も増えています。

## スポーツ・文化活動について

基金ではホームレス当事者によるスポーツ・文化活動

を応援しています。例えばホームレス当事者・経験者を中心とした「野武士ジャパン」というサッカーチームがあります。ホームレスの人たちはお金や住まいだけでなく、人との関係性を喪失してしまっていることが多く、サッカーを通じた自然なつながりがつくられる場になれば、という想いで2004年から応援を続けています。また、「ダイバーシティカップ」というフットサル大会の開催も応援しており、ホームレス状態の人以外にも、養護施設に通う人、ギャンブル依存症の人、ひきこもりの人、LGBTの人など様々な背景を抱えた人たち同士が交流できる場づくりに取組んでいます。スポーツを競技としてではなく、様々な人がつながるためのものととらえているという意味では、アートとも通じるものがあるかもしれません。

文化活動では、「新人Hソケリッサ!」というホームレス経験者、当事者によるダンスグループの活動を応援しています。路上生活を経験した肉体の記憶に着目したプロダンサーのアオキ裕吉さん（一般社団法人アオキカク）に支えられ、活動は12年目を迎えています。今年8月、扇町公園でパフォーマンスをした際には、メンバーの背景を知らない通りすがりの人が涙する場面もありました。ほかには、作家の星野智幸さんたちが中心となり主催する、路上生活経験者を対象とした「路上文学賞」の事務局を務めたり、講談が好き販売者により結成された「講談部」が、講談師の玉田玉秀齋さんに稽古をつけてもらい、自分たちの人生を講談にするという活動を応援したりもしています。また「歩こう会」というウォーキングクラブでは、主催の販売者がコースの下見から資料づくりまで、すべてご自身で行っています。

基金で初回の相談を受ける時には、必ずご本人の趣味や息抜きの方法を聞きます。同じ趣味の人が3人



ホームレス経験者や当事者によるダンスグループ「新人Hソケリッサ!」の活動

講談部メンバーと講談師玉田玉秀齋さん

ウォーキングクラブ「歩こう会」の様子

以上集まれば、基金が会場費などを補助し、クラブ活動化できます。これまで家庭菜園部、料理部、英語部、プロレス鑑賞会などが生まれてきました。こちらで用意したプログラムよりも、当事者が主体的に計画し、誰でも参加できる企画には自然と人が集まり、継続します。また、「相談に来て」と言うよりも「一緒にサッカーしませんか」と呼びかけるほうが参加のハードルも下がります。こうした小さい動きの積み重ねを大切にしています。

## 行政・他団体との連携

行政、ほかの支援団体とも必要に応じて連携しています。例えば市内で活動するNPO法人釜ヶ崎支援機構やNPO法人Homedoorなどの困窮者支援団体とは、日常的に連絡を取合っています。行政についても、生活困窮者の自立支援窓口「路上脱出・生活SOSガイド」の配布協力を依頼したり、地方検察所から出所後の処遇について相談の電話があったり、様々なかたちで関わりがあります。ハローワークでビッグイシューを紹介されたと言ってやってきた人もいました。公的制度の利用や常用雇用以外にも、困った人がお金を手に入れることができる選択肢が複数用意されている社会は、豊かなものだと思います。基金の各種プログラムにも、販売員はビジネスパートナーで、彼らが自分で稼ぎ、自分で使うことを保証するという、会社の「セルフヘルプ」理念が根底にあります。そうしたスタンスを保ちながら、貧困問題に寄与できる方法を模索しています。

## 今後の活動の展望

近年、ホームレスの人の数自体は減っていて、ホームレ



ス状態の人を見たことがないという若い人も増えているのではと思います。しかしネットカフェで寝泊りする人など、見えないホームレス状態の人は増えています。そうしたしんどい状況の人々と一緒に考えながら、多様な道筋の生活再建を応援できる場でありたいと思っています。ホームレス問題が複雑・多様化する中で、様々な人、団体、情報をつなぎ、支援のネットワークをつくっていく、仲介者としての役割が求められていると感じます。例えば女性支援やひきこもり支援など、様々な分野で尽力されている支援団体と協働し、連携を深めることが、より実質的なホームレス支援につながっていくのではと感じています。

[\*1] 「ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果について」(2019年1月実施、厚生労働省)より  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_04461.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04461.html)

タイトル 特別養護老人ホーム  
**グレイスヴィル  
 まいづる**  
 (経営主体: 社会福祉法人 グレイスマいづる)

カテゴリ 高齢者福祉施設

施設紹介 2005年に京都北部初の全室個室ユニット型特別養護老人ホームとして開設。入居者、家族、地域住民など「この街に暮らす人々とともに暮らし、ともに考え、ともに感動する」をモットーに、80名の入居者一人ひとりの暮らしに着目したケアを展開。2012年には一般社団法人日本ユニットケア推進センターのユニットリーダー実地研修施設となり、全国から実習生の受け入れを行っている。また、2010年から施設の一部を地域の放課後児童クラブ(学童保育)に提供、入居者や職員、地域の方、遠来の方も参加する「とつとつダンスワークショップ」開催など、開かれた施設づくりにも取組んでいる。

基本情報 住所 | 〒624-0806  
 京都府舞鶴市宇布敷小字中島52-1  
 Tel | 0773-75-7121  
 Fax | 0773-78-3322

ヒアリング 実施日 | 2019年12月23日[月]  
 話し手 | 淡路由紀子(施設長)

クレジット 文 | 四元秀和



淡路由紀子

「シリーズとつとつ」(筆者レポート)

2010年3月に舞鶴赤れんが倉庫で上演されたダンス公演「とつとつダンス」をきっかけに、①ダンサー・振付家の砂連尾理(じゃれお・おさむ)さんによる身体コミュニケーションのワークショップ、②看護師・臨床哲学者の西川勝さんによる哲学勉強会、③文化人類学研究者の豊平豪さんによる文化人類学カフェという3つのワークショップが始まる。およそ10年を経た近年は、ワークショップの内容も少しずつ変化しながら、月1回の実施が定着している。

訪問したこの日は、まず、砂連尾さんの「とつとつダンス」ワークショップから。1階の地域交流スペースに12名の入居者と数名の職員、市外から来られた常連さんが集まり、そばにいた学童の男の子3人も飛び入りで参加。車椅子の入居者、椅子に腰かける人の大きな円の中心で、砂連尾さんが簡単なストレッチ体操を始める。一人ひとりの手を握って回りながら、やがて幼な子のようにお年寄りの膝に頭を埋めると、砂連尾さんの顔をなでまわす入居者も。普段は、職員の言葉がけに対して一時の猶予が必要な入居者も、砂連尾さんの動きにはすんなり応じているという。砂連尾さんが円の中に風船を飛ばすと、特に言葉を交わさずとも、風船はお年寄りと子どもの間を行ったり来たり始める。続いてシャボン玉が飛ばされると、子どももお年寄りもシャボン玉を床に落とすまいと協力する。座の空気が温まると「お正月の替え歌をつくりましょう」と砂連尾さんが提案。お年寄りがつぶやいた言葉をホワイトボードに記していくうちに「グレイスのお正月」が出来上がる。子どもたちが太鼓を打つと、104歳の女性がやおら車椅子から立ち上がり、歌に合わせて、太鼓に合わせて、手を振りながら円をめぐり始める。職員がその女性の後ろで身体に手を添え、その背中に別の人がつながり、やがて、砂連尾さんを先頭に行列ができる。歌と太鼓と行列がずっと動いている。ホールを通りすぎる人も、思わず足を止めて手拍子を打つ。ようやく太鼓が止まり、歌もやんで、みんながもとの席に戻り始めると、砂連尾さんは始まりと同じように一人ひとりの手に触れ、顔に触れ、最後は静かに黙想を行いワークショップは終了。子どもたちも静かになり、ゆっ

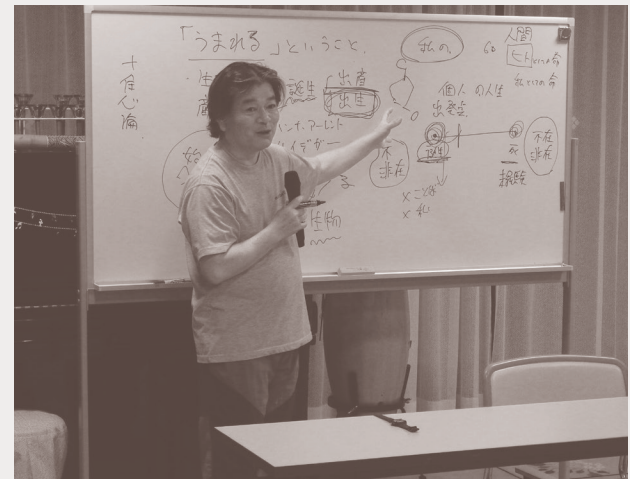
たりとした空気が流れる。15分ほどすると、職員も入居者もそして子どもたちも、それぞれの居場所に戻っていった。

しばらく休憩を挟んでから、元看護師で臨床哲学者の西川勝さんの勉強会が始まる。ダンスワークショップに参加していた人や、職員数名が集まっている。ここ1年は「介護の現場から」というタイトルで、「生まれる」「眠る」「遊ぶ」「歩く」「かむ」などの動詞をテーマに、老いとケアについて考え、語る場になっている。

砂連尾さんとの出会い

淡路 私は舞鶴市の職員でしたが、福祉事務所で高齢者福祉の担当をしていた頃に理事長と出会い、20年余り勤めた舞鶴市を退職して、2003年に社会福祉法人グレイスマいづるの設立メンバーになりました。2004年の建設工事着工と同時に地区の集会所をお借りして、そこに特養準備室を開設。事業計画や職員採用などを進めるうちに、畑仕事をされている近所の方、いつものように集会所に散歩に来られるお年寄りなど、地域の方々と少しずつ顔見知りになっていきました。施設のお隣さんになる小学校の先生方や児童とも親しくなり、竣工式では子どもたちが合唱でお祝いしてくれました。開設後は地域の方々が喫茶コーナーのボランティアを引き受けてくださったり、小学生が休み時間にユニットに遊びに来てくれたりと、賑やかになりました。入居者やご家族にもグレイスでの暮らしに馴染んでいただき、いろんなことがようやく軌道に乗りました。入居者やご家族にもグレイスでの暮らしに馴染んでいただき、いろんなことがようやく軌道に乗りました。入居者やご家族にもグレイスでの暮らしに馴染んでいただき、いろんなことがようやく軌道に乗りました。入居者やご家族にもグレイスでの暮らしに馴染んでいただき、いろんなことがようやく軌道に乗りました。

そんな2009年頃、舞鶴市では、市とNPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴との協働による文化芸術の振興やアートを通じた地域づくりを目的とするアートプロ



ジェクト「まいづるRB」が実施されていました。コンテンツポラリアートを中心として新しい表現を試みるアーティストらによって、舞鶴赤れんが倉庫群において舞台公演や展覧会などが開催されていました。このプロジェクトを進めていたのが、たまたま役所時代に同期だった友人だったんです。この友人から「まいづるRBの企画で招待したダンサーがお年寄りや子どもたちと作品をつくりたいと言うので、出会いを求めて市内の老人会やら自治会やらをめぐってきたのだけれど、最後にグレイスに寄ってもいいか?」と聞かれたことが、砂連尾さんとの出会いでした。

続けていく中で生まれた意識や関係性の変化

施設を案内しながら色々お話しして、砂連尾さんがグレイスの雰囲気を感じてくれたこと、何より高齢者施設ですからお年寄りとの出会いのチャンスは市内のごくよれも抜群にあることなどから、砂連尾さんの作品づくりがグレイスで進められることになり、2009年12月から砂連尾さんのダンスワークショップが始まりました。そして、最終的にこのワークショップの様子が「とつとつダンス」という作品となって、2010年3月に舞鶴赤れんが倉庫で上演。その公演が終了したところで、本来なら砂連尾さんとはお別れのはずでした。舞鶴市の予算で実施された今回限りのアートプロジェクトに、「続・とつとつダンス」はないわけです。

2018年7月23日開催  
 臨床哲学者・西川勝さんによる「生まれる」をテーマとした勉強会。



はじめはその後のことなど考えもしませんでしたが、作品ができるまでずっとお付き合いいただき、公演に出演された入居者のことを思うと、このままおしまいにするのはとても身勝手な気がしました。お年寄りの気持ちに火をつけておいて、用が済んだら「はい、さいなら」ではあかん、と。そこで砂連尾さんに、グレイスが経費を負担するのでワークショップを続けてもらえませんかと相談したところ、砂連尾さんも「またいつか会いましょう」というあてのない別れ方は残念と思ってくれていたことがわかり、ダンスワークショップを続けてもらうことになりました。

### 一歩引いてみることで見えてきたもの

それからずっと、およそ1か月に1回、かれこれ10年「とつとつダンス」を継続してきました。特別養護老人ホームですから、お年寄りには要介護の入居者です。軽度から重度まで認知症の方もおられます。毎回新鮮に楽しんでいる人もおられるし、何かわからないけれど肌感覚で覚えている人もいます。このダンスワークショップでお年寄りにこんな効果がありました、ということはありません。認知症予防のための〇〇療法みたいなことにはなりそうもない。ワークショップやダンスを通じて、私たちは、いつも一緒にいるのに、これまで知らなかった入居者の姿を見せてもらう、そんな感じです。普段は入居者と職員なのだけれども、ワークショップでは一緒に砂連尾ワールドに取込まれてしまう。そんな時は、入居者の方が断然ノリがよくて、ついていけません。我々の方がコミュニケーション能力は高いとか、判断力があるなんて思っていたら違うわけです。色々頭で考えているから、お年寄りみたいに素直に身体が動かない。続いてやっている西川さんのワークショップなんかで、さっき各々が体験したことは何だったのか、言語化が行われることもありますけど、西川さんの話を聞いて納得したり、わかった気になったりするの、「ちょっと違うでしょ」と思うこともあります(笑)。

以前は施設の2階にある広い研修室でやっていましたが、最近は通りすがりの人など、誰もが見える1階の地域交流スペースでやっています。ちょうど面会

に来られて一緒に参加するご家族もあれば、邪魔をしないようにささーっと行く職員とか、いろいろです。今のところ、役員や職員に「なぜこんなことをやるのか」と問い詰められたことはありません。施設長の権限を行使して「ものすごく大切なことしています」という態度で押し通してきた感じです(笑)。私がそういう風にできたのも、砂連尾さんや西川さん、まいづるRBのメンバーだった豊平さんが、グレイスの入居者、職員、地域との関係をすごく大切にしてくれているからだと思います。砂連尾さんたちはお客様ではなく、明らかにグレイスの馴染みになっていて、身内という感じです。

入居者の家族の中に役所時代の先輩がいて、ある時「施設の予算を使うのだから、ワークショップは施設長の仕事ではなく、もっと職員が進めてくれるかたちが良いと思う。このままだと『とつとつ』の効果は誰にも伝わらない。家族にしてみたら、もっとわかりやすいこと、うちの親に、認知症に効果のあることに予算を使ってくれ、みたいな話になるぞ」と言われたことがあります。OBになっても役所っぽいなあと思いつつ、ちょうど砂連尾さんたちと今後のワークショップのあり方みたいなことを話し合っていた時でもあったので、もっと職員に委ねてやってもらおうということになりました。そして2018年暮れから、最初のダンスワークショップからずっと一緒にやってくれていた管理職の女性3名に「シリーズとつとつ」の面倒をみていただくようお願いしました。突然のことに、なんで？ 今更？ みたいな話もありましたが、引き受けてくれました。そうすると、私があれば説明してやっていた時より、入居者も職員も参加する人が本当に増えたんです。ワークショップの場所を1階に移したのも彼女たちです。彼女たちのおかげで、これまでよりたくさんのお年寄りのキャラクター、入居者の個性がどんどん引き出されている。彼女たちに託して本当に良かったと思います。

### 地域との交流

グレイスには地域のおばちゃん、学童の親御さん、民生児童委員さん、視察や見学のお客さん、実習生など、様々な人が来られます。畑作業や庭の手入れ、生

け花や、季節ごとのホールの装飾にも、こっちが忘れていても来てくださいます。梅干しにたくあん、味噌づくりなど、地域の方々には本当にお世話になっていきます。そのほかに、大正琴の演奏会、日本舞踊にフラダンス、手品、本の読み聞かせなど、イベントをしたいと言ってくれる方々にもどんどん来ていただいています。お茶はセルフで、喫茶コーナーでも自販機でも自由にご利用くださいと願っているのですが、開設した頃は「あそこはボランティアにお茶も出さない」と噂になって来なくなった人もいました(笑)。

### 時代に合わせて変わるものと変わらないこと

昨今は介護業界だけでなく、どこも人材不足が大変だと思うのですが、グレイスにとっても人材確保は他人事ではなく喫緊の課題です。リクルートに向けて、グレイスのPRポイントを考えていたときにふと、「シリーズとつとつ」や「地域交流」など、これこそがよそにはないグレイスの特長、「売り」じゃないのかと思い、初めて作成したリクルート用のパンフレットに掲載しました。これまで、特に芸術系出身の学生さんにターゲットを絞って職員募集をしたことはありませんが、グレイスは、現場で、自分自身で、いろんなことを生で体験できる職場です、という感じです。今は舞鶴市と友好関係にある中央アジアのウズベキスタンと介護人材の交流について検討を始めたところで、これからはダイバシティーなんかに興味のある人にとってもおもしろい職場かもしれません。3年間続いたまいづるRBのアートプロジェクトは、いろんな人に影響を与えたと思います。けれどもその中で、その後も継続している企画は「とつとつダンス」だけです。高齢者介護の「現場」もひとつの「コミュニティ」。だから、「とつとつダンス」が続いているのだと思います。

「とつとつダンス」ワークショップでは、例えば、輪投げの輪を頭のにのける方がおられたり、ゴミ

袋を帽子のようにかぶる方がおられたり。それを「間違っていますよ」と制止せず、ハラハラどきどきしながら見守っている。ものの既成概念に捉われていると不自由なかも、なんてことを体験する。コンプライアンスやハラスメントが叫ばれる時代、ワークショップを外から見ている人には、「認知症の人をバカにしている!」とか、「人権侵害じゃないの!」なんて言われてしまうかもしれません。そこに、敢えて異を唱えるつもりはありません。「とつとつダンス」以前の私たちも、多分そんな風に見たかもしれませんから。人を変えることはできないけれど、自分が変わることで見方、感じ方は変わるものです。

準備室の時から地域の方々に応援していただき、受け入れていただいたことで、私たちいろんなものを受け入れることができたと思います。そういう中に「とつとつダンス」ワークショップの種が落ちた。そこから「シリーズとつとつ」という芽が出てきた。この先どんな風に育つのか、「シリーズとつとつ」はまだまだ始まったばかりのように思います。



「とつとつダンス」ワークショップの様子

# ドラッグクイーン・ストーリーアワー 東京 読み聞かせの会

カテゴリ ジェンダー・セクシュアリティ教育事業

団体紹介 Drag Queen Story Hour (以下、DQSH)

はアメリカのLGBTコミュニティから始まった文化・教育プログラム。本部はニューヨークにあり、現在、アメリカ各都市のほか世界各地に活動を広げている。本会は、同本部公認のもと、日本で活動する非営利任意団体。プログラム内容を日本の環境に合わせ、主に3歳から8歳までの子どもを対象に読み聞かせの会を実施。すべての子どもにとって大切な、自分らしさに対する自己肯定感、ジェンダーやセクシュアリティ、個性のダイバーシティを伝えることで、「自分と他人との違い」を理由にした、いじめや差別のない環境づくりを目指す。

基本情報 Webサイト | <http://dragqueenstoryhour.tokyo>

ヒアリング 実施日 | 2020年1月26日[日]

話し手 | 吉田智子、長谷川博史、マダム ボンジュール・ジャンジ、宮田ヒロシ、笠原麻衣子、オナン・スペルマーメイド

クレジット 文 | 倉谷誠

吉田智子



## DQSH東京の活動に至る経緯

吉田 | 私はニューヨーク在住で、4歳の子どもがいるので、様々な子ども向けプログラムに親子で参加しています。その中で、地元の図書館でドラッグクイーンが絵本の読み聞かせをする会を知り、実際に参加してみるととても感銘を受けました。子どもが楽しいのはもちろん、親として、ひとりの人間としてエンパワメントされた気持ちになりました。すでにほかの国にも支部があることを知り、これは日本で子どものいる友達でも興味を持つ人がいるだろうと思い、ここにいる長谷川さん、ジャンジさんに相談しました。このふたりがOKとってくれたら可能性があると思ったので。

宮田 | 実は、SNSでアメリカの取組みを知って、良いイベントだと思っていた(笑)。相談を受けたのが一昨年(2018年)の夏頃で、その1か月後には「やろう!」となりました。まずは権利関係が気になったので、吉田さんから本部に問い合わせてもらいましたが、本部の承認はそれほど厳しくなく、ロゴや運営マニュアル、様々なノウハウについても共有いただき、それらをもとにプログラムのローカライズを行いました。

長谷川 | 吉田さんが相談した先が、キャリアのあるドラッグクイーンだったのが良かった。もともとクラブで出会って20～30年になる仲間たちで、実は僕とヒロシとジャンジは、京都のクラブ・メトロで開催されていたエイズ・ポスター・プロジェクト(APP)が主催するエイズ・ベネフィット・パーティー「CLUB LUV+ (クラブラブ)」で90年代半ばに出会っています。DQSHについては、当初、話を聞いた時に興味は湧いたのですが、正直どうしたものかと思っていました。

宮田 | ドラッグクイーンというのは、ある程度「毒」があってこそ輝く存在ですが、その毒と子どもへの配慮というバランスが難しい。そこで、(笠原)麻衣子に声をかけて、専門的なアドバイスをもらうことにしました。彼女は保育士として働きながらも、20年間ドラッグクイーンを見続けてきた貴重な人材。読み聞かせに関わるスタッフやドラッグクイーンは、全員が子どもの特

性や、子どもや保護者への対応について麻衣子による研修を受けています。さらに、パイロット版の見学に来てくださった方の中から、障害児教育の研究をしている大学教員・シンプソンがメンバーに加わり、本格的に活動のスタートを切る体制が整いました。

ジャンジ | 以前、ワタリウム美術館で行われた子ども向けのショーや「アート1日幼稚園」というワークショップで「ハグたいそう」(参加型のオリジナルパフォーマンス)をやっていたことがあり、子どもたちとまた何かやりたいなど思っていたところだったので、タイミングが良かったんです。幼い頃の多様性に触れる経験って大事ですから。

## 活動の状況

宮田 | 2018年11月に開催したパイロット版は、プログラム内容や実際の運営をテストするリハーサル的な位置づけとして、渋谷区にある笹塚区民会館を借りて自主開催しました。その時の読み聞かせは、ジャンジとオナンにお願いしました。以降は、自分たちで会場を借りるのではなく、児童館や保育園、図書館など、会

場となる施設や団体に企画を持ち込んで、協議をしながら開催しています。その際、先方には、まずは一度見学に来てほしい、と依頼します。実際に子どもたちや保護者の皆さんの反応を見ていただくと、お互い安心して進めることができます。本日のイベント会場の笹塚こども図書館の方も、渋谷区の子育て支援施設「景丘の家」での読み聞かせの見学に来ていただきました。

吉田 | アメリカでは公立の図書館が会場になっており、日本でもいつか公立の図書館でやりたいと思っていました。アメリカや各国の支部では様々な契約の形態があるようですが、ニューヨークでは図書館と直接契約して、図書館のプログラム予算で開催しています。笹塚こども図書館での開催は、アーツカウンシル東京に助成をいただいているのですが、それがすべての財源ではありません。図書館は、誰でも来られるところが良いと思っています。今は事前申込というかたちをとっており、ダイバーシティへの意識が高い方の参加が多いですが、そこから発展して、地域の人が自由に参加できるようにしていくことが大事だと思っています。



「ドラッグクイーンがやってくる★おはなし会と工作会」読み聞かせの様子「1」



## これまでのイベント開催状況

〔日時〕	〔会場〕	〔読み聞かせ〕
2019年4月13日	渋谷区のかぞくのアトリエ	マーガレットさん
2019年11月2日	渋谷東しぜんの国こども園BUTTER	レイチェル・ダムールさん
2019年11月3日	渋谷区の景丘の家	エスマラルダさん
2020年1月11日	水戸芸術館	マダム ポンジュール・ジャンジさん
2020年1月19日	オランダ王国大使館	エスマラルダさん、オナン・スペルマーメイドさん

**富田** | 子どもの感覚は、親の感覚に大きな影響を受けます。そのため子どもと保護者が一緒に参加するというのが大切だと考えています。図書館という公共の開かれた施設なので、多くの人に参加してほしいという思いはあるのですが、あまりに人が多いと、絵本が見えない、声が聞こえないということになってしまうので、参加いただける人数については会場と相談して決めています。

### 活動する上で気をつけていること

**富田** | イベントの基本構成は、絵本3冊の読み聞かせと工作、最後にドラッグクインと一緒に記念撮影をするという約1時間のプログラムです。読み聞かせする絵本は毎回、ドラッグクインと相談して決めています。1冊目は子どもがよく知っているような絵本、2冊目はドラッグクイン自身のお気に入りの絵本、最後はジェンダーやセクシャリティに関係する絵本を選ぶようにしています。あとは、大人向けのショーとは違って、例えば、露出が高すぎたり、子どもが飛びついて来た時に怪我をしそうなトゲトゲの衣装は選ばない、「大人向け」すぎる言葉遣いや恐怖を煽るようなパフォーマンスは避けるなど、子ども向けイベントならではの配慮を研修で伝えています。とはいっても、ドラッグクインの個性が発揮されることがDQSHというイベントの一番の魅力なので、ルールを徹底するというよりは、バランスを工夫したパフォーマンスを考えてもらっています。ドラッグクインにとっても、新たなチャレンジになっているように思います。

**オナン** | 子どもたちの前で話す時の言葉遣いには注意していますが、絵本に書いている言葉そのまま読まざるを得ないです。どこまでアレンジするか、作品の良さを損ねないことを大事にしていますが、読み手である自分自身はそれを損ねてしまう存在でもあり、そのせめぎ合いのかなと考えています。回を重ねてみて、最近はもうちょっとアレンジを加えてみるのも良いかな、と思っています。子どもたちが、自然発生的にざわざわするのはむしろ大歓迎です。

**富田** | 最近、メディアからの問い合わせをいただくことが多くなってきましたが、基本的にすべて辞退しています。メンバーはみんな、別に仕事をしていてDQSH東京の活動に使える時間も限られているので、過剰に注目されるとメディア対応でほかのことが回らなくなる懸念があります。メディアへのケアが不足して誤解が生まれるようなリスクは避けたいですし、今の体制で対応できる範囲を超えるような手の広げ方はしないように心がけています。

このプログラムは、新しいエデュケーションの側面と、ドラッグクインがアーティストとして新しい表現を見出すことの両立を目指すものですが、そのバランスを取ることは思ったほど簡単ではないと感じています。

何かを表現するということは、1回きりで上手くいくことではありません。すでに頭の中にあるものを持つてくるだけでは「レディメイド」であって、「クリエイティブ」ではないです。自分の中でミッションを持ちつつ、子どもの化学変化を見逃さないということを両立できる、ある意味「客あしらい」に長けた経験豊富なド

ラッグクインは限られているようにも思います。かといって、ただ女装している人が絵本を読んでも意味がありません。やはり、ドラッグクイン自身の生身の人生がそこにあるからこそ、子どもに伝える意味があります。今日も、オナンの声が「男の人みただけど、男なの？ どうなんだろう？」と、質問をしたいけど聞いていものか迷っていた子どもがいましたが、すでにジェンダーについて敏感に感じ取れる年頃なんだと思います。目の前のドラッグクインと絵本の内容はつながっていないかもしれない。でも、ファンタジーとリアルの間で迷った今日の経験を将来、「自分らしさ」について考えるタイミングが来た時に、ふっと思い出してくれれば良いなと思っています。すぐに結果を求めるのではなく、長期的な視点で取組んでいきたいです。

この取組みが回数を経てもっと効率よくシステム化されることが良いかどうか、ドラッグクインに対しても、今回はこういうふうには振る舞ってほしいというようなディレクションをすべきかどうかは、毎回悩むところです。考え方を示したほうが乗っかりやすいのかもしいませんが、今はドラッグクインたちの自主性やアイデアに任せたいと思っています。同じ絵本の読み聞かせでも、ドラッグクインによって、場の雰囲気づくり方やメッセージの表現方法が違います。今日のオナンは、割と忠実に絵本を読み、オナン得意の演技力やトークで子どもたちを魅了していましたが、エスマラルダは絵本の中に書かれていることを拾い上げながら子どもとたくさん会話をするスタイルでしたし、レイチェルは3冊の本の流れをドラマティックに構成してくれました。マーガレットは、どんなに暴れん坊な子どもが来ても対応できる(笑)、百戦錬磨のアドリブに感動させられます。そんな風に、ドラッグクインも多様であってほしいと思います。

### ドラッグクインのスタンス・考え方

**オナン** | 自分なりの良し悪しのジャッジとしては、まず現場が楽しいかどうか。普段のショーでは大人が相手であり、空気を読んで色々と察することもあります。子どもはダイレクトに来るので、こちら側もごまかしがききません。何かしらの爪痕が残せたなと思えた

ら、ドラッグクインとしては達成感があります。ミッションとして、子どもも大事、自分の表現も大事、どちらも捨てたくないです。

オランダ大使館で実施してから、それほど間隔を空けずに今日を迎えられたことが勉強になりました。先日はそんなに絵本の説明をしなかったのですが、それは絵本の世界を壊してはいけない、作家の意図を逸脱してはいけないと思っているからでもあります。ただ、書いてある文章以外の挿絵などにも触れつつ、ある程度インタラクティブに進めたほうが子どもは喜んでくれます。今日、改めて感じましたが、子どもは絵をすごく見えています。自分の読みやすさだけを考えたら紙芝居のほうがやりやすいですが、やっぱり子どもと一緒に読みたい、お母さんに布団で読んでもらっている延長でありたいと思います。

**笠原** | 本の良さは、本屋さんや図書館で手に入れることができ、家に帰ってもう1回読める、もう1回感動に浸れることです。紙芝居だと、自分では読めません。

**長谷川** | 毒があってこそドラッグクインというところもあるので、ドラッグクインが子ども向けに絵本を読み聞かせることには「ドラッグクイン業界」「LGBT業界」でも賛否はあると思います。「ドラッグクインとはこうあるべき」論があるというのも理解していますが、多様性の中のひとつとしてドラッグクインがいるのは事実。自分たちとしては、子どもたちの日常の延長線以上に、多様性の実体験を増やしたいです。「LGBTQ」とくられるような自分たちにとっても、自分たちだけの安心な世界(新宿2丁目)から外に出ることが大事だと思っていますし、時代が追いついてきてきている実感があります。自分が子どもの時代は、ゲイにはネガティブな印象を持たれていましたが、それを变えたい。地味かもしれないですが、これからの未来を担う子どもたちの中からもじわじわと広がっていく、そんな取組みにしたいです。

**笠原** | 子どもは、ドラッグクインが子ども向けに清純派ぶっていたとしても、それがクリーンなだけでないことを見抜いています。場所が図書館であっても、クラ



「ドラッグクイーンがやってくる★おはなし会と工作会」の様子①

ブのステージであっても、ドラッグクイーン自身が持っている美意識、毒、違和感のようなものは隠しきれたものではないです。そういった子どもの様子を見て、親もドギマギしていると思います。

宮田 | ドラッグクイーンのキーワードは「違和感」だと思います。今の時代、ドラッグクイーンがクラブにいても違和感はない。図書館に現れるほうがずっと違和感がありますよね(笑)? そういう違和感がある存在でさえも、人としての本質を受け止めて、自然に受け入れられる社会になれば良いと思います。

#### DQSH東京の今後について

宮田 | 規模を大きくするのではなく、続けることに重点を置いて取組んでいきたいです。とにかく出会いの機会を増やす、東京だけでなく日本の各地で、こういうイベントの回数や会場の数が増えていくことが大事だと思います。やはり本物のドラッグクイーンに出会うとインパクトがあるけれど、お楽しみショーみたいなイベントにするつもりはありません。読み聞かせに工作を加えたプログラムになっているのは、子どもや保護者

が単なる受け身の観客になってしまわないための工夫でもあり、ステージから客席への一方通行にならないための、フラットな場をつくるのが狙いでもあります。開催場所は、誰でもアクセスできる公共のスペースでできるのがベストで、安心して参加してもらえるイベントの積み重ねが、次の展開を考える時の先方の安心材料になり、協力者や理解者を広げることにつながっていくと思っています。まずは開催場所を増やすことが大事だと思うので、この取組みがじわじわと浸透し、東京以外にも日本の各地に支部のような活動が自発的に生まれてほしいと願っています。

※1 「ドラッグクイーンがやってくる★おはなし会と工作会」  
 日時 | 2020年1月26日(日) 14:00 ~ 15:00 (13:30受付開始)  
 場所 | 笹塚こども図書館ほしのへや  
 主催 | DQSH東京  
 助成 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
 対象年齢 | 3歳 ~ 8歳まで  
 参加費 | 工作代金500円

## タイトル 一般社団法人 kuriya

カテゴリ 在住外国人支援事業

団体紹介 2009年から活動する「新宿アートプロジェクト」を経て、2016年7月に設立。外国ルーツの若者たち=未来の可能性ととらえ、自らの手で未来を切り拓く人材を発掘・育成している。東京をベースに多様な人たちが集うインターカルチャーな場をつくり、それぞれの持つ知識やスキルを共有し学び合いながらアートプロジェクトを行うことで、彼らに生きる糧やライフスキルを身につける機会を創出する。外国ルーツの高校生を対象とした定時制高校での居場所づくりやインターンプログラムを通じ、これまで300名以上の若者を対象にプログラムを提供するとともに、直接支援のみならず、政策提言やセミナーなどの環境整備も実施している。

基本情報 住所 | 〒108-0023

東京都港区芝浦3-15-4

SHIBAURA HOUSE3階

ヒアリング 実施日 | 2020年1月27日[月]

話し手 | 海老原周子(代表理事)

クレジット 文 | 倉谷誠



海老原周子

#### 活動をはじめた経緯

kuriyaの活動を始めたのは、幼少期をペルーやイギリスで育った経験が原体験になっています。言葉や習慣が違い大変でしたが、一番苦労したのが友人をつくることでした。そんな中でアートがひとつのきっかけとなり、友人ができたことで世界が広がっていったことを覚えています。いざ日本に帰ってきてみると、自分と同じように外国人として育つ子どもや若者に対して、自分が受けてきたようなサポートや活動が少なく、何かできないかと考えるようになりました。

大学卒業後は(独)国際交流基金、国際移住機関(IOM)で勤務し、2009年に同基金内で新規事業「新宿区につながるのある中高生を対象とした映像共同制作ワークショップ」を立ち上げました。外国人・日本人両方を対象に事業を実施したことが、今の活動をスタートした契機です。

以降、様々なアートをを用いたワークショップを行い、単発のものだけではなく、多文化の若者の人材育成のための包括的なプログラム開発に取り組みました。結果、外国ルーツの若者と日本の若者が自ら企画してプロジェクトを展開するように。また、現場で見えてきた社会課題に対して、仕組みづくりの観点から、政策提言をはじめとする外国ルーツの高校生たちの環境改善への取組みへとつなげていきました。具体的には、外国籍等高校生の中退率や進路未決定率について、文部科学省に調査を働きかけ、明らかにすることによって、社会課題を浮き彫りにしました。併せて、これまで具体的な取組みのなかった外国籍等高校生に対し、毎年補助事業として包括的な支援策が政策に盛り込まれるように。また、法務省に対しても働きかけを行い、これまで課題のあった在留資格についての要件緩和を促しました。

#### アートプロジェクト/社会課題の解決と 価値創造のせめぎ合い

プロジェクトと一緒に取組むアーティストは、結果として海外のアーティストが多くいます。これまでは、外国ルーツということをテーマに作品をつくるというよりも、



教育的な側面を踏まえ、作品制作よりも外国籍などの高校生や若者にとって、どのような体験提供ができるかを視野に入れながら、一緒に活動をつくってきました。例えばアーツカウンシル東京の取組み「TURN」の中で、「多文化ルービックキューブツアー」を実施。美術館の中にある「文化」をキーワードに、参加者がチームとなって写真を撮影し、そこから6枚を選んでルービックキューブをつくるという試みでした。これは、参加者同士で話をすることで多様な文化があることを認識し合い、多様性について体感する仕立てになっています。チームの中に多様性があればあるほど、より多様な視点を感じることができるという意図です。作品をつくるためのアートワークショップというよりも、社会に眠る課題をどう解決につなげるかという視点を持って、ともに行動してくれるアーティストと一緒に仕事をしてきたように感じています。

日本人のアーティストでは、立ち上げからずっと一緒に関わってくれている写真家の桑原優希さんがいます。一般社団法人の理事にも参画して下さっており、取組みの趣旨をよく理解してくださっています。関わりのあるアーティストのジャンルとしては、映像や写真のほか、ストリートダンス、ラッパーなどもあります。

アート作品をつくることを目的にすることと社会課題の解決を試みることは、視点が大きく異なるので、外国籍などの高校生が様々な壁に阻まれ、日本社会での生活が厳しい状況を目の当たりにしながら、それでもアートワークショップを提供することに疑問を感じるようになりました。アーティストは移民をテーマにした作品をつくることで自身の実績にはなるかもしれませんが、移民の高校生の環境改善にはつながりません。自分がやるべきことはアート作品をつくることではなく、まずは社会の課題を解決することだと思ようになりました。写真などアートの要素は取入れられているかもしれませんが、いわゆる作品制作を目的としたアートプロジェクトとはまったく異なるものだと感じています。

作品の創作活動自体は非常に価値あるものだと思いますが、私たちの役割は、外国ルーツの高校生が日本で希望を持って未来を描ける社会をつくることであり、社会課題の解決に比重を置いています。先入観でものごとを課題化して見ないアーティストには、違う切り口で発想してくれる点があると感じており、また、アートワークショップなどを通じて、思わぬ本音と出会うこともあります。そういった現場をつく



り出すこと、そこで浮き彫りになった声を集めて、より普遍的な政策提言につなげることが自らの役割だと考えています。

#### 団体の運営・今後の展開

4年前、アーツカウンシル東京とアートポイント計画を共催事業として行った際に、一般社団法人化に踏み切りました。事業自体は3年間続き、次の展開を考えた時に、どのような組織体が適切かと検討した結果、団体自体を大きくすることに価値を置くのではなく、課題解決のために柔軟な組織であることが重要だと感じました。具体的には、他団体と協働しながら取組みを進めていく試みとして、NPO法人カタリバと連携することになりました。昨年から事業協定を締結し、kuriyaからはこれまで培ったノウハウを提供することで、外国籍などの高校生の支援事業を進めています。また、学校内外でのキャリア教育のプログラム提供なども実施しています。

昨今、社会包摂や多文化共生をテーマに活動したい団体が増えたと感じています。ただ、これまでの経験から私が必要性を感じているのは、福祉分野へ

のアプローチです。ソーシャルワークが必要となる場面に多く接してきましたが、アートに携わる人たちにその視点があるのかどうか、疑問を感じることがあります。例えば、香港のアートセンターが実施している移民の子どもたちを対象とした映像ワークショップでは、5〜6チームに分かれての映像制作を行っていましたが、チームに必ずひとりにはソーシャルワーカーを入れていました。キャンプの間、子どもたちの話から出てきた悩みや課題に対して、アート関係者では対応できないので、リスクを抱えている外国ルーツの子どもや若者へのきちんとした支援につながる仕組みをつくっていません。虐待や生活困窮といった課題に直面した時に、自らが対応できなくとも、それについての視点を持つということが、日本のアート関係者にどれだけあるのかは今後の検討課題としてあるのかもしれない。



# MASH大阪

カテゴリ セクシュアルヘルス支援事業

団体紹介 大阪地区のMSM (MSM=Men who have Sex with Men)やTG(Trans Gender)に対し、HIV/STI感染の予防を促し、セクシュアル・ヘルス(性的健康)を増進させることを目的として、医療従事者、行政関係者、ボランティアらのパートナーシップのもと活動している任意団体。ニュースレターの配布、勉強会・啓発イベントの開催、ドロップインセンター・インターネットサイトの運営など、様々な予防プログラムを展開している。

基本情報 住所 | 〒530-0027

大阪市北区堂山町11-2 堂山山よしビル4階

Tel-Fax | 06-6361-9300

ヒアリング 実施日 | 2020年2月26日[水]

話し手 | 鬼塚哲郎 (元代表/京都産業大学文学部  
国際文化学科教授)、後藤大輔 (副代表)

レジット 文 | 山本亮太郎

## MASH大阪設立の経緯

鬼塚 | さっかけは、1991年にダムタイプの古橋梯二氏がHIV陽性をカミングアウトしたことです。90年代当時、HIV感染者は非常に厳しい状況に置かれており、医療機関の受け入れ体制が整っておらず、古橋氏もほかの患者が全員帰ってから診察を受けていました。アーティストを中心とした古橋氏の周りの人たちが、そうした状況に憤りを感じ、何とかしたいと考え、ボランティアの人たちとともに様々な活動を始めました。特筆すべきは1992年に京都で始まった「エイズ・ポスター・プロジェクト (以下、APP)」です。これは、当時のHIV啓発・予防のためのポスターの内容が、エイズという病気の怖さをいわずに強調し、感染者を特別視する、社会防衛思想に基づいたものばかりであったことから、海外の啓発ポスターを収集し、具体的なメッセージをストレートに伝えようと試みたものです。この頃、海外でも当事者は厳しい差別に苦しんでいましたが、差別と戦うために立ち上がった様々なアーティストがHIVをテーマにした活動を精力的に展開していました。1994年に横浜で開催された「国際エイズ会議」では、ダムタイプが大きなイベントを開催する機会に恵まれ、アメリカのアーティストを招聘し、公共空間にスライドを投射してメッセージを発信するというパフォーマンスを行いました。日本ではまだまだ知らせては困る病気という認識が強い中、アメリカは感染による死者数が桁違いに多いためか、パフォーマンスのクオリティが高く、アーティストの底力を感じました。そんな中APPとしても、ポスターをつくっても貼るところがなければ意味がないと考え、ポスター以外の様々な表現方法でマイノリティを取上げる活動を展開するようになります。

こうした活動を通じて大阪府のエイズ対策担当職員の森岡幸子さんと知り合い、1998年、彼女のもとに市川誠一先生 (現、金城学院大学教授)や大阪の発展場の経営者らとともに集まり、HIV/エイズをセクシュアルマイノリティのみの問題ではなく、「地域の健康課題」であるとならえ、予防のためのプロジェクトとして、厚労省の科研費をベースにMASH大阪が誕生しました。当時、研究者とボランティアの間に立つ翻訳者の

役ならば自分でも担えるかなと思っていたので、代表に就任することに迷いはありませんでした。当時、オーストラリアのシドニーにSMASH (Sydney Men and Sexual Health) という性的健康の向上を目的に活動する団体があり、「Sexual Health」という言葉を入れたかったので、名前をそのままいただいてMASH大阪と名付けました。

## 設立～初期の取組みについて

鬼塚 | 活動開始当初はベースライン調査と効果検証に取り組んでいました。行政からのアプローチでHIVの講習会などを開催しても人が集まらないので、ゲイタウンマップなど独自のリストを用いて、聞き取り調査を行いました。ゲイバーなどの商業施設は、大阪市内では約200～250件あると言われており、堂山町、ミナミ、新世界の3か所に集中しています。すべての施設とつながりがあるわけではありませんが、数自体は減少傾向にあり、高齢の方で、そもそもHIV/エイズに関心がないという人も少なくありません。そうしたコミュニティへのアウトリーチにも取り組んでおり、勉強会の

開催やニュースレターの配布など、地道な活動を足がかりにして、少しずつ調査先の輪を広げています。以前、大規模商業施設のオーナーに頼んで、毎週土曜日に計5回ほどアンケート調査を行いました。いざやってみると皆さん協力的で、調査趣旨を理解してもらえて、9割ほどの回答率でした。

またゲイコミュニティにおいては、自身がHIV陽性か陰性かを知ることは大きなニーズがあるにもかかわらず、検査に踏み出せなかったり、そもそも機会の提供が十分ではないという状況があることから、2000年に検査を盛り込んだ大規模イベントを企画しました。短い準備期間で医療関係者や場所などを手配する必要がありましたが、関係者間ではこうした問題意識が共有されており、実施することができました。例えば、曾根崎の性病クリニックの協力を得て、巡回診療というかたちで病院外での血液検査を可能にしたり、地域のキリスト教会を告知場所として借りるなどしました。カウンセリングについては専門家に任せるか、ピアカウンセリングにするか、内部で大きな議論がありましたが、高揚感だけで動いた結果ミスが生まれるリスクを考え、専門のカウンセ



コミュニティセンター「dista」入口





ラーに任せることにしました。結果、それで良かったと思っています。ひとりのコーディネーターの差配のもと3年にわたり実施し、1年目は約200人、2年目は約400人が集まり、3年目にはさらに参加者が増えたため、北区の保健センターを借りて実施しました。こうしたイベントを経て、コミュニティの人達にMASH大阪の本気度を知ってもらうことができました。またこうしたイベントを、医療従事者ではない民間団体が主催することはこれまで前例がなく、全国的なモデルとなりました。

団体の運営費については、2010年度までは厚労省科研費が、2011年度以降は厚労省事業費がベースになっています。事業費の管理運営は公益財団法人エイズ予防財団が行っています。このように、活動開始の初期からしっかりと実績と基盤を築き、現在に至っています。

#### 活動の目的

後藤 | MASH大阪は、大阪地域の男性とセックスする男性に向けてHIV/エイズ・性感染症予防に関する

情報を発信し、性の健康増進につなげることを目的に活動している団体です。メンバーはコミュニティの中の当事者や、MASH大阪の活動に関心を持つボランティアスタッフなどで構成されています。コミュニティセンター distaは、2002年にMASH大阪が厚生労働省の「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」として運営をスタートし、ゲイ向け商業施設を中心にアウトリーチ活動を行っています。その背景には、HIV感染リスクは、現在のところ商業施設を利用する人の方が高いという調査結果があります。また私たちは、「オープンミーティング」という誰でも参加可能な開かれた会議を毎月2回ほど開催しています。この会議では誰でも自分の立場や経験から意見を発信することができます。運営に関わるほとんどすべての意思決定をここで決めているんです。

#### 大阪の現状

後藤 | 大阪市におけるHIV感染の状況は、2019年は107件（HIV感染:87件、エイズ発症:20件）の報告があり、その多くが男性間の性的接触によるものです。HIV

感染は若年層の占める割合が多く、エイズ発症でわかる人は中高年層の割合が多い傾向があります。こうした背景から、それぞれの対象に合わせた資料を作成しています。

例えば、若年層向けの資料では、セーファーセックスの情報をビジュアルや画像を中心に構成し、若者が集まるクラブイベントなどで配布をしています。一方、中高年世代には、HIV/エイズという言葉そのものに対して忌避感を持つ人も少なくないため、老後の過ごし方や健康課題、文化教養やまちの情報などを表に出し、病気の情報はその中に少し盛り込むようにして発信しています。現在では、HIV/エイズは医療の進歩によって、早期に発見され適切な治療を続けることで、長く付き合う病気になりました。しかし、いまだにスティグマなどから、他者への相談が困難と感ずることや、貧困や依存症など様々な課題から医療アクセスにつながりにくいケースもあり、病気はもちろん周辺課題へのアプローチも近年の課題となっています。

#### 今後の展望と文化芸術の取組みについて

後藤 | 今後もHIV/エイズにフォーカスした取組みを続けていくつもりです。特に、HIV/エイズ感染のハイリスク層はゲイ・バイセクシュアルの男性です。また、トランスジェンダーの方もHIV/エイズのリスクに晒されているため、対策をする必要があると考えています。

今後の展望としては、社会の中でHIV/エイズが特別な病気であるという意識を変えていく必要があります。例えば、私たちが大阪市保健所と協働で実施している「distaでピタッとちえっくん！」という検査会では、コミュニティセンターdistaのオープンスペースでHIV検査が受けられます。これまでのHIV検査は、誰にも知られずこっそり受ける雰囲気がありましたが、この検査会では検査を受けることをオープンにしなが、検査結果についてはプライバシーが

確保された個室で行うようにしました。そうした検査会を2014年から実施しており、結果、保健所などでの検査ではHIV陽性率が約1%程度であるのに対し、「distaでピタッとちえっくん！」の陽性率は約2～10%と、よりリスクの高い人たちに検査が届けられていることを示しています。

コミュニティセンター distaは、検査だけではなくコミュニティのハブとして様々な人に利用してほしいという思いから、ゲイやLGBTのイラストレーターや作家の展覧会を定期的に行っています。3月18日から「LGBTQ ART LABOLATORY『満開する「生」の芸術的ハッテン場。』」と題して、若手アーティストの作品を展示するとともに、作品をプレゼンし、ジェンダー/セクシュアリティや表現について自由に語り合う場をつくる予定です<sup>[\*1]</sup>。画廊やネット空間以外でも作家やその周囲の人たちが語り合い、交流し、感化し合う場になれば良いと思います。こうした輪が広がり、いつか文化芸術が社会的スティグマを解消し、誰もが安心して暮らせる社会になるように、今後も様々な企画や活動を続けていきたいと考えています。

[\*1] 現在は終了。  
今後の予定は「dista」Webサイトを参照  
<https://www.dista.osaka/>



壁面には交流会や他施設の情報も並ぶ

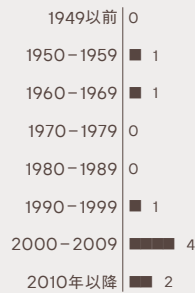
## 2019年度「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」において

### ヒアリング調査を行った団体の実態調査結果

回答数 | 9団体 / 10団体

#### ● 貴団体の概要

##### 1 貴団体の設立年月(法人の場合は認証年月)はいつですか。



##### 2-1 貴団体の活動のエリアはどこですか。



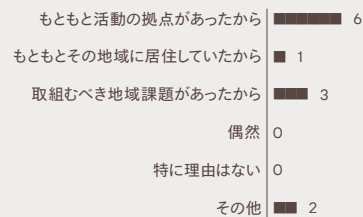
[具体的には]

大阪市北区/東京都新宿区/舞鶴市/  
東京/主に東京都内/大阪市北区

##### 2-2 2-1で京都市内と答えた団体について、活動のエリアで当てはまるものにすべて丸をつけてください。



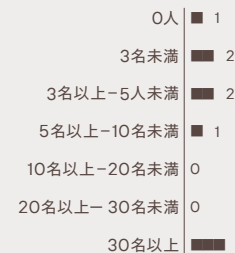
##### 2-3 活動のエリアを決定した理由に当てはまるものすべてに丸をつけてください。



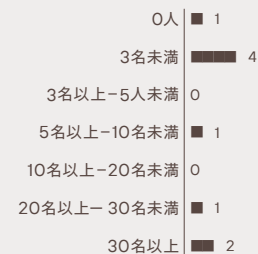
[その他欄への記載内容]

現在の実相院の敷地にあった大雲寺を中心に岩倉は  
精神疾患のある人たちの療養のメッカで、  
そこで営まれていた保養所が病院の母体です。

##### 3-1 団体の組織運営について伺います。貴団体の専従職員の数について当てはまるものに丸をつけてください。



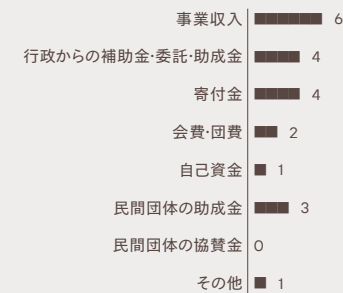
##### 3-2 貴団体の非常勤・アルバイトの人数について当てはまるものに丸をつけてください。



##### 3-3 貴団体の専従職員以外の方がプロジェクトの責任者になることはありますか。



##### 4 貴団体の活動資金はどこから得ていますか。当てはまるものすべてに丸をつけてください。

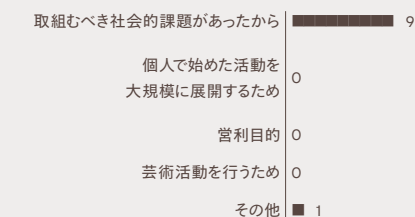


[その他欄への記載内容] 参加費

##### 5 昨年度の貴団体の総収入について当てはまるものに丸をしてください。



##### 6 貴団体の設立趣旨について伺います。最も当てはまるものに丸をしてください。



[その他欄への記載内容] HIVエイズ性感染症の予防啓発

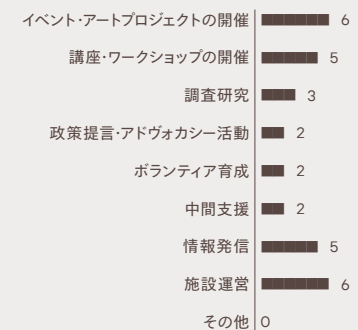
#### ● 社会包摂型の活動について

##### 7 貴団体はどのような地域・社会の課題に取り組んでいますか。当てはまるものに3つまで丸をしてください。

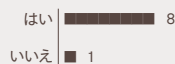


[その他欄への記載内容] ホームレス支援

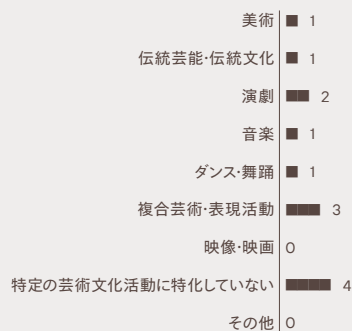
##### 8 7で回答した課題に取り組むことを目指した活動には、具体的にどのようなものがありますか。当てはまるものすべてに丸をしてください。



9-1 貴団体は課題に取り組むような芸術・文化活動を実施していますか。



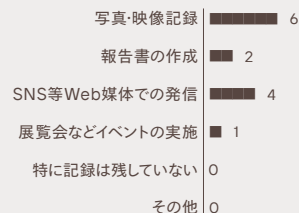
9-2 9-1ではいと回答した団体に伺います。実施している芸術活動の分野はなんですか。最も当てはまるものに丸をしてください。



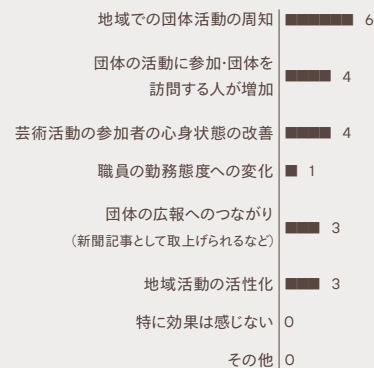
9-3 9-1ではいと回答した団体に伺います。芸術活動の内容には具体的にどのようなものがありますか。当てはまるものに3つまで丸をしてください。



9-4 9-1ではいと回答した団体に伺います。芸術活動の記録はどのようなかたちで残っていますか。当てはまるものすべてに丸をしてください。

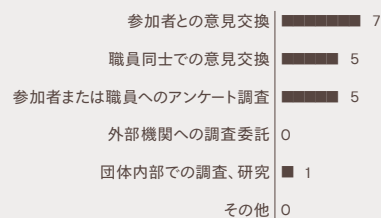


9-5 9-1ではいと回答した団体に伺います。芸術活動を継続することで感じている効果はありますか。当てはまるものに3つまで丸をしてください。

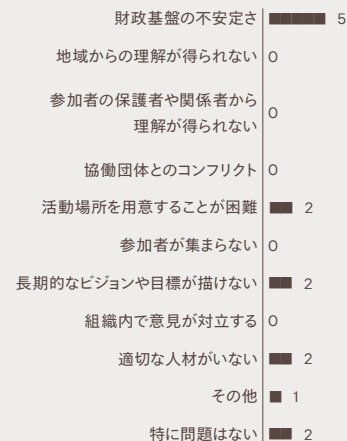


● 活動の評価について

10 9-1ではいと回答した団体に伺います。芸術活動に対する評価をどのように検証していますか。当てはまるものすべてに丸をしてください。



11 9-1ではいと回答した団体に伺います。芸術活動を行うにあたり、感じている問題はありませんか。当てはまるものに3つまで丸をしてください。



[その他欄への記載内容]

本来参加してほしい(参加が効果的と思われる)若者に時間・金銭的な余裕がなく参加が困難

● 協働

12 今後芸術活動を実施・継続するにあたり、協力を求めたい団体はありますか。当てはまるものに3つまで丸をしてください。



13 社会課題に取り組むような芸術・文化活動に関する相談員がいるとしたら、活用を希望されますか？



● コーディネーター育成

14 社会課題に取り組むような芸術・文化活動に関わるコーディネーターの育成は貴団体で可能ですか？



[理由]

人材不足/ノウハウがない/現在応援中のプログラムに、特段の専門性を必要としないため/育成のノウハウはない/新型コロナウイルスの影響で更に団体運営に余裕がない状況になってしまっているため



# 第14回 アジア・アーツ マネジメント 会議

カンボジア、  
シエムリアップにて

基本情報 開催日 | 2020年2月19日-21日

会場 | クメール研究センター (カンボジア)

Webサイト | <https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/2020/01/16/aam14/>

クレジット 文 | 中川眞

アジア・アーツマネジメント会議がシエムリアップにて開催された。この会議は2007年より日本を含むアジア諸都市において14回にわたって開催されてきた(大阪、那覇、バンコク、ジョグジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、ハノイ、ヤンゴン、シエムリアップ)。企画・実施責任者は私である。当初は大阪市の文化施策の一環として、アジアからアーツマネジメントのコーディネーターを招いてレジデンスプログラムを構築する目的で始まったが、施策自体が頓挫し、その後、国際交流基金などの助成を得ながら大阪市立大学都市研究プラザならびに一般社団法人スペース天の共催で実施されている。グローバル化に伴う経済格差、金融危機、貧困、少数民族問題、ジェンダーなど様々な社会的排除傾向が強まり、それに対してアートを通した克服や解決の努力が、アジアにおいて21世紀に入り活発化してきた。その実践法や理論をアジア(特に東南アジア)の関係者と共有、ネットワーク化しようというのが趣旨である。日本のコミュニティベースのアーツマネジメントの専門的実務家と研究者が東南アジア諸都市に赴き、現地の専門家たちと議論や意見交換を重ねることで多様な経験値を獲得し、会議を契機に国

際的な協働プロジェクトが多く生まれていった。

アジア諸国における社会的排除は、経済成長のために強力に市場原理主義的政策をとる発展志向の国家主義の歪みに起因する貧困、汚染の拡大として現れ、売買春や麻薬、ドラッグ、少数民族などが問題となっている。アーティストはそこで極めて戦略的な表現活動を行う。物質的な証拠を残さないパフォーマンスアートの隆盛が例証のひとつである。それは一握りの強権と、平等社会に住む民衆の対比という社会構造の中で生まれてきた、自衛的で慣習的な身振りの表出と言える。ソーシャリー・エンゲイジド・アート(以下、SEA)の議論では、欧米でのパフォーマンスの隆盛、互恵的寛容、非物質性などが指摘されているが、アジア諸国においては、はるかに先鋭化したかたちで、しかも伝統的な社会的活動としてそのような表現特性が現れている。

経済成長中心の開発スタイルは現実的にはクリアランスといった問題として可視化される。そのような問題群としての路上、スラム、廃屋・廃校、山岳地帯などといった場所が包摂的なアートの現場である。アートは空間の意味を変容させるがゆえに検閲的にマークされることが多く、警察力によって一掃されることもある。そこでは空間の争奪が生起する。そういった現象を解明するために、SEAや地理学の社会空間の議論を取り込みながら、本会議では討論を重ねてきた。

アジア・アーツマネジメント会議がアジア各地を周廻するようになったのには裏話がある。発端は先ほど書いたように、アジアからレジデンスのアート・コーディネーターを日本に招き、共同制作を行うという目的であった。そのため私は招聘者とコンタクトを取るために諸国を歴訪していた。3年目だったかにバンコクで気鋭のコーディネーターであるグリティア氏に会った。当時、日本に来てくださいと言えば、ほとんどの方々は喜んでOKしてくれたのだが、グリティア氏は違った。私の不意を突いたのである。

「日本の人はね、ことあれば私たちを招くだけでなく、それっておかしくない? ナニサマって気がするのよ。もし私たちと対等に付き合うというのなら、あなたたちがこっちに出かけて来ないとダメなんじゃない。

Time Table of the Conference		
[Time]	[Program]	[Who]
<b>DAY 1, February 19, 2020</b>   Morning session is facilitated by Jennifer LEE   Afternoon Session is facilitated by SO Phina		
9:00-9:30	Introduction and Keynote Address "Socially Engaged Arts Management and Community"	Professor Shin NAKAGAWA (Japan)
9:30-10:30	Group discussion: "What's Socially Engaged Arts?"	All
10:30-11:00	Coffee Break	All
11:00-12:00	Interactive workshop "Exchange of Imagination"	Takashi KOJIMA (Japan)
12:00-13:30	Lunch break	All
13:30-15:15	Cultural Policies and Socially Engaged Arts "Mapping Alternative Arts Activities: Cases from Southeast Asia and Japan" "Art Power in Taiwan" "The Think Playgrounds' Story" "Approaches to Community Engagement" [15 mins presentations + 5 mins for Q&A]	Mio YACHITA (Japan) Catherine LEE and Jennifer LEE (Taiwan) CHU Kim Duc and NGUYEN TIEU Quoc Dat (Vietnam) Janet PILLAI (Malaysia)
15:15-15:30	Coffee break	All
15:30-16:30	Inclusive Workshop "Every Person Counts"	PO Sakun Epic Arts Kampot (Cambodia)
16:30	Wrap up	SO Phina (Cambodia)
<b>DAY 2, February 20, 2020</b>   Morning session is facilitated by Takako Iwasawa   Afternoon Session is facilitated by Mio Yachita		
9:00-10:00	Interactive Workshop "Words, Mask, and Body Expression, Vehicles for Autobiographical Storytelling"	Narumol THAMMAPRUKSA (Thailand)
10:00-10:20	"Curating in Between: Collective Practice in the Context of Asian and Australian Contemporary Art" [15 mins presentations + 5 mins for Q&A]	Wilson Yeung Chun Wai (Hong Kong / Australia)
10:20-10:35	Coffee Break	All
10:35-12:35	Social Divide and How Arts Communities Respond? "Policy Impact - a Decade in Treasure Hill" "Deaf and Puppet Arts" "Reflect and Feedback upon Community Art Projects in Myanmar" "Arts Management in Japan's Largest Village TOTSUKAWA" "Working with Artists and Communities —Practices of HAPS within Social Contexts in Kyoto" "Who Owns Arts?" [15 mins presentations + 5 mins for Q&A]	Catherine LEE (Taiwan) INSISIENGMAY Lattanakone (Laos) Zun Ei Phyu (Myanmar) Marie DOI (Japan) Aiko KURAHARA (Japan)  Kanayo UEDA (Japan)
12:35-13:30	Lunch Break	All
13:30-14:30	Interactive Workshop "Dialogue and Misunderstanding: A Journey to Explore the Boundary of Sounds and Meanings"	Rii NUMATA (Japan)
14:30-15:20	Human Resources in Arts Sector "SEAΔ Program of Mekong Cultural Hub" "Cultivating Cultural Leadership with Social Conscience" [15 mins presentations + 5 mins for Q&A]	Jennifer LEE (Taiwan) SO Phina (Cambodia)
15:20-15:50	Coffee Break	All
15:50-16:50	Human Resources in Arts Sector "Beyond Empowerment: The Pride to be Artisan" "What Does It Take to be Qualified Arts Managers in today's Cambodian Socio Economic Context?" "Art Support System: Case Study of Osaka Arts Council" [15 mins presentations + 5 mins for Q&A]	Pierre-Andre ROMANO (Cambodia) HUOT Dara (Cambodia)  Miho NAKANISHI (Japan)
16:50	Wrap up	Mio YACHITA (Japan)
20:00	Performance: "Forbidden Rhythms" by Medha	Free. All delegates are specially invited to watch the performance.
<b>DAY 3, February 21, 2020</b>   Cultural Tour   Facilitated by SO Phina and KEAT Sokim		
8:00	Leaving from the hotel	By 45 seat bus
9:00	The Cambodian Landmine Museum	< <a href="https://www.cambodialandminemuseum.org/">https://www.cambodialandminemuseum.org/</a> > The museum is founded by a Cambodian named Aki Ra. The museum is located 25km north of Siem Reap, near Banteay Srey Temple complex in Angkor National Park. It takes roughly 50 minutes one way.
11:30	Kantoaming funeral music	Please find an article about Kantoaming funeral music here. < <a href="https://www.phnompenhpost.com/post-weekend/funeral-master-enshrines-old-tradition-new-generation-and-modern-show">https://www.phnompenhpost.com/post-weekend/funeral-master-enshrines-old-tradition-new-generation-and-modern-show</a> > On the way back from the Landmine Museum, we will visit the community based Kantoaming funeral troupe.
12:30	Lunch break	Meatophum Restaurant serves typical Khmer dishes.
14:30	Wat Bo Leather Puppet Troupe	It is located within Wat Bo, one of the oldest Buddhist pagoda in Siem Reap where CLA's Heritage Hub is also located within. There, delegates would meet the troupe leader and the head of the monk who is a strong supporter of the arts.
16:00	A Place to be Yourself	< <a href="https://www.aptbody.org/?fbclid=IwAR1f_Kao548_OIfqyLg054Rv-6FtwopuNbsVetHTD2sYIB6N-z2pMy4">https://www.aptbody.org/?fbclid=IwAR1f_Kao548_OIfqyLg054Rv-6FtwopuNbsVetHTD2sYIB6N-z2pMy4</a> > < <a href="https://www.facebook.com/aptbody/">https://www.facebook.com/aptbody/</a> > A Place to be Yourself is quite new in town. It is a LGBT Drop in Center aims to foster a place where youths learn about themselves and help each other.



上から目線なのよ」。

これは私の胸にグサリと刺さった。確かに言われればそうである。すぐさま関係者と話し合っ、翌年からは日本のアート・コーディネーターがアジア諸都市に出かけていくというスタイルに変更した。そして最初に実施したのがバンコクであった。

### シェムリアップ会議

前置きが長くなってしまったが、第14回のシェムリアップ会議について報告しよう。会議全体のプログラムは表にあるように、最初の2日間の発表とワークショップ、第3日が文化施設の視察と交流というスケジュールであった。参加者は、国別ではカンボジア9名、タイ4名、ラオス1名、マレーシア1名、ミャンマー1名、ベトナム2名、台湾2名、オーストラリア1名、日本12名（トータルで33名。そのうち2名はオンライン参加）で、9つの国・地域からの参加となった。本稿では日本以外からの発表を4つ選んで紹介したい。CHU Kim DocとNGUYEN TIEU Quoc Dat（ベトナム）、ZUN Ei Phyu（ミャンマー）、HUOT Dara（カンボジア）、Pierre-Andre

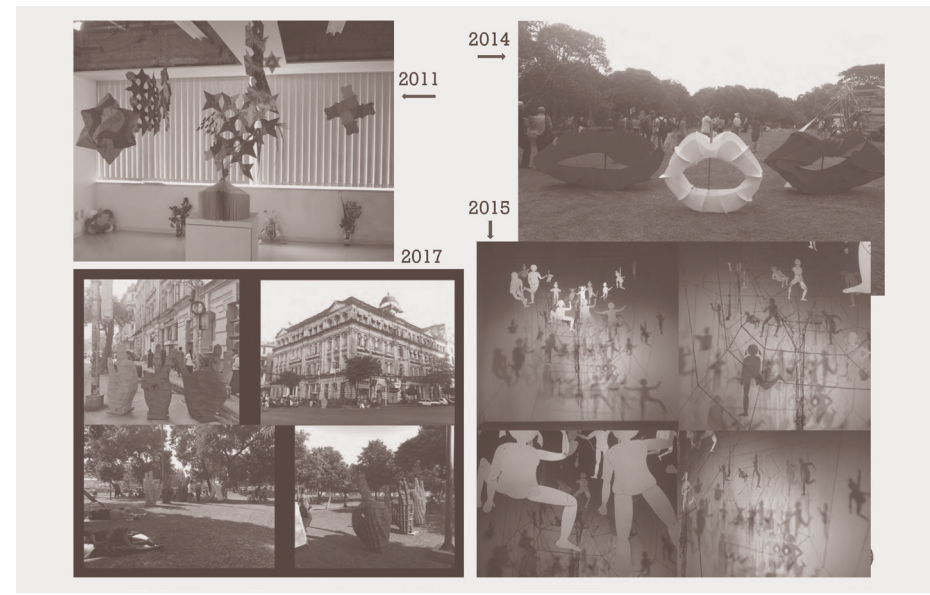


ROMANO（カンボジア）の発表である。

CHU氏とNGUYEN TIEU氏の発表タイトルは「The Think Playground's Story」で、子どものための遊び場をつくるプロジェクトについてであった。2013年にハノイを訪れたアメリカ人女性が子どもたちの遊び場がないのに気づき、大きな亀のかたちをした滑り台を寄付したことが発端となって、ベトナム人有志が始めた運動である。既成の遊具を注文するのではなく、廃材などを利用・加工して独創的な遊具と遊びをつくっていった。当初はボランティアの応援だけであったが、徐々に地域コミュニティや行政、財団などが巻き込まれ、市内各所に遊び場ができていくという大きなうねりとなったプロセスは圧巻である。

SEAの典型のようなプロジェクトであるが、この運動のキモは公共空間の設営というところにある。このプロジェクトはハノイ中心にある風光明媚なホアンキエム湖の畔で始まった。2018年に私がハノイを訪問した時、湖畔の路上では多くの子どもたちが乗り物遊具で遊んでいたが、これも本プロジェクトがもたらした風景なのであろう。

公共の空間、すなわち誰でもが入れる空間の確保は、特に公園をめぐる全世界的にホットな話題になっている。大きな流れとしては、公園の管理傾向が



強くなり、それを乱す者（例えばホームレスなど）の排除が続いている。そういう意味で、このハノイのプロジェクトは「子どものため」という、なかなか反対できない大義を掲げて遂行されている分、極めて戦略的であると言える。

ZUN氏は「Reflect and Feedback upon Community Art Projects in Myanmar」という発表を行った。彼女はアーティストと同時にメンタルヘルスをケアする医師でもある。アーティストであった彼女が医師になった経緯と、ミャンマーのアートの現状とは大いに関連がある。発表では自身のプロジェクト（野外における参加型オブジェクトの設置が多々見受けられた）紹介の後、ミャンマーにおけるアートをめぐる問題点の指摘と提案に多くの時間が割かれた。

彼女によると最大の弱点はアート教育の貧弱さである。ミャンマーにはふたつの芸術大学があるが、その質は低いという。確かに思い当たる節はある。2016年にヤンゴンでアジア・アーツマネジメント会議を開催した時、芸大の教員のプレゼンが約束されていたが当日には現れなかった。またアート関係者に、芸大を視察しても意味がないとも言われた。そこまで言われたら逆に行きたくないのが人情で、私は芸大の校門まで到達したがガードマンによって入構を阻まれ

た。公的な大学であるから入構は自由であるはずなのに、軍事政権時代の遺制が残っているのであろう。そういえば我々の会議に私服警官が潜入してきたことも驚きのひとつであった。それらを思い出しながらZUN氏の話聞いていたのだが、アーティストになるためには自学自習か海外への留学かの選択肢しかないとのことである。

ミャンマーの最大の社会的課題は60年以上続いた軍事政権時代の圧政による市民の精神的萎縮である。これも教育一般の脆弱さと関係しており、人々は正確に判断できず簡単に騙されたり心をねじ曲げたりしてゆくという。それを解放してゆくのがあるアートであり、そのためにアーティストが向き合うべきものは、①遠くの村落にまで及ぶ草の根的コミュニティへの教育の充実、②子どもと若者のためのアートとクラフトに関連する職業訓練、③環境（ゴミ、プラスチック汚染）と災害管理、④代替的なアート教育、⑤SNSにおけるヘイトスピーチの削減と、人権、特にジェンダーに関わる問題、とする。コミュニティや国を助けることができる最善の方法は、傷を負った心を落ち着かせることができるコミュニティアートプロジェクトを促進することであり、そのために彼女自身が医師資格をとってアートセラピーを実践するに至ったので



ある。日本との抱える問題の近さに想いを馳せたのであった。

HUOT氏は「What Does It Take to be Qualified Arts Managers in today's Cambodian Socio Economic Context?」と題する発表を行った。HUOT氏と次のROMANO氏の発表は文化経済と関わる内容であった。経済を動かすメディアとしてのアートがいかに貧困コミュニティを賦活できるのか、という問いでもある。

HUOT氏はサーカス公演やサーカス学校を経営するPhare Ponleu Selpak Associationと Phare Performing Social EnterpriseのCEOである。サーカス場はシェムリアップのやや郊外に位置するが、ショップやレストランを併設する立派な娯楽施設である。高度に訓練された団員によるショーはまったく飽きることなく1時間続く。観客のほとんどは海外からのインバウンド客である。シェムリアップがアンコールワットなどの世界文化遺産を持つ都市であり、夜の観光がパーやバブだけであったところにこの文化施設が登場して隆盛を誇っている。同じくボロブドゥールなどの世界遺産を持つジョグジャカルタ（インドネシア）では伝統的な民族舞踊ショーを見せているのに対して、ここではサーカスという世界基準のパフォーマンスを持ってき



ているところにHUOT氏の慧眼があるのだろう。

サーカス団は地域の若者たちに仕事を生み出す社会的企業であるとHUOT氏は説明する。貧困の根絶を目標に、彼は市場の「ピラミッドの底辺」に焦点を合わせ、多数の貧しい人たちの発展可能性を創成するために学校を建て、その卒業生を企業（ここではサーカス）に雇用するというシステムをつくった。カンボジアにおける貧困は、1970年代に苛烈を極めたクメール・ルージュによる大虐殺に端を発している。そこからの立ち直りは国家としてのカンボジアの課題であるが、文化の面でも多くの音楽家、舞踊家、工芸家、美術家が失われ、そこからの回復の手法としてこの職業訓練的な学校があり、次のROMANO氏の発表にあるような工芸の復活が試みられたのである。

学校プログラムは芸術的訓練だけでなく、一般教育やフリーの昼食など多岐にわたり、毎年1200名の子どもたちに無償で提供されている。その中から2020年2月時点で、サーカス団の演者として47名、スタッフとして80名が雇用されている。サーカス会場の通路にポスターが掲示されており、そこには1枚のチケット収入が何に使われているかが示されている。約30%が給料、30%が施設運営費、20%が税金、20%が学校の運営資金と収益である。

ROMANO氏の発表は「Beyond Empowerment: The Pride to be Artisan」というタイトルで、シェムリアップ州で18～25歳の学歴の限られた若者に専門的なスキルを提供する教育プロジェクトCEFPの設立（1992年）から、2002年の準社会的企業としてのArtisans Angkorの設立、そして2005年の経営安定による3つのポイント、すなわち無料の職業訓練、新たな工房の建設、公平な職業機会の提供が可能となった過程を紹介した後、現状の報告があった。

Artisans Angkorはシェムリアップ地域に1,800人の従業員、800人以上の職人、48の工房を生み出している。扱う範囲は、シルク生地、石や木彫り、漆器、陶器、銀メッキ、ジュエリー、シルク塗装、金メッキなどであり、ターゲットは海外からのインバウンド客である。職業や経済の安定によって貧困の緩和と伝統工芸のスキルの維持に貢献しているという。

トレーニングを終えた若者は、見習いとして48



の工房のひとつで働けるよう仕事が保証されている。家族の近くに滞在しながら生計を立てることを可能にすることによって、より良い生活と幸福をもたらしているのである。

#### 日本人参加者からの感想

日本から参加したメンバーによる感想からいくつかを抜粋しよう。

**A** | カンボジア・リビングアーツ（CLA）のカンボジア社会における役割の大きさを感じさせられました。①シニアマスターによる後継者育成と伝統芸能の復興、②伝統文化を背景とした新たな創作と場の形成、③アーティストおよびクラフツマンに対する経済

的支援、④アーツマネージャーの育成、といった多角的な支援を通じて、カンボジア文化芸術の構造的復興に大きく貢献している様子がうかがえました。

**B** | 一番気になった（ひっかかった）点は、社会的企業とアーツマネジメントとの関係でした。Artisan Angkorがカンボジアの文化産業を栄えさせる試みが紹介されました。それがアーツマネジメントなのかという疑問が残ります。ポスト・モダンニティ論やカルスタの領域では、文化が消費物化することに対する批判が出されています。日本のアーツマネジメントでは、消費ではない芸術文化のあり方を通して社会をデザインしていくことを目指していると思っていて、私もその力を信じています。だからこそ消費化を促すあり方に疑問を覚えたのでした。

**C** | ワークショップを重ねる中で、シンプルでありながら、実際に普段の生活の中でどれだけ個に立脚し、思考や表現ができていたのかを、自己に問い直す機会ともなった。個人として思考しているつもりであっても、組織としての立場での判断という内在化したフィルターに慣れることによって、阻んでしまっているものがあるのかもしれないということに恐怖を感じる。

**D** | ソーシャル・サーカスは社会的課題をアートというかたちで解決したものとしては非常に有意義だと感じるが、一方で、その中身は国外からの観客が中心で、表現そのものも西欧の文化的イデオロギイを用いたものになっていると感じた。あのような表現は消費社会で暮らす人々にとって大きな意味を持つかもしれないが、カンボジアの社会で意味をなすかどうかは疑問であ

る。例えばサーカスでは、集団に入ることのできないひとりの男の苦悩がソロで披露される場面があったが、それはヨーロッパ文化が古くから培ってきた精神性から来るもので、カンボジア人と実際に接してみると感じるものとは異なるように思えた。しかしこうした評価は、グローバルとローカルの両方の視点ですべきなのかもしれない。サーカスは地域の課題（貧困や犯罪）を西欧の課題（生産と消費、労働と気晴らし）を結びつけることによって成立しているとも考えられる。

**E** | 地雷博物館で館長のアキラさんに「この国に必要なものはなんですか」と尋ねると、「選挙、正当な」という返答だった。不正義が日常をうっすらとどんよりと覆っている現実があり、それでも諦めないアキラさんの態度が印象的だった。もしかしたら日本とて、同じようなものかもしれない。

**F** | 日本も政策的、経済的な制約からアーツマネジメントやコミュニティアートは閉塞感を抱えている。東南アジアの各国が興味深いのは、新しい情報や手法がインターネットを使って世界中から手に入れられる状況の中で、マネジメント手法やアイデアがどんどん更新されてゆくところにある。発展途上にある国々が次々にIT先進国になるように、先進的なコミュニティアートのアイデアや取組みは先進国ではなく、新しいフォーマットを整える体制が作りやすい国々で行われるのだと感じた。

**G** | 見せかけともいえる民主主義の社会で真摯にアーツマネジメントに取り組む人々に、日本の地方都市（例えば大阪）の文化政策がどのように市民から立ち上がったのか、そこにどんなコンクリフトがあるのかを、今回会った人たちに話せるようになりたい。

## パートナーについて

シエムリアップ会議ではカンボジア・リビングアーツ（CLA）とメコン・カルチュラルハブ（MCH）がパートナーとなって日本からの参加者を受け入れた。両方とも国際的なマネジメント団体であるが、CLAの発足が早

く（1998年、プノンペン）、MCHは2017年と若い。CLAは1970年代のクメール・ルージュによる大量虐殺という悲惨な出来事に付随する文化衰退（指導者と育成機会の激減）に対して、その復興を旗印とする活動を始めたが、軌道に乗るにつれ青少年への育成プログラムやアート奨励金や奨学制度をつくるなど広範囲な領域へと発展していった。このうち、アート・コーディネーターの育成とメコン地域の文化交流促進に特化して2017年にMCHが設立された。

文化によるコミュニティの持続・維持はメコン地域においては待望久しい共通の課題であるが、政府による政策はそこまで及ばず、大学などの公的な教育機関にもプログラムやコースはなく、現場では手探りの状態が続いてきた。そのような状況を乗り越えるべく、プリティッシュ・カウンスルなどの海外文化外交機関の支援でSEADという育成プログラム（期間1年）が始まった。このプログラムはメコン地域のみならず、インドネシアやマレーシアなどASEAN10か国をカバーするもので、4回の短期間の合同ワークショップやリサーチを通して参加者が成長していくことを目指す。これまでに10か国から20人が取組み、今3期目が実施されている。MCHはそのほかにMekong Mappingプロジェクトを2年にわたって実施し、そのレポートをWebサイトで公開している。

現在、CLAとMCHを牽引しているのはFrances RUDGARD（英）とJennifer LEE（台湾）のふたりの女性であり、LEEが事務局長を務めるMCHは台湾に本部を置いている。なお次回のアジア・アーツマネジメント会議は2021年5月に台北で開催される予定である。

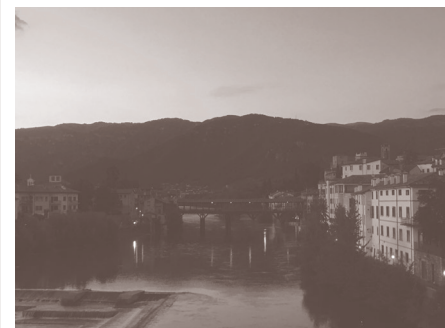
Report  
2

# 「Dance Well — movement research for Parkinson」 イタリア、バッサノー・デル・グラッパ市における活動とその広がり

Webサイト | <https://operaestate.it/en/dance-well>

レジスト 文 | 下倉久美（東京都美術館学芸員）

イタリア北部のまち、バッサノー・デル・グラッパ市で行われている「ダンス・ウェル（Dance Well—movement research for Parkinson）」というダンス・プログラムがある。パーキンソン病と共に生きる方を中心に、そのほかの病気の有無、年齢を問わず多様な人々が共に参加するこのプログラムは、リハビリやセラピーではなく、芸術創造活動として市内の博物館を会場に実施されている。病や高齢で孤立しがちな人々の活力



バッサノー・デル・グラッパ市風景

や創造性の向上、地域社会への参加の機会の創出、さらに参加者同士の交流により地域共生の新たなコミュニティを生み出すという、地域文化活動の社会包摂機能を活かした試みとなっている。

このダンス・ウェルを日本の美術館・博物館にて実施する可能性について模索していた、アーツカウンシル東京のシニア・プログラムオフィサー、今野真理子氏からの紹介を受け、2018年の夏、同氏および金沢21世紀美術館のチーフ・プログラム・コーディネーター、黒田裕子氏と共にイタリアでのプログラムを視察<sup>[\*1]</sup>。さらに翌年8月には、同市からの招聘を受け前述の今野氏を含む学芸員とプロデューサー4名と、国内外で活躍する6名のダンス・アーティストの10名で再び現地を訪れ、10日間の指導者コースに参加する機会を得た<sup>[\*2]</sup>。その体験、調査をもとにイタリアでのダンス・ウェルについてその内容と広がりについて紹介する。

## ダンス・ウェルとは

ダンス・ウェルのふるさとバッサノー・デル・グラッパ市（以下、バッサノー市）<sup>[\*1]</sup>は、蒸留酒グラッパの産地として知られるが、そのもうひとつの特徴は、毎年夏、3か月にわたり近郊35地域で上演する、演劇、ダンス、音楽の国際総合芸術祭、OPERA ESTATEを市が主催で実施していることである。同市はまたヨーロッパのダンス専門劇場の国際ネットワーク組織、European Dancehouse Networkに参加しており、イタリアにおけるコンテンポラリーダンスの拠点のひとつともなっている。

このフェスティバルのダンス部門のディレクターで、同市運営のCSC現代演劇センターのディレクターでもあるロベルト・カザロット（Roberto Casarotto）氏が、2012-13年に高齢化問題をテーマとしたダンス・プロジェクト「Act Your Age」<sup>[\*3]</sup>を実施した際、パーキンソン病の方を対象としたオランダの「Dance for Health」<sup>[\*4]</sup>の活動に出会ったことがダンス・ウェル誕生のきっかけであった。パイロットプログラム実施後、市民からの継続の要望を受け、2013年よりクラスを始動。同時に、主にプロフェッショナルなダンス





活動を行っているダンス・アーティストを対象とした指導者コースも立ち上げた。以後、バッサノ市の市立博物館<sup>[\*5]</sup>を会場に、博物館の展示室や考古学資料が並ぶ回廊に囲まれた中庭で、週2回(月・金)の午前中、1時間のクラスが開催されており、参加登録数は250人以上、各回のクラスの参加者は毎回60人以上のぼるといふ。

ダンス・ウェルのクラスは、特定のダンスの技術や型を練習したり、上達を求めたりするものではない。また、動きの正しさや誤りを評価する場所ではなく、参加者(ダンス・ウェルダンサーと呼ばれる)が自分自身の体を通して感性や想像力を育むこと、また、自身の体の最大限の可能性を見出すことが、主なねらいとなっている。

クラスの進行は、ダンス・ウェルの指導者コースを修めた講師1名が1か月毎に交代しながら、アシスタント役の2人以上の講師と共に進行。クラスの多くは、①椅子に座りながら自分自身の体の感覚や動きに意識を向ける導入部に始まり、②座った状態でのウォーミングアップ、③(椅子を支えにしながら)立ち上がり、④自由に動きながら、リズムやスピードを変えてみたり、即

興的に動いたりしながら空間全体を大きく使ってダンスを展開していく。⑤最後に全体を振り返りながら息を整えて終了となる。実際のクラスは、このような基本構成をもとに各講師がそれぞれ独自の芸術表現を取り入れつつ、参加者の経験の度合いや体調などに合わせて組み立てた自由な内容となっている<sup>[\*6]</sup>。

### パーキンソン病とダンスプログラム

パーキンソン病は、脳の神経細胞の一部の働きが低下しドーパミンが減少することにより、やる気や自発性が失われたり、全身に様々な不快な症状を生じさせる難病である。50歳以上での発症例が多いが、40歳以下の若年性の症例も見られ、発症原因はまだ解明されていない<sup>[\*7]</sup>。過去20年間で世界的に平均寿命は6年延び、高齢化による脳神経学的疾患患者数は増加傾向にあり、病による生活の質の低下や、国の医療制度への負担の増加は、世界各国共通の課題となっている。パーキンソン病において適度な運動は、身体機能の維持、運動障害改善の効果があるとして医学的にも広く研究実証されており、リハビリテーションとしてダンスを取入れている例も多い。そのような中で、より自発的、創造的な活動としてのダンスプログラムが2000年代初めより世界各地で始められ、アメリカ、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、イスラエルなどで独自の試みが行われている。

### バッサノ・デル・グラッパ市でのダンス・ウェル

各地のプログラムの多くが既存のダンスカンパニーなどのスタジオに招き入れるかたちで行われているのに対し、バッサノ市のダンス・ウェルは、市立博物館などの文化的な環境で、芸術創造活動として実施されていることが特徴である。博物館の建物、展示室の中でクラスを行うことは、参加者にとってインスピレーションの源となるだけでなく、作品の新しい魅力や見方を見つける鑑賞の機会ともなっている。2014年よりクラスに参加しているパーキンソン病と共に生きるダンス・ウェルダンサーのEva Boarotto氏は、「ダンスをしていると自分が美しくなったように感じる。

バッサノ・デル・グラッパ市立博物館

同市立博物館中庭でのダンス・ウェルクラス実施の様子

ダンスは病の中で自分が忘れていたハーモニー(調和)を取り戻してくれる。(中略)(博物館の)宗教画の前で踊っていると、聖書の中に自分が入り込んだような気持ちになる。このようなすべての感覚がまじりあうことで、とても豊かな気持ちになってくる<sup>[\*8]</sup>と語っているが、芸術的な空間での実施は、自らの活動自体もまた芸術的な意味を持つものであるという実感をもたらす効果もある。

クラスは、パーキンソン病の症状に十分に留意しながらも、子どもから高齢者まで、病気の有無、ダンスの経験の有無などにかかわらず一緒に楽しめるものとなっている。実際ダンス・ウェルはバッサノ市内の中高生の授業に組み込まれており、世代を越えた交流の場となっているほか、ヨーロッパの社会課題のひとつともいえる難民や移民の人々にとって、地域コミュニティに参加する機会ともなっている。

また、クラスの運営経費は、バッサノ市の年間予算からの拠出に加え、企業や個人からの協賛金により賄われており、参加者は無料で参加でき、講師のダンス・アーティストには、高額ではないが一定額の謝金が支払われている。講師にも参加者にも負担がないことは、活動の門戸を広げる重要な要素である。



### ダンス・ウェルクラスの広がり

クラスには、バッサノ市のダンス・フェスティバルなどのために滞在中の国際的なダンス・アーティストや振付家たちも日常的に参加し、時には彼らが講師としてクラスの進行を行うこともあり、ダンス・ウェルダンサーたちとの交流が盛んになっている。プロフェッショナルなアーティストの上演作品を頻繁に見ることができるだけでなく、プロの振付家とともにオリジナル作品を作することも始められ、現在では夏のフェスティバルでの発表のほか、イタリア各地での公演も行われている。

イタリア国内各地でもクラスは広がりつつあり、バッサノ市近郊のスキオやフィレンツェ、ローマ、トリノなどでも指導者コースを終えた新たな講師によるク

2009年 OPEAESTATE B. MOTION 上演作品『My Heart Goes Boom』公演中(2009年7月24日撮影)  
振付 Daniele Minarello 主演 タンク・ニール・タンナール 俳優 Chiesa San Giovanni (バッサノ・デル・グラッパ市)

Dance Well 五川実行委員会主催のダンス・ウェルの様子(2009年7月24日撮影)  
会場 市立博物館 | photo: Dance Well 五川実行委員会







は病気のことを意識せず動くことができる」「パーキンソン病を持っているからこその動きがあること」に気づいたなど、参加者が自分自身を取戻す機会となっていること、また、参加者同士の重要な日常のコミュニティの場として「かけがえない存在」となっているという言葉があった。同市のカザロツト氏は、ダンス・ウェルの実施において大切なことは「継続すること」と話していたが、実際、この活動が持つ社会包摂機

能から生み出された新たなコミュニティが、いきいきとした広がりを持ち続けていくためには、「継続」は欠かせない要素である。活動の質を保ち、高めながら続けていくこと、つなげていくためには強い熱意と根気が欠かせない。パッサーノ市での活動の継続に敬意を払うとともに、始められたばかりの日本での試みが、それぞれの地域と関わりを持ちながら息の長い活動となっていくようその可能性を今後も探ってきたい。

ラスが始められている。なかでも、フィレンツェでは、Palazzo Strozziの教育普及事業として、2018年秋のマリーナ・アブラモヴィッチの回顧展以降、各企画展の内容に合わせたクラスを毎週1回実施している。

日本でのダンス・ウェルの紹介は、2018年11月のイタリア文化会館でのカザロツト氏と2名の講師が来日して行われたプレゼンテーションとワークショップ<sup>[\*9]</sup>が初めての機会であった。同年夏の指導者コースを修了し、国内初のダンス・ウェル講師の認定を受けたダンス・アーティストのなかむらくるみ氏が、その年の12月に石川県にて「Dance Well石川実行委員会」<sup>[\*10]</sup>を立ち上げ、以後、金沢市内の美術館、博物館、アールスペースなどで定期的にクラスを開催している。筆者所属の東京都美術館でも、2019年夏になかむら氏を講師に迎え、企画展の関連プログラムとしてダンス・ウェルを実施した<sup>[\*11]</sup>。さらに2020年2月には、再来日したカザロツティ氏と共に、イタリア文化会館（東京）とみずのき美術館（京都）でダンス・ウェルのプレゼンテーションとクラスを行い、前年夏の指導者コースを修了したダンス・アーティスト4名が新たに講師認定を受けた<sup>[\*12]</sup>。今後、日本国内でもダンス・ウェルのネットワークが広がっていくことが期待される。

## 結び

パッサーノ市でダンス・ウェルダンサーの方々にとってのダンス・ウェルについて話を聞いたところ、「(クラスで

東京都美術館企画展「伊庭靖子展 まなざしのあわい」関連プログラムとして行われたダンス・ウェルの様子 (2019年8月6日実施) | photo: 中島祐輔



みずのき美術館で行われたダンス・ウェルワークショップの様子 (2019年8月6日実施) | photo: kim saiki

奥山理子 [みずのき美術館 キュレーター (京都)、黒田裕子、今野真理子、筆者 (順不同、敬称略)]

[\*3] イタリア(CSC現代演劇センター)、キプロス(Dance House Lemesos)、オランダ(Dutch Dance Festival)の3か国共同により、2012-13年に実施された2年間のダンスプロジェクト。[Sara Houston, *Dancing with Parkinson's*, Intellect Bristol, UK/Chicago, USA, 2019, p.52. 「ダンス・ウェル」プロジェクト] ロベルト・カザロツティ氏レクチャーより イタリア文化会館(東京) 2018年11月1日]

[\*4] オランダ、ティルブルフ・ダンスハウス(Tilburg Dance House)のエグゼクティブ・ディレクターであったMarc Vlemmix氏が、37歳でパーキンソン病を発症したことをきっかけに、当時の劇場のバレエ講師で振付家のAndrew Greenwood氏に協力を依頼し、身体の活性化に効果があり、楽しく実践できるダンスを創作。2013年に財団を設立。オランダ各地30か所以上で毎週クラスが開かれている。[Sara Houston前掲書 pp. 50-51. Dance for Health財団Webサイト]

[\*5] パッサーノ・デル・グラッパ市立博物館(Museo Civico di Bassano del Grappa) パッサーノ市の属するヴェネト州における最も古い博物館のひとつ。かつて修道院として使われていた建物に、考古学資料から、13世紀から現代までの美術作品を所蔵。

[\*6] 参考資料 Teaching Course on Dance Well-movement research for Parkinson's, August-December 2019 コースガイド

[\*7] 一般社団法人全国パーキンソン病友の会Webサイト内「パーキンソン病について」公益財団法人難病医学研究財団運営 難病情報センター Webサイト内「パーキンソン病(指定難病6)」作田学「図解 よくわかるパーキンソン病の最新治療とリハビリの

すべて」 日東書院、2016年、p.16

[\*8] Eva Boarottoインタビューの言葉より「Dance Well-Eva」2015年12月20日掲載、Operaeastate YouTube Channel <https://www.youtube.com/watch?v=smjz93SfWBk> (最終アクセス2020年3月18日)、Sara Houston, [\*3]前掲書、p.156

[\*9] イタリア文化会館(東京)、CSC現代演劇センター(ヴェッサノ・デル・グラッパ市)の主催により、2018年11月1日-2日に実施。詳細は下記のとおり。「ダンス・ウェル」プロジェクト]レクチャー 日時11月1日18:30-、講師 ロベルト・カザロツト/ワークショップ(対象 パーキンソン病と共に生きる方 医療従事者/介護者/家族など) 日時11月2日10:30-12:00、講師 ロベルト・カザロツト、ジョヴァンナ・ガルゾット(Giovanna Garzotto)、イラリア・コルシ(Illaria Corsi)(ダンス・ウェル講師)/セミナー-ワークショップ(対象 ダンサー-ダンス関係者-美術館関係者) 日時11月2日13:30-16:30、講師 ロベルト・カザロツト、ジョヴァンナ・ガルゾット、イラリア・コルシ(敬称略)

[\*10] 金沢市を拠点に「ダンス・ウェル」を実施する任意グループ。共同代表 なかむらくるみ氏、共同代表兼制作1名、クラスアシスタントのダンス・アーティスト2名(松田百世氏、山田洋平氏)、制作1名の全5名のメンバーにより2018年12月に設立され、2019年より金沢市内の文化施設、アールスペースなどで定期的にダンス・ウェルクラスを開催している。

[\*11] 東京都美術館企画展「伊庭靖子展 まなざしのあわい」(会期2019年7月20日-10月9日)関連プログラムとして実施 開催日時7月30日、8月6日 各10:30-12:00、講師 なかむらくるみ、アシスタント 松田百世、山田洋平(7月30日のみ)(敬称略)

[\*12] 2019年度の指導者コース参加を経て、酒井直之、白神ももこ、東野祥子、横谷理香の4名のダンス・アーティストが新たにダンス・ウェル講師の認定を受けた。(敬称略)

本稿は、筆者執筆の論稿「からだ全体で作品をあじわう——「ダンス・ウェル」の試み」東京都美術館紀要 No.26 2020年3月 pp.5-17を元に再編したものである。

[\*1] 2018年夏は、筆者と共に今野真理子氏と黒田裕子氏が、それぞれ自発的に現地を訪問し指導者コースの一部を視察した。併せて、後述のなかむらくるみ氏(ダンス・アーティスト)が黒田氏の推薦により指導者コースに参加し、同年秋に講師認定を受けた。

[\*2] 2019年夏には、国際交流基金の欧州のパフォーミングアーツのフェスティバルや劇場向けの助成プログラム「PAJ」(パフォーミングアーツジャパン)助成を受けたパッサーノ・デル・グラッパ市からの招聘を受け、6名のダンス・アーティストと4名の学芸員とプロデューサーらが指導者コースに参加した。ダンス・アーティストは、酒井直之(東京)、白神ももこ(東京、埼玉)、ハラサオリ(ベルリン、東京)、東野祥子(京都)、なかむらくるみ、横谷理香(石川)。学芸員とプロデューサーは、



**Director's Note** 全7回の連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」を実施した。そのうち3回（第2回、3回、6回）は京都精華大学との共同開講であった。「入門」講座であるが、日本でもトップクラスの実践者、研究者を招き、最新状況の報告をしていただいたので極めて刺激的であった。近年、ひきこもりが大きな社会的話題になっており、確かに国内で115万人、京都市内で13,500人と推定される数が多い。期せずして本講座では第1回（奥山理子氏）・第5回（滝沢達史氏）で、ひきこもりが大きなトピックとして語られた。アート側からの接近はまだまだ少なく、モデル的な事業の蓄積が必要であろう。第4回の木ノ戸昌幸氏は自らが代表であるNPO法人での表現活動の試みを紹介した。障害を持つ人たちの奇妙なアイデアや行動をつまらぬものとして放置しておくのではなく、そこに常識を突き抜ける新たな表現の芽があると感知し、大胆に広げてゆく手法には驚くばかりである。しかし手の届かぬことをしているわけではない。各人の表現の芽を見抜く力を養うことを教えられる。第7回の小山田徹氏は、まさに日常の時間や空間を、大それた仕掛けやお金を使うことなくアイデアでつくり変えてゆく達人である。日常とアートの境界線が滲み、緩んでいく瞬間のスリリングさを味わうべきなのである。京都精華大学と共同開講の3回は同大学の「芸術実践と人権——マイノリティ、公平性、合意について」というシリーズの一部であった。LGBTに関する問題をベースとする講座であるが、LGBT問題が引き寄せる人権や公平性について、アートや表現がどのように関わってきたのか、あるいは関わり得るのかといった観点での議論が深められた。

講師

・奥山理子(みずのき美術館 キュレーター)

2019年7月17日 | キャンパスプラザ京都

# 「第1回講座」 眼差しの パイオニアをつくる 基礎と未来



奥山氏は、みずのき美術館のこれまでの歩みと自身の経験を振り返りながら、アーティストの眼差しを通して、福祉施設の日常を社会化したアートプロジェクトの実例を紹介。芸術という異なるアプローチによって、個人が抱えている困難な状況を社会に開いていくことや、福祉施設が芸術活動を担うことの意義について考察する回となった。

構成文

・山本亮太郎

## 中学生から関わり始めたみずのき

奥山 私は普段、みずのき美術館という場所で、障害者支援施設みずのきで生まれた絵画作品を所蔵し、その紹介をしたり、現代美術を中心に様々なジャンルのアーティストとコラボレーションした企画展を開催するなどしています。まずはみずのき美術館が開館する経緯について、その後、「TURN/陸から海へ(ひとがはじめからもっている力)」(2014年-2015年)、「The Boatbuilding Project ayubune」(2014年)というみずのき美術館で開催したふたつの企画展についてお話しします。

みずのき美術館の母体は、障害者支援を行う社会福祉法人松花苑です。施設のひとつである「みずのき」は、重度の知的障害を持つ成人の方たちが暮らす入所施設です。みずのきは1959年に開設し、今年でちょうど60周年を迎えます。入所している方の約半数が入所後30年以上経過しており、高齢化、障害の重度化が課題です。周囲はのどかな田園風景が広がっており、昔から農園活動が入所者の日中の活動のひとつでした。2012年にみずのき美術館が開館する前までは、私も農園活動を担当していました。

そもそも私がみずのきに関わるきっかけは、12歳の時に、母が施設長に就任したことに遡ります。当時の私は、あまり自分の通う中学校に馴染むことができず、みずのきに行って過ごすことを好んでいました。私にとってみずのきで暮らす人たちは兄弟姉妹のようで、今でも実家に帰ることに似た感覚を持っています。彼ら彼女らの存在、そして彼ら彼女らを取巻く環境が、その後の私自身の仕事に非常に大きな影響を及ぼすことになります。



←  
みずのき美術館の外観  
—  
photo: DAICI ANO





### 絵画教室の苦悩と施設を開くということ

奥山 みずのきとアートとの出会いは、1964年に施設の余暇活動・情操教育の一環として絵画教室が始まり、日本画家の西垣籌一さん<sup>[\*1]</sup>が講師として招かれたことがきっかけです。週1回の活動を通して西垣先生が地道に当時のメンバーへ絵画指導を試みる中で、一般の公募展に作品が入選するなど、徐々に作品が評価されるようになり、1993年に世田谷美術館で開催された「パラレル・ヴィジョン」展の同時開催企画「日本のアウトサイダー・アート」展で紹介されてからは、日本発のアウトサイダー・アートとして国内外の美術関係者から注目されるようになりました。「正統的な美術教育という反アウトサイダー・アートのものが、知的な障害をもつ人たちと出会い、そこにアウトサイダー・アートのものが生まれたという事実、みずのき絵画教室の面白さがあるのだ。」<sup>[\*2]</sup>と、アウトサイダー・アートの研究者である服部正氏がご自身の著書の中でみずのきの絵画教室を評されたことは、みずのきとアウトサイダー・アートとの関係を紐解こうとする際の、非常に興味深い考察のひとつと言えるでしょう。西垣先生による丁寧な美術教育を受けた結果生まれた作品が、ある時からアウトサイダー・アートとしての評価を受けたことは、その後のみずのきに多くの課題を残し、問いを投げかけることとなりました。

西垣先生が他界された後、遺された2万点を超える作品が果たしてアウトサイダー・アートと呼べるものなのか、また、メンバーの高齢化による作品制作の停滞や、作品や教室での活動を通して抱かれるイメージと施設内の支援の現状とのギャップなど、葛藤や戸惑いに満ちた年月でした。やがて、福祉施設であったとしても、芸術的な評価を外部に頼るのではなく、「みずのき独自の視座の獲得」が必要であると思ひ至り、そのた

㉔  
みずのき絵画教室  
(1970年-1980年代頃)  
右に立つベレー帽の男性が西垣籌一

㉕  
西垣籌一(にしがき・ちゆういち)  
1912年-2000年。画家。  
京都市立絵画専門学校  
(現京都市立芸術大学)助教授を経て、  
1964年よりみずのき寮(現みずのき)で  
知的障害者に対する  
美術教育を実践。

㉖  
出典:  
服部正著「アウトサイダー・アート  
—現代美術が忘れた「芸術」」  
光文社新書、2003年

めの「活動拠点」、「作品のアーカイブ」、「福祉施設が芸術活動を行う根拠」の確立を目指そうと、2012年には「保存・研究・公開という美術館としての機能をつくり出すこと」、「アウトサイダー・アートの考察を行うこと」、「地域社会に開かれた活動であること」の3つの柱を掲げ、みずのき美術館を開設しました。特に「地域社会に開かれた活動であること」は重要です。美術館での取組みを法人の公益事業と位置づけ、これまで法人の利用者である障害のある方たちだけを対象としていた活動から拡張させ、美術館での活動を地域貢献につなげていこうとするものです。そのために、福祉施設の日常を見つめ直し、現代社会に対し訴求力のある方法で、「福祉」の専門性をより広く社会に開いていくことを意識しています。

### アメリカ人の船大工と7人の男性による和船の復元

奥山 2014年に、私が初めてみずのき美術館で単独で企画した「ayubune」というプロジェクトを紹介します。これは美術館のある亀岡市に伝わる鮎を釣るための和船を3週間かけて復元する公開制作と、そのプロセスを紹介する展覧会の二部構成でした。その大きな特徴は、船大工がアメリカ人であることと、彼とともに制作に携わったのが、いずれもひきこもりを経験した男性たちであるということです。

私は美術館開館以前、障害者支援施設みずのきの農園活動担当として、入所・通所の利用者の方に加え、ひきこもりを経験した成人の方の参加を積極的に受け入れたプログラムを行っていました。ひきこもりを経験した彼らとの数年間の関わりを通して、私たちの関係性と活動は定着したとも言えましたが、一方で固定化してしまったような行き詰まりに似た



㉗  
鮎船をつくる様子  
—  
photo: Kim Sajik



状況も生まれ、次の展開が求められていた時期でした。その時、たまたま私が傍聴したシンポジウムで、和船を研究しているというダグラス・ブルックスさんと出会ったのです。学生時代は哲学も学んだという知的な語り口の彼は、後継者がほとんどいない日本各地の船大工に自ら弟子入りを志願して技術を身につけ、後世に残る記録として残しています。その内容を聴きながらふと、彼と一緒に和船をつくってはどうかと思い立ち、シンポジウムが終わるや否や直談判し、プロジェクトを立ち上げることになりました。そしてみずのきの農園活動に参加している人たちを中心に、7人がこのプロジェクトへの参加を志願してくれました。

日本語が下手なダグラスさんと、とっても無口な参加者たちの、流暢な日本語を共通言語としない、大工仕事の始まりです。

日ごとに工程は進み、様変わりする舟の様子を見ようと、最初は日替わりで参加していた人たちも、次第に自分から頻りに工房となった美術館へやってきては、自ら作業を見つけて手伝うようになりました。また、開放された美術館の前を道ゆく人が足を止めて、思い思いに話しかけてくれます。一艘の舟が、参加者だけではなく、多くの人に夢を与えながらかたちを成していきました。

ただしこのプロジェクトでは、参加者の7人がひきこもりを経験した当事者であることには一切触れていません。伝えることで、さらに内容に豊かさや説得力が生まれるとは思いましたが、あえて「鮎舟の復元」にフォーカスしました。でも、本人たちの快諾も得て、展覧会のポスターや記録映像のエンドロールには彼らの氏名を掲載しています。

#### 記録をめぐる葛藤

奥山 「ayubune」では、舟の制作過程をドキュメント映像としても記録しました。しかし記録映像をめぐる監督との考え方の相違はとても困難で、同時に重要な経験でもありました。コミュニケーションが苦手な参加者のために、彼らが安心できる環境づくりをと現場を行き来する私と、画面に私の姿や声が入りすぎて良い映像作品にならないと考える監督。映像に残す価値がある現場だということは互いに理解しているものの、そのために現場の状況に意図的な行為が求められることを、当時の私は「演出」ととらえてしまい、その主張を受け入れることができませんでした。その葛藤は今も、アート(表現行為)が福祉的な分野を含むアートに馴染みがな

日本語が下手なダグラスさんと、とっても無口な参加者たちの、流暢な日本語を共通言語としない、大工仕事の始まりです。

(奥山)



いコミュニティに入っていく時、私の中で必ず生じています。その葛藤をどのように共有し、超えていくかを、私は自分が携わるプロジェクトを通して試み続けています。

#### アーティストの眼差しから福祉をとら直すプロジェクト

奥山 2014年から2015年にかけて実施した「TURN/陸から海へ(ひとがはじめからもっている力)」は、みずのき美術館、鞆の津ミュージアム、はじまりの美術館、藁工ミュージアムの4つの美術館が開催した合同企画展です。その中で、美術家の日比野克彦さんがそれぞれの美術館に関係する4つの福祉施設に、福祉サービスに倣ったショートステイを行い、そこで制作した作品を企画展の柱として構成しました。日比野さんは、滞在中、施設の利用者たちとまったく同じ日課を過ごします。これは、施設で生まれた芸術活動に注目するだけでなく、施設の中で起きている様々なことを、アーティストの眼差しで見つめてみようとして試みた画期的なアートプロジェクトとなりました。

アーティストは作品をつくるだけの存在ではなく、アーティストがいることで、いつもの場所に様々な変化がもたらされたのです。特にこれまで障害者の支援施設では、施設の一部の利用者の表現行為が作品として芸術的価値を見出され、そのことだけに注目が集まる傾向にありました。しかし、彼ら彼女らがなぜ表現するのか、あるいは創作する時間以外や創作しないとされてきた人たちの中にも、様々な豊かな営みがあるという事実が気づかされるのです。

以前、日比野さんと「どういったアーティストが福祉現場へ行けるのか」という話をした際、日比野さんは「人柄が割だ」と答えたことが非常に印象に残っています。当然のことながら、「人柄」は初めて人と出会っ

←  
仕上げを全員で行う様子  
—  
photo: Kim Sajik



㊦  
みずのきに滞在中の日比野克彦。  
利用者と(2014年)

たり、他者と関係を育んだりする際にとっても重要な要素となります。「文化芸術による共生社会」が全国的に注目されるようになった昨今、専門性(Professionality)だけでなく、「私/個人」(Personality)についても考えることが必要で、個人的な体験や自分の中の当事者意識の考察は、社会的なプロジェクトの充実に大きく影響していくことと思います。

#### 質疑応答

**質問者1** 「ayubune」について、参加者の心身の状況によっては毎日確実に参加できるという確証のない中で、進水式までのストーリーをどこまで想定していたのですか？

**奥山** 事前のフィールドワークやリサーチを通して、早い段階で参加希望者にも「進水式」がとても重要なイベントであるということがわかり、このプロジェクトのゴールとして共有することができました。また、みずのきでの農園活動への参加経験から、毎週1回の参加であれば可能だろうとも思っていました。それでも、中には初参加の方もいましたし、作業でミスをした翌日などはリタイヤするのはと心配しましたが、ダグラスさんの人柄や丁寧なコミュニケーションと彼ら自身の頑張りによって、その心配が杞憂に終わったことは嬉しい驚きでした。

**質問者2** 福祉施設からみずのき美術館に移ったことで利用者との関係は変わりましたか？

**奥山** 私自身の最大の変化は、対象が「個人」から「社会」へと広がったことです。それによって生まれた新たな可能性とその使命感が仕事の原

「私/個人」(Personality)だけでなく、専門性(Professionality)だけだけでなく、考えることが必要

(奥山)

動力になっています。しかし変わらず根本にあるのは、みずのきで暮らす人たちに幸せになってほしいという願いです。とはいえ、利用者の方たちと毎日一緒にいられないと現実感には確かに遠のくので、これは単純に寂しい。使命感に燃える一方で、これが入所施設で実践できたらどんなにいいかとも思います。

**質問者3** 個人的には、本当に、異なる分野を行き来する人にとって重要な大部分の要素が「人柄」に行き着いてしまうのか、わかりません。

**奥山** これは人と接する仕事すべてに共通しますが、重要なのは、相手に「明日も会いたい」と感じてもらえるかに尽きると思います。そのためには、人柄は無視できない要素です。一方で、新しいことを伝えたい時には説得力が必要で、その後ろ支えとなる専門性を深めていくことも大事です。私自身、まだまだ不安はいっぱいで、自分の専門性とは何なのか、それが交流先の人たちにどんなかたちで役に立つのかと絶えず探究したいと思います。

**質問者4** 撮影する際に参加者に同意は得ましたか？撮影が参加者の負担になり、心身のバランスを崩すことになった時にはプロジェクトを中止するという判断をされるのでしょうか。また、福祉の現場で職員同士の手によってアートプロジェクトを実践するために必要なことについて教えてください。

**奥山** 参加者には同意を得ています。私自身もカメラを向けられることが苦手だった一方で、様々なドキュメント映像に勇気づけられた経験もあったので、参加者が不安にならないよう話し合いました。監督も参加者たちと年齢が近く、彼らとも仲良くなってくれたおかげで、カメラの存在が参加者にネガティブな影響を及ぼすことはありませんでした。それよりも、カメラより私の動きが現場を乱していたという監督からの指摘に大きな動揺と憤りを感じ、映像作品として残す意味があるのか、これ以上撮影しなくてもいいのではという葛藤と闘うことが大変でした。

施設職員の手によるアートプロジェクトのつくり方やアートへの理解の促進の仕方は、永遠の課題です。自分が気を抜くとどんどん距離感が遠のいてしまう感覚があり、アートに限らず、日常的にコミュニケーションを取ることや、プロジェクトの中で共通の体験をいかにつくるかが重要です。



## 概論

- 山田創平 (社会学者、京都精華大学人文学部准教授)

## トーク

- 小泉明郎 (アーティスト)
- 遠藤水城 (東山 アーティスト・プレイングメント・サービス [HAPS] エグゼクティブディレクター、Vincom Center for Contemporary Art [VCCA] 芸術監督)
- あかたちかこ (思春期アドバイザー、児童自立支援施設専門講師)
- 山田創平

2019年7月27日 | 京都精華大学 明窓館 M-201教室



本講座は、京都精華大学が開催するレクチャーシリーズやゼミをはじめとするプロジェクト「芸術実践と人権 — マイノリティ、公平性、合意について」との共同開講で実施された。「芸術実践と人権」は、マイノリティや市民の人権・権利を視野に入れたアートマネジメントについて学ぶ機会を提供する場として2018年度から開催。2019年度は、アートの諸実践の現場においてマイノリティへの倫理的配慮や表現の自由といった権利がどのように発生しているのか、キュレーターやアーティストの実践事例から学ぶプログラムとしていた。本稿ではその導入となる講座と議論の内容を順に記していく。

## 構成文

- 内山幸子 (「芸術実践と人権 — マイノリティ、公平性、合意について」プロジェクトコーディネーター)

## 編集協力

- 吉田守伸

# 「第2回講座」 芸術実践と人権 マイノリティ、公平性、合意について

## 第1部 山田創平氏による概論

第1部は「芸術実践と人権」のプロジェクトリーダーでもある山田創平氏による概論で、次の3点を中心に語られた。ひとつ目は、表現の自由はそもそも社会的弱者が上位権力に対して持つ「自由」であること。ふたつ目は、このとき何を「社会的弱者」とし、何を「上位権力」とするかということ。3つ目は、社会的な芸術実践が持つ人類の歴史の中での意義についてである。

山田氏は以上の3点を考える上で「近代」という概念が重要になると述べ、近代を構成するイデオロギーである資本主義と国民国家のうち、特に前者を切り口に解説した。近代資本主義の生産システムが滞りなく運営されるためには労働者が必要であり、その要請に応えるべく労働者を支える妻の無賃の家事労働や、家族をつくり未来の労働者となる子を生育育てることが理想化されてきた。このことから、近代資本主義社会は男性中心主義・異性愛中心主義・健常者中心主義・婚姻中心主義をその本質とし、構造的にあるいは原理的に、女性差別・同性愛差別・障害者差別・単身者差別を内包していると言える。近代という時代の持つこのような中心と周縁の構造を認識すると、「社会的弱者」と「上位権力」の関係が自ずと見えてくる。<sup>[\*1]</sup>

続いて山田氏はセクシュアル・マイノリティへの排除を例に挙げ、過去に起きたいくつかのヘイトクライムとともに、マスメディアの偏見を持った表現や政治家の差別的言論を紹介し、差別や偏見を助長してマイノリティを不利な状況に追い込み、結果として「命を奪う表現」があるということを改めて確認した。一方で、米国で生まれたヘイトスピーチに抵抗する「Angel Action」など、差別や偏見に対するアーティストたちのカウンターアクションがマイノリティをエンパワーし、社会変化を促してきた事例も紹介した。これらの事例は、「周縁から中心に向けた表現」であり、それが既存の構造を揺さぶるものであるからこそ、社会的芸術実践としての意義を伴っていると言える。同時に、「表現の自由」は社会的弱者が上位権力に対して持つ権利であるという正しい理解のもとに擁護されなければならないことが強調された。

最後に、山田氏は上記の話が社会学では常識となっているにもかかわらず、アートの現場に持ち込もうとすると必ず反発が起きると指摘した上で、「ポリティカル・コレクトネスに対する拒絶とも取れる反応が起こるのはなぜなのか？」アート実践において人権について語ることはなぜ困難

\*1

近代と社会排除の問題については、山田氏による以下の論考もぜひ参照されたい。

WEB版美術手帖

シリーズ:ジェンダーフリーは可能か?

第6回「まずは知っておきたい

「芸術実践とジェンダーの平等」

について」

[https://bijutsutecho.com/](https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/20162)[magazine/series/s21/20162](https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/20162)

なのかについて、ゲストの皆さんと話し合いたい」と問題提起をして、概論を締めくくった。

## 第2部 小泉明郎氏と遠藤水城氏のプレゼンテーション

続く第2部では、アーティストの小泉明郎氏と、キュレーターの遠藤水城氏によるプレゼンテーションが行われた。

小泉氏の映像作品では、カメラの持つ暴力性や撮影者と被写体との間の権力構造自体が明らかにされることが多い。他者にカメラを向けた瞬間から発生する倫理の問題そのものを作品の中で問うているアーティストと言えるだろう。被写体との関係について小泉氏は、協力相手のやりたいことを推測しつつ作品の主題と重なる点を見つけ、近づけていくことをまずは目指すが、撮る側は「作品と鑑賞者の間に何を立ち上げるのか」も考えて制作するため、実際の撮影現場ではどのアングルを撮るかといった「モニター越しの関係」に集中していき、「人間対人間の関係」はほとんど見えなくなっていくと語った。そして「撮る側から撮られる側への要求にはどこがリミットかというルールはないから、『これはもうやめた』と思うところまで続けてしまうことがあります」と説明した。

小泉氏が観せたふたつの映像作品のうち、『Defect in Vision』は神風特攻隊として出兵する夫とその妻との最後の晩餐を描いた作品である。同じ夫婦の会話のシーンが4回繰り返される中で、カメラのアングルが変わったり、撮影者の“意地悪な”介入が映り込むことで、演じているのが視覚障害のある役者であることがわかっていく。また、『忘却の地にて』



小泉明郎氏によるプレゼンテーションの様子

は日中戦争における日本兵の証言が語られる映像だが、スクリーンの表裏にプロジェクションされているふたつの映像によって、それが記憶障害のある男性が暗唱していることがわかるようになっていく。一方は戦時下の盲目的な社会の状況が、もう一方は喪失された日本軍の加害の記憶が、障害のある人の身体を借りて語られていることになるのだが、その構造を「観る」行為の中で認識していくうちに、鑑賞者はさまざまな倫理的な問いに同時に晒されることになる。遠藤氏は後の全体ディスカッションで、小泉氏の作品では「協力者とわかり合えるかどうか?」にかける芸術家的実践の問いと、「人はどこまで権力関係に晒されていいのか?」という作品そのものが発生させている倫理的な問いが二重化しており、時に緊張関係をも引き起こす「芸術」と「倫理」の間で、このふたつを強い意志を持ってつなげようとしているのが小泉氏の作品であるとした。

小泉氏は、芸術実践と倫理や道徳との関係について、「作家は批評が生まれる可能性がどこに存在しているのか、そこで何が起るか、何が主題となり得るかということを美的な法則に則って追求しています」と述べ、その法則には社会の倫理観や道徳と重なっているところもあるが、アートの諸実践の現場ではそこを剥離させていくところがしばしばあると語った。また、タブーに踏み込んだり、ルールを破っていったりすると新しいことを生み出す芸術のエネルギーが埋まっているとわかっているからこそ、アーティストたちにとってそれは甘い罠となっており、芸術と倫理の間に緊張関係を引き起こすような出来事が繰り返されてきたのではないかと考察した。

時間をかけて協力者たちとの信頼関係を築くことや、彼らと合

撮られた人の人生に対する責任は負えるが、表現したことに対して責任は負うことができない  
——— (小泉)





意しつつ進めるというプロセスに注意を払いながら制作をしている小泉氏が締めくくりが発したのは、「他者を巻き込んで作品をつくっていく時に、表現したことに対する責任は負えるが、撮られた人の人生について責任を負うことができない」という言葉だった。「カメラを向けながら『もうやめだ』と思うところまでやる」という小泉氏の中のひとつの基準のようにも思えるし、その臨界に至るまで撮られる人のことを知ろうとする意志の表れとも受け止められた。

続いてプレゼンテーションを行った遠藤氏は、自身も属するキュレーターという職業が近代の管理型の権力と同時期に発生し、無自覚に抑圧的な社会のあり方を強化してきたということを自己反省を含めて指摘した。その上で、現代美術のキュレーションは価値の定まっていないものを価値化していく仕事であることを強調し、キュレーションの技術に政治的な正しさを適用する「アクティヴィズム型キュレーション」の可能性を語った。

一方で、国内の多くの公立美術館では、政府やスポンサーとの複雑な利害関係を考慮したり、調整したりしながら展示を行わなければならない、組織の問題や労働環境の問題など原因は様々あるが、「検閲」と言える状況が確実に進んでいるとした。遠藤氏はこうした状況にあって「安心安全な緻密な管理技術で構築していくキュレーション」ではまったく無意味だと述べ、小泉氏の作品を前にした時のように善悪の判断がつきがたい議論が喚起されて皆がそこに巻き込まれている状態、言い換えれば「もう1回みんながこのテーブルの前で“賭け”をやらなきゃいけない状態」に引き込むようなキュレーションでなければ現代美術をやっている意味がないと語った。そして、その“賭け”の判断基準は何なのかということも過去の



事例を参照しながら共有していかなければならないとした。<sup>[\*2]</sup>

### 全体ディスカッション

その後の全体ディスカッションでは、児童自立支援施設で性教育を行うあかたちか氏が加わり、芸術と倫理、あるいは政治について、4者による意見交換が行われた。

まず、遠藤氏が小泉氏のプレゼンテーションについて、アーティストと作品の協力が決別して作品としては成立しなかったり、理解し合えたと思っていたことが勘違いだったりしたとしても、「お互いに歩み寄ったという実践があったということを全力で肯定すべき」であり、「合意に至ろうとする意志がひとつの倫理としてある」と指摘したことについて、小泉氏は、率直に嬉しいと述べた上で、合意を成立させるという手続きに疑問を持っていると補足した。例えば契約書を交わす際に、どんなに相手方に説明を尽くしたとしても、それは契約書を書く側の都合でしかない。「その内容を検討するところまで相手に課さなければいけないことに違和感を感じるし、時間とともに変化するかもしれないことに合意をさせて法的に書面化することにも暴力を感じる」と小泉氏はまとめた。これについてあかたちは、昨今、性教育の分野でも「セックスの際に言葉で相手と合意を取ろう」と言われているが、合意すべきことが無数にある中でこれを言うことに不毛さを感じていたと述べ、「合意というのは約束ではなくて、プロセスや関係性そのもののものだということを改めて納得しました」と反応した。

また、山田氏が概論で投げかけた「アート実践において人権の

<sup>[\*2]</sup>

遠藤氏がエグゼクティブディレクターを務める東山アーティスト・プレイメント・サービスが発行するWebメディア「HAPS PRESS」には以下の資料が公開されているので、ぜひ参照いただきたい。

「美術表現に関わる近時の国内規制事例10選(1994-2013)」

<http://haps-kyoto.com/haps-press/bijutsuhyougen/10sen/>

「芸術判例集 美術表現に関わる国内裁判例25選」

<http://haps-kyoto.com/haps-press/geijyutuhanreisyu/25sen/>

ことを語ることはなぜ困難なのか？」という問いに対して、遠藤氏は「タブーに挑むといった芸術実践は、一見自由を表現しているように見えて、タブーを規定している社会構造を再肯定しているように見えるんですよ」と発言した上で、発想を転換すべき点がふたつあると述べた。まず、アートは機材や空間といった事実上の制限や条件の中で複合的なリアリティを持って立ち上がってくるものであるから、個人の才能とか自由への意志に関係なくそこにある事実を再確認するというほうが本質に近いのだということ。もうひとつは、自由や権利を求めていく人権運動やアクティビズムというのは、本来ポジティブなものであるはずで、様々なタブーに触れておいて「アートは自由なんだ」というのは話が逆転しているということである。遠藤氏の指摘は、芸術実践と倫理をめぐる問題において、SNSを中心に感情や情報に扇動されて人々が分断されがちな状況の中でも、芸術実践を通じてその弊害を乗り越えていく枠組みをつくることはできるのではないかと。アートの本質に立ち返りながら政治的な正しさを基準に据えた芸術実践のあり方は可能であると、想像させてくれるものであり、本プロジェクトのプログラムづくりにも示唆を与えてくれるものだった。

ディスカッションのまとめとして山田氏は、倫理や人権についての思考は社会の中でどんどん変化していくものであって、「これが答えだ」という語り方は間違っていると。その上で、社会的弱者がいつでも声を上げ意見を言える環境さえあれば、倫理や人権、人間の尊厳についての議論に社会がコミットすることは可能であり、それができなくなっているところに今の社会の問題があるのではないかと締めくくった。



| 2-2\_芸術実践と人権

アート実践において人権のことを  
語ることはなぜ困難なのか？  
(山田)

おわりに

以上、端折ったかたちになってしまったが、私の視点から講座とディスカッションをまとめた。話題は多岐にわたったが、芸術と倫理、あるいは社会や政治についてのそれぞれの登壇者の論点は一貫しており、芸術実践と人権運動は、問いの立て方や、問いを立ち上げる手法、倫理的配慮の発生のさせ方において、異なる技術なのだということを改めて理解した。しかしながら、遠藤氏が指摘したようアートの本質——芸術を発生させる条件や制限——を突き詰めていくと、アクティビズムを生み出している政治や社会と通じるころはあるだろう。アプローチは異なるとしても、同時代の社会の不安に誠実に向き合い、それぞれの諸実践によって社会が変化していくことの喜びは共有できるはずだ。なぜなら、ポジティブな社会変化を起こす芸術やアクティビズムがあることを私たちは歴史の中ですでに知っているからである。

タブーに挑むといった芸術実践は、一見自由を表現しているように見えて、  
タブーを規定している社会構造を再肯定しているように見えるんですよ。

(遠藤)



## 03

講師

・住友文彦(アーツ前橋館長・東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授)

討論者

・山田創平(社会学者、京都精華大学人文学部准教授)

・今井朋(アーツ前橋学芸員)

・石倉敏明(人類学者、秋田公立美術大学准教授)

・住友文彦

2019年8月31日 | 京都精華大学 明窓館 M-201教室



この講座は2019年10月12日～2020年1月13日にアーツ前橋で開催された「表現の生態系 世界との関係をつくりかえる」展の関係者による講演と討論からなる。講演者は住友文彦氏、討論者は司会の山田創平氏のほか、今井朋氏、石倉敏明氏、そして住友氏であった。講座は前半に住友氏の講演、後半に4名による討論という構成であったが、本報告では後半の「今井朋氏の語り」を独立させ、3部構成とした。

構成文

・中川眞

## 住友文彦氏の語り

住友氏は「キュラトリアル・アクティヴィズムは可能か?」というタイトルで、主にキュレーターと美術館のあり方について現状を批判的にとらえ、あるべき姿を示唆した。その趣旨は特権的な場としての美術館を内側から解放し、再構築してゆくというもので、当然ながらアーツ前橋が歩んでいるプロセスを踏まえての提案である。立論の参照となっているのが、マウラ・ライリー<sup>1)</sup>「Curatorial Activism: Towards an Ethics of Curating」(2018, Thames & Hudson)である。

住友氏は、美術あるいは美術館というシステムが白人男性以外を排除してきたというライリーの指摘に同意する。ライリーはMOMAやベネチアビエンナーレでの実状を具体的な数字を挙げて証明したが、住友氏はそれを受けてキュレーターは自らの偏向に自覚的になるべきであると言う。すなわち美術館の常設展示室ではどこでも似たような作品が置かれており、キュレーターがそういう「マスターピース」のあり方を疑ってかからないのはいかかなものかと。それを常態として放置せず、周縁化されている作家に目を向けること。そのためにキュレーターの取るべき態度としてライリーのふたつの戦略を紹介する。第1は戦略の本質主義、第2は間テクスト主義である。だが住友氏はその有効性を認めつつもライリーに対して懸念を示す。彼女はキュレーションを展覧会実践に限定しすぎているのではないかと。「表現の生態系」展はそういったライリーの観点への応答でもある。展覧会が展覧会実践(=美術館)以外の場所といかにつながるのが可能なのかということ、キュレーションとして考えるべきだということである。

そこで住友氏は一気に「そもそもキュラトリアル・アクティヴィズムは不可能である」と考えてみることを提案する。美術館(あるいは美術)が特定の市民の所有として特権的な位置にあるのではないかと、本当に公共的なかと問いかける。ライリーのいうアクティヴィズムはどこかユートピア的、理想主義的なものに見える。この「ユートピア」との指摘は、講座後半の「アジュール」をめぐる議論への伏線となる。

「表現の生態系」展は2016年に始まった「表現の森」プロジェクトと深い関係がある。それぞれ特色の異なる5つの施設との協働であるが、共通して施設の人々が美術館に来ることが困難という事実が横たわっていた。それをクリアするにはどうしたら良いのかを考えることから始まったプロジェクトが、美術館へのアクセシビリティや公共性について考え試行

1)

“Curatorial Activism:

Towards an Ethics of Curating”の

著者であるマウラ・ライリーは、

ブルックリン美術館のフェミニスト

美術のためのエリザベス・サックラ-

センターを創設し、フェミニスト美術の

紹介の先駆けを担った。そこには

ジュディ・シカゴの‘The Dinner Party’

などの優れた展示が含まれている。

また、シンディ・シャーマンや

リチャード・ベルなど社会正義に関わる

アーティストたちについて60編以上の

論稿を発表している。バード大学

シモンズ・ロック校(マサチューセツ)で

教鞭を執る前に、国立デザイン

アカデミーの常任理事やグリフィス

大学クイーンズランド校(ブリスベン)の

美術理論の教授を務めた。

また女性差別と闘う2つの組織

The Feminist Art Projectと

Feminist Curators Unitedの

設立メンバーである。

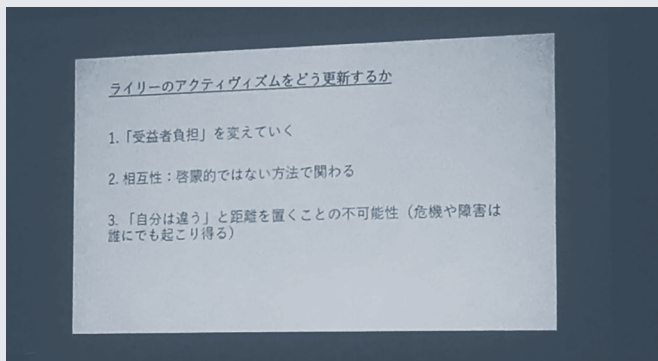
美術史学博士(ニューヨーク大学)。

し、洞察するきっかけとなった。様々な課題を抱える人々を包摂する施設のあり方は、本来は(昔は)信仰や共同体が受け止めていたものであろう。それに比べると、美術館というシステムは新しく「近代的」である。そういう近代性と地域の包摂はどのように接合できるのか。ここにも美術館という近代的制度の持つ特権性あるいは近寄りかたさが忍び寄ってくるのである。それについての考察はアーツ前橋の存在意義を定立すると同時に、ライリーを批判的に継承することにつながる。

住友氏は「表現の森」の3つの特徴を指摘する。第1は受益者負担の問題。美術館は無料で誰もがアクセスできる場所として博物館法(第23条)で規定されている。つまり美術館に行くのは市民の基本的な権利であるということ。第2はライリーの啓蒙性(上から目線?)に対する批判。キュレーターは美術の専門家ではあるが、福祉や教育については非専門家である。異なる分野の専門家と仕事をしてゆくという「相互性」の自覚が必要。第3は個人的な危機や障害を持つ人との協働の中で、問題を客観視して相対化するのではなく我がこととして引き受ける心構えの保持。

このような特徴的な視点のもとで「闇に刻む光 アジアの木版画運動 1930s-2010s」展を企画したり、エイズに関わる「ACT UP」と交差したりすることによって、住友氏はアメリカのマイノリティ美術に関わる人々が提唱するキーワード転換に共鳴する。すなわち近代美術を説明する際にこれまで用いられてきた Subjectivity - Medium - Presentation という列から、Identity - Scale - Process という列への移動である。こういった概念のシフトは「表現の森」をとらえる上でキーとなるが、実はその先鞭は歴史の中に求めることができる。

その証例として住友氏はダダイズムとシュルレアリスムという戦前の前衛運動と、1960年代のコンセプチュアリズムを示す。ダダイズムは亡



「そもそもキュラトリアル・アクティヴィズムは不可能である」と考えてみる  
(住友)

住友氏のスライドより

命者=マイノリティという視点からとらえ直せること、シュルレアリスムでは印刷物を流通させた点と、大衆文化と接点を持ちながら高尚なものと低俗なものとの価値転換を図った点がポイントである。コンセプチュアリズムでは価値のないものを取り上げること自体にラディカルさがあり、アジアの美術家が特に強く反応した。こういう流れの中に「表現の森」が位置づけられる。

また住友氏は、キュレーターがとすれば新しい形式に注意を向けがちなのに対して、宗教や保守思想を取り上げることの意味を、モーリス・バーマンの『デカルトからベイトソンへー世界の再魔術化』の中の「参加する意識」や「弱い主体」という概念を用いて語る。これは近年のティム・インゴルドの『世界と魂の関係』に通底する考えであろう。

最後に、ライリーの提起したキュラトリアル・アクティヴィズムに対する再定義として、住友氏は「表現の森」と『表現の生態系』展のアプローチを次のようにまとめる。

- どこかに訪ねてゆくという経験的なことから出発。[「自分」に固執しない]
- 土地固有のあり方に即して。[ローカリティ]
- ほかの専門家との協働で多角的な見方。[脱特権性]

そして、美術館が多様な属性の人々にとって「安全な場所」であることの意味、ひいては美術は本当に自由なのかと常に問い続けていることを述べて、住友氏は講演を終えた。

#### 今井朋氏の語り

今井氏はアーツ前橋と「表現の森」、「表現の生態系」展について紹介した。2013年に開館したアーツ前橋には3つの活動の柱がある。第1は企画、展覧会、管理、第2は作品と鑑賞者の関係をつくるラーニング・プログラム、第3は館外での地域アートプロジェクトである。この第3こそがアーツ前橋のユニークな点である。

「表現の森」を立ち上げるに当たっては3つのポイント(キーアイデア)があった。第1は「自分事として考える」ことである。美術と社会をつなぐ作業の中でソーシャルインクルージョンなどといった言葉を使うが、「障害」と一言で言ってしまうと、どこか自分には関係がない問題のように聞こえてくる。しかしそれを現代社会における「生きづらさ」ととらえると、自分事として社

現代社会における「生きづらさ」ととらえると、自分事として社会課題に向き合えるのではないか。  
(今井)





c  
プレゼンテーションを行う今井氏

会課題に向き合えるのではないか。第2は美術館に来づらい人、美術館から最も遠い人を想定してみることから始める。第3はアーティストや美術館が「生きづらさ」に対して持ち得る役割について考える。

その上で、今井氏は「表現の森」の具体的な実践手法として、さらに3つの軸を挙げる。第1は社会で見えづらくなっているものの可視化を図ること。第2は美術館が外の施設に出て行ったときに人と人との関係性がどういったかたちで構築されるのか、また時間をかける中でそうした関係性がどう変化していくのか、さらにその変化が美術館や美術にどう影響を与えるのかという関係性を観察すること。第3はアート自身が福祉や医療といった異なる分野からの影響を受けることに着目すること。

次に「表現の森」を『表現の生態系』展として仕立てるに当たって留意した7点が挙げられた。

- 3種のプロジェクト(1:企画、展覧会、管理、2:ラーニング・プログラム、3:館外活動)を有機的につなげることによって、さらに大きな情報プラットフォームに。
- アウトリーチとインリーチの相互作用。
- 展示室における教育普及プログラムのプロセスの開示。
- 長期的視点(～2035年)に基づいた関係団体や施設スタッフとの関係性の構築と維持。
- 福祉/教育/医療の分野とアートの関係の考察。
- 活動の検証のための記録の充実。
- ポリティカル・コレクティブ活動に陥らないための美術以外の専門家の視点の導入。搾取的と言われることへの応答。

最後に、今井氏は5つのプロジェクトからふたつについて語った。ひとつはアーティストの滝沢達史氏と、ひきこもりや不登校の経験がある若者たちが通うフリースペース「アリスの広場」の協働である。展覧会の作品のひとつに、滝沢氏と元ひきこもり(自殺未遂の経験あり)女性との共作がある。彼女の自殺未遂の現場を再訪するという、精神科医から見れば危険とも言える行為の後に、彼女は「生きていて良かった」という感慨を得る。幸いなことにこの協働は極めてポジティブな結果をもたらした。

「アリスの広場」の若者たちは休館日に美術館にやってくる。ひきこもり当事者には社会復帰をしていく中で、どんな表現をしても否定的な言葉を発することなく受け入れてくれる場所が重要な要素となるが、美術館が「受け入れてくれる相手がいる安全な場所」となるならば、彼らの社会復帰を後押しできるのではないか。今井氏が引用する、滝沢氏の「……生きづらさを抱える人には、社会に合わせる努力よりも、世界の広がりや獲得した方が良いと思っている」という言葉が非常に印象的であった。

もうひとつの事例は、ホームレスや脱北者、難民などを受け入れてきたシェルター「あかつきの村」とアーティスト集団「Port B」の協働である。作品ではひとりのインドシナ難民とケア担当者の濃密な関係性を記録したものをベースに、連続フォーラムや朗読を連日行うとともにSNSに拡散し、広く課題を社会と共有する試みが実施された。

#### クロストーク

住友氏、今井氏の語りでは、美術館を可能な限り近代的な制度から解放し、その特権性に安住するのではなく、地域の多様な困難を持つ人々との協働の中から本来的な自由や安全が保障される美術館像を打ち立てるプロセスが明らかとなったが、それを受けて石倉敏明氏は一種のアジュールをつくらうとしているのではないかと指摘した。アジュールは一般的には統治権力が及ばない地域(空間)のことであり、「避難所」「無縁所」「隠遁場」「聖域」などと訳される。江戸時代の「縁切り寺」、現代のDVシェルターもアジュールの一種である。

石倉氏の指摘に触発されてアジュールをめぐる議論は活発化した。今井氏は、あかつきの村でインドシナ難民男性をケアしてきた担当者の「社会の中で最も弱く、最も声の小さい人を基準に私たちはコミュニティをつくることを考えている。しかし、この価値観を社会が良しとして実践し

てしまったら、社会は崩壊すると思う」という言葉に着目し、アジュールにはユートピア的な発想があるのではないかと懸念を表明する。それに対して住友氏は、美術家はユートピア的なコローニーを繰り返してつてきた。その必要性は確かにあったが、Port Bというグループがあかつきの村に行くこと、すなわち外部世界がその空間とどう関係性を持っていくべきなのかが、まさに「表現の生態系」展では問われている。

石倉氏はこれを受けて、より広い観点からアジュールを語る。ヨーロッパにあるアジュール法を引きながら、どの国においても一元的に法律はすべての人が守らないといけないのではなく、なぜか例外がある。アジュールは特定の空間だけではなく、お祭りのように社会全体がアジュール化する瞬間ととらえることもできる。文化人類学は特殊な文化のひとつとしてアジュール研究を行い、普遍的な自由の問題との接点をあまり考えてこなかった。しかし石倉氏自身が文化人類学者として参加した「表現の生態系」展では、歴史的なアジュールの知恵を学びながら、未来の社会をどうつくるのかというふたつの命題の交差があったと報告する。アジュールは一定ではなく、閉じたり開いたりするという可塑性を持っているのではないか。変形したり破壊されても時間を経て蘇ったり、別の場所に現出したりする。例えば縄文時代の要素が戦国の安土桃山時代に突然出てくるように、間欠的に噴き出してくるのである。美術はそれくらいの長期的なスパンで表現をとらえるべきではないかと述べ、「大きな権力によって何か展示が実現できなくなるとかがあるかと思いますが、逆にそれによっても破壊されないものをどうやって守っていくのかということを考えていくべきだ」と、暗に2019年の「あいちトリエンナーレ」の問題に触れるのであった。

ここで山田氏は場所ではなくアイデンティティとつながるアジュールを提起する。それは住友氏が講演で提示した戦略的本質主義を受け止めての発言であるが、セクシュアルマイノリティが市民活動を行う時に、多様な属性がありながらも、アイデンティティをつくるためにまずは「ゲイ」に特化した。それによってゲイひいてはセクシュアルマイノリティ全体の人権を主張したのだが、その団結がアジュールに見えたという。実際の空間ではない人間関係やネットワークをもアジュールに含めたらどうかという提案である。それに対して住友氏は肯定しつつも、美術として関わってゆく場合に、施設の人々のプライバシーを外に晒してしまうような無防備の危険性があるゆえに、連帯の可能性を担保するのは専門家との協働の強度によるのではないかと指摘する。山田氏もそれに合意し、基本的には学び合いが重

アジュールは一定ではなく、閉じたり開いたりするという可塑性を持っているのではないか。  
——(石倉)

要であり、いかに共感できるネットワークをつくるのが重要だと述べた。

アジュールは空間かネットワークかという外形の議論を経た後、アジュールという存在が発出する意味や問題についての議論へと移ってゆく。石倉氏は、アジュールをつくと一般社会とそうでない社会という二項対立ができる。中心と周縁というメカニズムの中でふたつの社会間に補完的な共犯関係が発生するという1970年代の人類学の解釈と対比して、近年ではジョアオ・ビールの著作に見られるように、アジュールにおいてなぜ行き場のない人々や社会的な弱者が再生産されていくのかを問うようになったという。写真家とともに成したビールの仕事はアーティスティックとも言えるが、石倉氏はそういった視点や行動が「表現の森」に関わる場合に重要になってくるのではないかと指摘する。

この議論は住友氏が述べた戦略的本質主義と間テキスト性という概念に回帰しながら展開し、アジュールとしての美術館をどのように構築していくかという、議論の最終段階へと入ってゆく。住友氏は補足的に、戦略的本質主義的アプローチは焦点を絞るやすいものの、間テキスト的アプローチは、観客に委ねるだけに、観客が共有する知識の上でしか作動しないのではないかという懸念を示す。「あいちトリエンナーレ」の「表現の不自由展」においても多様な理解のレイヤーが間テキスト的に機能したかどうか疑わしいというのである。そこで石倉氏は再びアジュールの開閉機能に視点を戻し、南方熊楠の粘菌研究を参照にしながら、戦略的にアイデンティティを持って何かを閉じていくことと、逆に間テキスト的に多様体的に開いていくことの両方があることによって、自由が獲得されるのではないかと投げ返した。

最後に、住友氏が、2019年9月に京都で開催される国際博物館会議にて「博物館は多様性を議論するための場所」という定義について議論されるが、なかなか一筋縄ではいかない。その中であって「表現の生態系」展は、ミュージアムの定義を変えていくこととする動きに対して、アーツ前橋という赤城山の麓にある美術館が長期的な議論の中に参加しようとしていること、今井氏が、「表現の生態系」展は、社会の中にある小さな声をどう拾っていくのかということが、これからのアーティストの活動や表現という分野の中で非常に重要になっていくこと、石倉氏が、「表現の生態系」展は「人間の外」あるいは「more than human (人間以上のもの)」を視ることによって場所の限られた地域的な問題と外の世界をつなぐ展覧会になっていくと指摘して、この長きにわたる講座の幕は閉じられた。

戦略的にアイデンティティを持って何かを閉じていくことと、逆に間テキスト的に多様体的に開いていくことの両方があること  
——(石倉)



## 04

講師

- 木ノ戸昌幸(NPO法人スウィング理事長)

- Q
- XL

2019年10月31日 | 京都芸術センター ミーティングルーム2



演劇、祇園の Snackbar、遺跡発掘、福祉施設勤務などを経て障害者福祉施設「スウィング」を設立した木ノ戸氏が取り組む、既存の障害福祉の枠を外れた創造的実践について、木ノ戸氏自身が紹介。既存の仕事観や芸術観など、社会の「まとも」を揺らしながら、「障害」「健常」「大人」「子ども」といった枠組みを超えていく、常にスウィングし続ける意義を考察する。

構成文

- 倉谷誠

2-4. まともがゆれる

## NPO法人スウィングとは

**木ノ戸** スウィングは2006年に設立したNPO法人で、障害者総合支援法に基づく「生活介護事業」の施設として運営しています。場所は北区の上賀茂にあり、風光明媚なところです。立派な門があり、躊躇しながら奥へ進むと木造の校舎が出てきます。そこがスウィングで、もとは学習塾でしたが、現在は天下一品が本部事務所を構えており、その一部を我々がお借りしているというかたちです。利用者29名、職員12名、計41名を「活動会員」と呼び、障害者も健常者も様々な市民活動の主体者となるスタンスを大事にしています。福祉施設なので、Qさんは利用者、私は支援者と位置づけられますが、活動会員として同じ立場になることで、この関係性を解体するべく日々活動しています。そもそも、人間は二分化できません。「支援」という言葉が福祉業界では頻繁に使われますが、スウィングでは使わない。支援には、支援することによって何かを剥奪してしまう暴力性があり、職員には「職員でなくなれ」と伝えています。そのためスウィングでは利用者の車椅子を押す利用者、利用者に料理を振る舞う利用者という風景が日常にある。誰が職員で誰が利用者かわからないという状況が自然にあるのです。

またNPOというあり方にこだわりを持っており、「非営利」の「市民団体」として、営利組織には生み出せない価値を創出したいと考えています。市民団体を構成するのは「市民」。市民には「障害」「健常」「男」「女」もなく、フラットです。「市民」は「市民」、「シャーマン」は「幸田シャーマン」なんです(笑)。

スウィングの目指していること、それは「仕事とはこうあるべき」「芸術とはこうあるべき」といった、世の中の規範に対して疑問符を投げかけること。そうすることで、セーフゾーンの狭い生きづらい世の中をちょっとでも生きやすいものに変えていきたいと考えています。

## スウィングの仕事

**木ノ戸** 仕事は大きく分けて、[1] shiki OLIOLI (しき おりおり)、[2] 芸術創作活動「オレたちちひょうげん族」、[3] OYSS! (オイッス!/O:おもしろいこと、Y:役に立つこと、S:したり、S:しなかったりの略)の3つ。[1]と[2]は収益性があり、[3]にはありません。[3]は対価の有無を問わず、仕事を「人や社会に働かせること」と定義し、生まれた実践です。

支援には、支援することによって何かを剥奪してしまう暴力性があり、職員には「職員でなくなれ」と伝えています。

———  
(木ノ戸)

shiki OLIOLIは、紙器折々。具体的には、八ツ橋の箱を折っています  
が、地味でパッと見はつまらないものです。でもスウィングができて13年間、  
ずっとこの仕事をやり続けています。一見するとつまらなく見える仕事の魅  
力をどう伝えるか。今年2月には、この会場(京都芸術センター)でワークショッ  
プを開催しました。その時、華道とか茶道のように箱折りを「道」ととらえて、  
それ一筋の達人が言いそうなフレーズを考えました。例えば「入るのは  
八ツ橋 入れるのは魂」とか「もはや箱ではない」とか、いかにも言いそうな  
ことを書にして展示しました。

あとは、ドキュメンタリー映画の予告編を撮影しました。予告編  
のみで、本編はありません(笑)。『ロッキー』や『パッチギ』など、いろんな映画  
の場面をパクらせてもらいました(笑)。とにかく、地味で地道な仕事の魅力  
をどう見せるか、伝えるか、悩んだ末に動画が生まれました。

## 2 | 芸術創作活動「オレたちひょうげん族」

この活動は絵画制作を中心とした、わかりやすいアート活動です。皆さん  
気づいていると思いますが、この活動名もパクっています(笑)。本当にいろ  
んな作品が生まれていて、例えば小さい三角の集合を1年半かけて描いて  
いる絵もあれば、コラージュで私と志村けんが浜辺を歩いている作品もあ  
ります。権利問題と表現の自由が拮抗していますね(笑)。実は、3年前に



木ノ戸氏  
プレゼンテーションを行う木ノ戸氏



木ノ戸氏の話と並行して  
制作を行うXL氏

私が表参道でベビーカーを押しているコラージュ作品があったのですが、つ  
い先日東京に行った時、まったく同じ場所を見つけました(笑)。XLさんは  
独特のデフォルメした画風で人気があり、現在文句なしの稼ぎ頭です。

## 3 | OYSS! (オイッス!)

「オイッス!」って皆さんご存知ですかね。「8時だヨ! 全員集合」で、いかり  
や長介さんのセルフで……、「オレたちひょうげん族」の裏番組で……という  
ようにつながりがあります(笑)。

この活動の代表が「ゴミコロリ」で、11年前からスタートしました。  
スウィングがある上賀茂を、ブルーの戦隊モノのスーツを着て清掃するとい  
う活動で、毎月1回、20~30人が集まってゴミ拾いをしています。上賀茂  
は畑や公園があり、意外とゴミが落ちているんですね。軍手と火ばさみを持  
ってゴミ拾いをしていると、とにかく良いことをしていると思われて、ありが  
とうと言われます。何かその単純作業に工夫をしたいと思い、「まち美化戦  
隊ゴミコロレンジャー」というヒーローをつくり、勝手にデビューさせました。  
7~8人いて全員ゴミブルー。ゴミブルーは名刺を持ち歩いて、目が合っ  
た人に逃さず渡しています(笑)。毎月必ずやるので、地域でも当たり前の景  
色になってきました。当初は警察を呼ばれてパトカー3台、警官7名に囲ま  
れて質問を受けたこともあります。一見すると切迫した状況ですが、圧倒的  
に良いことをしているので、警官も「ありがとうございます」と言いながら帰っ  
ていきました(笑)。おそらく警察内部でも共有していただけたのか、今では平



気で交番に行って落としものを届けることができます。

最近では奈良でゴミコロリをするため、近鉄電車に乗車しましたが、車両内にゴミブルーのほうが多く、普通に乘っている人が居づらそうにしています。まさに、マジョリティとマイノリティが入れ替わった瞬間です。

またゴミコロリには、スピンオフ企画として「プチコロリ」があります。5〜6人で全国各地に出向くもので、大阪の新世界に行ったり、沖縄の国際通りに行ったり。これまでに70回ぐらい実施しています。ゴミブルーが景色に馴染むかどうか、そのましかが持つ許容度ではないかととらえています。ほかには国内外に23支部があり、ベトナムでも活動していただいています。熊本支部ではお年寄りが集まってゴミを拾ってくれていますが、よりにもよってゴミブラックに挑戦しているんです。ブラックはとにかく暑い(笑)。

京都市内交通案内「アナタの行き先、教えます。」も、8年くらい続いています。ややこしい京都市バスの路線・系統を丸暗記しているQさんとXLさんの知識をいかす道はないか、と考えた末のヘンタイ記憶パフォーマンス(笑)。二条城などの観光地で、京都市バスの関係者っぽく装い、困っている方に声をかけています。ほとんどが外国人で、案内用紙に書いて渡してあげるのが私の役割。今ではパフォーマンスというよりも本気で案内する活動になっていて、間違った案内をすると落ち込んでいます。この活動は、今年6月15日の朝日新聞夕刊のトップに掲載いただきました。前日のトップは、アメリカとイラクの緊張関係の記事であり、そのギャップがおもしろかったです(笑)。

2006年より「コードモとアソブ」という実践も続けており、岩倉にあるフリースクール「わく星学校」の子どもたちと2か月に1回、スポーツやレクリエーションをしているんです。近くの児童館にも6年ほど行っており、何かしら一緒に過ごしています。8月の地藏盆の時期などは、色々なところからワークショップの依頼が来ます。ゴミブルーが主人公の寸劇をするのですが、子どもを笑わすための内容にすると、保護者からすごい視線を感じることに(笑)。説明しすぎて不要なバイアスをかけない、ということを大事に、とにかく一緒に楽しめる場をつくらうと考えています。

#### 自分のままに居る、自分のままと表現できる環境づくり

**木ノ戸** Qさんの作品で、良いと思われる作品は100のうちひとつぐらいで滅多にありません。とにかく頭に出てきた言葉を書き出し、人前で披露

する。でも、それが自然になっていて、披露していいんだという安心感があるのだと思います。スウィングは、自分が自分のままで居て良い、自分のままの表現をして良い、そう思える環境づくりをしてきました。

そういう環境づくりのひとつとして、毎朝、まじめに朝礼をしています。ただ、その中身は本当にどうでもいいことが数多く発言され、毎日どうでもいいなと思いつつ聞いている(笑)。朝礼というのは、一般的には意味のあることを発言する場。でも、スウィングの朝礼では急にモノマネをしたり、クイズをしたり、どうでもいいことを言える人がすごいという逆転現象が起こっています。こういう環境をつくることで場の自由度が上がり、みんなが思っていることを言やすくなるんです。

#### 表現の多様な発信

**木ノ戸** スウィングの表現活動は様々なかたちで発信していて、主催の展覧会は年に3回のペースで開催しています。昨年は「親の年金をつかってキャバクラ展」を2年かけて、京都、高知、東京、鳥取、神戸と巡回しました。Qさんは1度、XLさんは3度、これまでに個展を経験しています。XLさんは、12月に大阪で個展を予定しています。

展覧会を開催する時は、単に“作品を展示する/鑑賞する”だけで終わらせない工夫をしています。例えば、制作の現場をギャラリーに持ち込むとか、お客さんにインタビューしながら似顔絵を描くとか。



上  
壇上のQ氏

朝礼というのは、一般的には意味のあることを発言する場。でも、スウィングの朝礼では急にモノマネをしたり、クイズをしたり、どうでもいいことを言える人がすごいという逆転現象が起こっています。

(木ノ戸)

その場にある作品をあげる、もらってもらおうという展覧会も開催しました。作品がいろんな人の暮らしの中に自然に入ってほしい、そのためにどうしたら良いかと考え、お金の概念を取っ払ってしまっただろうかと考えたんです。Qさんはひいひい言いながら詩を書いていたのですが、みんなに大量に持って帰ってもらって喜んでいました(笑)。

そのほか、グッズとしてTシャツやハンカチ、ポーチなども制作、販売しています。歌手の青窈さんがXLさんの絵を気に入り、次回のコンサートグッズに使ってもらえることになりました。

発信のツールは、主にブログやFacebookを活用していますね。また、フリーペーパーも年2回、6月と12月に発行。部数は9,000部で、北海道から沖縄まで配布しています。これは、300人を超える賛助会員の支援によって発行できています。最近『まともがゆれる—常識をやめる「スウィング」の実験』という本も出版させていただきました。

#### さらに社会の“まとも”を揺らすために

**木ノ戸** 現在進行形のプロジェクトは、スウィングに図書館をつくること。なぜそれを思いついたかという、スウィングには12名の職員がいて、それぞれデスクがあるのですが、普段は現場にいるのであまり使っていません。かなりのデッドスペースなので、昼間ここを使えると思いました。また、ずっと事務を支えてくれている職員の目が悪くなり、なんとか働き続けてもらうことはできないか、図書館の受付ならできるのではないかと考えました。

「福祉」には幸せという意味があり、障害者や高齢者のための制度ではなく、万人が持つ権利だと思っています。福祉施設の公共性を広げたいという想いで、「スウィング公共図書館」をオープンしたい。

さらに、「Gうへうへ舞妓プロジェクト」にも取り組んでいます。81歳になるGさんは週3日スウィングへ来て、とにかくただ居るのですが、最近少し元気がありませんでした。認知症で、昔はよく舞妓の話をしていたので、実際に来てもらったらテンションが上がるのではと考えたんです。ただ、本物を呼ぶと高いので、HAPSに相談し、女優2名を紹介してもらいました。Gさんが喜ぶのはもちろんのこと、回を重ねるごとにブラッシュアップされており、演技手の演技力の向上にもつながっています(笑)。

ほかには、近くの町家を改装して布のものづくりのアトリエをオープンし、玄関横によくお寺の住職が名言を書いているような掲示板を設



七  
「Gうへうへ舞妓プロジェクト」を紹介する木ノ戸氏

置しました。そこに無意味な、どうでもいいことを書いて掲示しているんです。よく子どもが通るので、立ち止まって見てくれたらいいなと思っています。

#### 本当の意味で共生社会を実現するために

**木ノ戸** 最近、「共生社会」や「社会包摂」という言葉をよく聞きますが、危ないなと感じています。それは、どうしても「共生する/される」「包摂する/される」という二分化を生んでしまうと思うから。私はこちら側、という状況をつくってしまいます。そもそも、どちら側の問題なのか。こうした土壌を生み出してきた、マジョリティ側の問題であるはず。その責任から逃れようとしているようにも思えます。大切なのは、一方向ではなく、自分自身を包摂してほしいという双方向の姿勢。それを続けていくと、いずれそういう実感すらなくなる社会になります。スウィングで10年かけて取組んだ結果、上賀茂ではそれが景色になりました。

法人理念は「Enjoy! Open!! Swing!!!」。Swingとは、揺れる、変化すること。ブランコは、揺るぎない支柱があって、前後に揺れます。ひたすら前へ前へではなく、後ろに揺れることも大事にしたい。

コンセプトは「ギリギリアウトを狙う」。今の世の中、「普通」「常識」「まとも」など、固定観念、ストライクゾーンが狭い。そこに入れた人も、こぼれ落ちまいとして必死になり、生きづらくなってしまいます。なので、そのストライクゾーンのちょっと外側を狙って、それをセーフに変えることで、ちょっとずつ生きづらさを生きやすさに変えていきたいなと思っています。



## 質疑応答

質問者1 木ノ戸さんが考えるアーツマネジメントとは？ お金は関係なく働きかけることなのでしょうか。

木ノ戸 いろんな考え方があると思いますが、NPOは非営利というのがそもそもその出発点なので、開き直っている部分はあります。この世の中で、お金をまったく度外視するのは不可能ですが、ミッションが違う。自分としては、営利では生み出せない価値をつくることに意味があると考えています。

質問者2 二分化されない場づくりが大きな目的としてあると思いますが、一方で、制度上の障害者支援施設でもある。木ノ戸さんとしては、この活動を障害者支援施設の使命としてとらえているのか、それともそうではない拠点のあり方を目指しているのか、どちらでしょうか？

木ノ戸 できれば、障害福祉の制度からは逃れたいのですが、それが資金源になっているので難しいところです。でも、そういった矛盾の中でやっていくこともおもしろい。自分の存在が何なのか問い続ける、問われ続ける、制度を使っているからこそその悩みだと思います。例えば、Qさんは最近事務所の電話に出てくれるんです。利用者だから動かないということはありません。制度があるから気づいて、逆にそれを崩していけるのだと思います。

## QさんとXLさんについての紹介

木ノ戸 スウィングの前の施設から一緒なので、ふたりとは15年くらいの仲になります。

Qさんは、前の施設ではいつも怒っていました。仕事に行くふりをして、市バスに乗って遠くまで行ってたんです。大原や原谷まで行くのですが、全然楽しくない。でもその結果、バスの路線に詳しくなりました。当時からすると、今の姿は奇跡みたいなもの。はじめは、字すら見せてもらえませんでした。

XLさんは中学校でいじめに遭い、社会人になってもいじめられ、15年間ひきこもりの生活を送っていました。初めてのことが苦手、学校の

コンセプトは「ギリギリアウトを狙う」。  
(木ノ戸)

教育でも絵が下手と言われてきたため、傷つく行為をしたくないという想いが強かった。でも、どうしても絵を描かないといけない時があって、その場では脂汗をかきながら、しかし翌日からは自由に絵を描き始めた。ふたりとも相応の時間があって、今の景色があるのだと思います。

質問者1 Qさんは、1日にどれくらいの詩を書くのですか？

Qさん 日によって違いますが、今日は25作品。絵を描く時もあります。

質問者2 XLさんは、画材が多彩ですごいと思います。

木ノ戸 長い付き合いですが、6月に爆音の演奏の中で絵を描き続けている姿を見て、初めてかっこいいと思いました(笑)。



自分の存在が何なのか問い続ける、問われ続ける、  
制度を使っているからこそその悩みだと思います。  
(木ノ戸)

# 「第5回講座」 日常使いの現代美術



現代美術家であり、福祉施設の経営者という顔を持つ滝沢氏が、教育、障害者福祉をはじめ、生きづらさを抱える人たちや、その土地の歴史と向き合い展開してきた表現活動を紹介。誰もが日常生活にいかせる、現代美術の「使い方」とその効果について解説した。

## 外に出る美術

滝沢 多摩美術大学を卒業後、特別支援学校の教員として9年勤め、東京都教育委員会のもとで学校開設の仕事をしてきました。その後、美術家として様々な地域で作品を発表。昨年、岡山県倉敷市に発達障害の子どものための学び場「ホハル」を開所しました。現在の肩書きとしては、美術家と福祉事業者のふたつの顔を持っています。

今日は、「日常」と「美術」という縁遠く感じるものについてお話します。日常生活の中では、「美術」は遠く感じられることでしょう。その上「現代美術」などと言えば、もはや興味も失せてしまう。しかし、案外「現代美術」は生活のそばにある。今日の講座では、そんな美術の側面について知っていただけたら嬉しいです。

私は現在、群馬県のアーツ前橋で「表現の生態系」という展覧会に参加しています。この展覧会は市民運動、精神世界、宗教など、人が太古から現代まで生み出してきたコミュニティと美術の関わりを再考しようというもの。そこで私は「アリスの広場」という、不登校やひきこもりの若者のための居場所との活動を紹介します。私が3年の間に出会った人、会えなくなった人について、そのエピソードを電車の広告欄に掲示するという作品です。作品が美術館ではなく電車にあると聞けば、「ほら、現代美術はやっぱり謎」と思うかもしれません。しかし考えていただきたい。私は通常、美術館の外でひきこもりや不登校の人と活動しています。その人たちは、自主的には美術館にやって来ません。でも電車なら、もしかしたら人づてに伝わるかもしれない。不登校の悩みを抱える学生が見るかもしれない。私は、当事者が蚊帳の外にあるような美術はやりたくないんです。それを考えた結果として、例のない表現になっているだけ。現代美術のわかりにくさは、実のところわかりやすいんです。

## 日常と美術の関わり

滝沢 ここで今日のテーマである「日常」と「美術」について考えてみたいと思います。人類史を振り返ると、日常と美術の付き合いは実に長い。美術史の教科書では、約4万年前の洞窟壁画から「美術」が始まります。この頃、人は死と隣り合わせの日常を生き抜くことで精一杯だったはず。その中でなぜ絵を描いたのでしょうか。不安を解消するため、あるいは、狩猟

現代美術のわかりにくさは、  
実のところわかりやすいんです。  
——— (滝沢)



の作戦を立てていたのかもしれませんが。いずれにしても人は原初から「美術」とともに暮らし、美術は人の不安に寄り添うかたちで発展していきます。古代文明の時代になると農耕が生まれ、食料の備蓄が可能になりました。これまで日常だった食料確保が容易になって、富は集中し権力となり、人は労働力としてコントロールされるようになります。その中で絵は簡略化され、意味を明確に伝えるための文字へと分化しました。美術が、コミュニケーションツールとしての文字を生んだのです。

その後、人は衣食住の安定を手に入れましたが、寿命という死の不安を克服することはできませんでした。そこで美術は神(宗教)を彩り、目に見えない存在を表す役割を担うようになります。14世紀になると、創造主が見つけたものとは別の世界が科学によって見出されていく。ダヴィンチに代表されるように、美術は徹底した自然観察によって世界を写し取り、以後18世紀まで世界の再現が成熟してゆきます。18世紀後半になると、フランス革命によって「人権」という考えが生まれました。「人間は生まれながらにして平等で、自由に生きる権利がある」という考えに基づいた個の時代が始まり、美術表現は人間存在の内奥へと向かいます。写真機の発明もあって、克明な記録は写真に委ねられ、絵画は個人のうちに生じる情感を表現していく。その代表的な動きとして、印象派が有名でしょう。

以降、人は生きるための様々なものを手に入れてきましたが、心の不安は解消されないままでした。そこで原初に立ち返り、人間存在を再検証しようという動きが始まります。民俗学・文化人類学の流れから生まれたのがピカソ後期の作品であり、精神医学・心理学の影響下に生まれた例としてシュルレアリスムのダリが有名でしょう。そして、デュシャンの《泉》という作品によって、考え方や感じ方こそが美術であるという「現代美術」の基礎が確立した。ここから物質に依拠しない美術が始まります。



二  
滝沢達史氏

| 2-5\_日常使いの現代美術

そして、ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」に示されるように、美術は社会との関係を深め、今に至ります。

かなり乱暴に歴史を振り返りましたが、美術は古来よりその時々「日常」=生命・富・神・科学・人権・社会という、人間の不安を埋める作業と寄り添ってきました。よって現代でも、美術には「社会」との関わりが色濃く反映されており、それを「現代美術」と呼んでいます。このように、時代ごとに日常と美術はセットだったことがわかりただけなのではないでしょうか。現代美術がわかりにくいのは、おそらくどの時代においても美術は常に新しい価値を生み出してきたからです。

### 現代の課題

滝沢 人権という考えを獲得してからも、合理的社会の試みは上手くいっていません。そこで人は、非合理とは何かを考え、非合理的な行動をとる三者に注目します。それが、「犯罪者」「子ども」「障害者」です。それら非合理的存在を合理的な存在にすることができれば、人間社会は合理的になると考えた。犯罪者は司法によって、子どもは教育によって、障害者は医療によって、矯正の対象として扱うことにしたのです。

しかし現在も合理的社会は揺らいだままであり、現代は非合理とされてきた対象の扱いが見直される時代に入っています。人権獲得以後の社会システムの再構築。それが現代の取組んでいる課題であり、現代の美術もまた社会システムへの関わりが増えているように思います。

### 社会に関わるアート

滝沢 先ほど述べたアーツ前橋で3年前、私はひきこもりの人の部屋を再現しました。部屋を本人と一緒に作り、自死の考えに囚われていた場所に向かい一緒に撮影を行ったんです。その作品を美術館に展示した時、本人から「消したい過去が忘れなくてもいい思い出に上書きされた。生きていて良かった」と言われました。私は、ひきこもりの若者たちを社会に出したいとは思っていません。ただ、生きることを自ら否定せざるを得ない状況にある人に対して、美術という変わった手法で居心地の良さを見つけたい。不定期で美術館の休館日に彼らを招待して鑑賞会をしています。美術館の閉鎖的で、少し陰気な空気が、実は彼らの居心地の良さにもつながる

そこで人は、非合理とは何かを考え、非合理的な行動をとる三者に注目します。  
それが、「犯罪者」「子ども」「障害者」です。  
(滝沢)

ことを知りました。私自身も彼らから新しい視点を与えられています。

### 当事者から生み出されるもの

**滝沢** 私が教員だった頃は、月曜日が憂鬱で、子どもにも大人にも憂鬱な学校とはなんだろうと考えました。そこで、小学生と教員と芸術家による実験的な学校「カマクラ図工室」の活動を行っています。当初は美術活動を軸に据えていましたが、現在は「自立生活」がメインテーマ。学校の夏季休業中に合宿を行い、子どもたちがやりたいことを大人の協力で実践していく。野宿をしたり、興味のある研究をしたり、去年は民家を借りて大人と子どもで1週間の家出をしたりしました。東京の企業がビル1棟を貸してくれて、都会で無賃生活をしたこともあります。ここでは「矯正としての教育」ではなく、「当事者が望む教育」を実践しているんです。そのことが次世代の教育を考えるヒントになればと思っています。

### 被災と美術

**滝沢** このように私は、福祉や教育と関わる美術を行っています。果たして当事者にとってどれほど役立っているのかは疑問です。この講演のタイトルは「共生社会」ですが、「福祉とアート」や「共生社会」という言葉はどこか嘘っぱい。そんなことから、自分で児童福祉施設をつくろうと思い、昨年、倉敷市真備町で発達障害のある子どもが通う学童保育を始めました。カマクラ図工室での実験を実践の場に落とし込み、子どもがやりたいことを実現できる教育の場として始めたのですが、西日本豪雨で近くの川が氾濫し、開所からわずか3か月で沈んでしまいました。建物は全壊しましたが、自分の家をなくした子どもたちが多くいる中、1日も早く避難所として再開する必要性を感じ、クラウドファンディングで泥だらけになったおもちゃを購入してもらうことで約500万円の資金を1週間で集め、被災の1か月後には施設を再開することができました。このような非常時においても、美術的な発想は大変役立ちました。

### 日常使いの現代美術

**滝沢** これまでの歴史を踏まえ、教育や福祉、災害を経験した私が思

「ここでは「矯正としての教育」ではなく、  
当事者が望む教育」を実践しているんです。  
（滝沢）



▲  
ひきこもりの若者との旅/表現の森  
(アーツ前橋)について  
プレゼンテーションを行う滝沢氏

うに、「共生社会」には3つの要素が必要です。現代では、「人・社会・自然」という3つの分断が生きにくさにつながっている。なので、その3つが寄り添える環境を生み出した時、私たちは今より生きやすい社会をつくれると思います。それを考察するための手法として、現代美術は日常に変化を与える効果的な道具だと考えています。

### 質疑

**質問者1** 美術作家は自分の思いついたことを作品にするイメージがあるのですが、依頼を受けて仕事をすることもあるのでしょうか？

**滝沢** 私は特定の表現を持たず、かなり抽象的な依頼から仕事を始めることが多いです。例えば「この村をおもしろくしてほしい」「取り壊される施設の記憶を残してほしい」など、どちらかと言えば私は依頼から仕事を始めています。

**質問者2** 今、障害者福祉施設の支援員として働いており、子どもや障害者の表現活動に関わっています。「日常」とそれに対をなす「非日常(美術)」の関係について、詳しく聞かせてください。

**滝沢** 私自身、保育園で昼寝をせずに場を荒らす子どもで、やむなく周りから隔離されていました。そこで紙と鉛筆を与えられ、絵を描くことに熱中した結果、学芸会の背景画を任されることになったんです。それは問題児



からヒーローとなる瞬間でした。しかし小学校に入ると、病院に行くことを勧められました。受診はしませんでした。病名がついていたかもしれません。このように、私は変わらず、状況が私という存在を変えることがあります。環境デザイン、発想の転換において多くのヒントを美術は与えると思います。

質問者3 ひきこもりの人と出会い、一緒に活動する上で気をつけることはありますか？ 作品をつくることを前提に対話するのでしょうか。

滝沢 作品をつくる時には、他人の土地なり心の領域に踏み込むことが生じます。その行為が許されるためには、相手がマイノリティであるかに関わらず、受け入れられるための信頼が必要となります。どうすれば対話できるのかを、都度考え続けることが大切です。そして、作品というゴールを設定することは、私にとって重要です。先ほど紹介した、自死をしようとした場所に出向くという行為はリスクを伴うものですが、誤解を恐れずに言えば、暴力性を含む美術だからこそ成立した成功例だと思っています。医療ではおそらくそのようなことは行われません。私は美術作品として、人の心に訴えかけるようなリアリティを探しています。作品というゴールがあるからこそ、個人の本质に迫るような深い関係を築くことができたのではないかと。このような、医療とは異なる癒しの力に美術の可能性を感じています。

質問者4 様々な人と関わる中で、その時点では合意が取れていても、後になって後悔をしたり、周りから攻撃されることもあるのではないのでしょうか。芸作家側がそれをどれだけ引き受ける必要があるのか、考えを聞きたいです。



㊦  
会場の様子

滝沢 人や場との関わりが増えると、それだけ責任も増えます。本日、自死を考えていた彼女の作品を紹介したのは、先日彼女から嬉しい電話をいただいたから。2年ぶりの電話で、彼女は結婚の報告をしてくれました。時間の経過によって作品は意味を増します。その後の彼女の人生次第では、私はこの作品を成功例として記録に残さないでしょう。作品の合意は当事者との間において、常に更新され続けるものだと考えています。

質問者5 コミュニティをつくる上で大変だったことは？

滝沢 大変なことだらけです(笑)。私の周りでは、過疎・高齢・障害・ひきこもり・不登校・性的少数者など多様な人が関わるので、その接点を見出すことが難しい。お金があれば楽だろうと思う局面はありますが、ないからこそ本音が出ます。総じて、大変な方がおもしろく、失敗した時にこそ学ぶことが多い。きれいごとでまとめたいのですが、実際は大変です(笑)。

## 講座

- 吉澤弥生(共立女子大学文芸学部教授、NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]理事、NPO法人アートNPOリンク理事)
- 三輪晃義(弁護士)

## トーク

- 渡邊朋也(山口情報芸術センター[YCAM]アーキビスト、ドキュメント・コーディネーター)
- 山本麻友美(京都芸術センター チーフ・プログラム・ディレクター)
- 伊藤まゆみ(京都精華大学 展示コミュニケーションセンター特任講師)

## 進行

- ほんまなほ(大阪大学COデザインセンター准教授)

2020年1月11日 | 京都精華大学 黎明館 L-201教室



第1部では吉澤弥生氏と三輪晃義氏にそれぞれ「芸術労働の現状」、「労働法について知る」と題した基調講演をしていただいた。第2部のクロストークでは、山口情報芸術センターの渡邊朋也氏、京都芸術センターの山本麻友美氏、京都精華大学の伊藤まゆみ氏に「労働組合とキャリアデザインの話」をテーマにそれぞれの具体的な取組みについてお話しいただいた。それらを踏まえた第3部では「労働者としての私たちと芸術」というテーマを冠して、ほんまなほ氏を進行役に来場者を交えたフォーラムを行った。

## 構成文

- 内山幸子

## 編集協力

- 吉田守伸

# 「第6回講座」 フォーラム 「芸術と労働」

## まえがき

本フォーラムは2018年度に続き2回目の開催である。継続開催に至ったのは、芸術と労働をめぐる議論の場が関西にまだまだ少ないことと、フォーラムを終えてますます、この議論を育てていく必要があると感じたからだ。

第1回では芸術と労働について広範にわたる議論が行われ、来場者からはそもそも芸術実践と労働を同列に語ることに違和感があるという根本的な意見も聞かれた。また、芸術と労働を取り巻く問題は、日本社会における芸術文化の価値づけの低さと文化政策予算の少なさ、非正規雇用の拡大といった社会全体の動きと無関係ではない。しかしながら、本フォーラムではそのような状況を注視しつつも、「芸術従事者の労働者性」にフォーカスし、まずは労働者が雇用主に対して交渉力を身につけるという最も身近な実践に議論を絞ることにした。

## 第1部 基調講演

吉澤氏はこれまで、公的な文化事業やアートプロジェクトに関わる人々にインタビュー調査を行い、見えづかった芸術従事者の労働の問題を先駆的に可視化し、社会問題として訴えてきた。本講演では、来場者と芸術労働の状況を共有するために、アーティスト、アートマネージャー、キュレーター、ディレクター、ボランティアスタッフへの調査結果から労働条件に関する内容を中心に紹介いただいた。さらに、NPO法人Explatによる



c

三輪氏によるプレゼンテーション



舞台芸術従事者を対象とする調査結果からも、雇用契約や雇用期間の有無、就労時間や年収についてのデータが参照された<sup>[\*1]</sup>。ふたつの調査から浮かび上がってくるのは、芸術労働における長時間労働、低賃金労働、雇用保障・社会保障の不在、賃金・待遇のジェンダー格差といった現状である。一方で、雇用主と交渉して賃上げされた例や、契約書に基づいて業務内容が改善された個人の例も紹介された。

弁護士三輪氏は労働法と労働者の権利について解説した。労働法の基本理念として、<sup>[1]</sup>労働者の保護、<sup>[2]</sup>生存権の保障(憲法25条)、<sup>[3]</sup>団結権の保障(憲法28条)が挙げられる<sup>[\*2]</sup>。労働法がなければ、雇用主は、経営の事情で賃金を減額し、仕事が終わるまで無限に残業を命令したり、気に入らない労働者をクビにしたり、工作中に怪我をした労働者を解雇したり、労働組合の交渉要求を無視したりすることができる。このような事態を防ぐために、労働条件の最低基準(労働基準法)や、労働に関する契約の基本ルール(労働契約法)や、労働組合の保護(労働組合法)や、性別により差別されない待遇(男女雇用機会均等法)を定め、人間らしい働き方を保障するのが労働法である。

両氏の講演から生まれる次の問いは、“私たち”は労働者として認められる可能性があるか?である。労働者性を判断する主なポイントは大きくふたつ。<sup>[1]</sup>使用関係があるかどうか、<sup>[2]</sup>賃金が支払われているかどうかだ。労働者性は契約の形式ではなく働き方の実態で判断されるため、業務委託契約などで働いている人も労働者として労働法による保護を受けられる可能性はあるという。

ここで、自営と雇用の間の「中間領域」の就業形態についても触れておきたい。自営、フリーランスであっても特定のクライアントとの関係に依存していたり、逆に雇用されていても勤務場所や時間の自由度が高く設定されていたりといった、自営と雇用の中間的な働き方が増えている。フリーランスや任期付きで働くキュレーター、アートマネージャーやアーティスト、デザイナーなどは、労働者性が非常に曖昧なこの中間領域に含まれているのが実態ではないかと吉澤氏は分析する。そこでは、実際の働き方と契約上の就労形態の不一致や社会保障の不在といった問題が散見される。このような中間領域の働き手が増えてきた背景には雇用主側のニーズがあることも確かであり、だからこそ働く側が労働者として自衛する必要性が高まっている。そして労働者が雇用主と対等に交渉するための手段として法で保障されているのが、労働組合の活動である。

<sup>\*1</sup>  
NPO法人Explat  
「舞台芸術に関わる  
マネジメント専門人材の  
労働環境実態調査2016」  
—  
[http://www.explat.org/hrd/  
event/2018/infographics.html](http://www.explat.org/hrd/event/2018/infographics.html)

<sup>\*2</sup>  
日本国憲法25条は  
「すべて国民は、健康で文化的な  
最低限度の生活を営む  
権利を有する」、同28条は  
「勤労者の団結する権利及び  
団体交渉その他の団体行動をする  
権利は、これを保障する」と定めている。



## 第2部 クロストーク「労働組合とキャリアデザインの話」

労働組合はふたり以上であれば同じ会社や雇用主に属してなくても結成できる。地域に根ざしたユニオンという形態もある。団結して雇用主と交渉したりストライキを行ったりする権利もある。第2部の前半は、今まさに労働組合を設立しようとしている山口情報芸術センター(以下、YCAM)の渡邊氏と、かつて労働組合が置かれていた京都芸術センター(以下、KAC)所属の山本氏に各施設の事情について報告していただいた。後半は伊藤氏に理想とする労働環境やキャリアデザインについて語っていただいた。

YCAMは、メディアテクノロジーを用いたオリジナルのアート作品や教育プログラムを制作・発表している。YCAMで働くスタッフには、指定管理者の山口市文化振興財団が定める専門員や常勤職員など6つの就業形態があり、渡邊氏は副専門員にあたる。労働組合をつくろうと考えたきっかけは、特に臨時職員とほかの職員との間の、賃金・待遇におけるギャップだったという。もうひとつには、YCAMの活動理念と雇用形態にもギャップがあるのではないかという問題意識があった。YCAMの活動においては、スタッフに蓄積される経験やネットワークが非常に重要視される。さらに、文部科学省の研究機関認定を受けたことで、今後は美術館や劇場機能に付随する業務だけでなく調査研究の比重が増えていくことも予想される。現在は行政的な雇用形態をベースに適用しているが、こうした実態に合わせた働きやすい労働環境を開発すべきであり、そのために「YCAMの活動理念を発展的に表現していくための組織のあ

七  
壇上左から、ほんまほ氏、  
渡邊朋也氏、山本麻友美氏、  
伊藤まゆみ氏



㊦  
基調講演を行った三輪氏からも  
質疑があがった

り方を、雇用側とスタッフが議論する場が必要だ」と考え、労働組合の結成を検討するようになったという。

「組織や運営のあり方を話し合う場」という視点から、山本氏もKACの労働組合の結成から現在に至る経緯を振り返った。KACでは開館6年目に、当時在籍していたアートコーディネーターたちによって、京都こむ公共一般労働組合の分会というかたちで労働組合が結成されている。アートコーディネーターは、KACの「若い世代の芸術家の制作活動の支援」という理念のもと、芸術を支える人材の育成を目的として3年任期で採用されてきた。KACの労働組合の初年度の要望書には、運営方針や推進目標の提示、評価指標のあり方、会議で議題を提案する権利など、運営のあり方についての項目も多く挙げられていた。その後も毎年、手当や有休などの制度改善、スタッフ補充による業務改善を要求していた。山本氏によると、それらはほとんど解決されてきたという。雇用主である公益財団法人京都市芸術文化協会とスタッフが交渉する素地ができてきたこと、労働組合の活動と業務との両立が難しい状況があり、2018年に組合解散に至った。もうひとつの背景に、3年契約の定めのないプログラムディレクターなどの職階ができたこと、もともとアートコーディネーターだった山本氏が管理職となって予算や人事を調整できるようになったことがある。三輪氏はこれに「KACの場合、労働組合は解散したが、労働者が交渉力を身に付けた例だ」とコメントした。

異なる組織を移動しながら独自に経験を積んでいくという働き方は、芸術従事者には珍しくない。伊藤氏も神戸アートビレッジセンター(以下、KAVC)、トーキョーアーツアンドスペース(以下、TOKAS)を経て現職に至

る。10年勤めたKAVCは、契約職員ではあったが契約の更新回数の上限はなかった。ただし職位が固定されていたため、自身の次のキャリアステージをつくらうとする意味でTOKASに移ったという。「長い時間をかけてつくった地域とのつながりは、施設ではなくスタッフに蓄積されている部分がある。人が離れることでそれが切れてしまうような状況を見ると、施設にとっては積み上げてきたネットワークやノウハウを失うデメリットもあるのでは」と伊藤氏は振り返る。TOKASは常勤契約職員で、試験を受けて正規職員になる選択肢もあったが、自身にとって新たなチャレンジと考えて大学教員を選んだ。現在は、京都精華大学付属のギャラリーで企画運営を担い不規則な勤務になりがちだが、一般的な大学教員を想定した就業規定では残業の概念がないので、働きすぎに注意しながら自分自身で労務管理を行っている状況が語られた。

### 第3部 来場者とゲストによるフォーラム「労働者としての私たちと芸術」

ここからは客席の来場者にもマイクが回され、登壇者との間で自由な意見交換が行われた。様々な働き方・芸術との関わり方をしている人々から相次いで発言が行われたが、特に話題が集中したのは雇用・スタッフの「流動性」という言葉と労働組合への評価だった。

「流動性」についての議論は、渡邊氏がYCAMの雇用制度を論じた際に、無期雇用は雇用の安定のためには良いが、従業員が多くはない文化施設においてはスタッフの固定化が体制の硬直化を招くリスクもあり、事業展開にダイナミズムを生むために流動性をどう担保するか、そ



㊦  
質疑に答える吉澤氏

事業展開にダイナミズムを生むために流動性をどう担保するか、  
それと雇用の安定をどう両立するかが課題。  
(渡邊)

れと雇用の安定をどう両立するかが課題だと発言したことが口火となった。一般企業の労働者があまり持ち出さないこの理屈が、芸術従事者たちの間でしばしば必要なものとして使われるのは、芸術労働に特有の現象だと三輪氏は指摘する。芸術の労働で「流動性」を重視するのは、「雇用の安定度」と「仕事のやりがいや理想の働き方の探求」を天秤にかけない/かけられない状況も一因であると想像される。その背景には、働き方と就労形態のギャップ、非正規雇用の常態化あるいはジェンダー格差に起因するキャリアステージの不在といったいくつかの要因が考えられる。こうした状況を前に個人が業界全体の将来を慮らざるを得ない節もあり、山本氏も「自分が抜けて若手にポストをつかっていくほうが、組織にとって有効なのではないか」と考えを明かした。また、渡邊氏は自身も無期転換の打診を断ったことを明かし、その理由として「組織内の労働の不均衡を是正しないまま、適用される部分だけ無期転換ルールを適用するといったことは根本的な解決になっていない」と指摘した。問題にすべきは、雇用主側が簡単に人を辞めさせることを正当化するために、「流動性の担保」を持ち出すやり方である。雇用の安定性や生活の維持は、常に労働の基盤になければならない。

また、流動的に働く場所を変えていくことが芸術労働の特質ならば、「同じ職能や質で仕事を続けていく時、どこでも同じ条件で働き続けられるという権利は、労働者として求めて然るべきでは？」というほんま氏の指摘はもっともである。さらに山本氏が「契約書にどんな条項が必要かといった共有すべき情報を共有できる場がない」と指摘すると、吉澤氏は日本では労働組合結成への知識的・心理的ハードルが高いため「契約書作成といった実践レベルのノウハウを共有したり、ネットワークから始めることは現実的に思える」と応えた。

後半は労働組合の役割や評価についての発言が続いた。来場者の中には、「東京オリンピック後に文化予算が減らされていくことが目に見えている中で、(組合を結成して)対立構造をつくることに意義があるだろうか?」という意見もあった。芸術が本質的に富の生産を目指すものではないと考えると、互いの条件を調停してさらなる経済成長を目指すといった従来型の労使交渉が想定しづらいということも、芸術従事者が雇用主に對して対立的なアクションを構想しにくい原因だろう。三輪氏は「誰と闘い、どこに狙いを定めたら自分たちの職場が良くなるのか」という戦略が必要」だとした。さらに、ドイツでは労働者や組合を孤立させないよう支援

東京オリンピック後に文化予算が減らされていくことが目に見えている中で、(組合を結成して)対立構造をつくることに意義があるだろうか? (来場者)

する空気があり、実際に市民が不買運動などを行っていることを例に挙げ、「対立するだけでなく、芸術労働者がどれだけ市民の協力を得ているかということアピールすることも交渉力につながる」と語った。

労働組合への抵抗感や、日本でストライキをする意義が失われてきているという実感は複数の来場者から語られた。三輪氏は「同じ目的の人たちが集まって実現したいことを交渉して改善する労働組合という仕組みは、民主主義の基本的な形態」と述べた上で、たとえ組合以外の方法であっても労働者同士で力を集めて交渉力をつけていくことの重要性は変わらないと強調した。ほかにも、実際に労働組合をつくったことがある来場者から「組合をつくることで新聞に取り上げられ、問題を世間に知ってもらった効果があった」という発言もあった。

第3部の最後に話されたのは「ツールとしての法をいかに使いこなすか」ということだった。法をいかして、どうクリエイティブな環境づくりをするか。また、雇用主、労働者、そのほかの様々なかたちの協働者とのポジティブな関係をどう再構築できるか。「実際のトラブルを弁護士に相談して、新たな攻め方の発想が出てくるように法律家をトレーニングしてもらいたい」と三輪氏は語った。第2部のKACとYCAMの例を思い起こせば、1周回ってもう一度同じ話題に戻ってきた感もある。しかし「労働者としての私たち」と法の関係、労働組合は私たちにどう有効な手段なのかどうか、どんな連帯がイメージできるか、そういったことを一つひとつみんなで納得していくための話し合いだったように思う。

全体の終わりに、ほんま氏は「労働や労使関係が多様である時、労働者としての私たちがどう出発していくのか」という問いを立てて締めくくった。フォーラム全体を通じて、労働者としての自覚をつくる重要な出発点が法律であることが改めて確認された。しかし、それだけでは芸術労働の実態をとらえきれないという現状の中、既存のものとは異なる労使関係を結ぼうとした時に法律はどう使えるのかについて、今後検討される必要がある。

同じ目的の人たちが集まって実現したいことを交渉して改善する労働組合という仕組みは、民主主義の基本的な形態。

(三輪)



講師

・小山田徹(美術家/京都市立芸術大学教授)

2020年2月13日 | 京都芸術センター ミーティングルーム2



小山田徹氏は1961年鹿児島生まれ。1984年、京都市立芸術大学日本画科在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成し、活動と平行して1990年から、様々な共有空間の開発を始め、「アーツケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画を行うほか、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加してきた。本講座では、多様な背景を持つ人々が出会い、語り合う「共有空間」のつくり方、意義について考察した。

構成文

・倉谷誠

## 「第7回講座」 共有空間の獲得

### 今日の講座の趣旨・背景

小山田 今日私の話の後、ディスカッションではなく「作戦会議」として、皆さんと意見を出し合って、アイデアを練ってみたいと思います。

私は鹿児島出身で、大学から京都へ来ました。入学当初は座・カルマというアンガラ劇団に所属していましたが、ブブ・ド・ラ・マドレーヌさんや古橋梯二さんと出会い、立ち上げたのがダムタイプシアターです。1998年までダムタイプとして活動する中で、「S/N」を上演したあたりから人が集まる場の重要性に興味を持つようになりました。

以降、場を開く、つくり出すということを仕事の核として活動しています。自分はそういった場のことを「共有空間」と呼んでいるんですが、これは、人がひとりいれば、その周囲に漂っているもので、人が交われれば、可能性のある空間が広がっていく。それが、何かをきっかけに共有化されるんですね。フィジカルな空間だけではなくSNSも含め、関係性が共有される。皆さんそれぞれの活動の中で、共有空間を何かしら感じることはあると思いますが、そこで「獲得感」をどれだけ得ることができるのか。私にとっても永遠の課題であり、そのことについて今日は話したいと思います。

「S/N」という作品がきっかけでエイズと向き合うようになり、価値観を変えて、差別のない社会をつくらう、真剣に世の中を変えようと思いました。でも、そんなに簡単に変わらないとわかり、その当時は敗北感があった。それでも活動を続けていく中で、ひとつの方法だけで何かを変えようと思うのはある種の暴力であって、動機としては悪くないが、それは奢りであると気づくことができた。

場を持続すること、考え続けることが、一番大事なこととして最後まで残ったんですね。そして討論し合える仲間を持ち、時代ごとの断面に対する答えを探す。これが、私が活動する上での、テーマへと変わっていきました。

### 共有空間を獲得するための実践1|ウィークエンドカフェ

小山田 それ以降、「アーツケープ」や「ラブ・ポジティブ」など色々と実践しましたが、「ウィークエンドカフェ」が大きな転機となりました。

「アーツケープ」も良かったのですが、続けるうちに無言の敷居が

共有空間は、人がひとりいれば、その周囲に漂っているもので、人が交われれば、可能性のある空間が広がっていく。  
——(小山田)



←  
京都市立芸術大学の移転予定地に  
開かれたウィークエンドカフェ

できてしまい、新しく来る人が入りにくくなってしまった。これはどの組織にも起こることで、熱量や経験の差を感じると関わりづらくなってしまいます。気づいたら、アートスケープはスペシャルな専門家の集まりになってしまいました。

それではダメだと思い、当時、京都大学地塩寮の敷地内に寮生が自主管理する洋館があったので、そこを活用できないかと考えました。全員で片付けて、向かいの酒屋でビールを買って、ホームパーティーの延長でスタートしたのがウィークエンドカフェです。とにかく安く飲むという目的で、非営利のカフェとしてカンパと差し入れを共有し、2週間に1回オールナイトでオープンすると、200人くらい集まるようになりました。ゲストからレクチャーをしてもらう時には、ワインの瓶をフォークで鳴らして案内したり。そこでは、ベーシックな問題意識を共有できている感覚がありました。テーブルに布をかけてカウンターとして運営するのですが、気がつくといろんな人がマスターになっている。よくパーティーに参加して、グラス片手に壁際でひとりている感じがあると思います。でもウィークエンドカフェでは、誰かがお酒をこぼして、みんなで掃除しているうちに会話が始まり、そこに存在する意味が立ち上がるんです。お客さんがだんだんマスターをやり始めると、誰にとっても「俺の店」へと変わる。すると準備から片付けまでがスムーズになるし、駐輪場の整理などが自律的にされるようになります。こういったことが、社会のいろんな場面に入れ込めないかと考えるようになりました。その洋館は歴史的建造物に指定されて使用できなくなり、ウィークエンドカフェは3年で終わってしまったのですが、振り返ってみると奇跡的な3年間だったなと思います。

## 共有空間を獲得するための実践2 | Bazaar Cafe (バザールカフェ)

小山田 ウィークエンドカフェが終わり、困っていた面々が「またやりたい」と言い始めました。特に看護師の方々の、エイズ患者さんの対応をされている方が愚痴をこぼしていたんです。そんな時に場所を探してきてくれた人がいて、それが「Bazaar Cafe」の始まり。そこはもともとキリスト教の宣教師の方の住まいだった場所で、最初の1年間はお金がなかったので、2週間に1回のホームパーティを開きながら「こういうカフェがいいよね」と話し合いを行いました。さりげなく設計図を置いておいたりしたのですが、元銀行員、大学の先生、医者、庭師、大工などいろんな人が集まるようになり、気がつくとい年で300万円くらいの予算がファンディングされていました(笑)。

それから1年かけて改装して、カフェをつくるという方針をみんなまで考えていたのですが、ウィークエンドカフェも2回目なので今度は世の中に開いたコミュニティカフェにしようと思いつきました。工事を始める時、最初に飯場をつくり、昼飯を食べながらやると、素人が30人くらい集まってくる。経験ある方はわかると思いますが、棟梁はその素人の面々に仕事をつくるのが大変(笑)。みんな楽しく仕事をしたい、でも良いものにしたいということで、一番簡単なペンキ塗りをさせていただきました。後はわざと面倒くさい方法で建てるとか、わざと仕上げのイメージだけ伝えて時間を使ってもらうとか(笑)。最近の工事は分業が多く、終わったら次の現場に行ってしまうので、直接ありがとうと言われる機会が少ない。ちょっとお疲れだった庭師の方がいて、教えてもらいながら作業したのですが、彼が真ん中にスコップを挿すだけでどよめきが起こり、それが彼のやる気につながる。金銭は発生しないのに、どんどん教えてくれるようになり、心のバリアフリーになる。

私は最初の3~4年だけ濃く関わっていましたが、その後もいろんな人の手によって継続していき、今年で22年目です。これはすごい。理事会組織で運営することにより、誰が雇う側で誰が雇われる側が良い意味で曖昧になっています。

そして、この場所がすごいのは、京都御所の近くののに奇跡的に焚き火ができること。昔からご近所で焚き火をされていたようで、逆に何がためなんですかという感じです(笑)。

また、点字サークルの人が点字のメニューをつくらせてくれたり、敷地内にある夏みかんの木の果実でマーマレードにつくって売ったり。みんなが

金銭は発生しないのに、  
どんどん教えてくれるようになり、  
心のバリアフリーになる。  
———(小山田)

それぞれにできることを担ってくれました。理念は「一緒にご飯を食べよう」。上下の関係をなくし、人を育てる場になり、一緒に成長することができたように思います。興味を持っていただいた方は、営業日がよく変わるので事前に調べてほしいのですが、ここで飲み食いすると誰かが助かるので、ぜひ訪問していただきたいです。

### 共有空間を獲得するための実践3 | ID10 / 屋台 / 小屋づくり

**小山田** それから徐々に場をつくるのが楽しくなり「ID10」という素人ばかり集まった施工チームができました。チーム名の由来は「いつでもどこでも10人くらい」(笑)。依頼を受けてみんなでつくっていくと、まち中に便利な場所が増えてくる。ギャラはないけれど、おかげで元クライアントが妻になりました(笑)。

阪神・淡路大震災の直後、そのメンバーと移動の屋台を引いてボランティアの活動をする中、屋台営業に目覚めたんです。なんとなく楽しいもので、コミュニティをつくる最初のツールにもなり得ます。緊急災害時における活用の可能性も高い。今は規制があり、屋台が生活の中にあることを世の中は諦めてしまったように思いますが、昔は屋台のおでん屋に気楽に入って、知らず知らずのうちに隣の人と話しているみたいな経験があったはずなんです。

屋台の次は、小屋に魅力を感じるようになり、秘密基地をつくる感覚で、いろんなところに小屋をつくる人生が始まりました。授業で大学の敷地内に小屋をつくるのですが、自分でペンキを塗ったり、屋根をかけたりすると愛着が湧いてきます。そうすると、自分たちで掃除をするようになる。大学のカフェテリアを自分で掃除する人はいませんが、自分でつくると「獲得感」が生まれてメンテナンスをしようとする。おかげで、学内にどんどんいろんな小屋が増えていきました(笑)。

### 共有空間を獲得するための実践4 | 焚き火

**小山田** 共有空間について考えていくうち、最後に辿り着いたのは焚き火で、これが最も効果的だと考えるようになりました。焚き火があると、なんとなくみんなあたりに行って、「寒いね」「温かいね」なんて言いながら見知らずの人と話し出し、なんとなく気持ち良くなって帰っていきます。



女川迎え火

実は、焚き火は、人類と最も付き合いの深い行為で、100万年の歴史があります。40～50年前は自宅でも毎晩火にあたって、身近にあった人もいると思う。火にあたるとなんとなく蘇る感情、DNAに刻まれているような、知識的な共通項がなくなるとつながれる感覚であると思います。でも、今はまちなかで焚き火はできません。消防署に届ければ可能ですが、近所が許さない。通報されて消防署が注意に来ます。昔は道の角でおっちゃんややっていましたが、今は煙がクレームになる時代。東日本大震災、阪神大震災は冬場に起こったため、火にあたって寒さをしのいでいました。東日本には濡れたものでも火を起こせる人たちがいて、火にあたって救助を待っていたんです。焚き火は、命をつなぐものとも言えます。私よりも下の世代は、こういった経験値が少なく、丸太にライターあてる人もあるので、ほどよく経験しておいたほうがいいでしょうね。大学では学内を説得して限定的に焚き火をさせてもらっていますが、まちなかでもやりたいと思うようになりました。焚き火をしたいと申請しても通りませんが、アートの企画で出すと通ることが多いんです。場づくりのアート、そこだけは美術の名前を使ってもいいかなと思っています(笑)。

宮城県女川町は津波で80%が流されてしまいましたが、うっすらと昔の敷地跡が残っている場所があります。その跡で火を囲む「女川常夜灯」というイベントを、住民やアーティストとともに企画しました。80組の家族が参加してくれて、なんとなく昔のまちの姿が見えた奇跡の瞬間でした。ただ、徐々に復興していくと火気厳禁になります。送り火・迎え火のような宗教儀式として説明していましたが、新築は火事を心配されるので、今後どう継続するかが課題になっています。



焚き火でウィークエンドカフェということで、京都市立芸術大学が移転する予定の崇仁地域の空き地でもやってみました。2週間に1回、3か月やって、非常に楽しかったです。仕事、アートの企画ということを忘れてしまいました(笑)。慣れてくると、お客さんがテントの設営から撤収までスムーズに運営してくれて、ついには自分が不在の日もオープンできました。

このあたりから、「焚き火の人」として全国から声がかかるようになりました。鳥取の海岸で焚き火をしていると、ランニングしていた中学生が通り過ぎ、家に帰って親の許可もらって戻ってきた。先日は奈良で行ったのですが、火祭りがあるためか許容度が高いですね(笑)。でも、そうやってこじ開けていきたい。

子どもは子どもなりに勝手に遊ぶし、成人は自分で何でもできる。老人は、火にあたりながらその光景を見ている。気がつけば、年齢層の違う人が話をする状況が自律的に起こる。今は、そういう場を自分たちでつくり出すのが難しくなっています。

最近のワークショップはよくできているけど、破綻がありません。何かを持って帰ったような気にはさせますが、きれいすぎます。子どもたちは遊びの中で学んできた、そういう環境はもうつくれないのでしょうか。今はクレームを跳ね返すだけの力が出せず、自主規制をしてしまいます。もっとプリミティブな、人間の力を信じた何かができなかと考えています。

焚き火はその一例であって、お味噌をつくとかでもいいんです。いろんな人が活躍する瞬間がある。おばあちゃんが先生と呼ばれる瞬間がある。本来はそれが場に内包されていたはずなのに、いつの間にか外側に置かれている。それを再獲得したいと思っています。

#### 共有空間を獲得するための実践5 | パーラー公民館

**小山田** 最近では、沖縄で「パーラー公民館」に関わらせてもらいました。新しく埋め立てでできた、公民館のない地域で、低所得者が多いところに公民館の機能を持たせるという企画です。建物を建てる予算はないので、モバイルの公民館として月に3回、若狭公民館の協力を得て実施しました。学校の近くに曙公園という荒れた公園があり、夜になっても帰らず、ずっと過ごしている子どもがいるんです。公民館の鍵を与えるとそこがたまり場になってしまい、家に帰ることもできない。シングルマザー家庭など、い

子どもは子どもなりに勝手に遊ぶし、成人は自分で何でもできる。  
老人は、火にあたりながらその光景を見ている。  
気がつけば、年齢層の違う人が話をする状況が自律的に起こる。  
——(小山田)



移動公民館

ろんなタイプの子どものかいました。パーラー公民館のモットーは“何もしない”こと。でも、それで子どもが群がってきます。最大の目的は子どもたちの実態把握。顔の見える関係ができると、ケアをすることができます。助成金で3年間続きましたが、一区切りなので、これから地域住民が自分たちでやるにはどうするかを考えているところです。

#### 共有空間を獲得するための実践6 | 子どもの居場所づくり

**小山田** 子どもの居場所をどうしたらつくれるのかが、最近の課題です。大人同士でアイデアを出し合って、仕込んでおかなければなりません。妻が公文書の資格を持っていて、教室には地域の子どもの60人くらい集まるんです。とてもおもしろく、やっと地域に入った感覚があります。私は1階の待合にいます。変なおじさんとして、迎えに来る保護者や子どもと話しており、色々と企画を考えています。

私には高校1年生、小学校5年生、小学校1年生の3人の子どもがいます。彼らを育てていく上で、ダムタイプをやめた瞬間の記憶、「アートは可能か」という命題がよぎることがあります。子どもと共有しようと思うと、言葉が難しく伝わりません。子どもに対しては大胆な翻訳と工夫が必要になり、そこで得た感覚を共有したいと悩み始めていました。

例えば、子どもを保育園に送るときに建仁寺を通り抜けていくのですが、その道で「巡礼ごっこ」を始めたことがあります。石像にお参りしたり、捧げものをするようになり、そのうちに捧げる場所を探すゲームを始めました。そしたらどんどん見つけてくるようになって、30か所ぐらい聖地がで

きて、保育園までなかなか辿り着かなくなっていました(笑)。

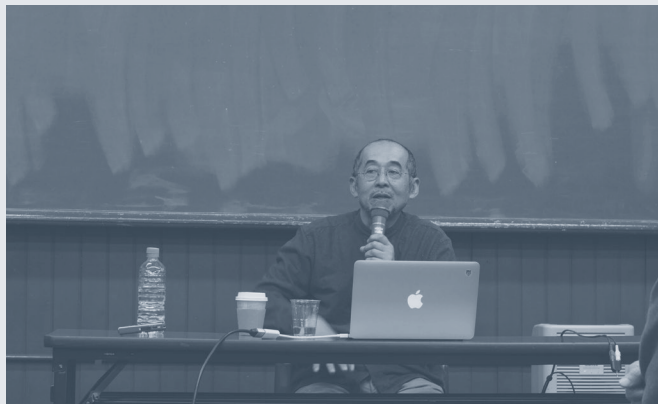
お父ちゃん弁当というのもし始めました。保育園に週3回、お弁当の日があり、料理は好きなので私が担当しています。朝、真ん中の子がちょっといをかけてくるようになり、じゃあ絵に描いてよとお願いしたことから始まったのですが、娘が絵を描いて、私がつくり、下の息子が食べるという流れです。これが、やり始めたらめっちゃ楽しい。冷蔵庫の残りもので対応するので、毎回、大喜利をしている感覚です(笑)。弁当についてたくさん会話するようになり、子どもと関係性や企みを共有することができました。こういったことを自分の生活に、いい感じで持つことができると良いのではないかと思います。毎回SNSで投稿していたら、東京都美術館の方の目に留まり、展覧会に呼んでいただくことになって、娘が作家デビューできました(笑)。

### 共有空間がアートになる

小山田 私たちはアートだと思っていないんですが、外から価値観を共有してくれることで、それがアートになります。カフェや焚き火は本来アートと呼ばなくてもいいものですが、美術は“ずらし”がしやすい。何かを変化させるためのツールのひとつであり、それが目的ではありません。何かを主目的にしていくと、続けていくうちにしんどくなります。サブで起こったことに目を付けると、意外におもしろかったりする。それを上手くつくり出していきたいです。

### 講義後の作戦会議「子どもの居場所に必要なアイデア」

講演後の作戦会議では、子どもの居場所に必要なアイデアとして、会場か



㊦  
小山田徹氏

ら「紙芝居」「高齢者施設で遊ぶ」「駄菓子屋」「あまり手入れがされていない公園」「児童館」「野ションスポット」などの提案がされた。

小山田氏は、「本当はこういったアイデアをどんどん挙げて、テーブルに転がしてチャレンジする、そういう空間が必要。今後どこかでお会いできれば、一緒にやりましょう」と締めくくった。

**Director's Note** モデル事業は京都市南区東九条地域と、京都市下京区崇仁地区にて行われた。前者はアーツシード京都へ企画と運営を委託し、「東九条子どもご近所映画祭」が実施された。後者はHAPSによる企画のもと地域との新たな関係の形成作業から始めた。崇仁地区にて取組むアーティストは2組で、①山本麻紀子氏、②谷本研・中村裕太氏のユニットである。山本氏は昨年度の東九条地域でのモデル事業のアーティストであり、今年度は隣接する崇仁地区での取組みとなった。地域との関係づくり、調整、コーディネーターによるリサーチやコンセプトづくりに時間をかけ、アーティストによる現場での動きは2020年1月から本格化した。同年2月より新型コロナウイルス感染症の感染状況が悪化し、モデル事業は感染対策と並行して進まざるを得なくなったため、山本氏のフィールドワークに基づく、来年度に向けてのプランづくりが事業の中心となった。ただ、この作業は過去に経験したことのない「感染症と社会」というコンテキストの中にアートをいかに埋め込むかという課題に直面するため、非常に重いプロセスを経ていくことになる。谷本・中村ユニットについては具体的な取組みを来年度に持ち越すこととなった。



# 京都・崇仁地区にて、 プロジェクトを立ち上げる前に

文 ————— 石井絢子 (HAPS)

今年度のモデル事業は、京都駅東部に位置する崇仁地区およびその周辺エリアを中心に、来年度まで約2か年をかけて行うことになった。京都市の受託事業として行われた過去2か年のモデル事業は、いずれも東九条地域の高齢者福祉施設において、各年度1名のアーティストとともに単年度事業として行われた。昨年度、ともにプロジェクトを行った「東九条のぞみの園」が、隣接する崇仁地区において「崇仁デイサービスうおい」「下京・東部地域包括支援センター」の運営も行っており、施設長が「ぜひ崇仁でも」とお声がけくださり、様々な地域の現状をうかがったことが、同地区を中心にモデル事業を行う大きなきっかけとなった。両施設ともに、高齢者の「生」を支え続けてきた拠点であり、2023年度に移転予定の京都市立芸術大学にも隣接する。特にデイサービスは、この地域で暮らしてきた方々と、周辺地域に住む方々が通われており、交流する場になっていることも意義深く感じられた。

事業としては2019年8月より同地区でのリサーチを始め、12月頃までプロジェクトのあり方とアーティストを検討し、1月に確定したアーティストのうち、山本麻紀子さんからは2月にプランをいただいたが、新型コロナウイルスの感染拡大とともに、プランや動き方を都度再検討する状況になっていった。新型コロナウイルス感染拡大以降の思考の流れ、状況とその変化を2020年3月末までで明確に区切り本報告書に記すのは困難であると判断し、本原稿の記述は2020年1月までの構想にとどめる。それ以降の動きについては、来年度の報告書に掲載するものとする。

## ● アートプロジェクトのリサーチとは

アートプロジェクトの準備段階において、しばしば使われるのが「リサーチ」という言葉である。英語で「research」とは、接頭語の「re-」(強意)と「circus」(円)を語源とするラテン語の「cerchier」(探す)による語で、「歩き回って徹底的に探求する、探し求める」という意を持つ。地域の人と接し始めた当初は「崇仁のことを聞かせてください」というような言葉を使い、「何か」を知ろうとしていたが、日々の生活の中で急速に人間関係を詰めるような聞き方で得られることは多くない。何

より、人々の生を企画素材の対象としか見ていないようなやり方のように思えてしまい、これを継続することはできないと、早々に「リサーチ」のあり方を切り替えた。

それから約数か月にわたる準備期間の中で、崇仁地区の人々と話し、様々な団体、個人による高齢者向けのレクリエーションを見学し、時に運営を担いながら、高齢者や彼らを支える人々とともに時間を過ごした。「探し回る」というよりは、関係性がゆっくりと開いていく期間であり、思いがけず相手から滴り落ちてくる言葉を受けて、様々な地域を知る期間でもあった。地域で表立ってまちづくりの取り組みをしている人だけでない、この場所に生き、支えてきた人々の当事者性のほんの一部を、何とか一度自分におろすことを試みるような、言葉の向こう側にある感情に触れ、想像する期間だったように思う。

やがて運営を手伝っていた高齢者福祉施設の喫茶室に、ハーブを持ってきて演奏する方が現れたり、「父と主人が残した皮革を引き取ってくれん?」と言う女性が現れたりなど自発的な動きが出てきた。

## ● 構想と方向性

崇仁地区の現在の高齢化率は京都市内随一とも言われ、現在は地区の大部分が京都市有地である。2023年度の京都市立芸術大学移転に伴い、地域の姿は大きく変化しようとしている。2019年度には移転予定地内の住民は、付近に新しく建てられた市営住宅へ引っ越し、元崇仁小学校・崇仁保育所など、地域の歴史を語る上で欠かせないシンボリックな公共施設は活用が終了しない移転した。2020年度より本格的な建物解体工事が開始されようとしている。政策に端を発するコミュニティの再編成、著しい高齢化や新しいまちづくりにより土地の記憶が喪失する可能性は、崇仁地区に限らない問題である。行政と住民。地区内出身者とそうでない人。新しい住宅に引っ越し人とそうでない人。とすれば簡単に陥りそうな二項対立を超え、この世にあるすべての命や、あるいは命がないもの——例えば、植物、虫、石、風、死者——を含むすべてのものを等価と見なし、様々なささやきに、それぞれが耳をすませ、ささやきを受け取った自らを信じ、他者を尊重し、表現を通して応答しようと試

みる。この地域の中にある声から、小さな、ささやかな響き合いを新たにつくり出そうとするプロジェクトを構想した。

現在の同地区には、長年、地道に活動を重ねて来たまちづくり組織や団体、公共施設の運営団体がいくつか存在する。また、近年新たに地域へ参入してきた団体や人々もいる。彼らとの協働も検討しながら、2019～2020年度にかけては、特に芸大移転に伴う再開発において、直近で消えてしまうかもしれない「声」に耳をすませ、表現を通して顕在化し、新たなかたちでの継承を試みる（決して、地域の人の声をすべて飲もうとするプロジェクトではない。それは不可能である）。

アーティストは、特に生活の近くにあるささやかなものへの眼差しを起点に、丁寧なリサーチからプロジェクトを展開してきた3名（2組）を招いた。ある特定の地域をテーマとした時、地域固有性の発見にとどまることなく、対外的には普遍性やユーモアを伴って受け止められる取組みを行っていること、それが日常とされる人々に対しては、風を吹きこむように、世界のとらえ方が変化するような取組みを行ってきたことが、依頼の一基準となった。

また併せて、アーティストを含まない住民や福祉関係者らによる参画を検討中である。

## ● アーティストについて

山本麻紀子は、ある特定の場所のリサーチを通して観察や考察を続け、常識や習慣など日常の中で見過ごされている事柄や疑問を糸口にして、他者とのコミュニケーションを創出し、プロジェクトを展開してきた。近年は、幾度となく他国に侵攻されたポーランドを守る騎士の伝説や、被災地である南三陸に住むある家族との出会いを起点とした、いずれも土地と深い関わりを持った企画が多い。制御できない自然や他者の力と対峙しながらも、ある土地で生き続けようとする、生きざるを得ない人々の想いは、「伝説」や「物語」として古来より表象されてきた。山本はユーモアとともに、それらを再解釈したり、新たな物語を制作しながら、時に他者と協働で歌、造形物、ドローイング、映像表現へと展開する。その中には「伝説の中に登場する巨人」や「鳩」「樹木」など、人間以外

の存在が登場し、語りかけ、対話を始める。様々な命が生きる場所への深い眼差しは、昨年度のモデル事業「ノガミツ プロジェクト」にも表れていたが、彼女自身が両地域を制作場所の拠点としている（いた）こともあり、崇仁と東九条の新たなつながりが生み出されることも期待し、再依頼した。

美術家の谷本研と中村裕太は2014年より、京都市内に点在する路傍祠の生態系に着目し、「タイルとホコラとツーリズム」シリーズを行ってきた。ふたりは、地蔵祠にまつわる土着の信仰や人々の営みに向き合い、観光のまなざしと独自のユーモアを交えて作品を生み出している。京都市内で開始したプロジェクトは、沖縄・広島など各地で展開してきた。

崇仁地区の地蔵祠は、住宅地の変遷とともに、場所を移動してきた歴史を持つ。行政の住宅施策に伴う移動により、ひとつの祠に複数の地蔵がおさまられている様も印象的である。芸大移転予定地の市営住宅内にも、地蔵祠が数か所ある。それらに耳を傾け、地蔵が見てきたものを想像することで、住まいやコミュニティの変遷、子どもを中心として行われてきたまちづくりの歴史などが、複層的に表われるのではないかと。また、地蔵や祠を起点に、この土地での個人々の信仰のあり方などが垣間見えるのかもしれない。彼らの繊細でユーモアのあるツーリズムの視点にも期待したい。

## ● 今後の展望

アーティストによる実践の中で開かれる関係性にも期待しつつ、企画サイドによるヒアリングや関係の形成は、引き続き進める。

併せて、これまで東九条や崇仁をフィールドとしてきた様々な研究者を招き、内部での勉強会を実施する。また、デイサービスのボランティアや地域の識者教室の方から、若手アーティストと関わってみたい、という声もよく聞かれるようになってきた。出入りし始めた美術大学・芸術大学の学生との関わりを創出することも、長期的な視点で検討していきたい。

# 東九条こどもご近所映画祭

レポート ————— 福森美紗子

コーディネーター

- 福森美紗子  
(一般社団法人アーツシード京都)

講師

- 久保田テツ  
(大阪音楽大学准教授、NPO remo  
[記録と表現とメディアのための組織])
- 松岡咲子  
(大阪音楽大学助手、ドキドキぼーいず)

サポートスタッフ

- 糸井宏美(一般社団法人タチャオ)
- 小島剛(一般社団法人タチャオ)
- タカハシ'タカカーン'セイジ
- 半野聡理
- 藤原美保(ノノチ)
- 御厨亮
- 室谷智子
- 柳本牧紀(一般社団法人タチャオ)

撮影

- 呉屋直

主催

- 東山 アーティスト・プレースメント・サービス(HAPS)

企画・制作

- 一般社団法人アーツシード京都

助成

- 損保ジャパン日本興亜  
[SOMPOアート・ファンド]  
(企業メセナ協議会2021 Arts Fund)

協力

- NPO remo  
[記録と表現とメディアのための組織]
- 一般社団法人タチャオ
- 希望の家児童館
- 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

アーツシード京都がHAPSより委託を受け、企画制作した事業。コーディネーターに福森美紗子(一般社団法人アーツシード京都)、講師を久保田テツ氏(大阪音楽大学准教授、NPO remo [記録と表現とメディアのための組織])、松岡咲子氏(大阪音楽大学助手、ドキドキぼーいず)が務め、地域の子どもたちとともに映画作品の制作と上映会を行った。制作に当たっては、映画づくりワークショップを実施。地域の夏祭りでプレ上映会を行った後、アーツシード京都が東九条地域にて立ち上げた劇場「THEATRE E9 KYOTO」にて上映会を開催した。ここにそのプロセスを記していく。

## ● その1 映画をつくる

日時	2019年8月5日(月) 10:00-14:00
会場	京都市地域・多文化交流ネットワークサロン、THEATRE E9 KYOTO
参加	子ども25名、スタッフ・講師12名、児童館の先生4名

事前に参加を募った子どもたちと、3時間での映画づくりに取組んだ。まず、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン内(以下、ネットワークサロン)の希望の家児童館のスペースにて、講師の久保田氏による映画のレクチャーが行われた。映画の仕組みや、スタッフにはどんな役割があるのか、どのようにストーリーをつくっていくかなど、子どもたちにわかりやすく実例を見せながら20分ほどレクチャーは終了。

その後、子どもたちはチームに分かれ(1チーム5~6人×4チーム)、チーム名決めからストーリーのジャンルなど、タイトな時間設定の中でどんどん進めていく。なお久保田氏、松岡氏とは別に1チームに2人、サポートスタッフが付き、チーム内の子どものアイデア出しや取りまとめ、進行の調整などを担う。大枠が決まればストーリーやセリフなど細かく進行表に書いていく。また“全員が必ず出演すること”というルールから、全員が俳優であると同時に、美術や撮影などのスタッフワークも担当する。テロップの作成や、ビデオカメラの撮影レク



チャーなど短い時間の中、慌ただしくも賑やかに進んでいく。

お昼休憩を挟んだ後、撮影はネットワークサロンとTHEATRE E9 KYOTOにそれぞれ2チームずつに分かれて行われた。THEATRE E9 KYOTOでは劇場スペースのほか、楽屋なども撮影場所として使用された。普段は俳優である講師陣も多く、子どもたちの演技をサポートしたり、一緒にカメラアングルを考えたりしながら撮影が進んでいく。

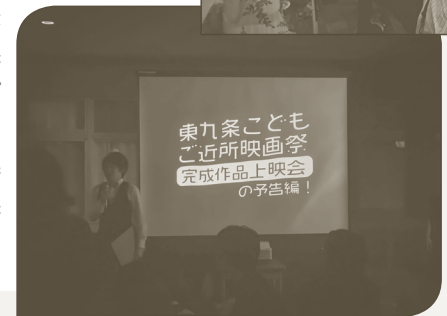
撮影時間はわずか1時間程度だったが、どのチームも最後までなんとか駆け抜け、無事クランクアップとなった。最後は全員が希望の家児童館に集まり、この日のまとめとあいさつが行われ終了となった。

## ● その2 東九条夏祭りで宣伝する

日時	8月17日(土) 17:00-20:00
会場	京都市地域・多文化交流ネットワークサロン
参加	子ども13名、スタッフ5名

8月23日の上映会の宣伝を行うため、子どもたちが5日につくった様子をドキュメントとしてまとめた予告編を、地域の夏祭りで上映した。

子どもたち自身に上映会の宣伝をやらせようという主旨から、映画づくりで実際に作成したテロップやイラストなどを活用し、上映会の宣伝チラシを作成した(作成は久保田氏)。そのチラシを、予告編上映の始めに子どもたちから直接お祭り







の参加者に手渡ししてもらい、宣伝を行った。

また予告編上映後には参加した子どもたちが前に立ち、見どころやつくった時の感想などを話した。この5分程度の予告編は、子どもたちをはじめ、お祭りに参加した多くの地域住民に見てもらうことができた。

### ● その3 上映会を開く

日時 8月23日(金) 14:30-15:30

会場 THEATRE E9 KYOTO

制作 舞台監督:浜村修司、照明:池辺茜、音響:森永恭代、映像:久保田テツ

参加 子ども23名、来場者67名、スタッフ・講師20名

当日の劇場は、スクリーンが吊られ、舞台面には赤バンチが敷かれた。照明と音響のスタッフが入り、明かりや効果音も含めた舞台演出をしつらえ、アカデミー賞のような華やかな上映会になるよう準備を行った。映画づくりに参加した子どもたちはワークショップ講師が児童館まで迎えに行き、一足先に劇場入りして、流れの確認と簡単な練習を行った。

すべての準備が整い開場すると、児童館の子どもたちや先生、保護者の方をはじめ、地域の方や一般の来場者など多くの人で席はあっという間に満席となった。またその日にインドネシアやタイから劇場の見学に来ていた人たちも上映会に参加し、当初よりも増席を行っての開演となった。

遊び心満載のオープニング映像からすでに場内は大盛り上がり。司会あいさつ後、子どもたちの映画紹介となる。チームを代表してひとりが前に立ち、映画の見どころを紹介した。1チームずつ紹介と上映が行われ、上映後はチーム全員が前に立ち改めて感想などを述べた。子どもたちの創意工夫が詰まった個性的な映画たちは、上映中笑いが絶えず、大いに盛り上がった。すべてのチームの映画上映が終わった後、講師久保田テツ氏よりあいさつが行われ、そ



の後は劇場支配人蔭山陽太による表彰式が行わ

れた。この表彰式は子どもたちにサプライズで行われ、各チームの特色に合わせて「脚本賞」「視覚効果賞」「撮影賞」「演技賞」がそれぞれ発表・授与された。それぞれのチーム名と作品名が入ったトロフィーを受け取り、最後は全員で前に並び、子どもたちの「ありがとうございました」で上映会は終了となった。

### ● 実施を終えて

この希望の家児童館の子どもたちと行った映画づくりは、昨年に続き2度目の実施であった。昨年はアーツシード京都が主催となり、久保田氏、松岡氏の協力のもと同様に行われたが、上映会は夏祭りのみであった。その上映会は地域の夏祭りにとって初めてのプログラムであり、上映時はスクリーン前の席に人があふれ、お祭りそのものが例年以上に盛況となったことは非常に喜ばしいことであった。

そういった昨年の状況も踏まえ、2度目となる今年最大の違いは、劇場での上映会を行ったことだろう。THEATRE E9 KYOTOはこの年の6月に開館したばかりであり、地域にとって初めての劇場である。2014年に劇場ができるプロジェクトが立ち上がってから、夏祭りで狂言を披露したり、まだ工事の始まっていない劇場予定地の倉庫で子どもたちと演劇ワークショップを行ったりと、少しずつではあるが地域の人たちに様々なかたちで舞台芸術の世界に触れてもらいながら、交流を図ってきた。私たちアーツシード京都のメンバーも、見知らぬ土地であった東九条という地域を知り、人々と触れ合い、この場所での居場所を少しずつ築いてきた。

そんな中で、いよいよ劇場という場所が立ち上がった2019年の初夏。今まで言葉の中だけでしかなかった劇場という場所は、実際に地域の人たちにとって足を運んでもらえる場所になり得るだろうか。そういった不安は開館してから2か月、簡単に消えることはなかった。しかし、この映画上映会を実施した時、参加してくれた子どもたちはもちろん、参加できなかった子どもたち、

児童館職員、保護者の方、地域の方、そんな人たちで劇場がいっぱいとなった。その景色は心の底から嬉しかった。何よりこの上映会があって、初めて劇場の中に入った人たちが多数いた。もちろん上記に挙げた人以外にも、このイベントに興味を持ってわざわざ来てくれた人、劇場見学に来ていた海外の人、そして、たまたま近くを通ったから、といった理由で参加してくれた人など、様々な年齢と立場の人たちが一緒になって、子どもたちのつくった映画を見て楽しんでいる状況は、劇場だからこそつくり出せるものであり、小さいけれども豊かで多様な社会がそこにはあった。また今回、子どもたちには撮影から劇場を利用してもらうことができた(実際に使用できたのは半分だけのメンバーであった)。「ブラックボックス」とよばれる黒い箱状の空間は、日常的にはなかなか触れる機会がない場所だが、撮影場所として上手く活用してくれただけでなく、単純に走ったり、客席用の足場を駆け上がったりと、劇場はまるで大きな遊具のようだった。そして、音響、照明といった舞台演出をつけて、劇場機能をフルに活用し行った賑やかな舞台に、子どもたちが立てたことも、大きな経験になるだろう。

映画づくりを行う子どもたちは、みんなつくことに積極的で、演技も恐れない、そんな印象を受けた。そんな地域の子どもたちが、決して遠くない場所として、「何かをつくる」または「自分が立てる」場所として劇場をとらえてくれれば、これからここはもっと豊かな場所になるだろう。この地域ではそれができ、そんな希望をこの映画づくりを通して感じる事ができた。

### ● その後の補足として

地域のコミュニティカフェ「ほっこり」にて子どもたちのつくった映画を、カフェ主催のイベント<sup>[\*1]</sup>の中で上映したいという嬉しい申し出があった。残念ながら当日の現場にうかがうことはできなかったが、後日そこに参加した地域の方から、映画を見た感想を伝えてもらったり、次回開催を望む声も聞くことができた。加えてこのイベントは日曜日に行われたため、平日開催であった劇場の

上映会に参加できなかった人にも見てもらうことができる非常に良い機会であった。

### ● 参加したみなさんの感想(アンケートより一部抜粋)

#### [子どもたち]

- | たおれたところがきもちいい
- | カメラがちょっとむずかしかったです。
- | きょねんよりうまくできて、よかった
- | たいけつするところが大へんでした。

#### [保護者や来場者]

- | 子どもたちが自然体で楽しんでいたところがすばらしく大人がそのサポートをしっかりと、でもさりげなくしている所がよかった。こんな素敵な経験をした子ども達がどんな大人になって、どんな未来をつくっていくのかとても楽しみになる映画祭でした。
- | 子どもたちがいきいきしていて、映画をきっかけに主体性がはぐまれているなど感じました。
- | 普段と違った表情でちゃんとセリフを言って役者の顔になっていました(笑)。帰ってきたら“サイン”をもらいます。

\*1  
「4-3-2市」  
日時 | 2019年9月8日(日)  
10:00-15:00、  
会場 | コミュニティカフェほっこり

# 2018年度モデル事業 継続調査報告

—— 関わる人々それぞれにとっての「ノガミツ プロジェクト」

文 ————— 小泉朝未

「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業では、京都市南区東九条地域を中心に社会課題の緩和や解決につなげることを目指したアートプロジェクトが行われてきた<sup>[\*1]</sup>。2018年度には、アーティストの山本麻紀子と社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会総合福祉施設東九条のぞみの園（以下、のぞみの園）との協働によって、「ノガミツ プロジェクト」が立ち上がり、2019年度は法人の予算と助成金を活用し、のぞみの園の自主事業としてプロジェクトが継続している。

本稿は複数の人々の関わりのもと行われるアートプロジェクトが、その関わりに基づき事業の目的やアーティストらの当初の意図を超えて、いかに発展し得るのかを確認するために行った継続調査である。社会課題の緩和や解決というアウトカムを評価する前に、プロジェクトを通じて実現した関係性やそれがいかに各々の表現や思考や行為を方向づけたかを明らかにすることは、プロジェクトが体現する「共生社会」や「文化芸術」が何たるかを照らし出す手がかりとなるだろう。

## ● 調査から見てきたこと

調査ではノガミツ プロジェクトを多面的に見るために、モデル事業の実施主体（京都市）、コーディネーター（HAPS.あごうさと）、現在のプロジェクトの実施主体（のぞみの園、山本麻紀子、小西由悟）、地域でプロジェクトに協力する団体（児童館）にヒアリングを実施した。それぞれにとってのプロジェクトとは、地域とそこで行われるアートとは、事業の課題とは、といった問いへのヒアリング報告を掲載する。

筆者はノガミツ プロジェクトの初年度にリサーチャーとしてプロジェクトに同行し、記録を行ってきた。今回の調査で興味深く感じられたのは、彼らがアートや福祉、行政といった自らの立場からプロジェクトを語るだけでなく、関わる相手にとってのプロジェクトの見え方、意義をとらえ、その上で自らの行為を選択している点が見えてきたことである。アーティストの山本は、のぞみの園が地域の要望から生まれた施設であること、その施設で死までを含み込んだ命へ

の関わりとしての「福祉」が営まれてきたことから着想を得て、プロジェクトを進めてきた。のぞみの園の施設長や職員からは、プロジェクトで行われている「アート」の性質についての、また福祉の仕事とプロジェクトの連続性についての言葉が聞かれた。コミュニケーションを重ね、自然発生的な創造の場を大切にしているプロジェクトの性質は、東九条地域で人々の努力によって育まれてきた表現の文化を受け継ぎながら、共鳴し、徐々に新たな文化を生み出しつつある。

その一方で、アートプロジェクトが成立するためのコミュニケーションをアーティストや福祉の現場で働く人々、地域の人々の努力や善意に任せるのではなく、プロジェクトに関わるどのような価値を大切に、共通認識や合意をつくっていくか、というコーディネートの重要性や課題も見えてきた。専門外の分野と関わりを生み出しつつ、互いの自律性を保つには現場でのリサーチや相手への想像力を持つだけでは十分ではない。こうした課題は、プロジェクトに関わる人々の権利や契約の問題から、労働とその対価、公共の福祉についての議論にまで関わってくる。アートプロジェクトに関してまだまだ十分に吟味されてこなかった課題が見えたと言えるだろう。

アート、コーディネート、福祉、教育、文化行政などの関心に従い、ヒアリングの報告はどの対象者から読み始めても問題ない。ヒアリングの報告内容はそれぞれに独立しているが、分野横断的なものである。継続調査として事業を振り返り、今後を考えるためにプロジェクトの関係者にまず報告が読まれることを期待する。

## ● 2019年度ノガミツ プロジェクト概要

### 1. のぞみの園特別養護老人ホームの入居者との対話

昨年度から引き続き、アーティストの山本麻紀子がのぞみの園を訪問し、より多くの入居者との交流や対話を続けている。入居者の希望をもとに、のぞみの園の外に山本と職員と入居者で「おでかけ」する計画がある。対話やおでかけの様子は映像で記録されている。

[\*1]

モデル事業は、アートを媒介にして人々のコミュニケーションを生み出し、社会的に排除されがちな人が接近することのできる公共空間づくりを目標としてきた（平成30年度本事業報告書 中川2018, p.21）。





協働制作中のタペストリー

## 2.ノガミツ ガーデンの運営とさらなる展開

これまであまり手が行き届いていなかったのぞみの園の中庭は、昨年度のプロジェクトで園芸委員会に所属する職員らとともに、野菜の収穫ができる畑と地域住民からいただいたおすそわけ植物によって構成される「ノガミツ ガーデン」として生まれ変わった。今年度も園芸委員会の職員らと話し合いながら、作庭協力の小西由悟のアドバイスのもとに、新たな畑をつくり、野菜を栽培し、デイサービス利用者とともに収穫を行っている。収穫された野菜は、デイサービスの料理レクリエーションで調理される。山本もこのレクリエーションに参加し、利用者らとの調理や昼食を通じた交流を行っている。

## 3.ノガミツ ガーデン・タペストリー制作

山本が、約2×3メートルのタペストリーとなる布に、昨年度ノガミツ ガーデンがどのように作庭されていったか、その過程を描き、地域住民、のぞみの園の職員、プロジェクトに興味を持つ人々などが、山本が描いた線の上を刺繍している。制作場所は、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンや、プロジェクトへ協力する地域のアートスペース（studio seedbox、ノランラン）を使用している。希望の家児童館の子どもたちや凌風学園の家庭科部も制作に参加し、様々な人の手により糸や布でノガミツ ガーデンが描かれる予定だ。

### ● ヒアリング報告1 アーティスト 山本麻紀子

実施日 2020年3月9日[月]

今年度のノガミツ プロジェクトは施設から地域へと関わりが広がっていったように見えますが、プロジェクトへの意識に変化はありましたか？

—

**山本** 昨年度の展覧会前くらいから、次年度にどういことをやっていきたい

か、だんだんと方向性は見えていました。私の場合、プロジェクトを進めていく中で、次の方向性が見えてきます。今年度はのぞみの園の自主事業として、私が業務委託を受けた形態となります。そのため、継続して私と関わることで、施設が何を期待されているか、その部分をまず根底に据えて考えていく必要があると思いました。そのひとつとして、この活動をより地域に、また福祉業界に周知することができればと考えました。

のぞみの園が地域の人々の要望で創設された施設であるということをお大切にするために、やはり閉鎖的でない施設であってほしいという思いがあり、施設外のような年齢層の方々とも関わりを増やし、ひとつのものを制作したいと考えました。昨年度は、作品制作に関わっていただいた入居者さん一人ひとりのために、ハンカチに刺繍をしてプレゼントしました。それが起点となって、次は大きな布の作品をつくりたいと思い、たくさんの方々に関わっていただいて成立するタペストリーの制作へと発展しました。希望の家児童館の子どもたち（主に小学校低学年）と、凌風学園の家庭科部の皆さん（小学校5年～中学1年生）、職員さんや地域の皆さん、またプロジェクトに興味を持ってくださっている方々と、それぞれ週1回、異なる制作行程を準備して協働制作を進めてきました。刺繍の部分が完了したら、最後はのぞみの園の利用者さんに、刺繍が施された図柄の内側に色鉛筆で塗り絵をしていただきたいと考えています。

幅広い年齢層の方々に関わってもらおうプロジェクトになったのは、いろんな視点でノガミツ ガーデンを見てみたかったということもあります。児童館の子どもたちとの制作では、昨年度、地域の方々からおすそわけ植物としてノガミツ ガーデンにお迎えした39種類の植物を図鑑で調べて、植物画を描いてもらうところから始めました。児童館の子どもたちとの制作では、布を割く、色布を染める、色布の整理をする、植物画を描く、糸染め用の糸を巻く、刺繍をするなど複数の作業を常に用意し、毎回好きな作業を選んでもらいました。好きな作業をやりきった後に、別の作業にも取組んでもらえば、やったことのないことにも挑戦してもらえるかなと思ったからです。子どもたちの目から見ると、植物がこんなふうに見えるのかという驚き、感動の連続でした。凌風学園の家庭科部の皆さんには、児童館の子どもたちが描いた植物画をもとに、色布（児童館

の子どもたちと一緒に染めた布)や刺繍糸(昨年度、私が東九条・崇仁エリアで採集した植物から染めた糸)を使って個々にパッチワークをつくってもらっています。植物画とはまたひと味違うアレンジが為されたり、反転したレイアウトで仕上がってきたりして、その予想外の手作業にもとても感動しています。

また、異なる年齢層の方々が、作業を引き継いでいくような制作がしたいという想いもありました。希望の家児童館は、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンの中にあります。同じ施設内の部屋をお借りして、地域の大人の方々とタペストリー制作を行っているので、その場に児童館の子どもたちも制作しに来てくれることもありました。彼らも、様々な人との関わりを感じてくれていると思います。このように、たくさんの方々にタペストリー制作に関わってもらい、対面したり、また対面せずとも作業を引き継いだりと、その様々な時間軸が交わる過程の中で、私自身もノガミツ ガーデンのあり方について色々考えることができました。

ノガミツ ガーデンを立ち上げるにあたり、畑や花壇をつくるために伐根した梅の木やさつきなど、たくさん命を奪いました。私の中でそのことは忘れてはいけなと思っています。その一方で、おすそわけ植物として新たな命がやってきました。主に多年草をいただいているので、去年咲いていたお花が季節を超えて今年もまたお花を咲かせてくれました。それでも、昨年のは何かが違ってきます。知らないところで、風が運んで来てくれたのか、おすそわけ植物をいただいた時の植木鉢の土と一緒にやってきたのか、別の命もたくさん育っています。入居者さんの人生のかけらも、今は土の一部となっていると思います<sup>[\*2]</sup>。こういう様々な要素が混在し、季節とともに変化していくお庭だからこそ、時間をかけて地域の皆さんに知ってもらい、施設活動の一環として末永く続くお庭になってほしいと強く思います。

今年事業としてのサポートやコーディネーターがいなかった中でプロジェクトが進みましたが、困難を感じた部分はありましたか？

—

**山本** 昨年度のコーディネーターのあごうさとしさんやHAPS、京都市職員の方々には、事業の枠組みを離れて今年度もたくさん助けてもらい、心強かったです。の



京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでタペストリーの協働制作を行う

ぞみの園の施設長とは、今年度の活動について幾度となく打合せをしましたが、あごうさんが同席して下さることが何度もありました。あごうさんは、アーティストと福祉施設の取組みのあり方についてずっと気にかけてくださっています。社会福祉法人の事業としては、個人情報やプライバシーの問題、制作費のことなど課題がたくさんあり、その都度、相談に乗っていただきました。

HAPSには、全般的な相談や、作品の著作権や所有権に関しての文書作成に協力していただきました。また、児童館の子どもたちとのタペストリー制作では子どもたちのサポートが必要だったので、興味を持ってくださりそうな方をご紹介いただきました。さらに、地域の方とのタペストリー制作についての広報協力の部分でもお世話になりました。

のぞみの園の小笠原施設長や井上理事長にも、たくさんのお力添えをいただきました。地域の方々のタペストリー制作に関しては、毎月、小笠原施設長がチラシをつくって掲示してくださっていました。また、タペストリー制作に関して、のぞみの園だけでなく、同じ法人下の崇仁デザインサービスうるおいの職員さんにもお声かけをしていただくなど、職員さんへの周知にも積極的に動いていただきました。また、私が中学生とも一緒に制作がしたいと言っていたこともあり、小笠原施設長が井上理事長に相談して下さり、おふたりとともに凌風学園に協働制作のお願いに上がりました。その結果、家庭科部の皆さんと週1回制作をさせていただくことになりました。

私は予算の幅に合わせて、制作のボリュームをあらかじめ明確に決められないので、プロジェクトが進んで行く中でやりたいことが膨らみ、ほぼ毎日プロジェクトに関連した活動をしています。そのため、実際のところ資金面では、潤沢とは言えません。お金では換算できない価値を大切に、あるいは、予算に合わせて割り切ってプロジェクトを組み立てるという選択が求められるように思います。近年、福祉施設と芸術家との取組みが増えつつあるように見受けられますが、もう少し現実的な部分、例えば、プロジェクト運営のための資金源確保や成果物としての作品発表とその後の展開における個人情報やプライバシーの問題などについて明るみに出してほしいです。そういった点を、プロジェクト開始時にクリアしておく必要があると思います。

<sup>[\*2]</sup> 2018年度のノガミツ プロジェクトでは、のぞみの園との入居者と対話した中で共有した人生の物語の「結晶」を粘土のオブジェとして制作し、同年度に開催された展覧会において、そのオブジェを贈り物として入居者に手渡した瞬間の写真や、オブジェのモチーフが刺繍されたハンカチ、オブジェが土の中に埋められた植木鉢を展示した。展覧会后、山本はそれぞれの入居者とともにオブジェをノガミツガーデンに埋め、入居者が施設やその中庭と新たにつながるきっかけになることを希望していた。本文はその山本と入居者との協働行為を指して、語られたものだと考えられる。

今年度のクリエーションの核となったものは何ですか？

—

**山本** プロジェクト2年目にして、身近な人や大切な人が亡くなり、人の死について考えた1年でした。のぞみの園でよくお話をさせていただいていた入居者が亡くなり、福祉施設で働く職員さんは、こうした身近な方の死を幾度となく経験されていることを実感しました。そして、改めて「死」にも向き合っている現場で、私に何ができるのだろうと考えました。昨年度はどちらかというと「生きる」ことを軸に、福祉施設と関わりながら私ができることを考えていましたが、活動を継続させていただく中で、「死」は「生」に含まれているのだと思いました。死ぬことは生きることの一部である、というように。そのふたつはある意味連動しているようなもので、決して別ものではない、というか。そういう考えは、ノガミツ ガーデンでの活動、たくさんの方々とのタペストリーの協働制作、入居者さんのお話とお出かけなど、この2年目の活動が綿密に絡み合っ、私の中にふつふつと湧き上がってきたものです。このあたりのことに関しては、展覧会で表現したいと思っています。

プロジェクトを通して、例えば糸染めでは、植物が持っている色がこれほど多色で美しいということ、畑づくりやおすそわけ植物の植え付けなどを通して植物の世界をより知ったことで、アーティストとして今後の活動の方向性にも影響を受けたと思います。今後は自然に近い環境で、草木の持つ色、薬草としての植物の性質を学ぶなど、本格的に取り組んでみたいと思っています。

## ● ヒアリング報告2

東九条のぞみの園 小笠原邦人、横井昌代、小倉哲朗、小嶋正明、小泉多美子

実施日 2020年3月23日[月]

今年度のプロジェクトでの取り組みや、変化について教えてください。

—

**小笠原** のぞみの園は地域の声が上がったことで生まれた施設であり、地域に認められる活動でありたいと思っています。地域には、赤ん坊、幼児、小中高生、私たち生産世代、高齢者まで多世代が暮らしています。今回は子どもや中学生と、のぞみの園との関わりができ、それを地域に知らせたいという想いでプロジェクトを進めてきました。人が人と関わろうとする時に、まずは動き出すことが必要です。私たちの取組みたいことを説明し、それが伝わりにくければ、受け入れてもらえるよう説明を重ねる努力をしています。

—

**横井** 今年度に入ってノガミツ ガーデンの規模を拡大し、畑の畝を増やしました。おすそわけ植物も増えてきたので、玄関先にも植えようということになり、玄関の西側にはいただいたムクゲを植えました。それから、1年を通してご利用者様にお庭で花を見ていただきたく、バラを増やす方法などを小西由悟さんと相談しています。花の咲く植物のドームをつくりたいなど、毎回お庭で作業するうちに、次はこうしたいという意見や希望が出てくるようになりました。

—

**小倉** 先日、野菜の苗を植えた時に、小西さんからご指導いただいたことが勉強になりました。苗によって肥料の入れ方、水のやり方が違うことを知り、介護という個別化とつながっているように思い納得しました。テラスからお庭を見るだけでは、高齢で目が悪い方には見えにくいこともあります。お庭の中にある通路が広がり、近くで見て、触るところまでできるようになったのは大きな変化なので、今後もご利用者様に見てもらえる様々な機会をつくることができるとしています。

—

**小嶋** 昨年度にノガミツ ガーデン完成図のイラストをもらい、はじめはこんな大がかりなことができるのだろうかという感想を持っていました。梅の古木を切らなければならないのは残念でしたが、実際のお庭の土地改良に汗をかいて関わり、地道な作業をすることで、参加した職員の施設に対しての愛着や、カトリックで言う慈愛の精神が育ったように思います。みんなで協力してお庭をつくり上げていく過程をご利用者様も見えてくださることが、力になりました。

また園芸の経験のあるご利用者様もいらっしゃるので、「それじゃあだめ」「もう



ちょっと端に植えて」など、これまでになかった言葉が出てきます。そのように意欲を引き出すことができたのも、このプロジェクトから得たことのひとつだと思います。

小泉 殺風景だった中庭ですが、みんなでお手入れすることでだんだんあれもしたい、これもしたいという気持ちになってきました。おすわけていただいた花も、枯れそうになったら場所を変えると、持ちこたえてくれます。そうすると次の季節にも咲かせたいという意欲が湧いてきます。ご利用者様も私たちが作業しているのを見て、花を植えている時に話しかけてくださるなど、ひとつのコミュニケーションツールの役割をお庭が担っていると思います。

いただいた花の種を収穫して、今度は私たちの方からおすわけができるようになればいいなと思っています。まだ数は十分ではないですが、去年もいただいた一部のケイトウの種は取っています。今年はサクラソウの種も取りたいと考えています。

昨年度のモデル事業の枠組みから離れ、自主事業となったプロジェクトでサポートがほしいと感じたところはありますか？

小笠原 昨年度の京都市の事業に倣うかたちで、アーティストに委託をすることになったのですが、クレジットや契約内容、著作権などについて整理することがなかなか難しかったです。アイデアなどの無形物や、作品とは異なる畑などをどのように継続していくべきか、今後福祉施設としてアーティストの活動への対価をいかにつくるのか、もしくはアーティストが筋道をつけたことをどう職員が引き継いでいくのかなど、コーディネートが必要な部分はたくさんあります。本プロジェクトでは作品をつくるだけでなく、人と人とを結びつけるコーディネートの要素も山本麻紀子さんに担ってもらいました。初めてのことも多く、アーティストとしての想いを汲むことが十分にできないこともあったので、仲介に入ってもらう人がいれば、もう少し上手く調整できたのではないかと考えることもあります。



ノガミッツガーデンでの作庭風景

プロジェクトを通じて地域との関わりはどのように生まれましたか？

小嶋 玄関周りに花を植える作業は今までなかったのですが、園芸委員会の活動から広がって、小西さんに監修してもらい、玄関先で職員が集まって作業するようになりました。職員が施設のことにあんな風に取り組んでいるのだなど、地域の方々も見てくださるようになりました。施設と職員が良い関わり持っていると、地域の方々が「あの施設にお世話になれるのだ」という実感を持つことにつながるのではないかと思います。

横井 玄関先で私たちが土いじりをしているのを見て、近くにお住まいの方が「うちのお花を持って行って」とお声がけしてくださることもあります。ゆくゆくは、ご利用者様やご入居者様はもちろん、地域の方もお招きして、ノガミッツ ガーデンでお茶会をしたいと思っています。

小倉 デイサービスやショートステイのご利用者様も玄関先の花の成長を楽しみにされていて、「伸びてきたな」というコメントをいただくことも。特養のご入居者様にも、玄関先に出て花を鑑賞してもらうこともあり、ひとつのレクリエーションのように機能しています。

お庭を見た職員からおすわけをもらうことや、特養のご入居様のご家族からおすわけの相談をいただくこともありました。理想としては、そういった方々にお庭の作業に関わっていただけるところまで発展させられたらと思います。昔は特養入居者の家族会というものがあったそうで、そうした会にもつながるご家族の意見を聞く機会として、お庭の活動を広げていきたいです。

小笠原 夏祭りではノガミッツ ガーデンの植物が押し花になったしおりづくりを行うことができました。また、秋にのぞみの園で企画した公益事業には、44名の方が地域から来ていただきました。山本さんを講師に呼び、参加者の皆さんに張り子づくりをしていただき、その後お庭の作業にも加わってもらうというイベントになりました。

プロジェクトと福祉施設との関係について、新たな発見があれば教えてください。

—

小笠原 アーティストにも様々な方がいると思いますが、人や人と育てたものを使って活動をする、人によって続いていくものをつくるということは、決して福祉から遠いものではなくて、むしろそれが福祉の本当の姿なのだろうということを山本さんから気づかせてもらいました。

山本さんは「おすそわけ」をキーワードにノガミツ ガーデンをつくられましたが、そのキーワードを施設の理念やケアの考え方にまで広げていきたいと思えます。おすそわけとは、「気軽に関わってもらう」という意味だと私は考えています。ご利用者が様々なお話をされますが、憎まれ口を叩かれてもそれは辛い気持ちのおすそわけであるというように、おすそわけによってのぞみの園は成り立っていると言うことができます。気持ちのおすそわけ、良かったことのおすそわけと、おすそわけを軸にしたケアの考え方を来年度の事業計画にも載せていきたいと考えています。

福祉施設が人材不足と言われる中で、少数の職員とともに、負担を感じる部分もありながらプロジェクトを進めてきました。ただ、職員自身がやりがいを感じながらそこに参加していたようです。今求められている働き方改革も、休みを増やす、給料を増やすというだけでなく、その職業を好きになる、働きがいをつくることできるかどうかも重要だと思います。プロジェクトを通じて、職員は自分たちが高齢者や地域に働きかけをしている存在であることを実感し、それは仕事へのやりがいへとつながったのではないかと思います。また京都市の広報誌に取材を受けるなど、私たちが福祉の現場で取り組んでいることを人に知ってもらう方法として、こうしたプロジェクトもあるのだということを再認識したところです。

お庭での作業を中心に、のぞみの園をみんなが好きになってきたということは福祉施設として理想であると思います。職員を見て、ご利用者が昔の自分を思い出し、ご自身の存在を承認されていると感じたり、お庭を見て今ここにいて気持ちいいなと思えたり、明日あの花が咲いているかなと明日の自分を楽しみに想像できたりするのは、福祉施設の醍醐味。明日を見ることのできる福祉施設をつくっていききたいと思えます。

### ● ヒアリング報告3

たま製作所 小西由悟(ノガミツ ガーデン作庭協力)

実施日 2020年3月10日[火]

ノガミツ ガーデンではどのように皆さんをサポートしていますか?

—

小西 ノガミツ ガーデンが継続するように、月に1回の園芸委員会でアドバイスや実際の作庭作業をしています。農業的な知識がなくとも参加できるように、希望を聞いて準備をしたものを職員さんたちにやらしてもらっています。

今年度は地域に住んでいる方にお庭に来てもらい、菜園にさつまいもを植え、その後はほうれん草やカブを植えて収穫しました。来年度ののぞみの園夏祭り、ノガミツ ガーデンで採れた夏野菜のカレーをつくりたいという意見が職員さんから出て、昨年の11月中旬くらいから開墾作業をして畝を増やし、これから夏野菜の苗を植えるところです。

昨年度は1年しか関われないと思っていたので、植物の種を植える時期、土についてなど分厚い資料をつくり、皆さんに事前にお渡ししていました。ただ、通常の業務をしながら、職員さんが野菜を育てる知識を身につけるのは難しいことが見えてきました。今年度は、資料の説明の時間よりも実際の作業の時間を取ることを大事にしています。

ノガミツ ガーデン自体は、昨年度細かく立てた計画が効いて、ハーブが育ち、おすそわけでいただいた多年草も枯れずに大きくなっています。そうしたことでお庭の雰囲気も良く、素敵になっています。職員さんもその変化に気づかれているようです。

プロジェクトへの関わりが2年目に入り、感じる変化や課題は何ですか?

—

小西 今年は職員さんがより本気になって、ノガミツ ガーデンに関わっている

のを感じます。7月の夏祭りで自分たちがつくった夏野菜を振る舞うという経験をしたら、それが一区切りとなり、次のステップが生まれてくるのではないしょうか。夏野菜を収穫した後に、その畑で次は何をつくるのかを考える時には、知識や経験が必要になってくるので、壁にぶつかってしまう可能性もあると思います。今は僕が中心になり、畑や作庭の知識を提供していますが、今後はのぞみの園の職員さんの中で、中核を担う人をどう育てるかが課題になってくると思います。

僕の経験からすると、春夏秋冬通して土に触れることを3年続けると、畑作業の感覚が身についてきます。都市部に暮らす方や第3次産業をされている方だと、季節感を感じることは難しいので、その感覚は育てるしかありません。昨年度の秋からノガミツ ガーデンは始まり、今は1年半が過ぎたところで、畑作業は3回(冬野菜2回、夏野菜1回)しかできていません。6回できればだいぶ慣れてきますが、どこまで僕自身が付き添うことができるかも、今後の課題になるだろうと思います。

今年度は施設の自主事業として、施設に雇用してもらおう形態となり、予算に応じて訪問する回数を調整するなどの話し合いをしました。資材購入もしています。できるだけ安いもので、最低限にすることを意識しています。

ノガミツ ガーデンは、のぞみの園のお庭から地域のお庭へと変化することを目指していると思いますが、外部の人たちの参加はまだまだこれからだと思います。福祉施設に外部の方が出入りする時には、クリアしなければならない問題が出てくると思いますが、より地域に開かれる方向を期待しています。

ノガミツ ガーデンづくりを通じて、自らの経験や視点に発展はありましたか？

—

小西 ノガミツ ガーデンを進めるに当たり基礎になったのは、3年間大学で畑をつくる授業の指導員をしていた経験です。今回の対象は大学生でなく一般の方ですが、その経験のおかげで、人が知識のないところから畑を覚えていくプロセスがわかります。

ノガミツ ガーデンとの関わりは、ライフワークの一環と言えるかもしれません。美術作家としても植物や生物に関わるものをつくっていますが、そのきっかけは自給自足生活をしていたことにあります。僕には生きていく上で、自然環境

とどう付き合っていくかという命題があります。10年ほど土に触り、植物を育ててきたので、ノガミツ ガーデンはそうしたライフワークと、仕事としての建築業や設計業、デザインの経験が混ざり合ったプロジェクトだと思っています。

人生60年と考えると、0歳から畑をしたとしても、耕し植えることは年に2回、120回しかできません。畑をするということは、経験値がたまりにくい、成熟していくのに時間がかかることでもあります。そう考えると、ノガミツ ガーデンに菜園があること自体、意味のあることです。食べる行為につながることを取り入れていくのは動物として根本的な喜びであり、今の時代に野菜を育て、狩りをするといった行為を直接行うことはほとんどないので、良い機会でもあります。野菜を育てることを軸に考えると、知識や技術の成熟には時間がかかりますから、その意味をどうとらえていくかが重要だと思います。

## ● ヒアリング報告4

一般社団法人アーツシード京都代表理事・演出家 あごうさとし  
(平成30年度モデル事業コーディネーター)

実施日 2020年3月13日[金]

ノガミツ プロジェクトに今年度はどのように関わっていますか？

—

あごう 一般社団法人アーツシード京都が運営するstudio seedboxを、タペストリー制作のための場所として無償提供しています。もともとプロジェクトの立ち上げに関わらせてもらい、私たちが一事業者として東九条で劇場という文化施設を運営しているので、引き続き貢献できることがあるのであれば、協力したいと思ったからです。山本麻紀子さんは地域で暮らし、制作するアーティストでもあり、タペストリー制作の工程には街に暮らす子どもから大人まで、幅広い人が刺繍を通じて関わっています。街全体でつくるアート作品という側面に、私たちなりにできることを探して関わっています。私は演出家であり、劇場の運



営者でもあるので、劇場にこもって作品をつくるだけではなくて、地域に出て何がしか貢献できる可能性があるのであればお手伝いするという立場です。

2年間のモデル事業においてコーディネーターを務めたことで、見えてきたことは何ですか？

—

**あごう** 福祉施設など異分野とアーティストがプロジェクトを行う時にコーディネーターがいない場合、専門ではないマネジメントやプロデュースをする役割を施設かアーティストのどちらかが担わなくてはならなくなります。両者が共通の意識やイメージを持っている部分は問題ありませんが、業種が異なる分、事情やルール、手続きが違うということは起こり得ると思います。

そのため、両者の合意形成をしていく時に、コーディネーターという第三者がいると話が進めやすい場合もあるのだらうと感じます。美術館や劇場など芸術の制度の中であれば、コーディネーターやプロデューサーは、ある程度守られたかたちで活動ができ、アートの世界を熟知していれば十分です。しかし、コーディネーターが街とアートをつなぐ、福祉とアートをつなぐ場合、種々のヒアリングを行い、議論し、このやり方や考え方が妥当なのではないかという提案をして、ひいては、社会全体にもつながるコンセンサスをつくるのが仕事になるのではないのでしょうか。道路をつくる時にかかる費用の妥当性に文句を言う人はあまりいませんが、アートや特にアートプロジェクトに関しては妥当なラインは明確ではありません。行政の行うアートプロジェクトでは、おおむね市民を無料で招くものが多いようにも見えます。それは税金のサポートがあるからで、その意識が薄いと、アートは無料で見られるもの、余暇的なもの、経済的な価値を持たないものとしてとらえられる可能性もあります。アートプロジェクトで協働制作を行う時のように、経済的な関係性に根ざさない、純然たるひとつのアートの形態を立ち上げようとする行為に対して、制作資金を提供する主体とアーティストは、プロジェクトの趣旨や出来上がった作品の展開についての位置づけを共有しておく必要があると思います。そのあり方に両者が合意できていれば、中身がどのように設計されていても自由ですから、合意のステップが重要だと思います。

モデル事業を通じて東九条地域とはどのような関係ができましたか？

—

**あごう** 事業などを通じて地域と培われた関係は途切れることなく、日常的に住民の方々とやりとりをさせてもらっています。以前の私たちは外からやってきた人たちと認識されていましたが、今では地域のメンバーの末席に入れていただいたという感じがします。その関係がベースにあったからこそ、今年度はモデル事業とは別に、京都市が主催する地域事業の企画運営主体となり、住民の方々と野外劇場という大きなイベントを行うことができました。地域でアートを通じて何かを実現するステップを、少しずつ踏ませていただいていると思います。

劇場運営に関しては、例えば現在新型コロナウイルスの感染防止対策が問題となっていますが、どのような対応が期待されるか、住民や地域で施設を運営されている方などに意見やアドバイスを求め、問題への対応方針を決めさせてもらっています。ひとりで判断するのではなく、相談をさせてもらえるのはありがたいことです。

「京都駅周辺における『文化芸術都市・京都』の新たな文化ゾーンの創出に向けた土地計画の見直し素案」が出された時には、街でも大きな議論になりました。主としては暮らしに対する不安、懸念が示されたわけです。私たちの劇場が規制緩和を行う理由のひとつに挙げられてもいましたので、私たちの見解も公にするべきだと考えました。2017年3月に出された「京都駅東南部エリア活性方針」の理念には賛同しています。その方針を具体化すべく、生活や暮らしやこれまでの文化に根ざした規制緩和にしてほしいというメッセージを打ち出しました。その後も、地域の方々や行政の方々と議論に、継続的に加えていただきながら現在に至っています。

東九条は、違いがあってもともに暮らす文化をつくってきた歴史を持つ街であり、その土壌の上で、私たちも受け入れていただいています。完全にわかり合わなくとも、ともに暮らせ、排除されない街を一緒につくりたいと思っています。人の心、暮らし、経済、芸術活動、それぞれが良いバランスでこの街に立ち上げられれば願います。自然な身振りで暮らしが営まれ、ビジネスが起こり、アートが創作されたり、鑑賞したりしながら、暮らしが豊かになるとはどういうことな

のかをみんなで考えていく。一歩ずつでも、そうしたことがかたちになるように、私たちに努力を重ねたいと思います。

## ● ヒアリング報告5

希望の家児童館館長 前川修(ノガミツ ガーデン・タペストリー制作協力)

実施日 2020年3月28日[土]

希望の家児童館はどのような理念を持つ児童館ですか？

—

前川 障害のある子もいない子も一緒に育成していく、統合育成を大事にしています。今は障害者差別禁止法がありますが、障害のある子を拒否する児童館があった時代にも、障害の有無に関わらず子どもを受け入れてきました。子どもたちは障害の違いがあっても、互いに違和感なく接することができているように思います。

次に、地域の行事でも異なる文化に触れる機会があるのが当たり前の地域なので、多文化共生を行っていくことがふたつ目の柱です。地域には、コリアンだけでなく、中国やベトナムから来た方など外国籍の方も多く暮らしています。子どもは日常会話で使っている韓国語を児童館でも当たり前に使って、外国籍であるかどうかにはあまりこだわらない雰囲気があります。

最後に、複合施設なので、高齢者と出会う機会があり、異世代交流をすることを大事にしています。のぞみの園は同じ法人の運営ということもあり、ハロウィンパーティーの際には、子どもたちが児童館でつくった衣装を着て訪ねていき、交流するといったことをしています。

ノガミツプロジェクトのタペストリー制作に参加する子どもたちを見て感じることは何ですか？

—

前川 クラブ活動のようなかたちで、活動したい子どもたちが集まり、タペストリー制作に参加しています。山本麻紀子さんの人柄もあり、子どもは飽きることもなく、徐々に制作物が出来上がっていくのを嬉しそうにしています。鴨川で糸を染める植物を採集する時には、児童館の子どもたちがみんなで参加しましたが、山本さんが子どもたちにきっちり説明しながら「必要以上には採らない」と伝えるところなどは非常に丁寧でした。その丁寧さが活動の基本になっているように感じます。

いつまでにつくらないといけないというノルマを山本さんは掲げないので、今日はここまでできた、次はその続きをやるという活動のつくり方が良いところだと思います。教育的な部分が出ると、その型に合わせないといけないと子どもも感じますが、植物から様々な色が出てきたことを褒め合うというように、山本さんは型にはまらない子どもの発想を大切に、子どもの自発性が出るような導き方をしているように思います。決められたノルマをこなしていくことは、子どもたちは学校で十分に経験しているので、そうではない自己表現ができるから彼らが生き生きしてくるように思います。

東九条地域でアーティストの活動や文化芸術を中心にした行政の事業が増えたことをどのように感じていますか？

—

前川 長い間、まちづくりの活動を通じて京都市の行政と付き合いっていると、行政が地域を変えようとする時期には資金が投入され、優秀な能力の高い人が担当課に集められるということが見えてきました。それに比べて、何も計画がない時期には、やる気がなく対応してもらえない担当者が配置されるということも経験してきました。ですから、行政が何かをやりたいと言った時に、NOという選択肢はないのです。次にチャンスが訪れるのはいつになるかわからないし、これが最後のチャンスかもしれないからです。芸術はよくわからないけれど受け入れるしかないという気持ちでした。それならより良い方法で受け入れることができれば良いのではないかという想いで関わってきました。

そうした中で、まだ改築されていない頃から、劇場Theater E9 Kyotoの皆

さんとの出会いがありました。今地域にやってくる人たちは、山本さんをはじめ魅力的な方が多く、考え方の幅が広がったり、地域を理解し、地域の中で自分たちが何の役に立つのかということを一生涯考えてくれたりする人たちがたくさんいらっしゃると思います。仮に山本さんがいなかったら、ノガミツ プロジェクトもタペストリーも生まれなかったわけで、そういうものが変化をもたらしてくれています。変化が上から押しつけられるのではなく、地域にやってきた皆さんが取り組むことに私たちも協力し、自然と一緒にやっていくことでできていると思います。

子どもたちはタペストリー制作や、ほかにも劇場の人たちとの映画制作ワークショップに参加するなど、専門家が手伝ってくれ、良い経験をすることがここ数年間たくさんありました。彼らにとっても、私たちにとっても成長をもたらす良い機会となっています。子どもが大人になった時に「あの児童館、変やっただ、なんかすごいことやってたで」というようなことを思い出してくれたらありがたいです。そう考えると、今までになかった変化が色々なところに出てきているように思います。地域の持つ文化や芸術など、文化的なものは、まず一緒の場でやっていくことで、どこかで混じり合っていきます。そこからまた違う文化を生み出していくのではないかと感じています。

## ● ヒアリング報告6

京都市市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課 倉谷誠、山本亮太郎

(平成30年度「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」担当者)

実施日 2020年3月9日[月]

モデル事業としてのノガミツ プロジェクトは終了しましたが、今年度はプロジェクトにどのような関わりを持っていますか？

—

**倉谷** 来年度の展覧会の会場として山王小学校の使用許可申請の取り次ぎや、南区の助成制度を紹介するなどの事務に関わりました。その際にのぞみの

園の施設長や山本麻紀子さんから随時相談を受け、作品の著作権や契約などのサポートをしました。山本麻紀子さんからタペストリー作品の制作に誘っていただき、そこに参加することも。今年度のプロジェクトは、京都市の事業という位置づけではないですが、継続的にプロジェクトが自走するために背中を押すことも私たちの役目だと考えています。本事業に関わるか否かによらず、相談があった時に応答することは行政の業務の一部でもあります。

—

**山本** 昨年度のつながりから、施設長に「まず誰に相談したらいいのかわからない」とお話をもらうこともありましたね。また、ノガミツ プロジェクトは、一体どのようなかたちになっていくか、自分もわくわくとした気持ちで参加できるので、今年度は当事者の方や地域の方にもそれを感じてもらえんじやないかと。だからこそプロジェクトについて色々な人に知ってもらいたく、それは市にもメリットがあるので、仕事として行っています。福祉施設としての通常業務を損なうことなく、何年か文化芸術を用いた取組みを継続することで、理想とすることと現状のバランスが上手く取れていくことが重要だと思うので、地道に継続するためのサポートをしたいと考えています。

平成29年度から文化芸術による社会包摂や共生社会の実現を目指すモデル事業を継続する中で、見えてきた成果や課題を教えてください。

—

**山本** モデル事業を行ったアーティストの倉田翠さんの作品は、公共劇場で次年度に再演され、山本麻紀子さんが事業で行った展覧会は、美術業界からも良い反応を得るなど、アートの面からプラスの評価をされる、アーティストとして次のステップに進むことのできる事業になったことは成果のひとつだと思います。イベントを行う事業で終わらずに、独自に発展したことは誇りに感じます。

—

**倉谷** 自治体の人材育成を行う研修機関である全国市町村国際文化研究所(JIAM)で実施されたアートマネジメント講座での事例紹介や、大学の講義などでもお話しする機会をいただくようになりました。モデル事業の大きな目的



として、文化芸術の力を活用した共生社会実現を目指す取組を福祉施設やアート関係者に周知することが挙げられますが、取組みのモデルを示すという点は達成できたと思います。

課題としては、プロジェクトの継続性が挙げられるでしょう。また、単年度の予算で達成できることには限界もあります。文化芸術に触れたプロジェクトの参加者や関係者が、1年で大きく意識を変化させることは困難です。だからこそ継続が大切だという想いがありますが、その時に財源や組織内での理解の共有などの課題も出てきます。さらに、新しいことに挑戦する上で、組織としては通常の業務が減るわけではないという前提があります。ただ、何か新しいヴィジョンが示され、実感が伴えば、それを乗り越えることはできるのだと思います。ただし、事業として関わった時と同様のサポートが1年ですべてなしになると、そのヴィジョンは見えにくくなり、プロジェクトを続けようと組織内で頑張る人が孤独になってしまいます。そうした状況をつくらないためのサポートが重要だと考えています。

東九条地域を中心にモデル事業に取組んできた理由は何かですか？

—

**倉谷** 京都市の中でも、それぞれの街の目指す姿は多様だと思います。東九条にはマダンがあり、マイノリティを含めて様々な人が共生してきた街です。文化芸術には多様性を担保する、様々なアーティストの表現を大切にするという側面があります。そうした両者のコンセプトが上手く合うように感じ、モデル事業を東九条地域で続けてきました。事業をすることは、まず人と人との関係をつくることだと思います。倉田翠さんと行った初年度のモデル事業を通じて、地域の方と少しずつ信頼関係を育むことができ、その関係を介して、地域の方々や様々な団体と知り合っていけるようになりました。

「京都駅東南部エリア活性化方針」という市のプランも事業の前提にありますが、令和5年に京都市立芸大が移転してくる前に、若いアーティストと地域との良い関係をつくっていく地ならしをしたいというHAPSの想いも聞いていました。大学が主体的に地域との関わりをつくっていくのは、どうしても移転が迫ってからになるのだと思います。市として、入学してくる若いアーティストや、すでに

地域で暮らしているアーティストのための環境をつくりたいということも事業では意識しています。

## ● ヒアリング報告7

HAPS 石井絢子、藏原藍子(平成30年度モデル事業コーディネーター)

実施日 2020年3月11日[水]

ノガミツ プロジェクトに今年度はどのように関わっていますか？ また、コーディネーターの不在に関して感じることはありますか？

—

**藏原** アーティストの山本麻紀子さんやのぞみの園の施設長からマネジメントの部分について相談があり、プロジェクトの段階に応じて契約内容、ボランティアスタッフの募集、展覧会の予算立てやその運営スタッフの確保などの相談を受けました。施設がプロジェクトを主催する立場になった時に、コーディネーターやマネジメントを施設とアーティストが直接担う際の課題が見えてきました。アーティストの構想や作品が広がることと、社会福祉法人としてのプロジェクトの意義、予算立ての正当性などを両者が直接に擦り合わせ、調整するのは難しいことだと思います。

—

**石井** 藏原とともに相談を受けました。昨年度末の小笠原施設長による「ノガミツ プロジェクトも福祉施設の本来業務と言えるよう動いていきたい」という言葉は非常に印象的でした。クライアントワークとアーティストの表現の自律性の両立を考えた時に、コーディネーターがいた方がバランスを取りやすい面もあるとは思いますが、この1年、アーティストと施設とが密に話し合ってきたことで育まれた関係性の強さも感じています。

また、福祉施設に主催が移り、一施設のみで昨年度と同規模のプロジェクトを行うのは難しい面がある、とも感じました。確保可能な予算や人手に合わせ

て規模を縮小するのもひとつの解決策ですが、私の立場としては、広く地域や社会に開かれつつある取組みだからこそ、長期的に社会の中でプロジェクトの意義を確立する努力が必要だと改めて感じています。例えば、プロジェクトのアーティストフィーやコーディネーターの設定根拠は、アート分野においても議論が足りているとは言えません。アーティスト、コーディネーター、職員、ボランティアへのフィー（謝礼や給与）の違いはどこにあるのか。多様な領域の助成元に対し、企画や制作費、フィーの正当性をどう根拠をもって説明するか。十分な費用の確保は、多角的な視点での評価とも連動するのではないのでしょうか。費用面だけでなく、見過ごしてきたことを見直し、領域を超えて議論していくことは、アート分野の更新にもつながると感じています。

HAPSは平成29年度からモデル事業の委託を受け企画や運営をされ、今年度からは「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」を主催される立場ですが、事業の成果や課題は何でしょうか？

**石井** 昨年度の山本さんとは、今後数年続かかもしれないプロジェクトの礎をどうつくるか、ともにコンセプトを言語化し、できる限りプロセスを地域に公開してきました。2年目となる現在は児童館や地域の団体との取組みが始まり、地域にも少しずつ活動が共有されているように思います。東九条の方々が培ってきた歴史や地域性があり、コーディネーターのあごうさとしさん、行政、HAPSと様々な立場の意向が噛み合って進められ、何より施設が継続を決めたこと、アーティストの人間性や努力、表現、それらが総体的に働いて、少しずつ地域の中にこのような取組みの居場所が生まれてきたと感じています。

施設が自主事業を行う際に突き当たる実務的な課題については、来年度以降相談窓口が開設されるので、事業終了後のサポートもより密に行えるようになるかと思います。今年度より一部先行的に動き始めていますが、プロジェクトの展開と並行して事業終了後を見据え、「法人として中長期的なレベルでどうプロジェクトを位置づけていくか」など、これまで以上に専門性を持ち相談に乗りやすくなったと思います。継続のためのモデルが見えてくると、より広がり

を持った、意味のある事業になるのではないのでしょうか。

**藏原** 継続的に時間をかけて顔が見える関係をつくり、お互いの理解や信頼関係をつくることで可能となることがあると、より感じるようになりました。人との関わりは年度で区切られないもので、私たちはアーティストや施設や地域と継続的に関わってゆく姿勢を持っています。それゆえに、事業予算が年度単位で区切られる現状や、行政の状況の変化によっては予算の継続性に保障がないことが課題になります。一般の会社では当然行われる、1年以上前から事業を組み立てて準備しておくということが、現在の運営上は困難であり、課題だと思います。

東九条地域を中心にモデル事業に取り組んできた理由は何ですか？

**藏原** 現在、事業を東九条で取組むようになって3年目で、様々なプロジェクトやアーティスト、劇場などの活動が絡み合い、相互に働きかけ合っているのを感じるようになってきました。

東九条には、排除の問題や福祉改善に取り組みながら、命に関わるたたかいの中でつくられてきた文化、切実さの中で獲得されてきた表現や運動があり、それを土台に「幅広い多文化共生」を実行している場所なのだと思います。HAPSが表現する人を支援し、社会の中でアートのあり方を考え実践する時に、生きることと表現することが結びつき、その切実さが生々しく歴史として積み重ねられてきた地域に関わることは、表現の持つ力や意味を常に考え直させてくれます。そのこと自体に希望も感じられます。

**石井** 東九条は、そこに生きてきた人や外からやってくる人、様々な個と個がぶつかり合いながら、街のあり方を獲得してきたのだと思います。その過程で生み出された、たくさんの表現があります。HAPSは個別の表現の豊かさがより光るよう、個別の相談を軸として動いてきた組織です。このような姿勢を生かしつつ、今後、私たちも東九条の表現や多様性のひとつになりながら、表現と社会のあり方やその関係性を、考えていきたいと思っています。

# 2017年度モデル事業 継続調査報告

——「京都DARC」との協働を経て、舞台芸術の基盤の問い直しへ

文 —— 高嶋慈

2017年度「京都市 文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」では、東九条の高齢者福祉施設「故郷の家・京都」を中心に、ダンサー・演出家の倉田翠が、入居者・施設利用者・職員・地域住民との対話やリサーチをもとに、舞台作品『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』を制作した。本稿はこの事業の継続調査である。

倉田の作品は、地域社会の抱える「問題」をアーティストの介入によって「解決」へと導くのではなく、むしろそうした態度に含まれる搾取の構造や演出家の権力性に対する自己批判と、「当事者を一方的に篡奪<sup>せんだつ</sup>しない」倫理的態度について繊細に問いつつ、倉田個人が出会った人々との水平的な関係を舞台上にのせる点に誠実さがある。対話のプロセスで交わした言葉や附随した出来事を(再編集しつつ)「本人の言葉」として提示する制作態度は、ダンス作品だが、「ドキュメンタリー演劇」的な性質を持つ。

よって本稿では、「どれだけ課題解決にアートが貢献したか」という評価基準ではなく(そもそもそうした「社会的有用性」でアートは測れないし、生産性・効率性を唯一の基準とする資本主義社会の外部にあるべきである)、東九条の地域との出会いや故郷の家・京都での公演が、その後の倉田自身にどのような影響や意識の変化を及ぼし、創作手法として深められていったかに焦点を当てる。具体的には、筆者が実見した3作品(上記作品の再演、薬物依存症回復支援施設京都DARCとの協働、俳優・ダンサー回帰)について、倉田へのヒアリングと作品分析を行う。

## ● モデル事業以前の倉田の活動概要と作家性

まず、京都市のモデル事業に関わる以前の、倉田のアーティストとしての資質や方向性を確認しておく。(旧)京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科を卒業した倉田は、自身とテクニカルスタッフで構成される団体「akakilike」を2016年に立ち上げる。akakilikeの特徴は、演出・振付・出演を倉田が担い、作品ごとに外部の出演者を迎え、主宰の倉田・テクニカルスタッフ・出演者が対等な関係で作品に関わることを目指す点にある。また、2010年より継続的に、ギャラ

リーでの身体展示企画『今あなたが「わたし」と指差した方向の行く先を探すと』を開催。倉田を含めた出演者がギャラリーに常駐し、普段通りに振る舞うという試みを通して、「日常的な『素』の状態と、見られることを意識した『フィクション』の境界線はどこか」を探った。こうした倉田の活動の特徴は、ダンスを通して他者と向き合うこと、水平的な関係性への志向、日常/フィクションの境界を問うことにある。

一方で倉田の作品には、個人的な痛みや葛藤、暴力性が内在する。例えば代表作のひとつ『家族写真』(2016)は、「一家団欒の象徴」であるテーブルを囲み、父と母、兄と妹、父母の若い頃あるいは兄妹の成長した姿と思われる「3組の男女のカップル」によって、不穏な家族像が描かれる。バラバラに解体され、孤絶した時間を生きる家族の成員が一堂に会するのは、儀式めいた「記念写真」が撮影される、凍りついた瞬間だけだ。のたうつように激しく踊り、テーブルに横たわって盛大に吐血する倉田に、「兄」役の写真家が馬乗りで容赦なくシャッターを切る。倉田にとって「家族」は癒しや包容の場ではなく、むしろ不調和と痛みであり、文字通り犯されるような傷を刻みつけるのだ。

## ● 「社会包摂型」「福祉系」への葛藤と、意識の変化

京都市のモデル事業に関わる中で、当初、倉田には、「社会包摂型」「福祉系」のアーティストというイメージで見られることに対する戸惑いや違和感、葛藤があったと言う。それはなぜか。

### 【倉田へのヒアリング】

**倉田** まず、私自身の性格として、人と関わる際、「作品は作品」として割り切って線を引けるタイプではありません。例えば、路上生活者のおじさんたちに惚れ込んで、一緒にパフォーマンスするカンパニー「新人Hソケリッサ!」をつくったアオキ裕キさんみたいに、全力で振り切ってしまう素質が自分にもあるから、立ち入るのが単純に怖かったんだと思います。



もうひとつは、母親が養護学校の教師をしていて、「24時間テレビ」的なものにすぐ抵抗があったことも影響しています。「24時間テレビ」は実際に基金が集まっているから成功だとは思いますが、障害者が頑張る姿を見せて感動のストーリーに仕立てるといふわかりやすさには違和感がありました。

このように「自分が好きでやっしまえる気持ち」と「そうなりたくない」というふたつの相反する気持ちがあった。でも、京都市のモデル事業で作品をつくって、翌年にロームシアター京都で再演して、その葛藤に向き合ったおかげで、逆に「自分は『社会包摂型』『福祉系』ではない」とはっきりわかったし、自分がどういう作家なのかも明確になりました。

「社会包摂型」「福祉系」と見られることに対して、アーティストが違和感を持つ理由は、複数のポイントが絡み合っていると思われる。行政にとって都合のよいようにアートが利用されてしまうこと（アートの道具化）に対する抵抗。アートとしての評価軸ではなく、「どう福祉の役に立ったか」や数値的な評価が下される違和感。「社会的弱者に優しい」「政治的に正しい」が、「作品としてはつまらない」ものになってしまう危惧。（特に当事者が出演する場合）「当事者に対して、演出家が一方的に搾取している」という（自己）批判。こうした点について、倉田はどう考えているのか。

#### 【倉田へのヒアリング】

**倉田** 搾取の問題については難しいと思います。舞台作品には、どうしたって搾取の構造がある。出演者に対してもそうだし、私自身も自分の作品に搾取されます。ただ、ダンサーや役者は、それを覚悟してやっている人たちだからいいんですけど。

でも今回、搾取にならないために、特にマイノリティと言われる人たちとやるとはどうか、めちゃくちゃ考えました。でも結局は、搾取なんだと思う。それを許してくれるところまで関係をつくる以外、解消する手立てはありません。それは、『はじめまして こんにちは、今私は誰で

すか?』の後につくった、京都DARCとの協働にもつながっています。

東九条の故郷の家・京都の入居者や施設利用者、職員、地域住民と、薬物依存症回復支援施設京都DARCの場合では、コミュニケーションの取り方は違ってくると思われる。具体的に倉田は、『搾取』を許してくれる関係性をどのようにつくっていったのだろうか。以下、上演作品ごとに、作品内容とともに見ていく。

#### ● 『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の再演

開催日 2019年2月15日～16日

会場 ロームシアター京都 ノースホール

前年1月に故郷の家・京都で上演した同タイトル作品の再演。出演者は、倉田、故郷の家・京都入居者、京都市担当職員、在日コリアン4世の女性に加え、新たに京都市職員の家族と東九条地域の住民1名が参加した。冒頭と終盤で、車椅子に乗った認知症の高齢男性に倉田が向き合ってダンスを見せるという反復構造の中に、各出演者と倉田が「一対一」で対面する会話や東九条各施設での交流の記録映像を見せるという基本構成は同じである。倉田を「覚えていない」認知症男性に対して、「忘れていてもいい」と応じ、「ただ、今日の前にいるあなたとこの一瞬一瞬を共有するためにダンスがある」という倉田が見せる踊りは、ダンスの悦ばしい本質を示し、忘れがたい。また、倉田と同年代の在日コリアン4世の女性が対面するシーンでは、「字幕も通訳もない韓国語の長いモノロー



photo: Kai Maetan



photo: Kai Maeani

グ]が文字通り「他者」を音響的に現前させるとともに、在日である女性自身もまた、日本社会/韓国社会どちらに対しても完全に溶け込めない存在であることが(日本語で)やりとりされる。

新たなシーンの追加に加え、より本質的な変化は、倉田自身と父親の葛藤を示す台詞の挿入、倉田の幼少期の写真のプロジェクション、京都市職員の娘ふたりの登場によって、「家族」という軸が浮上し、倉田自身が「自分の作品」として積極的に引き受けようとした姿勢が見えた点だ。京都市文化芸術企画課の男性職員が登場するシーンでは、「文化芸術で共生社会を実現する」取組みについての説明とともに、自問自答的なモノログが語られる。「アーティスト/施設入所者/スタッフ/市職員」といった既存の枠組みのままではだめなのではないか。一方で、「社会包摂」の仕事に関わる自分は、自身の家族や子育てを大切にしているだろうか……。淡々と語る男性は、足元に横たわった倉田に突然、罵声を浴びせ始める。「ダンスなんて訳のわからないことをせず、きちんと就職したらどうだ。父さんは、35年間働き続けている」。ここでは「親からの圧力や無理解」という倉田自身の抱える問題が提示される。続けて、背後のスクリーンに、七五三、誕生日、バレエの発表会といった幼少期の家族スナップが投影されると、倉田はもがき狂うようなダンスを展開し始める。「幸せな家庭」の残像と、身体でしか表現できない愛憎入り混じった感情。

一方、京都市職員の男性は、スーツから普段着に着替え、「パパ」と駆け寄り、娘たちとサッカーに興じる。彼らが倉田と一列に並んで座り、スクリーンを見つめる後ろ姿は、「子どもを挟んで座る夫婦」のように見え、擬似的な家族を形成する。「家族」の暴力性と同時に、「自分も一員として居場所がある」穏やかな肯定と憧憬をさらけ出した。ここには、自分自身の言葉で語る出演者たちの対話相手を務めつつ、自らは安全地帯に身を置いたままでは、やはり非対称性があるのではないかという自己批判と、自身の抱える内的葛藤に向き合う誠実さがある。

#### 【倉田へのヒアリング】

**倉田** 『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』は、作品をつくる出発点ですが、まず個人としての関係性をつくることから始めないとだめでした。京都市職員の倉谷誠さん、東九条地域の特定非営利活動法人「京都コリアン生活センター エルファ」元職員の丁春燁さん、それぞれ本人として出演してもらいました。それを1回やったから信頼関係ができたし、私の生い立ちを語るよりも私のことを理解してくれるようになりました。だから、「もう一度、ロームシアター京都で私の作品として上演したい」と言った時にも出演してくれたんです。

ただ再演する際には、もう一つ踏み込んでいます。観客に「一対一の関係」であることをわかりやすくするために、倉谷さん自身の家族を入れるなど、個人の方に入っていました。京都市の事業、東九条、在日コリアンといった大きい枠組みから、スケールを小さくしたとも言えます。

倉谷さんや丁春燁さんとは今でもプライベートで会いますし、認知症の入居者の方にも、いまだに会いに行きます。出会ったきっかけは京都市の事業ですが、作品云々を超えて、そういう関係の人になっています。

#### ● 薬物依存症回復支援施設「京都DARC」との協働

タイトル『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、

夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、  
永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』

開催日 2019年8月17日～18日

会場 京都芸術センター

『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の経験を経た倉田の大きな変化は、薬物依存症回復支援施設・京都DARCのメンバーと協働してつくった舞台作品に表れている。それは、舞台の専門的な訓練を受けていない人々、特に

社会から周縁化された「マイノリティ」性を持つ人々と協働する創作態度においても、実際の京都DARCのメンバーとの出会いの面においても言える。倉田によれば、『はじめまして〜』の制作過程で知り合った東九条地域の住民から誘いを受け、川掃除の地域イベントに参加した際、ボランティア活動で参加していたDARCのメンバーに直感的に惹かれ、声をかけ、すぐに施設に見学に行った。「作品づくりのために潜入しよう」といった下心はなく、「単純に居心地が良かったから」毎週通うようになり、メンバーと仲良くなっていったという。川掃除での出会いから約1年半後、グループセラピーのミーティングと食事の共同作業という「DARCの日常」を再構成した舞台作品『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』が上演された。

作品の冒頭では、DARCの利用者とスタッフ計13名と倉田が、白いYシャツに黒いスラックスという同じ服装で登場し、長机に一列に座る。施設移転についての説明会での質疑応答が（地元住民の「反対意見」を空白にしたかたちで）再現される。続いて彼らは、舞台前面に一列に並び、服を脱いで下着姿になり、頭上から落下した普段着に着替える。制服的な匿名性から、「個人」であることを印象づけるとともに、何人かの体に入れ墨があることに否応なく目が行く。

その後、DARC利用者たちは、バトンリレーのようにマイクを渡しながら、日々のミーティングの光景を淡々と再現していく。薬物についての体験談、刑務所への入所、自殺未遂、生い

立ちや家族事情、日々の出来事、家族への感謝が語られる。DARCでは「言っぱなし、聞きっぱなし」が原則であり、ほかの者は相づちや質問を挟むことなく、スマホをいじったり、だるそうに寝そべったり、無言で食事の準備を進めていく。一方、倉田は彼らと交わることなく、

photo: Kai Maetani



独り言のように手足を動かして踊り、ジョギングのように走り回る。強迫的な反復は、輪に入れない疎外感を無言でぶつけているようにも見える。

大半の時間はやや散漫に流れていくが、緊張感が一気に頂点に達するのが、倉田が包丁を握りしめ、出演者のひとりと無言で対峙するシーンだ。しかし倉田は包丁を持ったまま、メンバーたちが食材を切っているテーブルへ向かい、作業に加わり、ともに食卓を囲む。終盤、ある出演者が「妻と社交ダンスを踊りたい」という叶わぬ願望を語り、倉田は彼の望みを代行するように、「不在の誰か」とダンスを踊る。「輪の中に入れない」疎外感や逡巡から、「ともに食卓を囲む」時間の共有を経て、他者の願望を内在的に生きること。それは、倉田が出演者たちと徐々に関係性を築いてきた、約1年半の時間の濃密な「圧縮」である。

また、「薬物反対」「更生の感動的なドラマ」といったわかりやすいメッセージを伝えるのではなく、「薬物依存症者」としてひとくりにされがちな彼ら一人ひとりの固有性や人間性に焦点を当てた点も評価できる。包丁のシーンに加え、倉田は序盤と後半で2回、「私は、かつて合法的に人を殺したことがあります。私のことは、怖くないですか?」という台詞を口にする。彼らの「ヤバさ」を演出するのではなく、むしろ倉田自身が「ヤバさ」の部分を引き受けようとする。また、(倉田が若い女性であることから)「合法的な殺人」とは「中絶」を指すのか、「殺人」の線引きはどこにあるのかと問いかけると同時に、「2回同じ台詞を繰り返す」という仕掛けは、意味の強調/「これは台詞=フィクションである」という両面性を持ち、「ドキュメンタリー性の強い作品=現実そのまま」という観者の思い込みを解除させる機能も果たしている。13人という大人数の、かつ舞台経験のない出演者を配置する構力とともに、倉田の繊細な配慮がうかがえた。

#### 【倉田へのヒアリング】

**倉田** この作品をつくるに当たっては、京都DARCと一緒に生活したことがものすごく大きいです。コロナ感染予防のために「外部の人は施設内に入



photo: Kai Maetani



れない」と言われて初めて「あ、私は外部の人か」と思ったくらい馴染んでいました。「舞台の人」としてではなく、「ただの私」としてそこにいた。単純に楽しかったし、「出ていけ」とも言われませんでした。仲間と思って接してくれているし、通過してきた時間の中で、私が演出家であるとか作品がどうかではなく、「私」という人間を理解して信用してくれていたから、「搾取なんじゃないか」という不安や、「俺たちのことを利用しているのでは」という気持ちはお互いにまったくなかった。作品をつくった時には、一人ひとりに「回復や社会復帰のためにやっているわけではない」と話しました。搾取の問題については今も考えていますが、気にならなくなりました。気持ち悪さはもちろんまだ持っていますが、そういう気持ちを持って関わらないのはもったいないと思えるようになりました。それは、京都市のモデル事業をやったおかげだと思います。そうでないと、DARCと舞台をやろうなんて思わなかった。

DARCのメンバーにとってもおもしろいんだと思います。演出家と知り合いになるなんてまずないから。この作品をつくった後も、彼らとの個人的な交流はずっと続いていて、私の舞台を見に来てくれたりもします。そういう交流はすごくおもしろいし、得るものも大きい。一緒に作品をつくった後の関係にまで影響が及ぶのは、ダンサーや役者ではほとんどないから。作品の素材として使う場合は、稽古場でいろんなことを聞くけれど、稽古場以上の関係になってはいけないと思うから、ダンサーや役者のプライベートには関与しません。逆に、DARCのメンバーのような舞台のプロじゃない人たちとは、作品制作以外の時間が続きます。これは大きな違いで、私にとってすごく良かったです。ただ、責任はすごくある。ダンサーや役者とはその作品だけの関係だから、責任を取らなくてもいいのですが、DARCとは「さようなら」にならないので。

この作品はすごく評判が良くて、今年、再演が決まったし、DARCのメンバーも喜んでくれました。その反面、施設移転の反対運動も激化している。私はそれに対しては、ただ、作品をつくることしかできません。「彼らの頑張る姿を伝えたい」とは思わない。ただ、彼らがこうして生き

ていることは、関係なく生きている「普通の」人にとっても関係ないことではないんじゃないかとは思っています。

この作品をつくる中で、私自身にも大きな変化がありました。ひとつは、舞台上であんなに踊れたり、脱いだりできたこと。普段は絶対脱がないから。舞台に立つ人として、彼らが私を変えてくれるものがあります。もうひとつは、「一人前のご飯を他人と一緒に食べる」ことができたこと。私は長年、摂食障害で、薬物依存症と似ているところがあります。治るものじゃないから、ラーメンとか定食屋みたいに一人前の食事を出される店はいまだに怖くて入れません。でもDARCでは、みんなで食事をつくって、「倉田さんもご飯食べていって」と言われて、最初は怖かったけど、ご飯を少量にしてもらって、一人前の食事を食べることができました。昔の私を知っている人は、作品の食事シーンを見てびっくりしていたけど、私が残しても誰かが食べてくれる、この人たちとだったら、私は安心してご飯が食べられる。観客にとってはわかる必要はないけど、私にとってはすごく大きな変化でした。

## ● 俳優・ダンサー回帰と実験的手法

タイトル『明日で全部が終わるから今までにした最悪なことをしようランド』

開催日 2019年11月8日～10日

会場 THEATRE E9 KYOTO

京都DARCとの協働を経た後、「出演者をダンサーや俳優」にほぼ絞って上演されたのが、『明日で全部が終わるから今までにした最悪なことをしようランド』である。一見、真逆の方向性に振り切った（「舞台作品」としては「通常」なのだが）ように見えるが、この作品の「異常さ」は、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』と京都DARCとの協働を抜きにしては出現しなかった質のものである。



photo: Kai Maetani

本作の出演者は、倉田自身を含む計10人で、ダンサーと俳優でほぼ構成される(1名のみ一般人が混ざるが、終盤まで舞台前景に横たわったまま、動かない)。本作の特異性は、「台詞」「役」「振付」「線的な時間設計としての

ストーリーやシーン転換」がなく、出演者たちは、舞台上で「俳優」「ダンサー」として存在するための安全装置を解除された状態で、「決められたタスク」とその狭間の「即興的な反応」との間を行き来する。個々がバラバラに断絶したまま、舞台上で入れ子状に「見つめる」視線に晒され、統率を欠いた暴力的でカオティックな交通が行き交う。ウロウロと徘徊しながら、「僕は自分の誕生日をFacebookに記載しない。なぜなら自分に関心のない人間に誕生日を祝ってほしくないから」という語りを垂れ流す男性。誰も彼の言葉に関心を払わず、その訴えは徐々に激高に達し、裏返しの自己承認欲求をさらけ出す。別の女性は、「さっちゃん」という呼びかけを懇願するように繰り返すが、当の「さっちゃん」は応答せず、身体を強張らせて身動きできない。激しいダンスを繰り返す。ペットボトルの水を挑発的に飲み干す者。羽織ったウィンドブレーカーに、天井から落下する水滴を受け止め続ける者。壁際の椅子に座ったまま、ただ見守る者。「ワンワン」という犬の吠え声が警告のように発せられ、舞台前面には死体のように身体が転がる。「今までにした最悪なこと」の告白は、「不当な悪口で解雇された会社を恨み、早朝に事務所に忍び込んで器物を壊した」というものだが、その話は別の出演者が引き継いで反復され、語りの主体も話の真偽も曖昧化されていく。

自己承認欲求と、コミュニケーションの断絶。自閉的な回路の中で、暴力性が増幅していく。私たちは、集団の中で、どのように「個(孤)」としてられるのか。どのように他者と同じ場所に立ち、あるいは拒絶されるのか。「舞台」が成立する基盤をことごとく破壊しながら、自身にも過酷な時間を課す倉田の実験性が浮かび上がる。

#### 【倉田へのヒアリング】

**倉田** 京都DARCとの協働を経て、大きな変化がありました。まず、ダンサーたちに対して、劇的に「おもしろくない」と思ったこと。DARCのメンバーは壮絶な人生を送ってきた人ばかりで、立っただけで「何かある」と思わせるオーラがあります。彼らの強度とは何か。ダンサーでも役者でもなく、すごく鍛えられて舞台上に立っているわけでもないのに、強度があるのは、やっぱり生きてきた人生だと思います。たかだか20代の若いダンサーが、そこに勝てるわけがない。

でも、彼らの強度に勝てないといけなかったと思います。だから、この作品では、徹底的に「あなたは誰なのか」とか「この場で自分が、役者やダンサーとしてどう判断するのか」を問いかけてみました。もちろん、細かい構成やルールはものすごくあるんだけど、「舞台上で起こったことに嘘をつかず、どう対応するのか」の判断を各自に全部任せています。実際に本番でも何が起るかわからなくて、「ワンワン」という鳴き声をやめなかった役者に、衝動的にペットボトルの水をぶっかけた子がいたり、私が「この位置に立っていて」と言ったダンサーが、急にふわっと踊り出したり。そういう「え？」って思う瞬間が起きても、びっくりすることに嘘をつかなくていい。どう行動するか、自分で決めていい。嫌だと思ったら、やめてもいい。これに賭けたのは、DARCとの経験がなかったら絶対なかったと思います。

こういう作り方は、すごく難しい。出演者たちを相当信用してやる必要がありますから。観客の反応は賛否両論でしたが、DARCとの経験を越えるためには、ダンサーや役者を信用してみないことには、作品をつくれ



photo: Kai Maetani

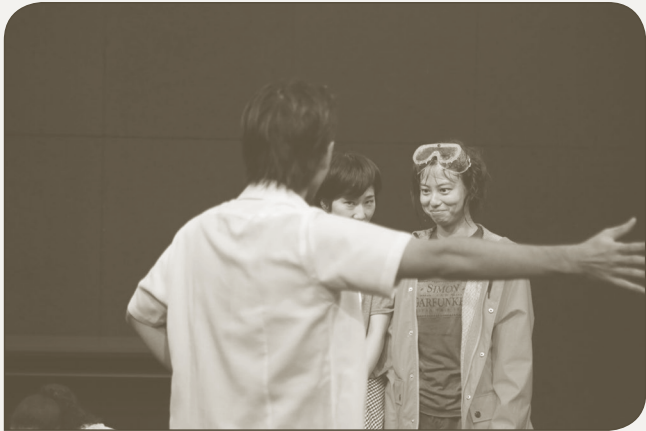


photo: Kai Maetani

ないと思いました。『はじめまして〜』やDARCとの経験がなかったら、ダンサーや役者を自分の手の内に置いて、もっとコントロールしてしまったと思う。

ダンサーや役者は「振付」「役」に寄りかかるものだし、それが仕事。でも私は、そこに興味がないんだと思います。例えば、動きだけに集中していられたらすごく美しく動ける出演者に対して、「台詞を言わなければいけない」という負荷を与えました。DARCのメンバーみたいに「どう生きてきたか」ではなくて、彼らが今までやってきた「役者やダンサーであること」に対して負荷をかけています。明確な役柄や振付がなく、自分自身と常に揺らいでいないといけない状態をどう保てるか。以前から、そうやってつくってきたつもりでしたが、やっぱり構成や振付にすごく安心していました。今回、私も出演者のひとりとしてみんなと同じラインに立ってみて、ガチガチに構成も振付もない状態はすごく怖いと思いました。

実は、DARCと作品をつくった後、「自分はもう舞台の人とは一緒に作品をつくらないんじゃないか」と思ったんです。ダンス作品や演劇を見ても、おもしろくなくて。でも私はダンスをあきらめたわけじゃなくて、自分がつくるのはダンス作品だと思っているから、ここで1回、ダンサーと一緒にやっておかないといけないと思いました。その意味で、もう一度自分を見つめ直す作業になりました。

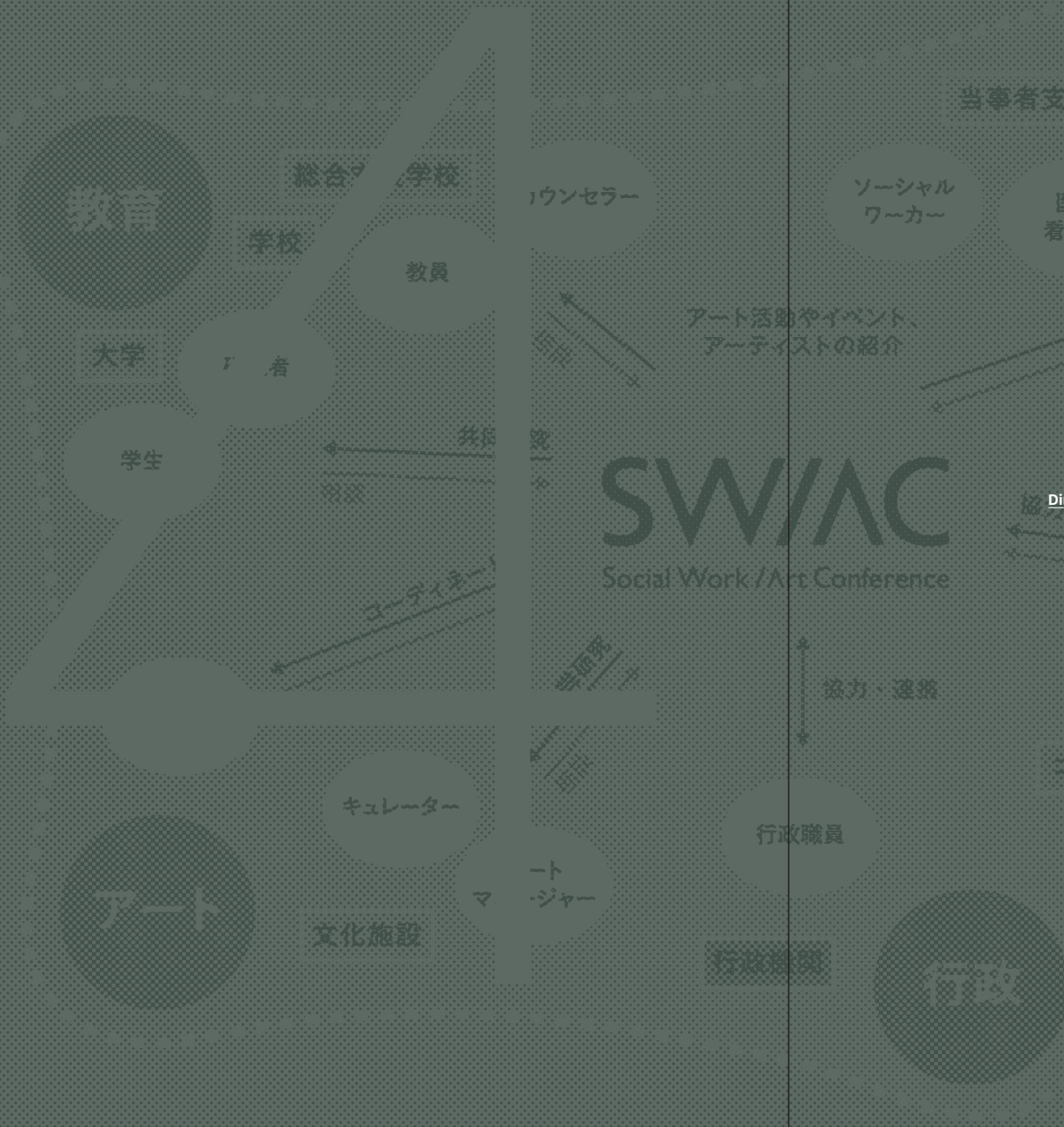
## ● まとめ

以上のように、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』初演以降の作品の分析とヒアリングから、「舞台芸術のプロ以外の人と、個別的で水平的な関係性を構築しながら、作品をつくる」創作態度への転換を経て、再び舞台芸術の基盤を問い直す方向へと、段階的な影響や深化が見られた。また、「搾取」

の問題について考え続けることで、(構造そのものはなくならないが)「それを許してくれるところまで関係をつくる」という倉田自身の倫理的指針が自覚的に明らかになった。さらに、京都DARCとの協働の経験が摂食障害の緩和をもたらしたように、創作においてのみならず、倉田への内面的な影響も大きいと言える。

アーティストが、自分の関心以外の「外」の社会に出ていくことは、それに対する批判についても反省的に考え、外側からアートがどう見られているのかを意識する機会になる。それは、アーティスト自身の表現を深める糧となり、アートそのもののより豊かで複雑な変革は、私たちの生きる社会へと還流的につながっていくのではないだろうか。





**Director's Note** HAPSは従来より相談事業(若手芸術家の居住、制作、発表や、彼らを支える方々からの各種相談への対応)を行ってきたが、それを拡充させて文化芸術により社会課題の緩和を目指す取組みに関する相談を受けつける「Social Work / Art Conference (SW/AC)」を開始することとなった。ディレクターは奥山理子氏である。拠点を京都市南区東九条東山王町に準備してきたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、来年度の然るべき時期まで開設を待つこととした。事業趣旨は、各専門家の知見をいかしながら、社会課題を探求し制作するアーティストや、より開かれた活動を目指す事業者、文化施設などからの相談への対応で、対象者は、作品制作の一環で福祉施設をリサーチしたいアーティスト、利用者の中活動の充実のためアートを取入れたい福祉施設職員、施設内のアクセシビリティサービスを向上させたい文化施設職員、「社会包摂・共生社会」と「アート」の関係性を学びたい大学生などを想定している。相談の流れは①相談の受付～②面会(必須ではない)～③調整～④回答、となる。SW/ACの目指すところは相談機能にとどまらず、アートを媒介とした多様な社会セクターのネットワークをつくり、共生社会実現のための拠点となることである。

# 真のヒューマンサービスを目指して

## —— 相談事業「Social Work / Art Conference」の出発

文 奥山理子

(「Social Work / Art Conference」ディレクター、  
みずのき美術館キュレーター)

### 帰京

もうだいぶ前のことのようにも感じるが、2018年の晩秋、HAPSが取組む共生社会事業で新規に立ち上げることとなる相談事業への参画をと、京都市から声をかけていただいた。その当時私は、京都で障害者支援を行う社会福祉法人が運営する美術館でキュレーターとして活動しながら、この数年は東京にも拠点を置き、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックの機運醸成の役割を担う文化プログラムのひとつに、コーディネーターとして関わっていた。この事業もまた、共生社会をテーマとした内容であった。そのプロジェクトの拡充に伴い年々東京での仕事の比重が増していたため、京都市の担当者との初回の打合わせも、わざわざ東京に出向いてもらうかたちになってしまった。しかし東京へ来て3年が経過したその頃の私は、活動拠点を京都に戻したいという思いが少しずつ募り始めていた時期でもあったので、図ったようなタイミングで訪れたこの申し出を受けるまで、あまり時間は必要としなかったことを覚えている。

### 使命と役割を再考する

私は、クライアントと呼べるほど明確な対象を持つ仕事をしてきたわけではなく、誰かのニーズを知り、その人のニーズに合うことは何だろうと知恵を絞り、そして実際に一緒にやってみることで、本人がそのきっかけ、プロセス、ゴールのどこかのタイミングで、一瞬でも幸せを実感することがあれば良いなと願い、伴走する、そのような関わり方に、自身との相性の良さを感じてきた。「何をやる

か」よりも、「誰と」「どのように行るか」に力点を置きながら、これまで畑を耕したり、舟をつくったり、絵を保存したり、ダンスを踊ったりしてきた。

しかし、ひとりの人間が他者を伴走できる容量には限りがある。しかも、自分で理想を思い描くよりもその限界は随分と手前でやって来る。ありがたいことに、自分の携わるプロジェクトの数や規模が年々広がりを増した一方で、一つひとつに直接関与できる時間は少なくならざるを得ない。そうすると当然、手応えや実感までもが薄まっていく。そんな中で、勘(それをいつかは「経験」と呼べるのかもしれない)を頼りに、素早く合理的なテクニックを発揮できるほど、私という人間は効率良くは仕上がっていないようだった。次第に、判断を迫られる局面で逡巡することが増えていき、伝えたい思いや言葉が雲を掴むように手元からすり抜け、曖昧になっていく感覚に苛まれるようになった。

「企画の必然的な立ち上がり」を抛り所としてきた私にとって、逡巡の時間は自信を喪失させることにつながった。しかしどこかで、“ためらわせる感覚”の正体こそが、私自身がこだわってきた部分ではないかという思いもあった。そのような時期に訪れた、新規事業への参画。そして、この新たな相談事業が、人々の暮らしや活動を、芸術を通してつなぐインフラとなるよう機能させたいというビジョンを持っていると聞いた時、ここでもう一度自分の使命とは何かを見つめ、果たすことのできる役割を専門性として見出してみたいという強い思いに駆られた。

### ソーシャルワークからの学び

2019年は開設準備の1年に充て、目指すべき相談機能のイメージを掴むため、京都市内を中心に、行政の福祉機関や、子ども、障害者、高齢者、ひきこもりなどの各支援施設、市内各地で活動する市民団体や大学の研究者、ソーシャルワーカーなどへのヒアリングを重ねた。その中でも、開設準備においてソーシャルワーカーへのヒアリングを重要な位置づけと考え、京都市内で病院に勤めたりフリーランスとして働いたりする4名のソーシャルワーカーの方たちに声をかけ、現状や相談対応の基本を知るため、何度か勉強会の場を持つことができた。

なぜ、ソーシャルワーカーへのヒアリングを重視したか。それは、私たちが扱うこととなる「相談業務」の本質と、これから構築しようとする新たな専門性の萌芽を、人と社会環境との間に立ち、その両方に関与しながら支えるヒュー

マンサービスである「ソーシャルワーク」に出出したいと考えたからだ。

そもそも、“ソーシャルワーカーたちの勉強会”には、私の原体験が少なからず関係している。私の母がソーシャルワーカーで日本ではそれほど知名度が高かったとは言えない1980年代当時、ソーシャルワーク(とくに医療ソーシャルワーク)という専門性を高めようと集まった相談員たちが、互いのケースを持ち寄り、定期的な勉強会が重ねられていた。今は130名を超える会員を持つ「京都医療ソーシャルワーカー協会」の草創期である。幼かった私は母に連れられ、夜に会議室を借りて実施されるその勉強会の片隅で、いつも絵を描きながら過ごしていた。もちろん小さかったので、そこで何が議論されていたのかはわからなかったが、大人たちが、人のために真剣に議論し研鑽を積む姿は、幼かった私の目に自然と目標となる大人の像として映っていた。今回の勉強会でも最初に声をかけたのは、同協会の現会長であり、私を子どもの頃から知る人である。あれから30年が経過し、現在、こうして私がアートという分野を介しながら、彼ら/彼女らの専門性から自身の活動を構築しようとしていることに、なんとも不思議な巡り合せを感じる。

## ソーシャルワークとアート

しかし、ソーシャルワークの起源と専門的な実践方法に深く共感しながらも、現在では日本のみならず世界的に見ても、その質の確保が大きな課題となっているようである。特に日本においては、法律や制度の改定に伴い、福祉分野への民間企業の参入や、労働者の非専門職化が著しく進んでいる。理想では十分な教育的知識と技術が求められるながらも、実際の現場は、既存の福祉サービスの枠組みの範囲内での効率の良い対応が優先される風潮にあるのだという。そうした背景には、福祉ニーズが多様化し複雑化していることが挙げられ、じっくりと時間をかけた根気強い関わりは、現場からすれば、もはや非現実的とも言えるのだろう。

また、ソーシャルワークや社会福祉の原理に基づく従来の実践が、現代社会で生きる人間の本質を的確にとらえ、バランス良く支えることができると言い切れないのかもしれない。支援が、「寛容」、「優しさ」、「寄り添い」に依存してしまった時、多様で複雑な人間の現実世界への洞察の妨げとなる場合だってあるだろう。

そんな矛盾に葛藤を感じる時、私は、アートを必要とするのだ。

ここに、「ソーシャルワーク」と「アート」とを引き寄せ、また、拮抗させる名文を引用してみたい。

「ソーシャルワークは、人間性の向上を目指し、社会的正義、人間の尊厳や価値の擁護、人間関係の強化といった理想を支える信念やシステムの伝統に根ざした、価値観に基づく職業である。その反対に、アーティストは、おそらく同様の価値を認めているだろうが人々の反応を引き起こすために、主題に皮肉を込め、問題化し、緊張を煽るような作品をつくる」

[Pablo Helguera, *Education for Socially Engaged Art: A Materials and Techniques Handbook*, Jorge Pinto Books, 2011]

このテキストの中に、私は、これから始まる相談事業の主題を見出している。私たちは、生きている以上、日々、より良くなっていきたいと願い、その無意識の願いが脅かされる事態に遭遇した時、打ちひしがれ、苦しみ、時に破綻を来したりもする。そのような時、あるいはそのような現実がいつか起こり得るかもしれないことを学び取るためには、「支援」や「癒し」の術だけが真の救いになるとは限らないだろう。現実には潜む問題に目を背けずに向き合うこと、自身の中に巢食う恐れや醜さを知ること、それによって身体中に緊張や憎悪が走る経験をすることもまた、人間を人間として充実させる上では必要なのだと思う。「アート」は、そうした向き合い難いものごとを多様なイメージとして置き換え、可視化してくれる。しかもただイメージを与えるだけではない。アートは、個人(アーティスト)が生み出したイメージを社会化させる根拠となる、非常に豊かな言葉も持ち合わせている。それがコンセプトであり、批評であると私は考える。

10代の頃、私は、学校という社会に馴染めず、休日の多くの時間を(時には学校へ行くべき日も含まれていた)重度の知的障害のある人たちが暮らす施設で過ごした。長閑な田園風景に囲まれ、そこで暮らす人たちと過ごす穏やかな時間があり、彼ら/彼女らの存在に当時の私は心の底から安心感を覚えることができた。しかし同時に、ここが社会の周縁に存在していることも知っていた。その頃から私は、福祉施設で過ごすということが「哲学する」時間そのものであると強く感じるようになった。厳密には、その頃そこまで明確に意識化できていたわけではなく、しばらく経ってから思い返す中で、あれは「哲学していた」のだと思うのだ。しかし、福祉施設の中では、そこで目にする光景やそこで暮らす人たちとの得難い交流から生まれたこの抽象的な感覚を、納得できる言葉で解説してくれる機会には出会わなかった。その代わりに、少しずつ関わり始めた「アート」の世界は、こうした感覚に極めて近いイメージを、鋭く言い表そうとする「言葉」に満ちているということを知った。



私はこれから、人が生きる社会について、福祉施設での「哲学を促す光景」を手がかりに、アートのコンセプトや批評の中で獲得し始めた「言葉」を用いて考察し、そして様々な実践を重ね続けることで、これまでは不確かだった「私の仕事」を裏付ける専門性を構築することになるだろう。その実践こそが、これから始まる相談事業そのものである。

### 「Social Work / Art Conference」の開設

自分のこれまでの経験をこすり合せ、その摩擦で熱を起すようにして構想を練ってきた相談事業は、その名称を「Social Work / Art Conference」(ソーシャルワーク・アートカンファレンス)とした。「相談」の原理をソーシャルワークから学び取りながら、「アート」だからこそ可能にする創造的な「対話の場」として相談の時間を育てていきたいという願いを込めている。

具体的には、大きく3つの軸に沿って始めていきたい。

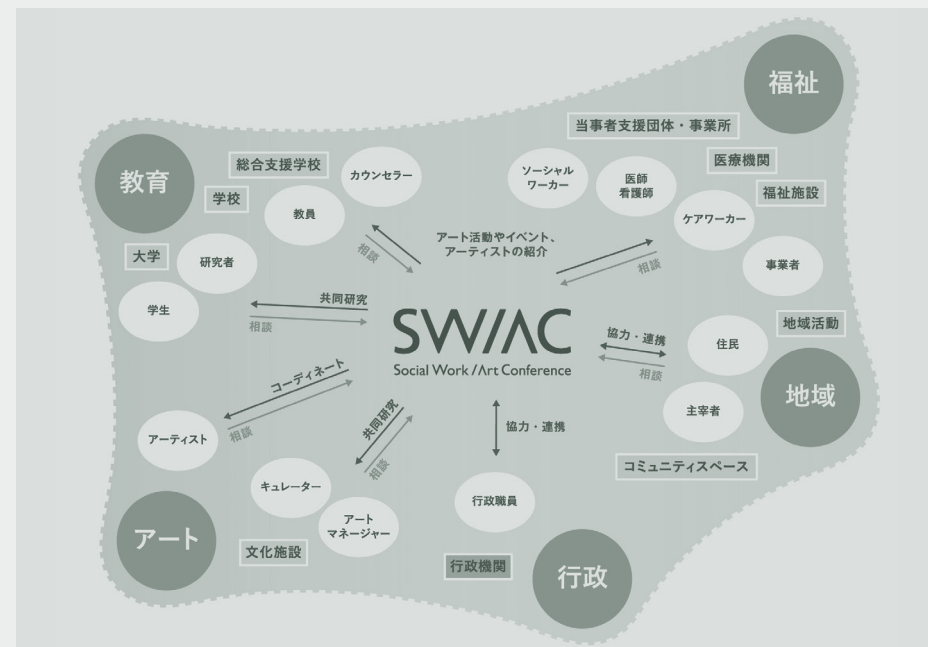
ひとつ目は、事業の基本となる個別相談である。アートを取り入れてみたいが、どこから始めたら良いかわからないと悩む福祉事業所、逆に福祉分野へのリサーチを検討しているアーティスト、あるいは新規に共生社会や多様性をテーマとした事業を始めようとする文化施設など、これまでは「どこに問い合わせたらいいだろう?」と躊躇してしまっていたテーマに対し、まずは最初の問い合わせ窓口として利用していただきたい。

ふたつ目は、共同/協働事業である。これは、既存の情報網や経験値から相談に対応するのではなく、先進性を感じさせる案件や、より丁寧なサポートを必要とする案件に対して積極的に関わり、今後のモデルケースとなり得る事例をつくるプロジェクトタイプを想定している。この場合、決して数多く扱えるものではないが、今までに実現し得なかったプロセスや成果につなげていきたいと考えている。

三つ目はアウトリーチ活動である。そもそも「Social Work / Art Conference」はまだ産声を上げたばかりだ。社会資源のひとつとしてまずはその存在を知ってもらわなければならない。講演会への登壇や、相談会の実施だけでなく、ニーズを積極的に掴むためのヒアリングや調査などにも積極的に取り組んでいきたい。

HAPSがこれまでの活動を通して培ってきた経験と関係性に、私の経験が加わり、さらにこれから「Social Work / Art Conference」として出会うすべての人や機会を大切な資産としてとらえ、社会の様々な場所で生じ、孤立や

棚上げされてきた「課題」や「問題」を、創造的で発展的な「問い」や「テーマ」として転換できるような関係性を築き上げていきたい。個人的には、先に挙げた事業の3つの軸からあっさりとはみ出してしまうような難題に、頭を悩ませウンウンと唸りながら、奔走できることを楽しみにしている。



### コロナ禍での出発

こうして「Social Work / Art Conference」の始動を令和元年度の目標に据え、開設も間近というところで新型コロナウイルスが猛威をふるった。もちろん、ささやかながら計画していた開設記念のイベントは中止となり、それどころか私たちの日常も、マスクの着用、リモートワーク、余暇活動の自粛を余儀なくされている。医療現場は逼迫し、芸術家やそれを支えてきた技術者たちは困惑の只中にある。またその間にも、Black Lives Matterに代表される人種差別、ネットでの誹謗中傷、家庭内の虐待事件など、暗澹たる気持ちにさせるニュースが飛び込んでくる。怒りの声、改善を願う声が世界中から上がっていることはせめてもの救いである。しかし一方で、こうした事態に反応することも、声を上げることも、防衛することもできない人たちが数多くいることに、想像を止めてはいけな

この地球をすっぱりと覆った非常時に、京都で誕生した「Social Work / Art Conference」が果たす役割は、決して小さくないはずである。目を凝らし、耳を澄まして、感覚を研ぎ澄ませながら、Social Conferenceをつくらせていきたい。

↑  
「Social Work / Art Conference」の関連図。各専門家の知見をいかし、各者との関係をつくりながら誰もが自分らしい人生を送れる社会づくりをサポート。





文 中川 眞  
 (2019年度 京都市  
 文化芸術による共生社会実現に向けた  
 基盤づくり事業 ディレクター)

「アートによる社会的包摂」は現場の臨床的で繊細な活動から国の政策、制度設計に至るまで、極めて多様多彩なプロセスに紐づけられている。それゆえに一筋縄ではないと言えるが、実践・研究ともアプローチにあたってはマクロ・メゾ・ミクロの視点を持つ必要がある。マクロ・メゾ・ミクロとは、社会学的に言えばマクロ(政府、グローバル)、メゾ(地方自治体、政策、施策)、ミクロ(日常生活)というレイヤーになる。「アートによる社会的包摂」について考える際には、いま自分はどのようなレイヤーに立脚してとらえ、動き、発信しようとしているのかを常に意識する必要がある。さもないと混乱したり不必要に錯綜したりする。その位置的に的確に把握した上で、マクロ・メゾ・ミクロ間を往還すること。私たちの実践・研究アプローチはそれを目指している。本稿では社会的排除という概念の成立経緯を概観した上で、社会的包摂とアートの関係についてのスケッチを試みたい。

社会的排除とは何か

社会的包摂は社会的排除を前提としている。つまり社会的排除という状態・プロセスの中に、社会的包摂という手法を用いて課題や困難の解決や緩和に向けていくのである。社会的排除は状態あるいはプロセスであり、社会的包摂は働きかけ、介入であり、正確に言えば両者は反対語ではない。社会的排除という状態に対するひとつのリアクションである。そのリアクションの実態を探る前に、そもそも社会的排除とは何かということをまず確認する必要がある。

社会的排除という現場にアートや表現活動が介在する例は、古くからある。日本について思いつくまに考えてみても、平家琵琶(盲僧琵琶)では視覚障害と音楽実践が重なり、太鼓、三味線の素材である皮革産業は被差別民によって支えられてきたなど、社会の中でマージナルな存在と見なされている人と芸術表現領域との交差は枚挙にいとまがない。私が深く関わっているジャワのガムラン音楽においてもゴングをつくる人々は、昔は周縁民に近い位置づけであり、そのとらえ方は東南アジア一帯に広がっている。マージナルな人々と芸術(アート)の交差は、なぜ生じたのであろうか? 霊性、非日常性、規範外な

\*1  
 アジット・S・ノバラ、フレデリック・ラペール(福原宏幸・中村健吾訳)  
 『グローバル化と社会的排除—貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂、2005年  
 [原著 A. S. Bhalla, Frédéric Lapeyre, *Poverty and Exclusion in a Global World* (2nd edition)  
 Palgrave Macmillan, London, 2004]

どなど様々な要因が語られてきたが、その考究は別稿に譲るとして、まずは現代の社会課題としての社会的排除について復習しておこう。

それは第2次世界大戦後の福祉国家とフォーディズムに代表される資本主義的経済体制に1970年代から亀裂が走り、歪みが生じてきたところに端を発する。大戦から1960年代に至るまで、先進国において「社会的統合は、経済成長、賃金を主な収入源とする社会への発展、完全雇用に近い状態、労働者の生活状態の改善によって実現された。福祉国家は再配分政策をとおして、この統合過程に大きく貢献した。つまり貧困をめぐる諸問題は、先進工業国において政治的課題の最優先事項からほとんど姿を消したのであった」[\*1]。古典的な社会的課題は雇用と貧困の対策であった。大戦以前の19世紀末から1960年代までは、福祉国家と先進工業国における資本主義が成熟してゆき、完全雇用が基本で年金などの福祉も充実し(日本でも総中流化現象)、その結果、貧困問題は解消していった。

「社会的排除」という語は1960年代にフランスの社会カトリック運動団体で使われ始め、1974年のルネ・ルノワール『排除された人々: フランス人の10人に1人』で脚光をあびる。当時の排除された人々とは社会的不適応の人たちで、社会全体からすると周辺的という位置づけであった。社会的に排除された者とは「精神障害者または身体障害者、自殺願望をもつ人々、高齢者や病人、麻薬乱用者、非行に走る者、社会に溶け込めない人々などであった」[\*1:p.3]。これらの人々は工業社会によって設けられた規範に適合せず、社会的に不利な立場にあった。しかしこの時期においては、社会的排除という言葉は限定的な意味しか持っていなかった。なぜなら、それは社会全体に影響を与えるほどではなく周辺的な現象にとどまっていたからである[\*1:p.3]。

しかし、1970年代後半から1980年代に入っていくと、資本のグローバル化と労働市場の再編成、つまり新自由主義化(自己調節的な自由主義メカニズムの優位へと移行)の方向へと舵が切れ、前時代のフォード主義的産業組織の持続可能な成長と社会正義を維持するために調和して(妥協して)機能していた多くの諸制度が破壊されてゆく。新しい傾向は、民営化、自由化、公的サービスの削減、対象を絞った支援への変更、労働市場の規制緩和へと導いた[\*1:p.4]。その結果、新しい貧困問題はマージナルな人々(障害者もしくは社会的規範から排除された人々)だけに関わるものではなくて、不安定な仕事と長期失業、



家族や家族外のネットワークの弱体化、そして社会的地位の喪失といった多次元的な諸問題に苦しむ多くの人々に関わるものとなった。そこに現れてくるのは、資本主義が過激化しグローバル資本が世界を支配するという新自由主義的な社会・経済・政治である。「所得の不平等の拡大や、福祉国家に対する攻撃、そして雇用の領域での資本に対する労働者の弱体化、さらに都市計画や都市統治の性格に」[\*2]によって社会は分極化していく。都市空間は再編され、「再開発、伝統的なアイデンティティや価値観に対する文化的攻撃、象徴的な福祉制度の民営化、広範な雇用での搾取、さらにはラディカルな芸術活動を陳腐な商品化へと従属させることなど、さまざまな形が含まれる」[\*2:p.340]。

したがって、「社会的排除の観念は個人の行動や特徴よりも社会経済的構造の変化と関係している」[\*1:p.4]。つまり問題は社会全体に大きく広がり、多面的な様相を帯びるようになったのである。そして、「人々のかかなりの部分が経済的効率とフレキシビリティの名において排除されている分断社会において、社会的結束をどのようにして確保するか」[\*1:p.5]ということが重要な課題となっていった。社会的排除と闘うための政策は、個人のレベルにおけるエンパワメントの喪失と、社会のレベルにおける構造的な障害物の両方に対処しなければならない[\*1:p.38]。

それに対する各国の取組みは、次のようになる。EUでは、1989年欧州社会憲章の序文(EUの成立は1993年) ▶ 1997年のアムステルダム条約において社会的排除と闘う社会政策へ ▶ 2000年リスボン欧州理事会、ニース欧州理事会(社会的アジェンダのひとつ) 2010年までに貧困と社会的排除の撲滅のために ▶ 2001年各国のナショナル・アクションプランが提出、という過程をたどる。イギリスでは1997年にブレア政権による社会的排除対策室が設置され、フランスでは1998年に反排除法が制定された。

では、現代の社会的排除はどういうかたちをとるのか。そこには経済的次元、社会的次元、政治的次元があるとされる[\*1]。経済的次元の中心にあるのは、言うまでもなく貧困問題である。それは貧困線(所得中央値の50-60%の水準)によって測られる。所得の不平等と長期にわたる所得分配の悪化である。社会的次元とは、関係性に焦点を当てたものである。経済的(物質的)幸福ではなく社会的幸福というものがあり、それが欠けた状態のことを言う。医療や教育へのアクセスのほか、コミュニティの活動に参加できない、など。政治的次元とは、公民権(シティズンシップ)の剥奪された状態、すなわち機会の均

等や人身の安全、法の支配、表現の自由が保障されていない状態。これに文化的次元(少数民族の言語や文化への攻撃など)が加わると想定される。

社会的排除は次のようにいくつかの特徴に分けて論じることができる。

- 1: 多次元的・経済的要因、社会的要因、政治的要因、文化的要因が組合わされている。リスクが多様である。
- 2: 長期的でダイナミックな過程を持っている。統合的な安定した領域から不安定な領域へ、さらに脆弱な領域、そして最終的に排除の領域へと移行してゆく。
- 3: 労働市場からの脱落、失業が依然として排除の中核にある。不安定な状態へと移行するとともに、技能の喪失、コミュニティの生活に参加する自由への制限、動機や自信や尊厳の欠如、不寛容、人種差別、犯罪へと帰結する可能性。

また、社会的排除をどう見るのかというのは、国によって異なる。特にフランスの「連帯・参加の欠如」とアメリカ、イギリスの「アンダークラス論」は代表的なものである。

### 社会的包摂、そしてアート

以上のような社会的排除に対して立ち向かう政策が社会的包摂である。社会的排除と闘うための政策は、先に引用したように、個人のレベルにおけるエンパワメントの喪失と社会のレベルにおける構造的な障害物の両方に対処しなければならない。個人の支援、救済というレベルから、排除を生む社会構造の改革に至るまで、まさにマクロ・メゾ・ミクロの働きかけが必要なのである。そういった活動の全体を社会的包摂という。

そのアプローチで、思想的に高く評価されているのがアマルティア・センのケイバビリティ論である。ケイバビリティは潜在力と訳されるが、排除されている人がどのように置かれているのかということよりも、

彼らが何をすることができるか、あるいは本来何をすることができたか、というところに着目する。したがってそこでの対応は、個人のケイパビリティを増大させ、個人の能力を付与することに狙いを定める。排除された結果を保障するよりも、個人をエンパワーして将来の見通しを広げることを目的としている。事後処理的な政策ではなく、先を見越した政策への転換である。センはケイパビリティを「恥じることなく公衆の前に現れることができること」という。個人レベルでのエンパワーに焦点を当てている点で、私たちのスタンスに参考になる考え方である。

ところで、以上の論調から浮かび上がってくる、社会的排除に対する政策志向型のアクションである社会的包摂と、私たちが「アートによる社会的包摂」という場合の社会的包摂との間には用法上の齟齬はないだろうか？

「アートと社会的包摂」と言う時に、私たちはアートを通して個々の人々をエンパワー(力を引き出す)し、その人々の社会化を図ってゆくというイメージが強いかもしれないが、社会的排除はいま垣間見たように、マクロ・メゾ・ミクロにおいて相互に関係しながら発生する。したがって、個人をエンパワーすることはミクロのレベルではあるが、それがメゾ・マクロにどのようにつながっていくのか、という視点が重要ということになる。

私たちがアートによって排除空間に介入する時、実際に関わるのは「個人」レベルである。そういう意味では、福祉施設や病院における福祉士や看護師、介護士、医師、ソーシャルワーカー、教育機関における教員(ここにもソーシャルワーカーが)などと同じ地平に立っている。だが、そこでの活動がメゾ・マクロとどのようにつながっているのかと実感するのはなかなか難しい。

反対に、個人というよりいきなり社会の全体構造すなわちマクロなレイヤーに広がる文化的な社会的排除と取組むこともある。例えば表現の自由の問題である。自由の制限は、個々人というより対象は社会全体に広がる。すなわち多くの人が影響を被る(排除される)のである。「あいちトリエンナーレ2019」における「表現の不自由展」の事件は、極めて明示的にその問題を提起した。ヘイトスピーチもネガティブなかたちでそれにつながる。また、ジェントリフィケーションも広範囲に社会的排除が及ぶ事例である。東京や大阪という大都市で先鋭化しつつあり、その地域で展開されるアートはジェントリフィケーションの渦に巻き込まれ、それを強化するのか批判するのかという瀬戸際に立たされる<sup>[\*3]</sup>。

先ほど「齟齬」という言葉を使ったが、私たちが取組んでいる「アートによる社会的包摂」の現場と、これまでの社会的排除の議論との間にはズレがある。例えば自然災害。地震、津波、洪水、噴火など日本は世界的にも稀に見る自然災害国である。災害の現場では近年、アートの介入が多く見られるようになった。しかし社会VS自然という二項的なとらえ方をすると、自然がもたらす災禍は排除と呼びにくい。だが、そういった現場でより激甚な被害を受けているのが、社会的弱者と呼ばれている人々に多いというのが経験的な事実である。脆弱な地盤等における防災インフラが的確になされていなかったという点で、人災であるとも考えられる。そういう意味では、これもまた社会的排除の一種だと言えるだろう。

障害者は、上記の社会的排除という文脈においては、フォード的資本主義から新自由主義へと移行していった時に登場してきた「新しく排除された人々」の中には入ってこない。だが、アートと障害のある人との関わりは極めて深く長いのは周知の通りである。現在の「アートによる社会的包摂」のターゲットは、1990年代以降の「社会的排除VS社会的包摂」という概念の枠組みより遙かに広い。ただ、社会的包摂の概念や範疇をこのようにこねくり回すのは空疎な言葉遊びのようにも思えるが、「アートによる社会的包摂」の広さ、深さを再認識するためには必要な考察プロセスである。あくまでも「現場」や「現象」にプライオリティはあるが、それを理論的に支える基盤も同時に設営しておかないと、マクロ・メゾ・ミクロレベルにおける反動的言説や政策に対してきちんと対峙できなくなるのではないかと怖れるのである。

また、狭い意味での社会的包摂という用語じたいの意味や語用の変節にも注意しなければならない。社会的包摂という語は、初めて見たように政策的背景を持っている。私たちはごく日常的に「アート(あるいは文化芸術)と社会的包摂」という言葉を使うが、そこにある政治的な含意に気を遣う必要がある。地理学者のアラン・ミュッセは、大都市の周縁地域における新自由主義的なイノベーション政策に包摂という言葉が使われていることに留意を促す。その政策の意図は「住民を追い出し、『失われた地域』を新しい都市経済の儲かるチャンネルにまとめてゆくというものであり、equity, resilience, durability, participation, inclusion, innovation, sustainabilityという用語のセットでもって<sup>[\*4]</sup>巧妙に推進されているとして、包摂(inclusion)という言葉に注意を払うよう指摘する。新自由主義的ディスコースの中へと福祉的な言葉もまた呑み込まれているのである。この指摘は、私たちが不用意に(あるいは楽観的に)社会

的包摂という言葉を使うことに警鐘を鳴らす。

さて最後になるが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の拡大により、予定されていたアート関係のイベントが続々と中止あるいは延期に追い込まれた。これは全国的なレベルにおける災害級の事態であり、あらゆる公的、私的活動に甚大な影響を及ぼしつつある。災害の場合、緊急に必要なのは住民の生命維持のための医療等への包括的な支援である。人的支援に加えて、薬やワクチン、保護治療施設、機器などの物質的支援や、その円滑な活動を可能とする流通や制度的支援が必須である。ただ、これまでの災害時の経験を踏まえるなら、とすればアートなどの文化活動は不要不急のものとして人々の視野から消え、制限されてしまうことへの危惧は表明しておいた方がいいだろう。

私は2006年のインドネシア・ジャワ島中部震災や2011年の東日本大震災における文化復興に関わってきたが、文化復興は社会のハード面での復興が達成してから始めるのではなく、ソフト面との協働を並行して実施することによって、よりスムーズなコミュニティの復興が実現するという方針のもとで協力してきた。批判はあったが、実際に現地では期待していたプロセスを目の当たりにすることが多く、まさにそれは文化やアートの力の発現にはかならないという手応えを感じた。詳しくは他所で論じたので参照していただければ幸いである[\*5]。

ただ現下のコロナ禍は、一般的な災害が「被災 ▶ 復旧・復興」という時間軸を想定できるのに対して、常に被災の最前線に社会が晒され続けているところに大きな相違がある。多くのアート活動の一時停止は止むを得ないであろう。特に今回はウイルスの蔓延という私たちにとって経験値の低い事態に見舞われているがゆえに、今後の見通しを立てづらいのが実情である。しかし、私はこんな状況だからこそアートもまた休止することなく、人々のウイルスとの闘いとともにあるべきだと敢えて主張したい。本事業においては下京区の崇仁地区でモデル事業を開始したところであるが、一旦停止するのではなく、模索しながら実施してゆくことを決定した。もちろん多大なリスク (物理的、倫理的、病的など) を抱えながらではあるが、まさにコロナ事態と共生しながら、どのようなマネジメントの方法論が、そしてアート表現が生まれるのか想像はつかないものの克明に記録し、その総括を来年度の報告書において公開したいと思う。

#### [連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」]

主催 東山 アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS)

共同開講 京都精華大学「LGBTQをはじめとするマイノリティの社会包摂を視野に入れたアートマネジメント・プロフェッショナル育成プログラム」(第2・3・6回)

チランデザイン 松見拓也(第4〜7回)

#### 1 眼差しのパイオニアをつくる基礎と未来

日時 2019年7月17日(水) 19:00-21:00

会場 キャンパスプラザ京都

講師 奥山理子

#### 2 芸術実践と人権——マイノリティ、公平性、合意について

日時 2019年7月27日(土) 13:30-16:15

会場 京都精華大学 明窓館M-201教室

講師 小泉明郎、遠藤水城、あかたちかこ、山田創平

#### 3 ローカリティと芸術実践 アーツ前橋「表現の生態系」展の事例より

日時 2019年8月31日(土) 13:30-16:00

会場 京都精華大学 明窓館M-201教室

講師 住友文彦、今井朋、石倉敏明、山田創平

#### 4 まともがゆれる——常識をやめる「スウィング」の実験

日時 2019年10月31日(木) 19:00-21:00

会場 京都芸術センター ミーティングルーム2

講師 木ノ戸昌幸、Q、XL

#### 5 日常使いの現代美術

日時 2019年12月13日(金) 19:00-21:00

会場 京都芸術センター ミーティングルーム2

講師 滝沢達史

#### 6 フォーラム「芸術と労働」

日時 2020年1月11日(土) 13:30-16:30

会場 京都精華大学 黎明館L-201教室

講師 伊藤まゆみ、三輪兎義、山本麻友美、吉澤弥生、渡邊朋也

進行 ほんまなほ



## 7 共有空間の獲得

**日時** 2020年2月13日(木) 19:00-21:00

**会場** 京都芸術センター ミーティングルーム2

**講師** 小山田徹

【事例調査(市内5件、市外5件、海外2件)】

- |   |   |    |   |
|---|---|----|---|
| 1 | 社会福祉法人 カトリック京都司教区カリタス会<br>希望の家 カトリック保育園 | 7  | 特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる                                 |
| 2 | NPO法人 京都DARC                            | 8  | ドラッグクイーン・ストーリーアワー東京 読み聞かせの会                           |
| 3 | きょうとWAKUWAKU座                           | 9  | 一般社団法人 kuriya   |
| 4 | 医療法人稲門会 いわくら病院                          | 10 | MASH大阪  |
| 5 | 東九条マダン実行委員会                             | 11 | 第14回 アジア・アーツマネジメント会議(カンボジア)                           |
| 6 | NPO法人 ビッグイシュー基金                         | 12 | Dance Well<br>—movement research for Parkinson (イタリヤ) |

【モデル事業】

## 1 東九条こどもご近所映画祭

**日程** 2019年8月5日(月)、8月17日(土)、8月23日(金)

**場所** 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン、THEATRE E9 KYOTO

**主催** 東山 アーティスツ・プレイメント・サービス(HAPS)

**企画・制作** 一般社団法人アーツシード京都

**助成** 損保ジャパン日本興亜「SOMPOアート・ファンド」(企業メセナ協議会2021 Arts Fund)

**協力** NPO remo [記録と表現とメディアのための組織]、一般社団法人タチヨナ、希望の家児童館、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

## 2 崇仁学区を中心としたアートプロジェクト

**期間** 2019年8月～

**アーティスト** 山本麻紀子、谷本研+中村裕太

**主催・企画・制作** 東山 アーティスツ・プレイメント・サービス(HAPS)

## 3 継続調査

- 2018年度モデル事業「ノガミッツ プロジェクト」

**調査報告** 小泉朝未

- 2017年度モデル事業「『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の制作」

**調査報告** 高嶋 慈

プロフィール

【企画・監修】

中川真 | なかがわ・しん

アジアの民族音楽、サウンドスケープ、アーツマネジメントについて研究する。著書『平安京 音の宇宙』(平凡社)でサントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、現代音楽の活動で京都府文化賞、アーツマネジメントの成果で日本都市計画家協会賞特別賞(共同)を受賞。インドネシア政府外務省文化交流表彰。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授。インドネシア芸術大学、チュラロンコン大学(タイ)の客員教授も務める。アートミーツケア学会副会長。

【連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」】

企画コーディネーター(第2・3・6回)

内山幸子 | うちやま・さちこ

kavcaapアートプロジェクト「HIV/エイズ——未来のドキュメント」事務局、秋吉台国際芸術村を経てメキシコ政府奨学金を受け渡墨。帰国後、関西を拠点にフリーランスとして活動する。2017年より地元・高槻市で「五領アートプロジェクト」を企画・実施。そのほか、のせてんアートライン2019事務局、Breaker Project (kioku 手芸館たんす)プログラムディレクター(2012-2015年)、NPO法人 アート NPO リンク事務局(2012-2014年)など。

登壇者

奥山理子 | おくやま・りこ

[みずのき美術館キュレーター、Social Work / Art Conference ディレクター]

母の障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い、12歳より休日をみずのきで過ごす。施設でのボランティア活動を経て、2012年みずのき美術館の立ち上げに携わり、以降企画運営を担う。2015年から2018年までアーツカウンシル東京「TURN」コーディネーター。東京藝術大学特任研究員を経て、2019年より、HAPSの「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に参画。

小泉明郎 | こいずみ・めいろ

[美術家]

ロンドンのチェルシー・カレッジで映像表現を学び、ニューヨーク近代美術館をはじめ、国内外の美術館などで展覧会に参加。2017年にVACANT(東京)で開催された個展「帝国は今日も歌う」は社会と個人の心理に深く切り込む大胆な映像で大きな反響を呼んだ。

遠藤水城 | えんどう・みずき

[キュレーター]

東山 アーティスツ・プレイメント・サービス(HAPS)エグゼクティブディレクター、Vincom Center for Contemporary Art[VCCA](ベトナム)芸術監督。これまで企画した展覧会に「希望の原理」(国東半島芸術祭、2014年)、「裏声で歌へ」(栃木県小山市

立車屋美術館、2017年）など。
—

### あかたちかこ

[思春期アドバイザー、児童自立支援施設専門講師]

専門は対人援助学と性教育。児童自立支援施設や大学、全国の中学校、高校で教えている。共著書に『たたかうLGBT&アート 同性パートナーシップからヘイトスピーチまで、人権と表現を考えるために』（法律文化社、2016年）、『セックスワーク・スタディーズ 当事者視点で考える性と労働』（日本評論社、2018年）、「Woman’s Diary」元編集長。

—

### 山田創平 | やまだ 創へい

[社会学者、京都精華大学人文学部准教授]

厚生労働省・外務省所管の研究機関などを経て現職。編著書に『たたかうLGBT&アート 同性パートナーシップからヘイトスピーチまで、人権と表現を考えるために』、共著書に『セックスワーク・スタディーズ 当事者視点で考える性と労働』など。NPO法人アートNPOリンク理事、HAPS実行委員、企業メセナ協議会東日本大震災芸術・文化による復興支援ファンD選考委員。

—

### 住友文彦 | すみとも ふみひこ

[アーツ前橋館長、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授]

主な企画に「Possible Futures: アート&テクノロジー過去と未来」展（ICC、2005年）、「川俣正 [通路]」（東京都現代美術館、2008）、ヨコハマ国際映像祭2009など。あいちトリエンナーレ2013、メディア・シティ・ソウル2010（ソウル市美術館）共同キュレーター。

—

### 今井朋 | いまい とも

[アーツ前橋学芸員]

主な企画に「ヒツクリコ ガツクリコ ことばの生まれる場所」(2017年)など。2016年に企画した「表現の森 協働としてのアート」展では、前橋市内にある福祉施設や団体とアーティストが協働する5つのプログラムを紹介。同展終了後も長期的なプログラムとして、アートが福祉や教育、医療の現場に入っていくことでどのような化学変化が起ころうのかを考察する。

—

### 石倉敏明 | いしくら としあき

[人類学者、秋田公立美術大学准教授]

1997年よりダーズリン、シッキム、カトマンドリ、東北日本各地で聖者（生き神）や山岳信仰、「山の神」神話調査を行う。環太平洋の比較神話学に基づき、神話集、論考などを発表。多摩美術大学芸術人類学研究所助手を経て、現職。共著に『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』（淡交社、2015年）、『人と動物の人類学』（春風社、2012年）など。

—

### 木ノ戸昌幸 | きのと まさゆき

[NPO法人スウィング理事長、フリーペーパー『Swinging』編集長]

1977年愛媛県に生まれる。立命館大学文学部日本文学専攻卒業。引きこもり支援NPO、演劇、祇園のスナック、遺跡発掘・福祉施設勤務などの活動・職を経て、2006年にNPO法人スウィングを設立。人の「働き」を「人や社会に働きかけること」と定義し、狭い「障がい福祉」の枠を超えた創造的実践を展開中。著書に『まともがゆれる ―― 常識をやめる「スウィ

『グ』の実験』（朝日出版社、2019年）など。
—

### 滝沢達史 | たきざわたつし

[美術家]

山に登る、子どもと遊ぶ、快適を求む美術家。教育や社会問題にアートの手法で関わりながら、時代をおもしろく越える表現について探求している。子どもの学び場「ホハル」代表。

—

### 伊藤まゆみ | いとう まゆみ

[京都精華大学 全学研究機構 展示コミュニケーションセンター特任講師]

2005から2014年にわたり神戸アートビレッジセンター（KAVC）の美術プロデューサー、2015から2019年までトーキョーアーツアンドスペース（TOKAS）[公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館]に企画調整係長として勤務し、若手芸術家育成事業に携わる。2019年より現職。

—

### 三輪晃義 | みわ あきよし

[弁護士]

大阪弁護士会所属。大阪労働者弁護団、連合大阪法曹団、LGBT支援法律家ネットワーク、日弁連LGBTの権利に関するPT、Cafe LGBT+に所属し、労働環境やセクシュアルマイノリティなどの人権問題に取り組んでいる。

—

### 山本麻友美 | やまもと まゆみ

[京都芸術センター チーフ・プログラム・ディレクター]

ジャンルにとらわれない事業や取組みを積極的にに行い、新しい創造活動を支援する京都芸術センターの事業全体を統括する。近年の主な担当事業に東アジア文化都市2017京都「アジア回廊現代美術展」、KYOTO EXPERIMENT 2018「山城知佳子〈土の人〉」展など。

—

### 吉澤弥生 | よしざわ やよい

[共立女子大学文芸学部教授、NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]理事、NPO法人アートNPOリンク理事]

専門は芸術社会学。『芸術と労働』（木声社、2018年）に「アートマネジメントと、非物質的労働の価値」を寄稿。近著に「芸術生産の現場から考える ― 労働・キャリア・マネジメント」（藤井光との対談）『社会の芸術/ 芸術という社会』（フィルムアート社、2016年）ほか。

—

### 渡邊朋也 | わたなべ ともや

[山口情報芸術センター（YCAM）インターラボ アーキビスト]

多摩美術大学美術学部情報デザイン学科卒業後、同大研究室助手を経て、2007年にリニューアルオープンした同大学図書館のコンセプトメイキングから携わり、オープン後は館内に併設されたオープンスペースの運用などを担当。2010年、山口情報芸術センター〔YCAM〕のスタッフに着任。展覧会や公演など主催事業全般のドキュメンテーションのほか、過去に同センターが発表した作品の修復・保存、ポータルサイトやガイドブックなど同センターの情報発信プラットフォームのプロデュース・ディレクションを担当。これと並行し、美術家としてコンピュータやインターネットといったメディアテクノロジーをペー

『**身体・音楽表現の創造**』(共編著、大修館書店、2013年)がある。

スに、インスタレーション、映像作品、ダジャレ、エッセイなどを制作する。共著書に『SEIKO MIKAMI 三上晴子 記録と記憶』(NTT出版、2019年)がある。

—

ほんまなほ

[大阪大学COデザインセンター准教授、ガムラン奏者]

臨床哲学を専門に、哲学プラクティス、対話、こどもの哲学、フェミニズム哲学、多様な人々が参加する身体・音楽表現についての教育研究を行う。著書『ドキュメント臨床哲学』(大阪大学出版会、2010年)、『哲学カフェのつくりかた』(大阪大学出版会、2014年)、『こどものてつがく』(共編著、大阪大学出版会、2018年)ほか、「アートミーツケア叢書」監修。

—

小山田徹 | こやまだ・とおる

[美術家、京都市立芸術大学教授]

1961年鹿児島県に生まれる。京都市立芸術大学日本画科卒業。1984年、大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。ダムタイプの活動と並行して1990年から、様々な共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アートスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画を行うほか、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加。

—

[**モデル事業**「**東九条こども近所映画祭**」]

—

企画コーディネーター

—

福森美紗子 | ふくもり・みさこ

[THEATRE E9 KYOTO、一般社団法人アーツシード京都]

1995年三重県生まれ。2019年京都市立芸術大学 美術学部 美術科 構想設計専攻卒業。在学中より、劇場建設のためのプロジェクトTheatre E9 Kyotoに参加。劇場開館後は、THEATRE E9 KYOTO事務局として、劇場運営や主催事業の企画・制作を行う。

—

講師

—

久保田テツ | くぼた・てつ

[大阪音楽大学教員、NPO remo [特定非営利活動法人記録と表現とメディアのための組織]理事]

1995年よりシンクタンクに勤務し、アートプロジェクトのメセナ事業運営に携わる。2005年より大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）特任准教授を経て、現在、大阪音楽大学准教授。大学およびNPOremoでの活動を通して、主にメディア、アートを軸とした社会学連携事業などに取組む。京阪電鉄「なにわ橋駅」コンコースに設置されたアートスペース「アートエリアB1」企画メンバー。

—

松岡咲子 | まつおか・さきこ

[舞台俳優、ワークショップデザイナー、大阪音楽大学助手]

京都を拠点に活動する劇団「ドキドキぼーいず」所属。創作活動のほか、学校現場、企業、医療福祉施設などで、演劇的

手法を活用したコミュニケーションワークショップのファシリテーターを務める。

現在は、地域交流の場づくりや人材育成を目的としたアートプロジェクトに携わり、演劇・音楽・映画などのワークショップコーディネートなども手がける。2020年より京都舞台芸術協会理事。

—

アーティスト

—

山本麻紀子 | やまもと・まきこ

1979年京都市生まれ。京都市立芸術大学・大学院 絵画専攻構想設計修了。ある特定の場所のリサーチを通して観察や考察を続け、常識や習慣など日常の中で見過ごされている事柄や疑問を糸口にして、他者とのコミュニケーションを発生させるプロジェクトを行う。その一連の過程を、写真、映像、ドローイングなど様々な形式に展開させて作品制作を行っている。2018年より、京都市の「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」の一環として、高齢者福祉施設・東九条のぞみの園(京都市南区)に関わり、利用者や職員、また地域の方々と協働する「ノガミツ プロジェクト」を実施。また、ライフワークとして、2013年より15年計画で日本(水戸)とイギリス(ペンザンス)の巨人伝説のリサーチをベースに「眠り」や「怒り」をテーマに巨人の世界を探求している。7年目の現在は「植物」や「土」をキーワードに模索中。

—

谷本研 + 中村裕太 | たにもと・けん、なかむら・ゆうた

谷本研 (1973年神戸生まれ、滋賀県在住。1998年京都市立芸術大学大学院美術研究科造形構想修了)と中村裕太 (1983年東京生まれ、京都府在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士[芸術])によるゆるやかなユニット。街中に点在する路傍祠やそこに使用されるタイルに着目した「タイルとホコラとツーリズム」(Gallery PARC、京都、2014年)を出発点に、東シナ海を取り囲む対馬・沖縄・台湾・済州島にみられる土着信仰のツアー記録を作品化した「season4《一路漫風!》」(京都芸術センター、2017年)、明治期に広島からの入植によって生まれた北海道北広島と広島との関係を扱った「season6《もうひとつの広島》」(広島市現代美術館、2019年)などがある。

—

小泉朝未 | こいずみ・あさみ

1991年大阪生まれ。大阪大学文学研究科博士後期課程（臨床哲学）修了。博士（文学）。大阪市立大学URP先端都市特別研究員(若手)。様々なアートや表現を通じて生きのびるための創作、対話、記録を実践している。

—

高嶋慈 | たかしま・めぐみ

[京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員]

美術・舞台芸術批評。関西を拠点に、ウェブメディアなどでの展評の執筆や、展覧会企画を手がける。近年の主な企画に、「Project ‘Mirrors’ 稲垣智子個展：はざまをひらく」(京都芸術センター、2013年)、「egØー『主体』を問い直すー」展(punto、2014年)。共著に『身体感覚の旅ー舞踊家レジーヌ・ショピノとパシフィックメルティングポット』(大阪大学出版会、2017年)。



## 2019年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業

---

### 企画・監修

中川眞

### 主催・事務局

一般社団法人HAPS

| 遠藤水城、藏原藍子(全体進行)、石井絢子(モデル事業・報告書進行)、岡永遠、沢田朔(広報)、埜美智子(経理)、櫻岡聡

### 所管

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課

| 四元秀和、倉谷誠、山本亮太郎

## 2019年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書

---

### 発行日

2020年3月31日

### 発行元

一般社団法人HAPS

〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339

TEL 075-525-7525 | FAX 075-525-7522

### 執筆

石井絢子、内山幸子、奥山理子、倉谷誠、小泉朝未、下倉久美、高嶋慈、中川眞、福森美紗子、山本亮太郎、四元秀和

### 編集

MUESUM(多田智美・永江大・鈴木瑠理子)、HAPS(藏原藍子・石井絢子)、小泉朝未

### 編集協力

牟田悠

### デザイン

綱島卓也

### 印刷

株式会社イニユニック

---